



# B 面詩集



かもめ7440

## 抱き締めて、シンドバット！

---

諦めることすら忘れちゃって

(あだ ぶかだぶら)

じゃなくて

(魔法のじゅうたん !)

でもなくて

壹阡壹夜譚の世界は四六時中つづく

(沙漠にはっ 星 があって

池には (像?) 杖がある

洋燈の精 黄金の椅子

そして冒険時代の戦利品たち

(ふと シンドバッド あなたは微笑む

めまいするような陽射しのなか

気持ちを昂ぶらせながら

掻き消されていったと思う

(あだ ぶかだぶら)

も 風に揺られて挨拶 したの

(蠍があなたの足に !)

でもシンドバッドは

死など怖ろしいものかと

腕にのせてわたしをドキドキさせる

名人なのね（心の？）　とうめいな

カメレオンは　こんな時

夜見の国のふしぎな世界を

めぐってゆく　！　だれもいち度は

（あだ　ぶかだぶら）

夢見たものだ

（アラビア　ン　ナイ）

シンドバッドの立ち居振る舞いに

恋をして　胸おどらせて

いつか（たとえば？）

そうたとえばこんな夢のな　か

（あだ　ぶかだぶら）

あおい翼のゆめを見る

## 壁

---

じょうずに笑えているかと聞いている

じぶんを駄目にしてしまうのがわかりつつ

おまえは生まれて間もない

不愉快なつめたい壁

はるかな隔たりは

この空と海のあいだでとり行われた

顔の造形さえままならぬうち

はぐくむにむずかしい

やわらかい死

なにかに怯えてた夜に感覚が散らばっている

ここに在って…ここに無い……

卵が腹の中にぎっしりしているシシャモ

蛙の卵 カマキリのたまご

それらが息苦しく咽喉をふさぐ壁

きびしく無視されるだろう

やがて難なく胃へとはいるだろう

そしてやさしく妨げられていた眠りへと

もうすぐ手がとどく

繭のなかに封じ込められていたパンドラの箱

タブー人それぞれの秘密の内約

おなかのふくらみは自動販売機に似ている

まどろみのなかで産み また棄て

しかしもうそろそろがま口の“クチ”をとじて

時計が神の代わりをつとめる夜

心臓は救いようのない自分を教え

埃が雪のように降り積もっていく

しかし雪は朝のひかりが溶かしていく

あとにのこるものは…あとにのこるのは……

そう 雪ではなく埃

うつくしさゆえに欺く

それでもその嘘をなぞる手すさびに

水は氷になっていく

ゆったり ゆたりに タプリー——胸が熱くなる、

正気であることがむずかしい、血液が重い、

静寂をなぞる不安、——

大陸の移動

かくして埃は歴史書の外ではなく内がわで

雪は翹にかわっていき

いくつものしろい音符にかわっていく

そして淡い賑やかさの楽譜をもって

なにかが洗われるように

しかしまた なにかふしぎな炎に

この身を焼かれる

傍らのちり紙を手にとり鼻をかむ

たった それだけだとしても

みじかく途切れていく脳内のひとコマに

埃がP I C K U Pされている

これからその埃をぬぐうために

小刻みに震える指を見つめなくてはいけない

それは領域をさだめた一点

とみに小粒な莓の黒点…白濁点……

かぎりなく遍満している平等の疱疹

それらはいばらの穴

へびの穴に成就

壁に穴があく

それは湖の中央の一艘の舟ともおもえるし

蓮花ともおもえるし

また輪島教会ともおもえる

しかしそれは意識の変容という

ヴァーチャル・リアリティー

光や色彩のパターンがつづき

肉体を構成する元素が解体さ

れ る すみやかな死

人間が一個の塊をなすために

ながいながい歳月を要した その理由を

わたしは壁のなかから見ている

無数の点がつみかさなってい

やがて ひびわれていく朝焼けが

この夜をすこし埃っぽくしている

そう 一つだ——窓を割ろう、

あたらしい風を入れよう、

そしてそれに耳を傾けよう、――

じぶんが抱えこんでいるものを解き明かすまで

このうつろな時

めまいのような脈動がつづく

じぶんの運命がひと筋の光だったら

雲間から燦然とあふれた凱歌

でなければ切れ目のない紙であつたら

どこまでもしろく まばゆく あかるく

うつくしく ことこまかな塵埃よ

ああ ことこまかな塵埃よ

もっと見える範囲が狭ければいい

見世物小屋らしくあればいい

昆虫も花も植物もそこでじっとしていればいい

ばらまかれているもの希望の瞳

ひとつずつ踏み潰していく毎日にさえ

この空の広さと果てしなさと

また 明日が見えてしまうことと

しかし足もとをおぼつかなく歩く癖を

ただ あたためるものであればいい

じょうずに笑えているかと聞いている ！

じぶんを駄目にしてしまうのがわかりつつ

おまえは生まれて間もない

不愉快なつめたい壁

どこかできれいに剥がされて

ときには きらきら貝殻で飾られ

のぼる者に 異端者と脱落者をあたえ

こころに距離をつくる

そこら中にあふれないように

T中

---

隣のクラスにおもしろい奴がいる

名前はT中T平といって伏せ字だが

だいたい想像がつく

しかし裏をかいているかもしれないのでよろしく

ともかくT中！

は アナコンダを喰ったことがある

もちろんボクはそんなことあるわきゃないと思ったが

しかもチューガクセーがですよ

なんでアナコンダ ！

パンナコッタの間違いでしょフ ァ ミ レ ス の

いや アナコンダ南アメリカの熱帯雨林でとのこと

まあ スネークハンターっているしー

できないこともないしーとボクがっていると

どうもそのT中はゾウも喰ったことがあるらしい

ゾー！ （そー ！ と あいづち）

アフリカでこどものゾウがしんでいるのを

あわれにおもって喰ってやったらしー

まあ たしかにゾーのこども死んでたら

喰わなきゃ人間の品性うたがわれるよね

ゾーだったら喰わにゃいかんよねーと

テキトーにまとめようとしているのに

まだやるつもりか狩猟民族T中！

鮫を喰ったことがあるらしー シャメ

シャボテンとかじゃなくて？

おーなんてお茶目な

おしゃめ（ほんとはオシメといたかった！）

まー 中国の屋台で売ってるっていうしなー

と 話をまとめようとする

いや どーも 海でおよいでいる時にでくわして

眼ン玉に拳でぶん殴って気絶させたらしい

するわけねえじゃん ! あんたは古武士か

だいたいそれどこよ オーストラリアの海岸

もーわけわかんないくらい気宇壮大なスケールになっていき

T中の父親は世界をかけめぐるビジネスマンに相違いなかった

そーでなければ海外旅行の折りにということになるが

それだと どーしても矛盾がでてくるので

やはりワールド・ビジネスマンの息子 T中なのだった

T中はどんどんウルトラになっていく

しかしそのホラ吹きは間接的にきいているせいか

みょうなりアリティーをもって迫ってくる

おそらく直接きいたら　すげーすげーと

半わらいでその話をきいていたろう

しかしあまりに興奮したせいか書店でおもわず

ギネス世界記録の本をショードー買いしてしまった

浴槽に入れたもっとも多くのガラガラヘビ87匹と

いっしょに45分間もなかよく浴槽にはいったらしい男

T中だったら口笛ふくかなーとボクはおもった

## 笑わない教室

---

おまえなんか変わったんじゃないか

そう言ったのはK君にだった

ながい冬休みが終わると

彼はメモ帳を制服のポケットに入れて

なんだか それまではテスト第一だったのに

また風紀委員なんていう憎まれ役をやったりしているが

それでも どちらかといえば

目立たない子のはずだった

しかしK君は新学期を告げる登校日の朝

なにか得体の知れない自信を持ってやってきた

もし仮に全校生徒が女の子で

たったひとりの男の子という役回りの特別編入生

いわば モルモットのなギガカワユス

チャットのなかの紅一点的萌えーであったとしても

たとえばパーキングエリアに突如あらわれた有名女優でも

べつだんふしぎはないくらいの様子で

K君は言った 《虫は無視しろ》

僕等の教室は一瞬にして吹雪にみまわれた

うう…ううッ…なんて寒さがこの教室に……

しかもそれがK君という

これまで大変に目立たない子がやったものだから

はは…いわゆる…なにかの聞き間違い……

てゆうかそら耳で片付けようとしていた矢先

またK君 《チラシ寿司のうえにチラシ》

ひやああああッ ！

それはたとえるならちびまる子ちゃんにでてくる

イタい子が悶絶寸前の恥ずかしさをやらかし

おもわずリモコンを別のチャンネルにかえてしまうような

そういう羞恥心 しゅーち心 シューチ心

おれたちーはあああっ♪

もう僕はK君に熱が出たんじゃないかと

本気で心配して

風邪なら無理して来なくてもよかったのに

保健室にでも行くかと言いきそうになっていた

しかしもちろんこの衝撃がおさまらぬまま

ぼくも おそらくクラスのみみんなも絶句していた

たとえるなら野球の世界で

トップバッターがいきなり こすい

セーフティー・バントなんかをするようなものだ

もちろんK君に先頭打者ホームランを

べつだんこれといって期待しているわけじゃないが

それでも役割通りに出塁してもらわねば困る

しかしK君はとどめを刺す      《亀のメカ》

うう…うううッ…うるせえボケエ……

どこからともなくそんな声があがった

しかしそれは教室の和をみだした制裁であった

このクラスはみな優等生が揃っている

TVの視聴時間も制限され

いちにち塾と学校で支配されている子ばかりだ

尾崎豊を聴くのさえ禁止された子もいた

ひそかに想いを寄せていたアイドルの写真を

まるでエロ本のように誇張されて

母親に大目玉をくらってべそべそ泣く子もいた

そんな僕等の教室でお笑いというのは

はっきりいってタブー以外の何物でもなかった

ヤクザの前で漫才をするくらい

オソロしい雰囲気がおそらくこの教室にはある

ぼくはK君の肩をつかみ無理やり立たせると

みんなごめん ちょっとK君熱があるみたいなんだ

それにちょっと勉強疲れみたいでと言いつけて

みんなの氣勢を削ぐと

ほんとうにゴメン…ほんとうにゴメンと……

あわてて教室から逃げ出した

K君…おいK君……

きみは教室でシカトされたいのか

イジめられたいのか

廊下を小走りにいきながらぼくは

ほとんど 早口で舌を噛みそうになりながら言う

ぼくはK君を本音のはなせる

ほんとうの友だちだと思っていたからだ

しかしK君は反省していない にたにたした顔をして

ちがう ぼくは目覚めたんだと言う

シンコーシュキョーのようにその微韻《ひびき》は

なにかぼくの心臓を高鳴らせた

ぼくらは気がつく立ち止っていた

ちょうどグラウンドが見える踊り場のところで

K君はいった 《ヨシモトのヨシモトタカアキ》

うう…ううッ…ヨシモトバナナ……

お笑いは感染する

そして気がつくとはくは 保健室に彼を置き

ぼくは不敵な笑みをうかべて教室へもどる

Kの奴ダイジョーブかと誰かが言う

しかし ぼくはKを教祖だとおもっている

そしてそれはおそらくキリストという英雄と

十二の使徒のようにこれからあたらしい聖書が始まる

ぼくは言った 《チーズで出来た地図》

頬杖をついていた奴はつるつとすべり机に顎をうちつけた

自習をしていた奴は手にシャープ・ペンシルを刺した

開いた口がふさがらない奴は時の流れを忘れていた

お笑いは感染する

そう Kが教えてくれた

ぼくらの笑いをかえせー ！

ぼくらは数人で職員室へとのりこみ教師たちに質問し

そのあいだに 放送室をハイジャック

そしてそこから Kがああブツを出してくる

まえから聞きたくて聞きたくてたまらなかったんだ

ぼくは嘘いつわらず正直にKにそう言った

あまりのばかばかしさとしかし本音と縋い交ぜになって

ぼくは涙をぼろぼろこぼしている

Kはそっとぼくの右肩に手をおいた

それでいいのだ～とバカボン調でK君がいう

それはもちろん綾小路きみまろのCDだった

## ラッシュアワー

---

足が踏まれている内に踏み板が抜ける

じぶんは板でした

あなたはちょうど洗濯板を胸にもっていました

あなたがいたから愛を知りました

それで大人になりました

切符をもっていて自動改札にいれるとプリントアウト

じぶんは原稿用紙でした

あなたはちょうどちり紙を欲していたようでした

あなたがいたから孤独を知りました

それでなんとなく泣きました

なかつり広告をながめていたら痴漢の文字のタトゥー

ああ じぶんはロッケンローラーでした

あなたはそこへやってきたファンで手を振っていました

あなたがいたから時代を知りました

だからわたしは歌いました

座席でねむっていると窓の向こうなんて見ませんでした

ああ じぶんは何もしらない傍観者でした

あなたはいつもどちらかへとよりかからせてくれました

あなたがいたから笑顔を知りました

だからわたしは日々を知りました

強がりやさみしさをかかえて朝起きるのが億劫でした

ああ ころころにいつも寒い風が吹いてました

でも愚痴をこぼすわたしのお尻ひっぱたいてくれたのあなたでした

あなたがいたから立ち止まりました

あなたがいて周りを見回せました

駅でさようならをしたのもワンフレーズでした

ああ わたしたちみんな隙き間だらけでした

あかるい嘘がアスピリンをほっしていても抗鬱剤をほっしていても

それでもまだ歩けます

あなたはわたしの春でした

## 水族館

---

どこにでもあるような

へんぴな水族館へ行った

・ ・ 。

しゅっ、しゅっ、

きれいな水草が

・ ・ 。

マイクでなにか呟いていた

酸素ありますよーとか

それとも???

・ ・ 。

ででででで

だだだだだだだだ

・ ・ 。

ぼくは昆虫がそうするように

蜜めがけて

突進してへばりつく

ぎゅうっとタコの吸盤

・ ・ 。

おいしそうな

アイスクリームだ

・ ・ 。

いや きれいな

真珠だ

・ ・ 。

ねえ、卵をうみおとす魚のように

あなたのそれがほしいわ

・ ・ 。

一瞬なにをいっているのかわからなかった

だけれど 水草は よよよと泣き崩れるように

ぼくの下半身に巻きつこうとしてくる

・ ・ 。

くうーっ、なんて、シモネタな水草だ

そんなやつは、…こうだ！

こうだぞ！

・ ・ 。

ぱああああん

ずうううッ

チチチ

わうわうわう

・ ・ 。

おい、相棒、…いやきょうのゴミ、

やたらとうるさいな

・ ・ 。

それからまた水族館へに行く気になって、

なんとなく嫌だったのだが 予感的中

なんでか知らないがあの水草は戻ってきている

ゴミ袋からどう脱出してきたのかは不明だが

ゴミ収集車のお兄さんが

たこおどりさせられていた

・ ・ 。

やっぱりなにかつばやいている、

ほざいている。

・ ・ 。

あたしの水着がやぶられた

きれいな水玉模様だったのに

・ ・ 。

そしてここであったが百年目

ぼくをみるなり弁償しろ、という

目玉が飛び出る金額なり！

ほんとうに目が飛び出たら眼科へと逃げられたのに

払えないので泣く泣く水草の男妾に

・ ・ 。

うふふ、好きよ、大好きよ、

さわられるの好きでしょ、好きってお言い！

どんな卵より、どんなうみの生物より

ゴミ収集車のおじさんより

ずっと、ずっとね

・ ・ 。

ある夜、ぼくは意を決して、

この水草を抱いた

へんなにおいがした

・ ・ 。

みずくさのさくずみ

くさいみずのあるところはすみっこ

はいすいこう

ないところはいずみ

・ ・ 。

ぼくは植物園へは行かない

動物園にも行かない

ぜったいにぜったいに

行かない

救急車のサイレンが遠くで鳴っているの

わかりやすい音楽はやめておく

\* \* \*

時代に うっすらと髭が伸びている

大好きな詩集を手にとるたびに そうさ

\* \* \*

耳たぶを、グイグイと引っ張る。 あたし。 手慣れた手つきで。

アウッアウッ。 四月のオットセイのような奇声をあげて

…発情する (発 症 す る?)

<ビーチボーイズとビーチボールの関係>

\* \* \*

ビーチサンダルなんかじゃ泣けなかった

ビーチのパンツの上に蟹がいるくらいじゃ笑えなかった

\* \* \*

…で も あなたがいる喜びに 染められて

あなたの中に き み だけ の

思 い 出 は 静 か に 語 る

<涙はもう乾いてたはずよね？>

\* \* \*

救急車のサイレンが遠くで鳴っているの

わかりやすい音楽はやめておく

\* \* \*

救急車のサイレンが遠くで鳴っているの

わかりやすい音楽はやめておく

\* \* \*

ビーチボールがえらくお気に入りのマリちゃん

前世はあたしのペットだったんでしょ ？

\* \* \*

ビーチボールが サーカスする

ビーチボールは アクロバティック空中飛行

ビーチボールは 真夜中のアイボリー

ビーチボールは きっ と せつないエレジー

\* \* \*

ビーチボールがえらくお気に入りのマリちゃん

excuse×spoil×思い出

いい思い出なんか な い け ど

\* \* \*

耳元でまた小さく 大きく ドップラー効果

まだ自分が 何ひとつ忘れていないと思い知り

まだ 何ひとつ 手に入れていないと思い知り

フラグメンツ 馴染まない匂いのする白いタオル

\* \* \*

誰だってすてきなビーチボーイズになれる

カミのむこうに見え隠れする

なみ音は …ああ 無常

\* \* \*

救急車のサイレンが遠くで鳴っているので

わかりやすい音楽はやめておく

\* \* \*

救急車のサイレンが遠くで鳴っているので

わかりやすい音楽はやめておく

## スワン達をめぐる

---

ネクタイを外している時のぼくというのは

無愛想で、マスクをもっていない

きゅうくつな襟をだぶつかせるため

ボタンを外した時

誰かに不意に名前を呼ばれたような気がして

振り返る… 孤独はフィルムを回して

ドジや しくじり、

とうへんぼくなぼくに舌うちする

こぼれてゆく珈琲のほろ苦さが

成る程 よかった――

下りてつきて砂利道へとゆけば、松の木がある

…鴉はまっさおに濡れた月の海のように

カーキ色の服を着た おさないぼくの懐古

ざざ、と揺れるたび、幼き頃の花の誘惑

ちらとよぎる戦争、林が教えた、…

ひろくてな あがい昔の道には

声もなく いともひっそりと夕方を引き裂く

かかしのようにはんな顔をしている斜陽

一瞬の間によって

ぼくは“やさしい傷口”を見出す

夜はふかき苑 そのくらき苦悩のあはれ兒

確定申告、生命保険、公的年金、

…ぼくは、たとへば人しらぬ静黙

ため息において人知れぬ波音をきき

はるかにさ迷ひうる兒、…

暮の目のような町に

訣別がしずかにかがやく

欠勤届や、退職届、

…一身上の都合により、という嘘を

ふり返りみては

とうめいな空の青さに

稲の穂がみのる月

ぼくが人生で選んだものは

歌ふべき歌をついに教えず、また知らず、

この、眼。この、奥に ———さまようてい る

夜の底。 えたいのしれない悲しいひびき

這いずってひびいてくる、まだ峠のくらい道

まだ、はぐれた小鳥なのよ、

まだ、まだ。 故知らず くらい通りを曲がり

汗臭さがどっと押し寄せてくる――

翳り、…まだいくらか温みの残った

ネクタイに、葬儀のマナー

猫背をして、涙をうかべるのは何故なの

命の綱… それはぼくの首輪です

くたびれた人が、とほうもない夢だけを見ているひとが

されど、ああされど ――頼みもしない

ともし灯など薄れうすれて 山を越えたのだ

みじめで、うだつがあがらない、

…消えなむとせる、あわれ孤独な影、

魂の碑、祀りあげられた人の訃報、ものなべて、…

死して聲なく、高い煙突が煙をふきだしていやがる

たとえようもなく、やわらかそうに見えるシルエ

カアペ、葬り去られた夕焼け匂ふfolkローレ

堤防のように見える高層建築群！ ああおまえ

やたらと胸の起伏。わけのわからない言葉の哀歓

おまえはPDS D。バブロフノ犬…

あざやかなまま、指は抜き取る

ゆるやかなリズムで、人生の一場面を走り抜ける

その時なすりつけられた、掴もうとしていたもの、

ぜんぶ、ああ、ぜんぶ、

おまえらなんかにはわかりやしない

つかみ損ねたことなど知らない、

おまえらの知らん顔、不満なこと、不満なこと

苦勞だと、ねぎらいだと——でもぼくはじき、

虫の声に馴染んでしまう 片隅にひそんでいる風の不安に

疼いている、マグダレン修道院の I M A G E

まだ女、一切が眠らないでおくれ

ママ！ 最期の空気を吸い取った一瞬まで

僕はあなたの心を、少し――

見過ぎてしまったようだ・・

“プリマヴェーラ”・・・

世界の根本原理である「愛」を表現している――

神々の庭園の永遠の春を表す春の絵――

神々の庭園の永遠の春を表す春の絵・・。

・・・生命は環境に適合し、生命と環境に均衡ができている――

――にぎやかに漏れていた歌や笛の音が、

今やかすかに聞こえるばかり・・

と、なって――

……狭き窓より、自然は逆襲する――

――（でもメルクリウスへの、）愛に目覚めてゆく・・

神経系の伝達回路――

彼女がメルクリウスを見つめている・・

でもメルクリウスは気付いていない――

そしてここには、パトロンで豪華王と呼ばれた  
ロレンツォ・デ・メディチの美男で有名だった、  
弟のジュリアーノ・デ・メディチの恋人、  
シモネッタ・ヴィスプッチ…。

ボッティチェリの描く女性には、――

常にシモネッタのイメージが重なる…。

春の訪れを告げる風――

酔って眠くなる…

多感さは、きっと笑われる…

――が、これはシモネッタとジュリアーノという実在の人物が、  
登場人物、――また製作時期が病死-暗殺という伏線を、  
回収するものであるならば、  
焼いて滅ぼしてしまえばいい…  
けど――そうじゃないって気付いてる…  
だから、ボッティチェリが二人を祝福し、――たとえそれが君でも…  
…ボッティチェリにおけるシモネッタは、永遠の女性…、  
『ヴィーナスの誕生』を含めた多くの作品で指摘されている通り…  
けして喜ばしいことではないが――祝福していた、と…

「ジュリアーノ・デ・メディチの馬上槍試合」

のなかにある詩から着想して描かれた、というのならば..

そしてそこに<永遠の春>を見た、

ということも出来る――

画面の不吉な要素は、一瞬の美しさを語るものとも言える..

ほんのひと時が...

薄雲がかって朧にかすむ――

が、始めよう..、――右側に、

冬が過ぎ去った森に西風の神ゼフェロスが現われる。

.....迫り来る雪崩――

それに君はまだ、気付いていない..

ウイルスや不適切なソフトが、

コンピューターに混入して、

うまく操作ができなくなるみたいに――

土の中に眠っていた花の神フローラを呼び起こす。

ゼフェロスはフローラに春の風を吹き込む。

ささやかに、かぼそく..

「青々と茂る草に霜が――来て・・・

女神は、雪のように、花のように――

白い・・・本当に――白い・・・」

フローラはやがて春の花を生み出し、

春の女神プリマヴェーラへと変身する。

花々に囲まれた森には、女王ヴィーナスが現われ・・・

――ヴィーナスは他の登場人物より一歩引いた場所において、

この無言劇を司る役割を演じている。

「でもこれは――君だ・・・

ポッティチェリ、君だね――

君の自画像は――女性・・・」

ヴィーナスの衣装や頭上の木々は、

聖母マリアの伝統的表現を象徴している。

マリアは世界の最高の真理である

「知恵の座」を意味し、

それはネオ・プラトニズム思想において、

ヴィーナスが象徴する「愛」が、

世界の根本原理とみなされていたことに対応する。

・・・ロレンツォ豪華王の妻クラリーチェ・オルシーニとも言われ、

クラリーチェが妊娠している時期に描かれたとする説もある。

でも美しいものにさえ・・・

酔ってられりゃそれでいい――

「すぐれた作品に必ず付きまとう予言性の悲しさ・・・

そしてそこに――いま、僕もまた・・・

<永遠の春>を見た、

ということも出来る――]

――夢の如く・・・

――夢なら醒めないで・・・

欲しいのに――

ねえ、欲しい――のに・・・

その傍で三人の侍女、

美の女神、貞潔の女神、愛欲の女神の三美神が舞い踊る。

アグライア・・・

エウフロシュネー、

タレイア ――・・・

「青々と茂る草に霜が――来て・・・

女神は、雪のように、花のように――

白い…本当に——白い…」

(たたえる)

… (たた) える——

ヴィーナスの子供で、

いたずら者のキューピッドは目隠しされている。

狙いを定めている場所は、「純潔」の頭上である。

この女神の頭部には…

何度も調整が加えられたことがX線撮影によって確認できる——

—— (でも、メルクリウスへの、) 愛に目覚めてゆく…

神経系の伝達回路——

この目隠しが、愛の不確かさや、

愛の負債を暗示し、( 儂いものであるので、 )

視覚的な美によってではなく、

( 人の世は、夢のようで… )

目に見えぬ天上の美によって引き起こされる…、

( 天上の愛を、人の無力さを…呼ぶ—— )

そこに何を籠めたのだろう、…ボッティチェリ、

( …言葉なんか——いらぬ… )

貞潔の女神に愛の矢の的を絞っている。

弟のジュリアーノ・デ・メディチの恋人、

シモネッタ・ヴィスプッチ…。

ポッティチェリの描く女性には、――

常にシモネッタのイメージが重なる…。

気温の低い冬から春にかけて…、

生物活動が弱まり水質がよくなる――

左側には旅人の守護神、

神々の伝令にして冥府に死人の魂を導く、

魂の案内者であるメルクリウス。

メルクリウスは魔法の杖ケーリュケイオンを持ち、

…冬の再来を防いでいる。

メルクリウスは、翼のついたサンダルをはき、

旅人の被るツバ広の帽子を被った青年の姿で想像されていた。――

と同時に、彼が見上げている神秘的な世界の心理を、

明かそうとしている…。

考え過ぎて…

涙が出そうになる、

プリマヴェーラ ー…

「春って…本当に永遠なのかな——

こんな気持ち——

ずっと抱いて…死ぬのかな……」

「僕はそれなら知っている——

空を穿つ——ような

白い…本当に——白い… 」

(空虚…)

… (空虚) それは——

突然不意に何の理由もなく、

夏が降りてくる。

たとえば横断歩道の中央で、

赤に変わって、

それまでの現実が引き裂かれてしまう、

“ゆれ”——。

美を感じる歪んだ感性は双眸に映りこんだ自嘲。

Sample...

マリーが目を覚まして、

マリリアンヌが来る、

マリアも…。

[紐でしっかり縛ってある箱は、

肥満してる]

微かな痛みをもたらす残り香の充満する、

…そんな箱の中に、

女という、ヴァイオリンが、

入っているのだ。標本として――

車の屋根に、

乗っている猫を見たかい？

その肩に、光彩で――虚空の色彩で・・

頬に、刻印と――恩寵・・

(on) 蝶・・。

判断の根拠や思考の過程を示しながら展開される、

髪にバタフライナイフ隠して。

「息継ぎ・・」

(脱力・・)

非常号音が鳴る――火事の合図さ馬鹿野郎・・

救急車がうごいて――パトカーが走る、

潜水夫のようにもぐる真珠売りたち。放火魔たち。

どこかに穴か、溝があって、そこに、

ライターでもかくしちゃうのさ、陽射し・・。

「そうそう、耳みたいだね・・」

そこをきれいに掃除することが大切なんだ・・

ああー甘いジャムが食べたいね、

マーガリンをべったりとつけてさ、

パンにーパンにね..

ああ、それとも、ベーコンとエッグにしようかな、

# シイ・ワズ・ラブ..

シイ・ワズ・ラブーー

ふふん..!

軽くなる無益な水槽の中身ー

軽くなる無益な水槽の中身ー

演奏しよう、

ポジション移動、

音階、

ヴィブラート、

ボウイング..。

ー大きな大きな樹がたくさんある、

歌って、弾いて、書いてわかる、

拍手を送るように…外へ出てゆく、

すると、きっと見つかるんだ——

手を噛む少年、嘘をつく少年、

不器用な男の子、優しいお兄さん、

飛ぶ、笑う、心ざける…

「そっとしておく時間が大切で、

孤独のなかに生まれ磨かれていく大切な、

心を解放するための、鍵…」

まるで物語——。汚れたフィルターを外して、

またしても、誤作動を起こし——て…。

——このありさま、さ…

小川の水面に、

跳ねてゆく陽射しを見たかい？

…麗しくて、

神々しい、

枯れる、時——。

<楽譜にはすべて書かれている>

《詩にすべてを書かなければならない、理由<sup>わけ</sup>…》

刺された、棘で——現実の痛みで…

夕方みたいな、雨もよう…

「これでもまだ足りないのですか？」

痛みで——痛覚で…反射神経で…

Sample…

マリーが目を覚まして、

マリリアンヌが来る、

マリアも…。

…国境越え、さ！

…太陽の永罰。

——排他的王国の理論がエクササイズする、

瞬く間に車はスピードを増し、

カーテンはかえられ——る…

開放的で…、どうでもよくて——

美しい目で、無理に笑おうとする、

女は、町の方へ…ゆくのだ！

シイ・ワズ・ラブ..

シイ・ワズ・ラブー

ふふん…！

軽くなる無益な水槽の中身ー

軽くなる無益な水槽の中身ー

## 君がいたから

---

必死にならない 心配しない…

難しく考えすぎない――

二つの目は精いっぱい心の目と五感を使って

新しい世界を第六感的なものにした

細胞ひとつだって無駄にしない燃焼力で

身の置き所のない僕は新しい秩序をもつ完結した世界

地を這うものは

空を舞うもの…

「遊ぼうよ」って――

僕と遊ぼう…

いつだって

なつのひかりの前で

無口な透明人間たち

用心深く石くれをハンマーで割れば

――エサをねだる声――

...複雑なニュアンスの表現

二重文節性

アップリケや、パッチワーク――

廃物利用、貼り継ぎ、

間に合わせ、使いまわし……

、、、、、、、、、、、、、、、、、、  
吊革に垂れ下がる空気は

枯葉から雪へと

巻き上げた髪は藻のように濡れて

鳥たちは渡ってゆく

<自由>を探して

《もっと確かな答え》を探して…

疲れた背広は浴槽へとすり替わってゆくとしても

昼から夜へ――流れていこ…う…

紡いでいこう――僕の時代…

いいや――僕等の時代…

ヒトが今ヒトにしか見出せないでいる言語とは何か？

ヒトが今ヒトにしか見出せないでいる言語とは何か？

…コミュニケーションとは何ですか？

…コミュニケーションとは何ですか？

「P1」

連続する映像・・・

惑星探査機に載せられてゆく頑丈な箱

通路を慎重に通ってゆく

コックピット内は無人

(・・・世界が破滅しても、

地球が再生するように――)

でも...

男と、女のような両手がのびてきて

いなかの、家のような瞬間がつづいてゆく

五月の*Butterfly*・・・

六月の蜻蛉――

大気圏へと突入するMaximumな航空機械・・・

身体がビリビリするような刺激・・・

ありえないことが目の前に起こったらすげえから

もっとすごいこと、もっとすげえこと・・・

ヒトが今ヒトにしか見出せないでいる言語とは何か？

ヒトが今ヒトにしか見出せないでいる言語とは何か？

…コミュニケーションとは何ですか？

…コミュニケーションとは何ですか？

――ゆれるゆれるよ心臓

竪穴式住居（の、）

遠い声、遠い部屋…

アンドロメダ…

カシオペア…

「この前すごく感動したんだよ、

“天空の城のラピュタ”ってあるだろ、

ムスカって出てくるじゃないか、

あれもしかしたら、星の名前から、

つけているんじゃないかって――」

[P2]

夜は鈴を鳴らしていた

氷の割れる音の中

時の鐘が音を消す…

夢幻Repeatライブハウス

夢幻Repeatライブハウス

――いつまでもあかるい太陽が

ルリルルリルする

(君はネット・コミュ/核シェルター)

目をつむった残像に

なにひとつ思い当たることがないけれど

(君はネット・コミュ/核シェルター)

ルリルルリル

遊ぼうよ！

遊ぼうよ！

ヒトが今ヒトにしか見出せないでいる言語とは何か？

ヒトが今ヒトにしか見出せないでいる言語とは何か？

…コミュニケーションとは何ですか？

…コミュニケーションとは何ですか？

――月が波に描かせた *Sign*

祈りの言葉をつぶやきながら

悪意への威嚇・・

正義への苛立ち・・・

それでも緩やかで不連続な流体となって

そして多分何物でもなくなって

僕はもう一度旅をしたい

生まれた頃の世界を――

終わった世界を・・

そしてもう一度魂に刻みたい

生まれた赤子の泣き声のような言葉を

できうるなら果物が熟して一番甘くなった時の言葉を

...受けとめてもすぐ逃げてしまうかも知れないけど

.....伸ばして、もっと手を伸ばして

## グッドナイトミュージック

---

薄いてのひらに息を吹きかけている

時は短すぎて――

唇のまわりのほほえみは罅欠を入れ

自分ではもうどうしようもない…

大きく見開かれた物語の豊穡な土の匂いを

深夜の繁華街をうろつく

犬のように嗅ぎながら――

その奥底に埋もれていた憧れが

天使を呼び覚ます…

醒まして欲しい…

グッドナイトミュージック…

偉大な神の力を…

お前は言った――

みんな鹿爪らしい顔をしている

耐えがたい二重生活のせいだ

過激な発言が支離滅裂な大衆たち

心は屍のように埋葬されている

時々僕はエロビデオなんかを

どうしても見るものかっていう気持ちになる

世界が全部シモネタフロイトにおける

アクロバティックな荒唐無稽さで塗り替えられ

血液型占いしているような気がするのさ

雄弁な演説に作り笑いに嘘だらけの拍手

主人公なんていない

誰もそんな結末もとめていない

でもノスタルジーのせいなのかい？

民主主義はいとも容易く毒を流して

川で溺れるだけじゃなくて

死まで面倒を見てくれるんだと言う

でもいつまでも

本当に底の見えないしじまを…

見つけられないって——

アキレウスが塹壕から出てくる…

あれは自戒するだけの夢だったって

そうだねって僕に言わせたいのかい

栄光あれ！

と…予言する者には

ヒヤシンスの体温がお似合いだ

青桐みたいなひねっこびた気配が

お似合いだ

政治性と芸術性は分裂し！

文学性と抒情性は分裂した！

僕の中の在りし日の僕も分裂した！

再生はしない！

でも宣誓はする！

人間は探究する生き物…

絶望に隷属せしめることできない生き物！

駆け寄ってきて——さっと遠のく…

旅に出る両腕

花に宿る精霊をそこに感じながら

翼をひろげるように

疲れたとかすかな声で言い

昨日読んだ下らないプロレタリアの詩に

シュルレアリスム理論を入れたかった

孤独だって

B29の大空襲よりマシだろう…

宗教だってマルチ詐欺よりマシだろう

たとえそれがどんな地平線であれ

それがどんな難破船であれ

深夜の重たい時計に心臓を寄り添わせる時は

敬虔なキリスト教の信者みたいに

うなだれたロマンチズムの影を

トルソーのように見立てて

あるいはデッサン人形のように見立てて

成功と敗北のアンヴィバレンスな天秤――

道の彼方で世界は失われる・・

自然だけが残されたみたいに君もそのことに気付く――

運命が三つの影を作る

そしてゆったりと流れる二つの河を作る

僕はタンバリンを取り出す

そして大きなおもちゃのような都市で鳴らしまくる

「いいかい大衆たち、

・・・魂が辿る道はたったの一つだけ――」

でも夢物語に呆けている場合じゃない

絶対そうなんだ

そうだろ落日の光・・

フィクショナルイズしている場合じゃない

ここは現在過去を通じてさまざまな偶像の地獄

水車の車輪のように軋りながら

血管の破壊・・・

水が流れているのは渴きを覚えるためなのか

それとも潤いが常にあることを教えるためか

世界はどんどん自由になっていくようなのに

時間をまだ越えられない

愛を見つけたつもりでいたのに

愛は重荷を下ろすことを忘れていない

人と繋がっているつもりで

離れていくことから逃れられない

そうして――暗闇が・・・

僕の心の中に這入ってくる

あんまりにもひどい僕の生活は

滅びの神託でもやらかすかのよう！

でも響く・・・ひたすらに

引き潮と満ち潮・・・

さあお出ました！

天使を呼び覚ます・・・

醒まして欲しい…

グッドナイトミュージック…

偉大な神の力を…

こんなんじゃまだ大人なんて言えないかも知れない

こんなんじゃ成功とは言えないかも知れない

僕は窓の傍で死者のことを考えて眠れない

僕は鏡の傍で死者のことを考えて眠れない

それぞれ痣に触れる。

ひら

開張く。

風が高い。

鳩。おまえは首を動かしながら――前へ…、

光のような…。えも言へぬ風――。

、、、、、、、、、、

誰もがそれぞれの北極。

吸盤をもてる影、傾いて――いる…

生のよろこび、

生のか なしみ。

パンとサーカスに怒髪するコロッセオ。

「漂白された頭蓋骨のようだな。」

――第一の印象。

五万人を収容するコロッセオ。

「壁に何か書き残しはしなかったか？」

――素朴な疑問。

ゴースト・スクリーム…

暗闇。金切り声。

汗。恐怖…。

(信仰の街で、異教を見た？ )

と――俺は、笑った…

一階の大理石張りの貴賓席、

二階は庶民の木製席、

三階は立見席、

なんぞ妨げん、無意識的な憤懣の血を滾らせている。

なみう

肉體に今、脈動つ血液…

秋の月と春の風のようにいまは空虚しい…

ローマ

都にはいま、商人があふれ、三々五々、夕闇へ散ってゆく…。

われはしかし跪く女のごとくなり…、

砥石を粉にくだいたような黄色い沙の微粒…。

「いくつかの螢のともしびだろう…」

(舗装道路や高速道路より…。)

悠久の水はゆく――

いまはもうそこにはない噴水…

てすく

一つかみ掌に掬った、空振り。

何千年の文化という、

襟がみを、もう用捨なくつかみながら…。

はな

鼻涕する…漏斗のかたちせる、心折…

——青きローマをとこしなえに紡ぐもの…。

「俺は——幾度、夕陽が紅く染まるのを見た…

幾度…そうして黄昏に——、

『最后』を感じた…」

めぐ

轉らせる頭…。

慣看——おそろしく騒がしくまたあわただしい取引。

パトカー進入禁止で…

白馬で警備する。勇敢に…観光の引き立て役みたいに——、

お土産屋が盛況する。蝗のように天下いたるところに、

群れをなして跳梁している。

心の奥底に溜まった鬱懐を出す。壮懐。

たけなわ

酒も酣。

二〇〇〇人の剣闘士と五〇〇〇頭の猛獣たち。

歌む。なおいまだに、悲切、

しょうしょう

瀟瀟と雨が降る。

エレベーター

昇降機を使って動物や舞台セットが、

わめ

引き上げられていく——喊き罵る、

よじりくねりたる、異国の黒き薫り……

<木乃伊たちの虚ろな眼>

<ひとすぎしたつもりの猖獗>

この跳梁跋扈は終わらない……寂然と——答えもしない。

血と汗が混ざり合いながら、骨の碎ける音。偉なる広さも……

むしろ慙れむべき人間の小ささ。

文を布く前に、武を以て、地上に平和を樹てるしかない……

オペリスク

方尖塔よ……在れ！

原爆ドームのようなもので、

ピラミッドで、このコロッセオのようなもので……。

俺が——俺が、

俺が、俺が、俺が、

随喜の涙を流さぬばかりふるえて……、

功名に燃えやすい青年の心をそそるように、

やい、老いぼれ。やい業突く張り。

やい、朴念仁。この気の利かぬ田舎者。

不貞無節！ ペテン師のイカサマ野郎！

たはけ

高慢ちきなトウヘンボクの呆痴！

「――でも本当は…違ってた…

色んなことが――違ってたんだ…」

(わからなく――なるよ…)

…雨がきつくなり、

雲も速く流れて――いた…

生のよろこび、

――ただようもののためにひろがり、

ねむるたびにとおのく、

生のか なしみ。

「…俺はまるで白痴になったみたいになん、

お前等のような馬鹿になってる…」

(早く死ねよ、偉大な芸術家…！)

、、、、、、、、、、

いまは地下部分が露出した、

剥き出しのコロッセオで。

ドムス・アウレア

在りし日の黄金宮殿で。

唯一遠く、忍耐のない汗、

水の底に沈む真珠の懈怠――、

冷ややかなうれいにしずむ黒き沼の擬態・・

ああ、何も喰える物がない・・

ああ、何も飲める物がない――

色彩が、匂いが、音が――

砂のように、さらさらと流れたかと思うと、

季節の推移は、

希薄な印象として、

ぎごちなく武装している・・。

冷たい悲哀が僕の疲れた胸に吹きこむ。

事象の底にはこの目に見えぬ暗い流れが走り、

理想を欠くが故に、

偽ることを覚えた人がいる。

窮屈と思えば馬鹿らしい。

大潮流は、

倦まず息まず澎湃として流れている。

肉眼で眺めうる確かさで、

僕の影が見える。

影はEcstasyの刹那に達しようとしている

そして自分というものを、

取り籠められた器の中で

殺してしまいたかったもの、

殺したかったものがある――。

母胎の中で聴き、

熱い血潮の滾りの中で聴き、

運命の悪戯の中で聴いた、

型から鋳出した人形のごとく、

させらるるごとくふるまった果てに、

何の苦しみもなく歩いてゆく、

何にも知らぬ子供のような心で進んでしまう。

靈魂の死を考える・・・

生命が危うくなると人格は研ぎ澄まされ、

個性が危うくなれば逃避衝動は強くなる。

罪は純真な道德だろうか。

複雑な夜道の声・・・

散ればまだしも、朽ちてゆく花びらが、

また、しとどと濡れてゆく。

無意味な考え・・・

忍耐に似たりか――

僕は数え立つれば際限がない宗教を思った。

壊しては建て直して…

静かに丁寧に元通りになってゆく。

賑やかなようで言い知れぬ淋しさの都会。

孤独なのか、

無存在になりすますがゆえの、

痛覚遮断なのかもわからぬまま。

僕は学問の話をした。

日本の話をした。

そして憑かれていった。

僕は疲れた。

右往左往によじれあい流れの末を知らぬ詩に、

その生命のような終わりのないimageに、

僕は昇ったり墮ちたりを繰り返していた。

色彩が、匂いが、音が――

砂のように、さらさらと流れたかと思う…

そしてどうなったかって、

どうなったんだろう…、

僕は何となく情けない気持ちがしてきた。

山に行きたい、海に行きたい、

水になりたい、風になりたい――

夢幻泡影…

うたかたの記…。

焰が音も無く燃えている。

眼を瞑ると、

自分の耳に、なつかしい声が、

聴こえてくる――。

普段思っていないようなことまで、

ずざざ、まことしやかに述べ、

明瞭な温み。

いや、明瞭な冷えか。

溜息と共に煙草の煙を吐き出し、

二十一世紀の遺物を完成させる。

財産は、睫毛と睫毛との間に、

小さな一匹の蜘蛛を住ませる。

僕はドイツで何を見た？

イタリアで何を思った？

日本という国をどう思った？

僕はどうするべきだと思った？

運命のつながりが堂々めぐりして、

天地創造まで飛躍する。

思い浮べることも、

思いめぐらすこともできない言葉が、

乾いてしまった心を潤した。

流れたのが血であれ、

インクであれ、

あるいは文字という記号の影であれ、

抽象的で単純な、泥一一。

僕が励ましていたのは、

何かを変えようとしていたのは、

自分自身だったのか、

それともやっぱり、お前だったのか…

僕は泥、

よごれることは構わない

だから傷付くことを恐れたりはしない、

でもエリートであり、

けれどお粗末な大学の馬の骨じゃない。

思いのままに働きつづけ、

疲れつづけ、

骨董を完成させようか。

それとも死者の書を編もうか――。

それとも、地図にない幻の街で、

ジーパンと白シャツの、

おいおいという格好をしながら、

あてどなく空でも見て、

匂いにめぐりあう春に焦がれようか、

ドキドキしながら、

やっぱり、ときめいたりしながら、

素顔のまま、

真っ直ぐでいることをやめられないまま、

不思議な空のように青くい続けようか。

手が自由になれば、

吊うこともできる、

煉瓦の壁の中の火も、

太陽のおおよそ強すぎる火も、

限度を知らなさすぎる、

僕の魂の火も――

色彩が、匂いが、音が――

砂のように、さらさらと流れたかと思うと、

表面的な事実にしたがって、

のびのびした自由が戻ってくる、

兵士にも、

休息が落ち着きと安心が与えられる・・

でも僕は、

地獄と煉獄を行き来する、

だって天国は頭が痛すぎる、

神様みたいに振舞ったり、

何もかも与えられたみたいに、

この世界を見ている君よ。

僕はいつも、

下らない話ばかりしたい、

できるうなら、

やっぱり何にも大事なことを話さず、

一人でぼうっとしながら過ごしたい、

必要なのは、勇気。

必要なのは、愛。

夢を掴むために国を捨てる人もいるし、

世界で働いている人がいる、

小さな考えに囚われちゃいけないんだ、

そしてそのために、

僕が僕でい続けることが、

一番大切なことなんだ。

僕は忘れちゃいない…、

人間の誇り。

詩人の誇り。

そして魂のかがやく、

言葉を扱うものの誇り。

最初に――

おそらく魔法があった…

夏の午後があった…

そして長い夜があった

長い長い夜が

僕等にちゃんとあった――…。

# 視線

---

インストール

移植する。

目を閉じているから何も見えないけれど遠くで落雷の音。

動物たちが野を駆け、鳥が空を舞う。

人の裸体は薔薇のようだ。シナプスが何処かに繋がる…、

クラゲが水中を流れ流れてゆくように大波小波をぷかぷかと頼りのない、

混沌が、嘘であるかのように…。レコードに針を落とした一。

テレビに、映画、ビデオに、音楽、

インターネット、携帯、娯楽には際限がない。

だからややもすると裁きの言葉は圧倒的な暴力に呑みこまれ、

「死」と「生」が、「絶望」と「希望」のように…、

コール&レスポンスする。空気の流れを繊細に捉えてみせる、

幼児化…退行…リハビリ…。

音が視覚と融合する。

曇る…目の前がそれだけであるかのように錯覚する。

感受する瞬間がスナップ写真として、

ショーウィンドーでも覗くように、それは意識無意識にかかわらず、

学習や広い意味の引用によって得られる情報であるのだが…

それでも読み上げられる賛成票と反対票における刻一刻と迫る、

手に汗握る決定的瞬間。テレビの画面に張り付いたまま一

刹那の暗転。特権性の戯画。

僕は地球という星にへばりついている。

そして僕のようにあいつも地球という星にへばりついている。

ゲームシステムの大幅な進歩とともに、

現在ではリアルタイムで広大なマップを移動できる。

それでもコカ・コーラは倒れる。泡を吐きながら――、

胸元から溶け出そうとする、

透明化する一方で固定化される、抑圧力の流動とでも呼ぶべきものが、

ゆれながら水銀のように光って、悪意と相互不信が増殖してゆく。

次の瞬間、川の水面に浮かんでいる。

キャンベル・トマトジュースも倒れる。

時を刻む時計の音と、時を告げる鐘の音。

窓際のレースのカーテン。

生命を告げる力の連鎖がダイナミックに展開される。

その部屋にマリリン・モンローの写真がある。

その部屋にエリザベス・ティラーの写真がある。

その部屋に、プレスリーを絵の素材にしたウォーホールがいる。

次の瞬間、星空。閉塞してゆく――

シンクロ

速度と同調する・虚構世界に呑みこまれてゆく――

六番目の感覚を取り戻そうとしている。

神を見つけ出そうとしている。

だが、そこにあるのは無実を主張する被告席だけだ。

嘘だ…と一一憤慨する…。

路傍の廃車を見たか、錆びたブリキ缶を。映画館を。

想念や夢が一種異様な熱気を帯びて一一

妄想のすべてが這い出してゆくようだ。

諦めきれない想いの数々を抱えて、モニター室で監視する。

警察。国畜。

秘密めいた空間、施設、サナトリウム。

コマーシャルが流れている…。

魂の深淵まで続く、呼応する、明滅する光が一一、

コンクリートとアスファルトですべて塗り固められてゆく。

狂っている、散らばっている感覚。幻燈の映し出す映像のように、

昇華して、きらきらと半透明になって、それを蟻が砂糖でも掻き集めるように、

疾風の感覚。夜の荒野を逃げてゆく一一。

回転する天球の波動がこの町の新しいノイズとなる。

水中花が見る夢もテクノロジー…。

擦り切れたビニールの座席。

畸形のハピネス。

アルカイツクスマイルが残っている。

一一寿命を迎えた人工衛星やロケットが年々増えて軌道を回り続け、

宇宙環境に支障をきたすほどゆゆしき事態にある。

猛烈なスピードで通過する。純度の悪いドラックのような、

シグナル

ヒップホップに悪酔いする。停滞する夜の乾いた信号燈。

清涼飲料水、車、バイク、エアコン。

ネズミがちょこまか動く勝手口。

カルチャーギャップが歴史を要求する。

誰かがぼやいている。

心臓マッサージでもするように…、

戦後何年経てば戦争は終わるんだろうか——…。

心臓を射ぬかれる救いようのない希望のない、幸福感。

僕は耀やく宇宙の背後霊のようなものであるかも知れない。

君も耀やく宇宙の背後霊のようなものであるかも知れない。

演出と演技の化学反応によって、リストカット癖が抜けない、女…。

彼女は音楽的沈黙の病——。

魅せられるがまま、お前は泣き腫らした顔を見る。

ノーメイクのまま、傷心と哀願にのた打つ女の無様さに感動を覚える。

凝視するカメラ。無自覚なモノトーンの朝とすり替わりながら、

道徳観が崩壊する。色鉛筆もパステルもコンテもない、

その一瞬、冬の針葉樹林の毛虫の映像。語り尽くされた理想が、

プラスチックにすりかわりながら、有刺鉄線を、壁を、映す。

雑誌の活字や写真にまた目を落とす男性が、

何食わぬ顔でベンチに座っている。マスコミの嘘、プレスの嘘。

彼女は一匹のミッキーマウスであるかも知れない。

彼女は一匹のこもちゃんであるかも知れない。

崩れた色香のフェロモンが職務意識にさえ思える。

逆さづりにされた女。骨を砕き肉を断つ、心の中で、

因果応報を示している。

その数ブロック先で物干し台に翩翻とひるがえる白いシャツ。

三千年、四千年、五千年…。

時雨が廃墟に降る。無意識により近い裏のペルソナ、

鬱屈した無能感を潜ませた不敵な全能感。

荒野に思春期特有の無限の「いま」がふと澄みきり…、

愛着と嫌悪を相反しながらも絡み合いさざなみを立てる。

無秩序で、不完全なシステムが棄てられ、

厳粛なバイブレーション。精神を悩ませる一夜…

みずみずしい爆発。人間が木端微塵に吹っ飛ぶ。

落下。断末魔の形相、投げ出された生足。

絶壁の髪をたくしあげるような風。

深い愁いをおびたストリングス。

エロスの発露。比喩的な世界が現出する…

そこで夭折した詩人がシーツを皺くちゃんに引っ掻きまわしている。

よく見ると、梶井基次郎だ。

鳥肌だった肉体。眼に殺気や狂気が宿る瞬間…

ふふふと笑いながら消えてゆく。

お前なんか生きている価値もない。

お前なんかそもそも生きている事自体間違っている。

タナトスの帰結。

海が無意味な記号の羅列のように思えてくる。それでも、

踊り続けるドン・ファン。

意識の延長線上に上質のリリシズムが、出口なき悲劇を忘我しながら、

時間が無表情のまま流れてゆく。

通奏低音のように不在と実在、幻想とリアルがたやすく反転する――

発火点となる・・路上では行き場をなくした若者が溢れている。

フラッシュバックする日本語のカタログが、比喩事典が、

言語機械が・・。

無作為に選ぶドンキーホーテみたいに君は――。

ゆらゆら漂う感じ・・。

## 淋しい歌

---

時々僕は

最初に抱いた女のことを

考える

金子光晴ほどじゃないけど

僕だって割とオープンな方だから

そこで液状化した…

トレモロした――

密室した あとで

水たまりの花びら

ゆらゆらくらくらする

真っ暗な部屋の中で

正直何度

生きているって不思議なことだと

洩らしたかったかわからない――

ときめく胸に

焦りを顔に出さないようにする表情

我にかえって羞恥し

時折思い出すと肩が落ちる

潮の満ち引き――

騙し絵みたいな錯覚でいたけど

多分 君は演じていたんだろうな..

僕はそういうことを思う時

なんだか胸が痛くなるんだ

優しい人でよかったなって

そこに感情があってよかったなって——

でも嘘

けど真にとるなよ

けど本気にしてもいい

両性生物だったら

よかったなって 思う..

そうしたらもっと

ロマンティックに

すきよすきよすきだから

くらいは言えたのに——

でも言えないかな..

やっぱり

あなたがいなきゃ僕は死んでしまう

と 太宰できたのに

一緒に堕ちますか

三途の川ですよくらいは言った

いえいえナイアガラの滝と

確実に 僕はシェイクスピアしたのに…

女よ

やっぱり

男が好きなの？

好きなのってどういうことって…

笑わないで——おくれ

茶化さないで…

閉店間際の

スーパーマーケットで

一方通行の道路で

僕は男っていうものが

動物しすぎて嫌に思っていた

漏れる明かりに暗い看板

面倒くさい人生を

吐き捨てるような台詞…

なんでお前は

そういうのが

嫌だって思わないんだって

怒りたかった

どうして

自分のことを考えないんだ

優しいなんて嘘だぞ

最後の男なんて思う必要もないぞ

好き勝手に生きろって

心の底から思ってた…

でもお前だって

思うのかも知れない—

夜 ドラマを観てるお前は

遠い昔の僕にちょっと似てる

あんな淋しい表情

ちょっと忘れられない…

爪を赤く染めながら

口紅をしながら

あるいは脱毛処理しながら

シャワーを浴びながら

お気に入りの服を着ながら

恋人とデートしながら…

愛の淋しさ――

嘘で固めてしまう喜び

本当の自分がいないのに…

それでも自分だって

見つけてしまう苦しさ

その切なさ…

愛しているけれど――

ねえずっと

こういう気持ちは変わらないけど

それと同じくらい

僕のもう一つの気持ちは変わらない

だって朝と夜が来る

そして何処かへと行く…

ずっとここにいけない

こんな気持ちのままじゃいけない

永遠になんて続かない

でもそれを信じるために

涙を流してまで

僕を繋ぎとめようとしたお前に

時々本当に切なくなる――

自分って

何だろうか？

と..すごく単純に一一

考えてる...

色んな人が

良く言ったり一一

悪く言ったりするけど..

なんだってほら

自分は自分だと思えるから

でも欠点は

泣き顔みたいに

蜂の巣で

アキレス腱なんだ

世界ってやつが遠ざかる

ちくしょうふざけやがって

なんだって俺はこんな所にいる

迷惑だよ

鬱陶しいよ

邪魔だよ

いくつもいくつも重ねてきた

僕ぐらい大胆に言った奴はいないし

そうやって色んな痛みに

触れて——触れて…

もう何も

考えられない——

何が正しいのか

何が間違ってるのか

そんなことさえ

わからなくなるような夜って

——僕には…

たまに——ある…

死んだ魚の目してる

虚ろな奴の目は

本当に落ち込んでいて

多分人って奴が

こんなにも弱いものなんだって

いまの僕みたいに…

そうさ——いまの僕をね…

鏡で冷静に分析してる

じわりじわりと圧迫されて

緊張して

手をつなぐ

なんて――

本当に難しいよ

一瞬があたかも

永遠に続くように思われて・・

苦しい・・

なんだってこんなに苦しい――

明日の保証がない

今日生きてる理由もない

自分が自分である必要もない

悲しいことだ

でも――受け容れてしまう・・

自分に嘘をつかないことを

知らず知らず僕は・・

繰り返してきたから――

でもそういう悲しさは

一晩経てば

大抵ケロリとしてしまう

こんな人を信じるのが難しい夜に

人が嫌いだって分かってしまう夜に

それでも――まだ…

何かを信じざるを得ない

どうでもよくて…

ただ苦しい何かの果てにあるんだ

淋しさ…で――

誰かが欲しくなって

気が狂いそうになる

そして誰でもいいように

思えてきて

潔癖な僕は

そういうことを考えた自分に

吐き気がする――

でも

ぼーっと…

何をするわけでもなく

好きこのんで僕は寝転がって

蛍光灯でも見ながら

夢想する…

その時の僕はもう詩人じゃない

世界一の詩人がだぜ

あれほどの才能みなぎった詩人がだぜ

色んなことを棄ててしまえる

つまらなくなることって

人が人であることをやめたくなることって

そんなに変なことかな

僕が僕でいるのをやめようとするのも

そんなに不思議なことかな

だって夜は――

こんな日を諦めよと言う

そして僕の考え方はずいぶん後ろ向きだけど

たまにはいいじゃないかって言う

楽になろうぜ

もっと肩の力を抜こうぜって…

水を出しっぱなしにして

二時間もほっといた

パソコンの調子が悪くてネット接続ができない

昨日なんか警察に違反切符切られた

先週なんか仕事で久しぶりに大ボカをやって

目も当てられないような感じだった

でもそんなの誰も知らないし

多分僕が話す人もいないだろう

だから人生がつまらないって言うなら

そりゃそうだよと訳知り顔で言えてしまう

そんな気持ちに萎えてしまうとしてもね

いまだって僕が

怒りんぼうの分からず屋だと思ってる人もいる

二十八歳だぜ

分別もある

ましてや社会の酸いも甘いも知ってくる

人間ってやつが

善くも悪くもあるってわかってくる

駄目な人でもいい所を見つけようと努力すれば

それなりに理解できることにだって気付く

社会が駄目な理由を

お金持ちのせいや

やる気のない人のせいにしちゃいけないこと

それはひとりひとりが悪いんだと考え

そしてそのひとは僕でもあるんだと考えること

忘れてない――

僕だって

何処までも嘘で塗りつぶしたい

できうるなら

何もなかったことにしたいことが

おそらく他の人よりたくさんある

僕が受けた傷は

思うに――

すごく客観的に・・

とても沢山あったんだということが

正直言ってわかってしまう

でも人生は

みじめで可哀想な人のものかな

勇気があることより卑怯であることをよしとし

みんなでひとりひとりを駄目にする方が

いいかな――

そんな風に恋人と向き合い

あるいは家族と向き合い

あるいは同僚と向き合う

誰でもいいけど大切な人と向き合う

それでいいかな..

いいと—本当に思えるかな..

僕は嫌だった

どうしてそうだったのか

内省的な僕は理解できているけど

ずいぶん長く考えていたんだよ

これでも..

スピリチュアル解釈を加え

両親や兄弟に分析をし

そこから哲学的な考察を加え

さらにそこに一般論を加え

僕はどうしたいのか

どうするべきなのかをゆっくりと考えた

本当の僕がどんなに普通であるのかを

導き出した

そして—

ただ単純に僕という人間は..

そういうのが嫌だったと..

気付いた――

不幸なニュースが嫌だった

それに呑み込まれるのは

嘘だと思えた

世界が美しくてたまらないと信じていれば

それはいつかそのようになる

ただそれだけなんだと

僕はぼんやり思っていた

生き方を決めるのは自分だよ

だから嘘や言い訳は通用しない

過去の一場面を

どんなに後悔したって

僕はもう後悔しない

前を向いて失敗する方がいいって

僕はもう気付いたから

それでやっぱり失敗しても

その方がいいって…

僕は気付いたから――

紛い物だらけの

この世界は

面白いとか

面白くないとかで

処理されてゆく――

それを責めるつもりはないよ

だって人は好きな夢を見てる

それで誰が苦勞をしようが

誰がどん底へいこうが

僕にどうすることもできない

でも僕は考える

どんなに嘘を必要としているだろうか

と…考えて――

頬杖をつきながら

僕は好きな歌を小さな声で歌う

僕はそんな風に歌う

言葉が洗いざらい

消えてしまった時だけ

自分が何を探してたのか

わからなくなる夜に

僕は一曲だけ聴きたい曲がある

でも誰にも教えない

そんな人の勝手だろ

もっと触れたい体温が

愛しくなることを

僕は知っているんだ

そうだろ——

そうだよ…

どうして知らなくちゃいけないの

終わってゆくのに

どうしてもっと別のことを考えないの

まるで他にすることがないみたいに

—あなたにはいくつかのボタンがあるよね—

「美術館ですね…、失礼しました。」

長い沈黙のあと、一掃抑えた声で言った。

物質至上主義が蔓延るなか、遠い時代を追憶するシステム。

しかし過去を詰め込むにはあまりにも狭すぎる美術館の粛々とした業務。

それでも、人々のライフスタイルをも変革した芸術運動。

異様に熱く意地悪く感じられる、ほころびだがいまにも花開きそうな…、

『Hello フィレンツェ』

一緒になって探してたものがある、

でもひとりひとり忘れて行ったり、離れていったりして、

そしていつかそのようにして、色んなことを完璧に忘れた、

『Hello フィレンツェ』

みすぼらしい店に入っていく時のような暗さ、

イラストやポスター、商標などのデザインとは違う時代のそれ、

けれど…、

「ハロー、ベイビー ♪」

ピラミッド内部を"透視"できる映像というのでしょうか、

密度の濃い——美の装飾・・スマッシュなデザイン、

コケティッシュな白人の妙齢の女性が真珠や、

ダイヤのネックレスで、肌の色を強調している。

それを見ながら、牧野富太郎の植物図鑑から、

瀬川康男の犬棒かるたを想起する。

映写機用のフィルムで・・、

難破した船の光景の末に木切れにつかまる、ぼくかな？

ぼくだな。ぼくは——盲目・・たずなを解かれて、

深くおだやかな入り江の目のくらむような昼にいる。

ぼくはフィレンツェのシニョリーア広場の隅で、座ってる、

スーパーマーケットで買ったココアの蓋が開いていて、

袋の中がめちゃくちゃで捨てるしかない・・。

投函する、いやいや——粉砕する、

優雅に震えるためにまぶたをゆっくり閉じる・・

「ハロー、ベイビー ♪」

複雑なものになっていく——“いい音”・・

彗星の観察会みたいな——“いい音”・・

ツナのペンネ／フィッシュフィレ リボルノ風／サイドディッシュ

／ジェラート／タリアテッレ マッシュルームソース

／フィレンツェ風ビーフステーキ／ティラミス

「世界の美術館来館者ランキング、

ルーブルが九七二万人で首位だとか…。」

「ふうん…」

「フリーマーケットで巨匠ルノワールの絵画が、

発見されたって…。」

「ふうん…」

他になんて言えばいいの？ わからないーよ…

印刷機、インク、カメラ、紙、の、こころひかれるまま、

言われるまでもなかった…あいまいに、よびもどす…

そうするしかなかったー。かわいい寝顔で…。

—あなたにはいくつかのボタンがあるよね—

「いま、何してるの？」

「洗車。」

洗車は綺麗になると気持ち良いし、

楽しいし、良い運動になる。

でも、ハートにぶち込みたいんだ、

電気で感電させてやりたいんだ、

この星を燃やしてやろう、

もっともっと熱くしてやろう、

“いい音”を開催せよ――。

あ――でも、咽喉がいがらっぽい…。

咳してるんで、しやがれ！

「ハロー、ベイビー ♪」

(イエーハローマイビーム！)

失望と孤独が生み出した、ぼくの世界、

レ・ミゼラブル的な気分が欲しい…、

ぼくは人を慮るコツを忘れてる、

「絶対、好きなことをした方がいい」

(それはそうだよ。)

というか、本質的には共同作業ができない、自分勝手な野郎だよ、

「でも、やりたくないことをやっている人を馬鹿にする風潮、

どうにかならない？」

(それはそうだよ。)

おまえを呼ぶ、おまえを呼ぶ…

甘美な蒸気、蒼ざめた炎――。

「ハロー、ベイビー ♪」

..聖母マリアの息子イエスを見つめる—

さまざまな色に彩られた遠いところを見るようなものうげな視線。

崇高く、聡い表情をみせる幼子イエス。

天使は、鳥だから二匹といたくなる間違い、正しい..。

情緒豊かな背景。騙し絵的な背景..

(Madonna col Bambino e angeli)

ミッドタウン—経済ウーマン、

と い き—吐息

『嘘を駆使した体験型の現代..!』

(かっこうが啼く)

必死になって探していたものだよ、

東へ流れていこうとしていた—

生創を拵えたり、癍痕を結んだりしながら、

まぶしくて不自然なインスピレーションの詩をつくりまくってる、

プログラミングされたボタンのそれで、

時代背景や、生きている感情のそれで

色々な町を歩いたり、女性と関わったりする、

(振り付けの記譜法)

バスの車内ではクーラーがあんまり効いていない、

そのせいか子供の時の麦藁帽子の匂いがなつかしく思い出せる、

そしてそいつがやわらかい心の中を噛みついてくる、

やめろ、――やめられない…。

(ヴィンテージ・コーヒーが飲みたい)

車の排気ガスが肌に纏わりつく、人間の臭い――

カメラのファインダーにも似たアイが太陽をつかまえる、

傷つくというのは生きることだよ、と、

――誓いを樹てろ！

振動、時間、音――美的側面としての飛躍的聴覚！

クリティカルなギャラリー！

クリティカルなギャラリー！

「ハロー、ベイビー ♪」

(イエーハローマイビーム！)

《マエスタ（オンニッサンティの聖母）》

（1306-1310頃）

テンペラ、板 325×204cm

ウフィツィ美術館所蔵（第2室）

作品は、オニサンティ聖堂の祭壇画として描かれたもので、

聖母マリアを描いたもの。

え…、と耳をかたむけるがおまえの声が聞えない——

絶望的な無関心さの乾いた目で自分自身を見つめる。

「鼻孔ではなく胸がつんとした豊満な色気ですよ。」

——より多くの薪をくべるために暖炉に近づく、  
ポッティチェッリやラファエロともルーベンスとも違う聖母…、  
独特の強烈な個性を発見することができる。

風船が、

風に流されて——いる…

見つけた。

人形と揚羽蝶の交歓…。

蜘蛛の巣と——月における会話…。

画家ジョヴァンニ・ヴィッラーニはジョットのことを

「この時代における最大の巨匠である。

ジョットが描く人物やそのポーズはこの上なく自然に見える。

その才能と卓越した技術によってジョットは

フィレンツェのお抱え画家となった」と書き残している。

え…、と耳をかたむけるがおまえの声が聞えない——

おまえは何処に行ったのだろう…。

「念願のものを手に入れたような——

それでいて喫茶店でたまたま通りかかって耳にした曲が好きな曲、

だったような…窓から……」

「窓から——」

(妙に何の気配のしない階段が見えるな……)

ヴァザーリによる近代最初の画家という評価をはじめ、

生前から一貫して巨匠としての名声を保っている。

作品は巨大な板のパネルで、金箔の背景、少し濃い明色の髪、  
色鮮やかな色彩、きつとどこかに、まぎれもなく、あるにちがいない…  
アルカイックスマイルの微笑、着衣の柔媚なふくらみ——…。

見つけられない——。

概念やメタファーは元々の使い方とはずれているから？

天への信頼が湧いてきて心の痛手をいやしてくれる——、

という意味だろうか、風船みたいに膨らんだ——膨らんで見える…

カトリック信者だったのだろうか、

カオスの中から——コスモスを組成していくような…

頂部は屋根の形になっている。怒りの、——希望の声も…

言葉がふわふわぐにゃぐにゃとまわりあうダンス！ ダンス！

あるいは、うねうねくねくねと、倦怠の声さえも、

この夢遊病者のように歩いた時代の――、

信仰画・・・、身体の芯から深い眠りを求められて、ひまわり畑を思い出す、

マリアの処女性と母性と威厳に対する、讃歌・・・！

あえぎながら辿りつく、荘厳な合唱――。

とおいとおい街――はるかな世界・・・

性質は静かで、恬澹で、そして立居振舞いを、ひどく気を付けて、  
温和にして――軌道の上を走る、..  
困窮もしないが、おそらく贅沢にも陥らない人の絵――。

脇に立つ天使が聖母に尊い冠を差し出し、

幼子イエスにはもう一人の天使が、

キリストの受難のシンボルである聖体器を差し出している。

――足で蹴られた小桶のように、

皺を深くしながら、..カナリア鳥は囀る。

聖母子の足元では、脆いた二人の天使が、

マリアのシンボルである薔薇と百合の小花瓶を捧げている。

え..、と耳をかたむけるがおまえの声が聞えない――

オートマティズム（よ、）――自立性の疎外..。

シロ（イ）ハピネス..

コワ（ワレタ）ザンキョ（ウ）..

「芸術が貧乏であるみたいに言う人もいるけどね、

相互に良友となって、助け合って、手を携えて、

真理の光明に向かって進むのさ……」

流れを止めることもできずに、  
流れを止めようとしたことも誰にも知られずに――、

日没における不滅の彫像のあいだに……、

けだるくつんとくるそらとぶきかい……。

斑色の大理石、実物から写された花などの写実的表現……。

一瞥すれば分かる――、それは下手くそな絵だ。

ピカソほどではないが、何かもう、奇妙なのだ。

何か東南アジアのパクリ漫画風で――、意味には意味があることを、

冗長に、でも印象的に、脱落的に――……。

イメージは、腹話術師を志すシスターとその取り巻き。

ゲットバックが聞こえてしまう――びーとるず……

くうこうのなかの、ひこうきを、かんがえてしまう……。

だがリアリズム。なによりも人物の眼、眼差しに現れてきている。  
ジョットの聖母の眼に注目すると、  
男性的といってもいいほどの視線の強さが特徴的だ。肉眼の視力が強靱すぎて、  
無意識の調和をはかっている、能動――

見つけた……。

舗道がとぎれている、石づくりの階段……。

が、が、……ガアガア、ぐえつぐぐえつぐ、

見あげるかなたに、のびていて――て、て、

ち、ち――、「イタリア絵画における十三世紀からの遷移を告げる、

ビザンティン様式が支配的だった西洋絵画に現実的、

三次元的な空間表現や人物の自然な感情表現をもたらしたジョットにおける、

おそらく最高の部類の一つに入るであろう作品。」

——黒い岩の群が絶え絶えにその周囲に立ち、  
尋常ではない泡が…泡が——泡が、  
割れている——割れている——割れている…。

風船が、

風に流されて——いる…

(ちなみに聖堂の主祭壇画として教団の修道士のために描かれたものか、

あるいは聖歌隊席の仕切りに使用されて、

会衆の信徒の目に触れることを目的に描かれたものなのか、

学者の間でも見解が分かれている。)

え…、と耳をかたむけるがおまえの声が聞えない——

美の意味を失い花は枯れそれでも微笑を浮かべる崩壊…

——抽象的、象徴的表現より、現実世界への関心が美術にも反映され、  
もっと自然な表現が好まれるようになり、そしてこんな変な絵が出来た！  
背後にいる髭面の男を見ながら、うん、やっぱり変だ、でもそこがいい、と思った。

砂漠よりもいっそう大きな空間で呆気にとられている——

波に揺られた光を溜め込んだ貝の表面…

玉座の奥行きに遠近法的な空間認識が見られ、

かく、地面にかかる肉体の重みを感じさせる人物描写などは、

ルネサンス美術以前のビザンティン・ロマネスク的な絵画とは、

まったく異なる表現の新しさを感じさせている。

え…、と耳をかたむけるがおまえの声が聞えない――

え、――そんな奴いたっけとぐるぐるするがよくわからないわからない…。

え…、と耳をかたむけるがおまえの声が聞えない――

おまえは何処に行ったのだろう…。

「鳴る。沸き立つ。ざわつく。渦巻く――痙攣する、ひくひくする…

なぜだろう、ビクビクする――その一刹那一刹那に、気が狂う、

――鏡のなかのクロス・グラウンド…

ふいいるとは…否定の否定の否定の否定…」

「窓から――」あの、…「窓から……」

(妙に何の気配のしない階段が見えるな…)

## ピサの斜塔

---

近代的な景色でいいかな…。

だって——あいつ、わりとヒューマニズムな産物だぜ…、

一九三五年、地下水が地盤をやわらかくしてしまうのを防ぐため、

薬液を注入して地下水の浸入を止めようとする応急処置がとられ、

一九九〇年、沈み込んだ側と反対の北側におもりを載せることで、

バランスをとろうとしたりした——。

塔は朝、琥珀のような黄を帯びて、一種病的な色を曝らしたろう、

それで人を悲しませて、——同時に人を興奮させやがった…！

ピサの斜塔 [料金：18ユーロ／人]

住所：Piazza del Duomo

——傾いた塔-斜塔…

積み上げた魚のようにぴちぴちと跳ねている。

光の裂け目が現われ、遺骨を納める石窟かと思われるこの建築物は、

在った——運命のつむじ風のかなたで、

コーヒーカップをかちゃかちゃ鳴らしている旅行者…、

このピサ・ロマネスク様式の大理石の塔は、

大聖堂の鐘楼として——七三年に着工した。

《実物を見ると、雑誌やパンフレットを、

コインロッカーに入れておくみたいに、

きれいに印象通りの斜め。》

——金子光晴なら陰 莖と書く。

(先日、デザイン関係の学校に通っているという若い男性から、

一通のメールが送られて来た。

「アラブ首長国連邦アブダビにある、

キャピタルゲートビルの傾斜角度は18度ですよ。」と…。

>>>貯水槽の底に沈んだ携帯みたいな事実ですな。

>>>でも知っているかな。ガリレオが球を落として、

「落体の法則」をしたのは弟子の作り話、いわば、

謔言で——むしろ、ガリレオの実験に対して行われた、

異端審問の弾圧に関連してローマ法王が侘びの公式声明を、

塔の頂上にて行ったことが、真実とかね…。

…窓の外の絵、塔の上の絵が、

神様のキスだったとしても、ね——

っ

尊い口にも唾の涌くような話——…。

天国の虹の橋が見えてくる——地獄だろ、ややもすれば…、

「犬と猫の如し」(Wie Hund und Katze)

らせん状の階段は上る時より下りる時の方が傾きを実感する。

——ピサはアルノ川が運んできた土砂の上にあるため地盤が大変弱く、

この塔は——八五年に第三層まで出来上がった時に、

地盤沈下のためにすでに傾き始め、工事は一時中断された。

…辞めよう、と言ったのは誰だろう。

神エホバのように、——信じられようか…底無し沼に放り込む、

緊張した言葉の羅列の中で、南京錠が濡れている…、

張りつめた絹の布地に刺繍するように、

まじないが、文字を3Dにする——。

「斜塔近くの土産売りもなんかじゃ、置物が売っていて、

もちろん、絵ハガキもある…小さな10センチほどの斜塔と大聖堂の置物、

—五ユーロ、斜塔型ライトは十ユーロ——」

どこへも行くあてもなく立ちつくし——

引き返すことなどあるわけもない…

それで問題の核心に肉薄し得たものとは認められないが、

どこかに——定着液の匂いを嗅いだことだけは認められよう…。

水没した一つの古代都市の子宮的感覚、球体的事実とするのはどうだろう、

それは——詩人的空想を十分に満たしたものとみなされよう…。

窓は閉ざされている、泥のなか…

曰く——卵の殻のなか…。

冒険へと手を差し伸べながら…

先例の許す限りの慰問——過去形ではなく、透視者のように、

脳天まで赤らむような、——ええ、ええ…本能的に恐怖心を発した、

隕石の光景-流れ星のような――ことば、コトバ、言葉・・

たとえそいつが、若く美しい幽霊のようだったとしても、

現在進行形で変化を感じている。無名の見すてられた、

墓のように枯れ葉ばかりが・・見栄だの虚飾だのを洗いざらいし、

そして――ベルのように乱暴な、無情・・。

うろこのように 虹色にきらめいていた

おまえの―― グロテスク・・。

……歓喜の声です。

偉大な感情を表現する原始的声音のヴォリューム！

塔は白大理石を用いた円筒形で、重さ一四四五三トン、

外周の直径は一七メートルにおよび、

高さは北側で五四.八メートル。南側で 五五.六五メートル。

南へ向かって四メートル五〇傾いている。五度三〇分傾いている。

塔の南側の地盤沈下は二.四メートル。

## ――水、水滴、水泡、

そして水の流れ出る音・・

「ちなみに階段は二九七段ある」

母なる坂の上を今歩いていく・・。

水はおまえを鍛える力だった——か…？

「地盤にかかる平均応力は五〇.七tf/m<sup>2</sup>と見積もられている」

——いっそう純粹になって、

真珠のような顔をして、

お前は——少なくともあと三〇〇年は、

倒れる危険がない…残酷な信仰が毒をしたたらせるにせよ、

遅くなるのさ…、さらに——さらに…。

——落下し続ける言葉、

……しずみつづけねばならない言葉。

工事は第二工期／第三工期と間隔を開けて進められ、

<かつて、微笑みが——

病気なんだと思っていたように…

小さな——アリア…灰色と沈黙の調和、電氣的流産…>

着工から実に一九九年もの年月が経った一三七二年に完成した。

名前を与えた。ろくでもない名前…ピサの斜塔。

コンクリートは溶けちまってる…時間のやわらかいクッションの上に、

だらだらと汗だけが牛の涎みたいに落ちていく——。

<泣いて笑った無口な陽気なまた憂うつな思いのため…

俺は――灰いろの服を着た。放火犯！

青年期決定版的感傷旅行…>

――知ってるか、俺はカメラが嫌いだ！

……人混みが大嫌いだ！

傾きを修正することはできなかった、五四メートルの塔で、

一番真っ直ぐなのは皮肉にも旗であり、旗とは、

予め取り決めた命題が真であるか偽であることを伝える、あの旗。

コンピュータアーキテクチャにおけるフラグの語源はここからきている。――

よく見れば、塔自体にバナナの傾きを修整したような形跡が見られる。

しかしもちろんバナナを胡瓜にすることは出来なかった。勘定書き。

…白ネズミみたいな、お前――。

(しかし傑作だね。恋愛映画のようなことをあれこれ空想し、

それでいて実は、不良で、血気盛んで、

最終的に少しずつ折り合いをつけて更生していったみたいで。)

――そして僕は、ゆっくりと踊って、

静かに舞台から消えて――いく…。

不鮮明な印象が、覚醒の契機となって、

何に啞然とするのか――僕は驚いて…いた、

あの芝生の広場から、鳩の巣となった壁から、

あたかも羅針盤が狂ってでたらめな方を指している、

六月の季節の場所で、さいころの予測なんかをし、

糸がほつれている…。ああ——かすかな痕跡…

黙っている——黙っているのだ、僕は…僕は——。

……昼の果てしない紺碧の空の色。

## オデッセウス

---

いたりあ旅行で

いちばん心に残っているのは

オデッセウスです

鍵がついています

でもその鍵

なかなか見つからないんです

用水路が

セメントしていて

石臼だった

なああんだ

そうだよ

そうだよそうだよ

きみは笑うかも知れないけど

わらってください

人生はもっと何気ないもの

「つくりごと」

(も)

「つくりわらい」

考えてたよ

やさしく埋められている

銀河のきらめき

ほら

ぽろぽろこぼれおちてくる

こころはいつだって洪水

きょうだって

過ごしてる

オデッセウス、ぼくらは

とつぜん

夜が死ぬことに

おどろく

はらけだらけて

愚者の火山

ばななむーんに

サバトな青二才の野郎ども

溪流の壮麗な嗅ぐ

嗅ぐでなければ咳る

28歳という歳が

澄めり

滑り

ああ風は涼し

ツッパル！

つんつんつん！

髪の毛トンガル

カンガルートブ！

リスはスリ

橋や街路のそばで

月に回転する

世界のなかでは腕

腕ながければ第三の指

ツベルクリン反応

とんだ蛙の

足を集めて

マリアのキリエ

ラッパの引き裂き

灰色とピンクの

入りまじった雲となって

ポエティック

ないしはエロエロチックな

ぽによぽによチック

ほらほら

そのでぶでぶした腹に

不毛未亡人

えへへだよ

そして気が付くと

ふふふだよ

盲従的なオリエントの

やさしい

ダンテに

すべてが始まった

どんぶらこするかい？

もちろんだとも

ドスコイ

アブラハムするかい

もちろんだとも

最後の審判でもいいかとおもうぞ

アラベスク

コッコッコ！

いっそう遠い冒険へと…

にゆうどうぐも！

干ばつや荒廃のうなぎ！

あーきょうも面倒臭い

でもぬめってるね

楽しいといいね

幸せだといいね

であるもがな！

まんとひひ！

ももひき！

殺し合えるといいね

撃ち合えるといいね

いいね…

いいね——

いいね…

ふふふ——ふふ…

平和だね

沈黙のなかに母の白い匂い

もちろんだとも

欲情する

ゆめ色

そんなにほしいか瑠璃の色

ああああん革命

抑圧する世界の破片の空虚な

溝のなかでためらう海老

海老でなければロブスター

とき色

とさか色

ああああん革命

コッコッコ！

きゃっきゃっきゃっ！

きつつく！ きつつく！

るんるんする

あーめんどくせーな

黒い馬車

「そんなスケに誰がした。」

「そんなスケべに俺がした。」

るんるんすれども

「びよんびよんびよん！」

「ピーンとしたら、」

「ピノッキオ！」

花売り娘のマッチ売り？

火遊びラビリンス

シャンプーはやめてよ

潤滑油

キリストしてみる

ぱっぱらぱー

禁じられたクリスト悪魔な事件

禁じられたマリーア精霊争奪コンクール

アクーマまくれーるしねーる

アクーメーるちえーんめーる

オーマイゴッドなきぶん

オーマリーア！

冷えた牛乳

すばらしくすばらしく腐ってる

なにかがすでにクラクション

腐りきってる懺してるセレクション

壊れているのだ眼鏡が割れている

音がひびけば

湿っぽい

鈴が鳴れども

ちゃちゃりちゃら

環境に棲息してるよー

今日からあんたも売春婦

やすいもんだねバナナのたたき売り

やっちゃったー！

ひとりでお祝いパチパチパチ

ちゃちゃりちゃら

ちゃちゃりちゃら

投げ銭捨て銭

持ってません

ホテルの廊下って不思議だ。

向きを変えられないし、

通りは一遍だし、

霧が立ち込めているわけでもないってのにね。

でも、かすかなきしみ音がする。

ねえ、そんな気がしないか…？

――足音が廊下を遠ざかっていく、

烈しい後悔のために…、

自分の生涯を汚したような気がしながら。

明るい顔だちのよく笑うひとが、

…獣が地球上の支配者になると予言でもするように。

いま、目の前に、悪魔が座ってる。

いや――ひどく寒くて眩暈してたからかも知れないが…

考えようともしなかった残りの半分がここにある。

身体の真ん中へんがからっぽで、

グローブボックスの中の地図みたいだよ。

そういえば、屋根裏の冒険地図は蜘蛛の巣だらけだった。

本当に、それからずいぶん長い時間が過ぎた。

道路標識は、停止してる。

霧雨は、続いている。

用心深く、航海灯を見てる。

ひどく新鮮で澆刺としての気分は何処かへと行き、

カーテンが揺れるでもしたみたいに、

ひどくだるい…

視界は三、四十ヤードしかない。

ソファーの上にあるピアノみたいな不思議な構図で、

僕は待っているしかーなかつた…

ズボンのポケットには、マッチが入ってる。

折れてる。

使い物にならない。

それはわかってるけど、

冷静さを装うのは昔から得意だ。

階段はかなり殺風景だった。

鉢植えの花は、もう枯れてしまった。

霊媒師が来た。

女だ。

水晶のシャンデリアはくすんでいる。

エレベーターはうごかない。

「死んでいるのよ、あなたは。」

「そうだね。」

庭に椅子がいくつかあって、

そこへ行って陽にあたりたい――

むやみに喋りたいんだよ、

ブルドック顔のチンピラや、

セントバーナード顔のやくざにいいがかりをつけられて、

馬鹿や阿呆になりすましている、

スピッツみたいな僕の方が正しい。

そうだろ、

石の階段を降りて行くんだよ。

そうすると、波の音がきこえる。

ちっとも心が動かないなんて、変だよ。

指笛を鳴らせよ！

そこを行くとカフェがあるよ。

ドアを開けるといつも流れ出る音楽がある。

僕はよれよれのジーンズで、

真っ白いシャツで、

馬鹿で。

――あのね、社交界の錚々たるメンバーが来たよ。

特別な賓客がね。

一等書記官に伴われながらね。

ワルツをしてた。

そしてそこにいる人達は、高級な葉巻に火を点け、

厚い絨毯が敷かれている長い廊下みたいに、

すごくつまらなさそうな顔をしていた。

白いドアみたいだった。

椅子に座ってるけど、

柱に凭れているみたいに、

蔓して、あさがおの花咲かせようとしてるみたいだった。

親指をぐいと逸らして、

秘書官に指示を送るけど、

自分で動いた方が早いことばかり。

…くるくる踊り続けている踊り子たち。

夜会服。目立つ顔立ちで、

流暢な英語を喋る。

寒いし、雨が多いし、とかね。

もちろん、聖書の文句を交えながらね。

デスクの上のランプシェードみたいに、

黒い瞳がいつになく考え込んだ表情をしてた。

外で、ジャスミンの匂いがしていた。

そして僕はシャンパンを飲む。

しっ、静かに！

スピードが上がる。

カードゲームが始まる。

暗闇に入っていく時間だ。

時計が永遠に鳴らない。

「あなたは――」と、霊媒師が言った。

「何が言いたいのか？」

「何もないよ」と僕は言った。

「何もね――」

ナイフがきらりと光った。

でもじっとそれを見て、つまらないことを、と言う。

「殺したって解決しない。」

「やってみなくちゃわからない。」

「あなたは何百人も殺した。」

「でも、――」

「でも、はない…あなたも死んだ。

あなたは死んでから、ずっと、ここにどまっている。

わたしはあなたを成仏させて、お金をもらう。

あなたは天国で、素敵な夢を見る。」

「素晴らしい。」

「――早く消えて。」

..でもどうか、ひとつだけ。

悪魔って見たことはあるかい？

ないだろう――ね..

いや、僕は見たことがある。

美しかった。

電気の光が青白くてね、

何かの仕掛け装置みたいに、

そいつのほっそりした顔を照らしてた。

そいつが、

トラブルや事件を巻き起こしてしまうのも、

やむをえないほどにね、不思議な気分だった。

この部屋は――

…そいつがいた。

僕は長い間、そのことについて考えていた。

考えていることが、男性の仕事であるみたいに思いながら、

そいつのことを考えていた。

飽きることなく、考え続けた。

部屋に鍵をかけるのと一緒にだよ。

明日も一年後も百年後も変わらない。

霊媒師は小さく笑った。

つづいて、ドアがノックされ、足音がして、

急に静かになった。

「…まだ、終わりませんか？」

しわがれた声が聞こえた。

老嬢は、怯えて一いた…。

「いいえ、いま、終わりましたよ。」

## 回想

---

いい夢をみるように――と…

逆鱗をなだめてゆく、人の声が…

都市に沈みかかっている太陽を、

また追わせようとしている――

肩胛骨がひらひらしそうになる、

麒麟が池へ水を飲みに、

来たような姿勢で――

言葉がその眼の中に…

ああ、行く――

ああ、やって来る…。

烈しくざわめき始めた、木々と…

のどかな葡萄畑の、風景――

(はなしが――ころされていく…)

慈愛の目に見まもられて…、

魔法にかかっている――んだ…

――そうだろ…

…………そう、って言えよ。

心のなかを、

歌にうたいたい気持ち…

ギリギリギリと変な音がした、

深い水底、で——

雨にうたれていまは消えてなくなった、

……靴についていた泥も、

……幼かった歌も。

ああ、行く——

ああ、やって来る…。

あたまから一と呑みに呑んでしまう、

不思議な感情で、乳房する、

何か言おうとしても、言葉が出ない。

芝居でもしているわけでもないのに、

(映画の中にいるみたいで——… )

麦藁帽子をかむって、

凡庸な青年になりたい——だなんて、

どうかしてる——…

どうかしてるけど……

(平凡な幸福…)

トスカーナのワイナリー…

心があたたまるような、乾杯——

電気にうたれたようにあっけなく、

思ってしまった——

「世界がみんな美しい…」

ちょっとくらい、

風が吹いただけだってのに…

ああ、行く——

ああ、やって来る…。

糸杉——お前の子守唄かい、

これは…お前の——聞こえよがし…

ねえ——おまえはその落ち葉でも…

拾ったらいいって…昔みたいに——

風よ、ささやいてくれないか…

立ち竦んでる兵士みたいな僕に——。

僕が、——欲しかった…

欲しかった——歌に…

……応じ——て…

書物する、めくれ——の…

げっとうと、と

ユニットバスで。 シャワーを浴びて。並列させられ、

coming soon... 夜が逃げる—玩具を遠ざける..撃ち落とす、

濡れてひかる芸人の笑い。

今宵も招待、しょう..たいむ...

首から生ぬるい汗、惰性が 夏期講習する。

(トランプしている

真っ白な ティッシュ..)

ヘッドランプを照らす、弦、

足を思い切り振った つややかで のびやかで 力強い

快樂。

ふいてふいてふいて—

どこかみだらにはしゃぎまわる..

おんぎゃ

おんぎゃ

おん ぎいやあ

急いで電話を切ったとしても、

――いまにもとびたとうとする、ちょうのような

(…モザイクが輝くことが必要だと思う)

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、  
はだして駆け回った感覚――

世界はいつもよりずいぶん早く回ろうぞ！

――なつかしいみせかけのうしろかげ

## でも一体・・

ぼくたちは／どっちだったのだろうか？

行き場のない闇、明るい未来、

人生とは何か、という深い問いに根差しながら、

ほら――たくみなさじゅつはふくめんした・・

でも一体・・

でも一体・・

道はどこかで交差している――

し。いつも営業している

し。太陽と月はいつまでだって

サウンド たおれる 欠伸が

巨大な内部空間 ふあんていな

音楽——詩・死・氏・市

ふいてふいてふいて——

どこか…で——

れいせいになって——も…

錆のみあたらない（シィ！）

大きな指なし手袋、ゆううつな あおぞらに

よくあるような、むれのうちのだれかのひごをかんじて…、

そいつが、くさびのようにおれにうちこまれていて、

そいつが、そうさ、まやくのようにうちこまれていて、

「てつにふれていたかもしれない、とかがえること…」

チチチ、クルック、浮かぶ（浮かべ「ば、」）

クルック、クルック…それでいいのに——

短い夏／

かなしくて切ない夏

子どもたちの声がひびきはじめた異国の公園で

ドアは閉めない）」

（「というより閉められない

げつとあうと、と

——いま、いつでも……

しっこうゆうよちゅう、みたいで——

やわらかな光が      さらりと滑り落ち

孔雀   したのかも……

森は渋い茶色と黄色につつまれ、優美な木々は霜にうたれて、

姿が現われているかとも思え、でも冗談みたいでうまくはじめられなくて、

はじめられないうちに、自分の身が流れ流れて、ひどく煮え湯を飲まされて、

ちらほらと輝かしいオレンジ色や、紫色や、また真紅……

(まんげきょう、であったのかも——)

(まんだら、であったのかも……)

ふいてふいてふいて——

まがまがしさ——いとおしさ……が……

みもだえてしま——う……

美術品に朽ち果てる      その炎に

おんぎゃ

おんぎゃ

おん   ぎいやあ

蠅の喜び、星の苦しみ――

折れかえる波、しづきに光る太陽、

今日降った雨、明日晴れてゆく空、

窓ガラスは水滴をきらきらと浮かべ

シャツ、ネクタイ、帽子、靴下……

きいほるだあ……きい――ほるだあ……

無限に不規則なせいせいのくびかざり

かちゅーしゃー―かちゅう……しゃあ……

しちゃったのだろう――

いやなつみのまぼろし……

つかまえようとしても

つかまえられない夢、

「オウ！」 「エイ！」 「オウ！」

げつとあうと、と

ざくり、ざくり、という音、 ふらんねる、を

引き裂く うしなつたあの聖なる衣――

ざくろ、ざくろ……

まっくろ、まっくろ――

欲しいもの、全部失くした。

失ったもの 考えられなかった。

黒いところに潜る 瞳孔だけが 読了する。

反復と歩幅の点描画――

はさみあああああ……が……かなでええええええ……

とてもしずかなまよなああああ……が……かなでええええええ……

胡桃いろのスチームが喪失を処理する平面的な酩酊の感覚……

わけわからん（あっけらん！）

生命の、海 きづかない／最／後／マ デ

むぼうびなかじつのかげのうぶげというかちいさなまつげ

（デモ！）

（モデル！）

ふいてふいてふいて――

さながら――おお……！

ひとつのかおりとなって――…

なれたら――なれたなら…

勝手口のドアを開け、海。

モディリアーニにひきのばされ、

撮影の進歩をぎむづけられながら、

ぼくらはレンズを向けた

おんぎゃ

おんぎゃ

おん ぎいやあ

黒より深く、静的な風穴をあけている、あれは、

おまえの耳がどうかしてしまう。あれは、種子、

魔法のつくりばこ、

砂利の混じる硬い土に、地雷を埋めるみたいに

げつとあうと、と

——2014. 6. 22

まどのそとはかいせいだ、ろおま——

それだけで 数枚の花びら、の、しい、つ、

静謐／聖櫃

ほろ酔い加減。 の、ロマンチシズム と。

うまく折り合いをつけていく。

にしからひがしに、ぜつぼう、

もう二度とおとずれない、ローマ風ピッツアと、

ナポリ風ピッツアのしょっかんがちがうことは、

えいえんにわからない、し、灰皿はゴミ箱といっしょになっている

し、日本は軟水だ、し、イタリアは硬水でしかも石灰まじりだった、し、

――2014. 6. 22

夢の中の夢――ひとつのかおりと、

…そのひとつのかんじょう…尊敬することも、

軽蔑することもないゆめのおわり――ろおま…

安心するまえに、あっさりと閉じられて、

かいの恥じらいが滲んでいる。空の増幅が、

蝙蝠というさっかくをうんで。

(呪っていた爆薬が造られている )

## でも一体…

そいつはもうシアン色で蜘蛛の巣で十二指腸、

強烈な圧力が身体中を締め上げてくる水や、木から 遠く離れた

ぼくらが、恐ろしい計画の中で、老人に追いやられてゆく、

未来を避けることはできない。花をにぎりつぶすみたいに、

小鳥がにぎりつぶされてゆくことさえ止められない、ぼくらが、

きゅうじゅうきゅうひきのひつじのうちのいっぴき、なのか、

ひゃっぴきのひつじのうちのいっぴき、なのか

でも一体…

でも一体…

おんぎゃ

おんぎゃ

おん ぎいやあ

沈黙する空に慣れずに彩色するのだけれど

灯りが漏れる格子戸

しゃぼん する。

ひとりごとのように応える、

「たぶん…」

(だろー—)

不意に 冷たい眠りの

洪水が、

みずのまぼろし…

— 2014. 6. 22

まどのそとはかいせいだ、ろおま—

はげしく問うぎりぎりのたしかめはない、ろおま、

なにかのあきらめにあつくほてっているが…

さりとして権利の希望や幸福をうたうでもない、ろおま…

蔓延する いのちを産む 死の匂い

痛い痛い 、痛

い、サウンド、変態し、拒絶し、やっぱり蔓延し、

毛を耨り取るような酸素不足の田植え、

し、し、舌、し、下、し、――

ぼくらは足の先、ニヒリズムの共同墓地、し、

指の先にまで十分に意識が行き届くと、

泣く。それは地底の入口だよ、と、

か、お、が、

ぐちゃぐちゃに、かまれてゆく、

プールがある…

――2014. 6. 22

まどのそとはかいせいだ、ろおま――

ほてるの、さんかいから、ながめている…

ぷーるがある、さっきもいったかな、おぼえてない、

あるんだ、BNLと、かかれた、かんべん、

かんべん、じゃない、かんばん、もある、

りびんぐでっど、じゃない、ばいぶる、もある、

りびんぐばいぶる、てーぶるにある、

すたんどらいとが、ある、かーてん、が、ある、

消える、つながらない

足りない、

えくすきゅうずみい、

えくすきゅうずみい、

チェシア猫、

食ったみたいに、

猟奇的、（パンドラ！）

いいや そいつを犯したみたいに、

シャーロック・ホームズの反対側を気取って、

エログロ趣味しながら（サタン…？）

せっけいの図めんをおもえば、

救急車のサイレンが遠くで鳴っている、

時計の秒針が動く。

ねむれない極彩色、

澱だよ、このプール。

プールがある…

— 2014. 6. 22

まどのそとはかいせいだ、ろおま—

よる、くるまをながめていたら…

ながれぼしみたいできれいだったよ、ろおま…

1

空港の夢を少し前に見た

ぼくは知らなかった

それが煙となり赤い脚となっていたことを

論じて飽きない夢は孵化した

2

縦横に突き進む軍船を前にしても

甲冑は平然としていた

神経は木の葉の葉脈に結びつき

あぶら

脂肪ぎった皿の水は捨てられる

3

夜 口に富んだぼくの硬貨は

暗くて苦い湖の味

電話加入者への新しいサービスの広告

カプリ島の『青の洞窟』のような

4

絵具箱とキャンバスを担いで

お前は絵を描きに出かける

「そしていまお前は詩を書いている…

鏡の前、不思議にシュールと思いながら――」

5

開かない口も通る

見えない目も通る

囚人が陳列ガラスの中の

broachしているように

6

人為（作為）的な心の動き

空気を吸い／静かに吐き出す

破綻寸前の兄弟たちの恨み声

別れた妻子の悲しみ

7

匂いのない何か粘着くものが

闇のように甘い

熱により血により

忘却の錆びにより

8

ツツツとしずくが垂れていく

トレヴィの泉にコインを投げようとする

工事中だった

ピサの斜塔が倒れかけて倒れまいとする

9

チェルヴィンアの雪

サン・カルロ的双子の教会

避暑客でにぎわうクールマユール

ヴェローナのカプレーティ家のバルコニー

10

胸を焦がさむほどにわくわくして歩きまわっても

白い可愛らしい顔を冷たい夜風にあてるのが嫌なんだ

札束で頬に打たれてその金をもらい受ける奴隷になれても

古雅で詩的な興味を帯びた言葉を晒すのは御免

1 1

いわばきわめだかい達成とその錯誤の遊戯

「飛行機の中でテトリス」

「飛行機の中でインヴェーダーゲーム」

——オルゴール気狂いのダンサーは自鳴琴へとゆく

1 2

個性豊かな仮面と衣装が

熱狂と興奮に包まれる

ヴェネツィアのカーニヴァル

網の目状に交わる

1 3

愛情と献身を込めて用意されているホテルで

ただ清く美しい情熱の中の華やかなあこがれに

今夜お前たちはあの砲台へ

「掏摸の助言はファーストクラス」と…

1 4

叡智や才気も

差異のある感覚に犯される

ぐっと奥歯に噛みしめて

大き波立つ うつくし乙女

15

バス停は絶対的に夕暮れがいい

タクシーに乗るなら真夜中がいい

そして詩人はやっぱり風船づくりさ

その手をはなせば空へぶっとんでいってしまうだけ

16

トリュフのパスタに

見せかけたシイタケのパスタ

ウニパスタに

見せかけたひじきのパスタなくても

17

なにごともないおとめの日

日ごとにふえるような一日という征服の記憶

内面全面豪華ステンドグラスのステラ座

ベッラ島ボッロメオ宮殿的非日常

18

(イタリアで書いたノートは二冊ある。)

その内の一冊は詩やメモであふれ

もう一冊には個人的感想が綴られ

どの頁をめくっても素晴らしいです！ うわー！

19

靈魂の沈滞のために

鐘の氣狂い笑い

ばかばかしくておもしろくて

なさけなくてどこかかなしくて

20

「お前は上の方から掘れ」と太郎は言い

「おれは下の方から掘ろう」と次郎は言う

(太郎は、穴を掘り過ぎて出られなくなり…)

(次郎は、深い所で壁が崩れて窒息死一一)

21

澄み切った水をたたえるガルタ湖

BがAの知り合いかどうかよく聞いてみた

殉教者の心理が精霊の為にあるかと

すれば北極大陸へ無許可の上陸

2 2

白と赤のイタリアワイン！

最高の魚！

そして全世界が映し出すイタリアは

チョコレートとパスタとビール！

2 3

ロケーションは素晴らしい

完全な形をなさぬ胎児であったとしても

以前からの知り合いのようにテーブルに向かい合う

流れる風景の履行を証明せよ

2 4

りと胸を張り

眼をカツと見開いて

面目をあらたにし

アマルフィのシュークリーム

25

「映画を二本観た…

ひとつは雑誌のネガ係で、

もうひとつはマッサージ師——」

(お前までヒステリイになっては困る…)

26

ふくれあがったこの奈落は

メモランダムになる

ささやきは

ひきつるひらめの無邪気なねむり

27

「ネガ係は雑誌の表紙を飾る、

写真をなくして、

グリーンランドにアイスランドへと、

行くのだが…」

28

「マッサージ師の方は、バツ1で、  
子持ちで、一一」

(荘厳かつ近代的な聖堂！)

…うわー！ うわー！

29

下着の色やかたちを持ったひとつのぬかどこで

回想もない隙もない

留守もない記録もない

おそらく靴音でもない小さな集団の眼

30

与えられた習慣を絶対的に考えてしまった

哀れなものよ

人間は理解する為につくられたものであれば

職分とは当然のことであるのだと

イタリア、お前のために歌おう。

もはや定かに解きがたい遠つ世の叫びを…。

そのとき風は吹いていただろうか？

(—————どうだろうか？)

いつごろのことだろう、丁寧に千切りながら、考えていた…

[考えていた]

《板…》

たずねられて思い出すか？

—————どうだろうか？

ああ、またかまただ——まただな…

政治的（で、）どこか——経済的（な、）

剥がれ落ちて来る日々の——

嵌め込まれてゆく一瞬を探す…

不協和音のなかから現れ出たのは、

司祭もよく知る子守歌の一節の、二声による斉唱——。

戦争の歌——ローマ、

遙か神話の時代から約三千年の歴史が積み重なる永遠の都ローマ…

街そのものが博物館のこのローマ…

「すべての道はローマに通ず？」

（否・聞こえるのは、お前をいとしみ抱く女の歌・、  
やがてはお前に来る死の歌・。）

—麻酔が効きにくいのだ—

—歩行者道路に無秩序なドライバーシステム—

、、、  
夜が褐色の呪句の死熱にほてる時、

バルベリーニ宮殿から抜け出すアン王女の姿・。

それから、出入口・、—その外は廊下。

流されて、—でも、形を変えて・ほらまた消えて・・・

秩序無く書き散らされ、滅亡が復興か、

—春か・それとも・、秋か—・・・。

あたりをさまよいながら立ちつくしていた？

（— — — — — どうだろうか？）

少しでも気持ちを明るく持つように努めながら、指先がかすかに濡れてくる・

[これは何だろう]

《だろ う ・ 》

ローマの休日、天使と悪魔、グラディエーター、

インフレーション。政治と経済。闇。取り澄ました態度なんかですぐに、

—舞台は暗くなる・カメラで何を切り取ろうとしているんだ・、

（それで？）—（それで・・・）

均衡を崩さないさきに、見えてくる—のかい・

——それでも、・・と続けてゆくつもりなのかい、

淫靡な悪魔的かつ野蛮な肉欲のヴィジョンで——、

真実の口、古代ローマ時代の闘技場コロッセオ——、

「アクア・ヴィルジネ」をもとに、一四五三年に甦った噴水、

トレヴィの泉、コロナ宮殿・・。

鳩の糞だらけの？

—————どうだろうか？

煙草の脂だらけの？ 嘘ばかりが巧くなる——掏摸であふれた・・・？

享樂的（で、）どこか——非現実的（な、）

あっと思うまもなく消えて——

すっかり忘れてゆく、枯れ葉・・

「ねえ、どここのスーパーへ行っても、

中々コーヒーなんて買えないんだぜ——。」

神々の意匠より——目の前のコーヒーで、

永遠について考えていたい僕なんかは・・

凡庸過ぎるかな、ローマ・・

「すべての道はローマに通ず？」

（否・・聞こえるのは、ピザをちらっかした奴等の声・・、

おどけてふざけて笑いあって今日を喜ぶ我々の声・・。 )

胸をめぐる。執拗な陰気な——輝く髪・・

「グラフィカルな木々に随分やられて…」

不思議と神秘の掬いを取って、

おのおのが無限の形を織り出し、

歴史を流す河としてさまざまの事実を正しく反映した、

イタリアー

我々は、王がないことを思う…、

(オルガンがおごそかに鳴った！)

民の忠誠もなく、宗教もないことを――。

(踊って踊って踊りつづけていた！)

〈そのとき〉 〈この場所〉 で、

――高速道路脇のホテルで詩を書いていたことを、

…思い出すのかい、動かぬ水面の白い旗のような、

――到着時刻…

イタリア、お前のために歌おう。

もはや定かに解きがたい遠つ世の叫びを…。

眼前に豁然と空虛な都市に…

(―――――――迷い――こんで…)

体温に馴染んでゆく、女性的な不安の冷えが、ドライなものとなる…

[高架橋を渡る鉄道の響き]

《ヴィーヴィー…》

## 亜鉛屋根に雨が落ちるような響き

—————どうだろうか？

花瓶が、砂糖壺に——仮装する…

エリマキトカゲ（も、）どこか——イグアナ（な、）

何処かで僕等の耳にとどまっている行為が——

垂直に降りてゆき…その底知れぬ重みをはかっている…

地を固め天のめぐりをはじめた…

黄金の闇——うす紅い昼の衣裳をきて…、

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、

いともまどかな岸辺に語れ泉を、

——たしかにそこにその輪郭が見えたような気がしながら…

光の泡は行方の知れぬものとなるう——。

加速的に離れていく——精力的な情熱…

……ガラス細工の職人が座っている——

遠くの遠くの空の向うに行ってしまう、心を…。

——雲は、もうさらったのだろうか？

上には音もなく…

水、お前はしたたる衣で理解する。

だれでもない音が——。

# だれでもない者が――。

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、  
朝が向日葵で黄金でイエロウな時計で、

叩いてい――る..それまで隔てられていた一つの点と、

他の一点が結ばれた、出入口で..、――あたらしい悲しみ。

「下記の場所にいない時は、

下記の場所に電話をかけてください..」

――何処か..いいやそれとも..、何処でもないのか――..。

あたりをさまよいながら立ちつくしていた？

(――――――どうだろうか?)

ちょっと薄ら寒いものを感じてぞっとしてまう――

[これは何だろう]

《だろう..》

テルミニ駅で、ハンバーガーを買ってみたりする――。

マクドナルド。世界中どこでもマクドナルドがあるのかな――..。

――表情が暗くなる..ねえそんなのどうだっていいことだぜ..、

(それで?)――(それで...)

テレビがなにげなくニュースを伝えて――いた..

――脱線事故、..貨物列車、昨年も二回やらかしてる、

日本で――でも、そんなの日本でも知らない――、

遠くへ、ただずっと遠くへ

---

あおむけに、

みずから空へ…。

自虐的俯瞰、

なにも——こんな時…

無重力を味わわなくても…。

感覚の鈍い瞼をこじ開けても、

光さえ億劫…。右腕の第二関節から上に向かって、

骨になってゆくような——ね…。

「無常の——…」

蔦が足下から昇ってくる。

気配だ。

そして、おぞましい汚穢物のような何かがね。

確実に、僕の中にある。

波紋が広がる——俺の心の中には…

本当に誰も見たことがないような海がある。

永遠に行き着くこと出来ない海——だよ…

目に見えない病なんだ…

愛って――

そしてそれに狂っていくことって…

自由なんだ――

でもすごく――束縛…。

散った火花が――導火線につながる…

今すぐ抱きしめないで爆発しそう――だけど…

折れそうなくらい光のことばかり考えていると脆い――ね…

それでも過呼吸になるほど胸を圧迫する。

「剥いでゆくふたしかなやさしさ…」

僕が何を後悔してるか――

滑稽だね。こんな夜はいつまでだって暗い話が出る…

お前に俺の心の奥底まで触れてみる勇気がある――か…

人それぞれ色んな感じ方や考え方が――ある…

でもこの変幻の資質にひそむ魂の在り処だけは…

永遠に――俺の秘密だ…。

それだけで何百年や、何千年…

時が過ぎるほどにね…。

でも俺が知りたいのは、もっと別のこと…

楽することでも苦勞することでも――ない…

目に見える・・・乾いて割れた土は嫌だけどね。

欲しくない・・・

勝手に苦しんでる――んだ・・・

崇高な哲学の合理的な賢明さ――。

嘘や作りごとで汚れているのが時々嫌になる。

ゴムの皮膜で覆われて、

身体中が息できなくなるみたいな――

怠惰で贅沢な微熱・・・。

胡散臭いdramaturgyの茶番。

よして――くれ・・・。

とほうにくれたういういしい切なさ。

ひとかけらのうそもはなせない切なさ・・・

インテリジェンスを優しく傷つけてくれる、

才能も、

死に至る病にやられて喘息になる。

シガレット

煙草放って、

宙吊りにされた宇宙――で・・・

考えることなんか、何一つとしてない――。

求め合うたびに苦しんで、

奪い合いながら傷付け合って喜んでる。

人間の底の浅さを思い知る…。

ひんやり冷たい距離。

永遠に純粋な僕は――

花になって――しまう…

ほらすぐに――風に…。

「俺は大分前から、

完璧に理解してるのが――ある…」

言葉は――

俺に息の根を止められたがって――る…

何度殺してもよみがえってくる、

だってそれは俺の生命を司る、

ドッペルゲンガーのようなものだから…。

(あめのなかでゆれている――ような…

ひえきったぼくのからだ…。)

ねえ、神様、

Elegy が聴こえる…

秋の歌が聴こえる――

当たり障りのない優しい美しい言葉は、

脂肪…。

そしてそれが俺たちを、

胃潰瘍にも、十二指腸潰瘍にも、――する…

Game がまた始まる。

うなるほどお金を稼ぐ為に人を利用しろ。

所詮世の中はお金だと理解しろ。

騙されるな欲望が俺たちのすべての原理だ…

でも――

俺は一生そんな甘い奴でいたい――ね…。

明日またお前を幸せにする――

世界で一番幸せにしようと努める…

くだらないことやじかんのむだは嫌い――

だけど、ばかをしないぼくはもっと嫌い…。

ぐったりと自失した心は、

的確に仕込まれた臓器を暴いた――ろう…

周りのみんなは楽しそうにしゃべってい――る…

そして空白の感覚…

コンマの振られた間隔…

いくつもいくつも絵になっていった——ろう…

そうだよそうやって何度も繰り返し、学んで、塞ぎこんで、

生まれ変わって——いく…。

規則的な潮の満ち引き——が…

すばやくにげ去った——…。

矢をもたぬ弓…

「抛り所が無い——僕等よ…」

歩き慣れてない——夜道を

ふらりと歩きたくなっ——て…

狂気の沙汰／湿気たクッキーのような粗悪な月／

巨人の背骨のような縦貫道路

「でも——知ってるんだよ…」

魔法は——解けてしまう…

(時が止まったように、

嫌な気持ちとか後悔とか残酷な失敗とかで胸がいっぱいになる、)

白と黒の微細な泡／コンピュータ・ミュージック／

転回を促す標識や、通行止めの看板——

——映画館へは行けそうにない…

——薬局で薬を買う気持ちにもなれない…

大人になりたいくて…真っ白な息を止め——て…

「それで どうしたなんて 言いそうだけど…」

窓ガラスに——

映る姿ばかり気にして…

…好きってどういうこと？

長い目で見てよね——もう少し

あっという間に時間が過ぎ ーーて…

(粗大ゴミみたいな 音が 溶ける…)

世界ってやわらかい からーー

「まるでーー昨日みたいに(ありがとう)って…」

オハヨーゴザイマスーー

レントゲン写真 みたいに ファーストフード店は…

シールのような ー日ー)

魔法はーー悪夢の続きだけど…

ーエレベーターの中で眼を瞑ってる…

暗黙…濃密になるーー壁で…鏡で………

ー髪や服に滲みついた煙草の臭いが切ない…

(気長に、うまくやっていこうよ…

目をつぶるとードラマや漫画や昨日の出来事がうまく混ざるから、)

綺麗なものじゃないーー

だけど幸せは訪れてくれるはずだよ…

…他愛もない胸の高鳴りと共に

今日も雲が浮んでーーる…。

世を遁れ行ひすましぬ僧もありき。

シエクスピヤの如き宇宙的人物にあらねども。

墮落はとある暗き林の眼界にありき。

多くの民に悲しみの世をおくらせしもの――

軍樂、うち鼓して過ぎれる！

むらさきに燃ゆるころその農園の扉を過ぎ。

忌はしきうたがひを受ける李下もあり。

右なりと思へど感情の為に左せらるること多し。

それによりて枕の有無を定めしこともあり。

大振動を起すべき恐ろしき性質のものなりと思ひしこともありき。

大家ほろびて小家となる。

悲しき事の、さても世には多かりし。

ひびき――寂寞の・・小川の悲しげなりや――。

ひびき――寂寞の・・小川の悲しげなりや――。

ゆえに思ふ外は、何事をも思はず。

ゆえに考える外は、何事をも思はず。

色にありて形にあらず。

形にありて色にあらず。

世を遁れ行ひすましぬ僧もありき。

シエクスピヤの如き宇宙的人物にあらねども。

世を遁れ行ひすましぬ僧もありき。

路傍に休みて撃たれたる……！

路傍に休みて撃たれたる……！

薬はあらざらむ！ 薬はあらざらむ！

酔ひしれて、一文字をだに知らぬもの！

## ビールの歌

---

そいつを飲みたいから黙ってる

そいつを飲みたいから詩を書くんだ

そいつさえあればいい

そいつが俺の血液だ

—— *BEER*

そうして広い納骨堂で

氏家も性別もわからぬ秘蔵の巻物じみた

時間の流れのとある出来事が錦秋する

…ばかばかしい展翅だよ

……こんなの虫取り網だよ

—— *BEER*

世界を埋め尽くす笑い声の標本室なんかで苦悶なんかいりやしない

世界は仏教もキリストもユダヤも求めてやしないんだ

世界は渴いた咽喉を水で癒したがっているだけなんだ

そいつを飲みたいから黙ってる

(人生はたったひとつしかありはしないのに…)

—— 高麗青磁 ..

そいつを飲みたいから詩を書くんだ

(酔っ払ってばかりいる僕は贅沢な夢のように口ずさむ甘露——…)

——どじょうすくい芸に口に手を当てるおしろいの女…

そいつさえあればいい

(さみしい人達があまりに多すぎる…)

——マストが停泊する…

そいつが俺の血液だ

(でもきっと僕には——癒せやしないんだ…)

——般若心経が聴こえる…

—— *BEER*

古い引き出しの中に錆びた鍵がある

そしてそれは急な石段をのぼりつめた所にある

やわらかに鳴り響く鐘の音

…エレベーターだよ、これも

……スケジュールは、いっぱいだよ

—— *BEER*

みんな駄目になっちゃった時代の賑やかな酒宴の始まり

バリケードも瓦礫も埋立地も僕のDNAにある

いなせな僕は酔い潰れるまで狂うことしかできないから

盆は 落ちていく陽に 乱雲を軽機関銃にする

瑠璃色の空の下で 僕を 南瓜にする

チューリップみたいな信号を 色変わりした写真にしながら

光を集めて降ってくる藁屋根に 地上の息遣いの水平線

ブランコがもはや陽炎でしかない 微笑は 黒揚羽

雨露をしのぐ宿よ 海嘯におぼれそうな若さよ

セロファンのような平和が 鉄筋コンクリートに誤魔化され

四十九日 平和記念日 遠い異国の死の臭い

夜っぴて飲みまわり壮烈な詩句を仕上げる プロレタリアよ

死者の沈黙よ 波の音は聞こえてはこない

額縁におさまった コンクリートの中で 菜の花を思う

永く苦しい冬を思う 長い長いトンネルを 憶う

ああ風 宵闇に蛍飛ぶ 輪廻の業にひとしきり迷妄しながら

声にも言葉にもならぬ 短い夏 蝉の拍手

二十代くらいの女の子がかわいい寝顔で眠っていた。

いいね。まるっこくて、ぷにぷにしてる。大福好きなんだ。

肉感的ってやつ。

ともあれ僕はそんなおんなのこがねむっているのをみると、――

すう…ぴい…すうう――くう…

ねむたくなる……

ズウウウ…っと、重い布をひきずると、

「ハイ！」

クラッカーが乱れ飛ぶ、夢の世界。

よくよく見ると、ペンギンがアイススケートしてる。

かわいいな。あのちいさいクジラも。

けど、よくよく考えてみたら滅茶苦茶な夢の中だな、ここ。

全世界共通の検定一級って感じの変な夢だな、ここ。

ともあれ、目の前には女の子がいて、僕を揺さぶっていた。

「なんだよ！ グッジョブ！ 寝かせて」

「眠らないで！ うおおおお！」

猛烈に揺さぶられている。ぶるる、やめろ。やめないわよ。

ぶるる、意味わかんねええええ！！！！

ぶるる、やめろやめろ。突き飛ばす。尻餅つく。でも立ち上がる。

甲子園球児は立ち上がる。お前、高校生に見えないし、女だぞ。

ボクサーは何度でも立ち上がる。プロレスラーにすれば？

そうする。おきろおきろおきろオキロオオーオオオオ…！！

「やめろクソガキ！」

「わかったわよ背の高いボケ！」

止まったー

ふう、これで眠れる。うiiiiiiーんん…

パチリと目を開ける。目の前にチェーンソーがうなっていた。

すごくすごく、ばっちり、と、うなっていた。

ちなみにchain sawと書く。

「ー起きたの？」

「…うん。」

「眠ってていいのよ。」

「ー眠くないのに、気付いた。

というか、気付いてしまった。」

「そんなこと言わないで。」

そんな優しい声出さないで、しばきたくなる。

「ありがとう、でも、何だか眠気が吹っ飛んだんだ。」

——ともあれ、ここはゆめのなか…

はい！　じこしょうかいタイム～♪

「先生えええッ！」

「はい。いい声ね、——なにかな、ボク」

年下にしか見えない女の、教師プレイ。

正直、引くからやめてほしい。

「断固拒否します。」

「いきなり。」

「すみません——不器用な男ですから。」

「それ、うまい。もう一回言って。」

「断固拒否します。」

しかしそう言うとも——うなり声をあげる、機械。

うiiiiii——んん…！！！！

「名前は、まだ無い。」

「そんな小説みたいな名前じゃなくて。」

…いや、そんな脅し道具使われても困ります、ホントに。

「…バルス。」

「いや、映画じゃないんで、困ります。」

「…バルス。」

—目が覚めた…醒めると…

見知らぬ駅まで来ていた。

二十代くらいの女の子は消えていた。

その代わりに、八十代くらいのおばあさんが、

隣に座っていた。

僕は、でんしゃのてんじょうを—みつめながら…

「…バルス。」と、言ってみた。

しかしそう言うと、八十代くらいのおばあさんが、

いますぐに—大福みたいな女の子になって…

「今日はアニメの気分なのね。」と言うのだ。

見るか！ 夜通しで！

するめ買うか、ビール、コンビニで買うか、と言うのだ。

その時、シータってギリシャ字で書けるかいという僕は、

あんまり、—あんまり必要はないんだな。

だからとりあえず、ジョジョ立ちする！

## 君は多分、死なないと思ってる

---

自動販売機のまえでポケットを探っていたら、

長ネギが出てきた。

しばらく前から、

僕の鉢植えで育てていたやつだった。

本当に最悪だ、

この世界は――

そう思うと、

その路地そのものが消え失せたかのように、

足音が聞こえてきた――

描かれつつあるかに見えて、その何かは遠のく。

自動販売機がすでにもう見えない暗闇の中、

そこは、つぶれたボウリング場の中だった。

僕が歩くとそれが聞こえる。

ピンを倒す音が聞こえる。

駆け足になると駆け足になる。

ゆっくり歩くとゆっくりになる。

そして誰かがストライクと言ってる。

でも振り返って……も――誰もいない……

食べ残したパイナップルのことが気になった。

焼き肉のたれにつかおうと思いながら。

――だって…

だってさ…パイナップルは肉をやわらかくするから、

とかいう豆知識は知らないが、

次の日にパイナップルは消えていた。

強行突破でこっちに来そうな足音は永遠に来ない。

マグマのような明かりでひしゃげそうな生命活動！

アッはははははははは！

くらめきがせかせかとする、

いらいらがせかせか――する…

長ネギは透かし絵のように、

少しずつ透明になっていき、

露出不足の像のように曖昧に、

やがて目の前から消えた。

腐りかけの甲殻類みたいにしつこく、

後尾燈のようにあやしげな夜光虫しながら、

眸の中に意地悪く残っている…。

xxxニナルノデス。

xxxニナルノデス。

ービョーンビョーン…

ビョーン！ ビョーン！

アッチョンプリケエエ！

ぐおおおおおん！

アッはははははははは！

目の前に、

中年の女、

気味が悪いほど全裸。

あるいはおぞましいほど全裸。

四十代のメタボした腹が突き出ながら、

ここは温泉ではないぞというのに全裸。

場違いで不揃いな、

ドレミファソラシドみたいに全裸。

もう何日も寝てないのか目にクマができていて、

ゲッソリしているのに全裸。

……

……………

「ねえ、あなた、あたしのxxx知らない？」

ーとても大事な用事があったはずなの…。

ねえ、おばさん、

なまなましい痕跡だな。

なめくじみたいだな。

「ねえ、あなた、あたしのxxx知らない？」

——誰かと会う約束があったような気がする…。

知らないよ、おばさん。

なまなましすぎて悪夢だよ。

熱にうなされるよ、おばさん。

ぶっとびだよおばさん！

すごいスピードでぶっ飛び、本棚に思い切り背中をぶつけるよ！

.....

.....

僕は、無視して帰る。

ポケットを探ると、ラジオが入っている。

ラジオには、真空がある。

夜気が流れる。

変だな、と思う。

でもそれはうつろな暗い空洞でしかない。

ぶつくさと何事かつぶやいている。

「大丈夫！ 心配しなくてもここから落ちるから！」

(ちかくとおく恐慌じみた声楽が――

それも追い立てる足音にすりかわりながらスクランブルに、

あたりを満たしては波のように打ち寄せるカモシカ！)

.....

.....

「警告せよ！」

一度だけ――ちゃんと聞こえた・・！

頭上を見上げると、北斗七星が、見えた・・！

尖った爪の先で地面を搔く見慣れぬ生き物のように！

アッははははははははは！

途端、シュルルル、という音をたてて、

巻き戻って――いく・・

おばさん、食べ残したパイナップル、

つぶれたボウリング場、長ネギ、

自動販売機……。

.....

.....

「でも――いったい何を？」

(いったい何を?)

そして――いったい何を?

永遠の尽きたあとの別の永遠のなかでも、

カマイタチする・・クサリする・・

ムンクする・・モンク言う・・

ガンタンクする――

シュルルル、という音をたてて、

やっぱり巻き戻って――いく・・

(棺桶よりは少し広くてよかった。)

どんな感想だよ。

(でも、財布みたいでよかった。)

どんな間奏だよ――

僕は――名前を思い出せない・・

でも、かろうじて・・

今朝飲み残したコーヒーカップが、

砂に変わっていることだけ――は・・

あ、顔が――思い出せない・・

でも、かろうじて――

茹で卵食べたかったことだけ――は・・

あ、性別が――思い出せない・・

そうだ、肉体の感覚というのを――

思い出せない…

でも、ぎこちない自然の不審な突風ごときで、

四角いファインダーを覗く、そいつの眼を、

忘れたりしない――神、ほらね…

僕等ようやく会えた――…

## 山の不思議な話

---

子供がいなくなった。

どれも、とりとめなくしゃべっていて、最初はわからなかった。

心臓に悪い。だってそうじゃないか、殺人事件でもあったのかと思う。

しかもボソボソと話すので聞き取りにくいし、聞こえても、

方言混じりでわからない。

でもその時、どうしてか、ふっと、子供の時に、

(僕等が生きているのは、何かを忘れていないからじゃないか。)

と、強く思ったことを――思い出した…

そんな風に思った人は、どれくらいいるのだろうか？

世の中には――不思議なことがある…。

と、人だかりの中で、

「神隠し――じゃないか…」

知り合いの老人が――ぼそりと呟くのが聞こえた。

そもそも食堂に入って、水がテーブルに置かれ、

ネクタイを緩めながらメニューを見ていた時だ。

店先にあわてた様子で、

「子供を見なかったか？」と血相を変えて、

近所のおじさんが入ってきたのが始まりだった。

人の手が欲しい――ちょっと手伝ってもらえんかね…

なんで俺が？

というか、飯食ってないんですけど――

あ、すみません・握り飯ありがとうございます。

と、もぐもぐ食べながら、

最初は仕事でしんどいからと帰ろうかと思ったが、

明日も明後日も休みだし、なにぶん――近所づきあいというのもある。

田舎の山間部にあるこの小さな町では、悪い噂は御法度だ。

それに、俺はちょっと気になっていた。

何をだって？ もちろん、さっきの言葉だ。

知り合いの老人が呟いた言葉が少し気になっていたのだ。

そして、人だかりの中に加わった。

まるで、子供時代の火の用心と言いながら歩きまわる冬の行事とか、

さもなければ、お祭りみたいだ。

歩きながら、仲のいいお爺さんの傍に立った。一緒に歩く。

歩きながら、話をする・・。

「よくわからないまま参加してるんですが。」

と、正直に言うと、ふっ、という風に笑った。

このお爺さんは、若い奴に無茶いやがって、と言いながら、

「夕方の六時を過ぎてもH君が帰ってこないのだ。」と教えてくれた。

H君といえば、神童とか秀才といわれている、

利発そうな男の子の名前だった。

「さっき、ご両親が懐中電灯を手にして、  
学校まで歩いていったんだが、見つからずに、  
そのまま、引き返ってきてこの騒ぎだ。」

世の中が物騒になったからな、と肯いた。

「遊びに行って帰ってこれないんですかね。」

子供のころなら、しょっ中ではないにせよ  
時にはそういうこともある。ただ、山間部、  
峠道のドライビングコースや、吊り橋…

子供の時とは違う、大人の想像力における恐怖感に戸惑いながら、  
首を振る。そうだ、いくら慣れているとはいえ、子供のことである。

怪我をしたとなれば、一大事だ。

捜索隊は、数時間後、町の隅から隅を歩いた。

見つからなかった。

一緒に学校に通っている子供たちにも事情聴取をしたが、  
見ていない、学校で会っただけ、と口をそろえるばかりだ。

行方不明。

しかし、時間が深夜をまわるにつれて、仲良くしていた老人は、

「…もう探さなくていいような気もするがねえー」

と、信じられないようなことを言った。

何言ってるんですか、と言いかけて、――

そういえば、さっき、神隠しとか言ってたなと俺は思い出した。

「…お、一時解散みたいだな。」

明日明るくなってからまた探すと言う。

両親は、引き続き探すと言っていたが、それを警察がなだめていた。

「おそらく、学校の帰り道で、山へ遊びに行ったのでしょうか。」

山間部あたりを探してみよう、というのが警察の見解ではあった。

俺は老人と一緒に帰り路を歩いた。

それにしても、ここでの夜道はいまでも慣れない。薄暗くて、湿っぽい。

人の孤独がここにあり、そこには今でもかすかに僕を震え上がらせる何かを、

ハッキリと――ほとんど動物的な本能の嗅覚で感じるからだろう。

ともあれ、歩きながら、聞いてみた。

「神隠しって？」

「あ、聞こえてたかね、…すまんね――」

時々、お爺さんには思ったことを話す癖があって、

それを俺は指摘したことがあったのだ。

もちろんそんなの俺は気にしないが――…。

「いや、わからんがね――

でも、ここいらじゃたびたびある…」

「たびたびですか？」

現代である。かえすがえすも――現代…。

誘拐されたとかいうのが普通だ。

「…今回の事件はよく似てるよ。

まあ、見てなされ。」

数日後、遠くはるか三百キロ以上離れたところで、

H君が発見された。

警察の見解が当たっていたのか外れていたのかわからないが、

やはり山間部で、切り株に呆けたように座っているところを発見されたのだ。

話によると、学校を出て二十分ほど歩いたところで、

ここらでは見かけない山伏のような大男に出くわしたそうだ。

その時点ですでに怪しい。

「坊主、こっちへ来い。」

嫌だ、と思ったそうだが――本当に一瞬のことだったそうだ。

そう言うや否や――、小柄なH君を背負うと、

風のような速さで滑るように道なき道を走ったそうだ。

さらに目をくらむような崖をも飛びおりるように走り、

そうこうしている内に、H君の意識は薄れ、

あとのことはよく覚えていない。

気がつくと、もうろうとした意識の中で樵夫に発見された、と――。

「どういことなんですかね？」

俺は、仲のいい老人の所へと話をしに行った。

俺はたびたびこの老人と晩酌をする。

「さてね——わしにはよくわからない…

ただ、こんな話がある。ずいぶん昔にね、

洞窟の中へと入った。ロープを持ってね、仲間数人とだ。

細いロープだった。それを目印代わりにして、洞窟探検をした。

真っ暗闇の中を懐中電灯で照らしながらね——

さて、最初は広かった洞窟も、道が狭まって、ついに、

前にすすめないようになった。それで、戻ろうとロープを手繰って、

帰って行った。結構複雑な洞窟でね、必要なロープだったんだ。

でも、そのロープをいくら手繰って戻っていても帰れない。」

俺は息を呑みながら、聞いていた。

「…ハッと、ロープを見ると、それは太いロープだった。

どこでどう間違ったのか、まったく自分たちの知らないロープだった。

どうしたかって？ あわてて走って戻ったよ。ロープを頼りにね。

よくそうしたと思うよ。洞窟の入口まで戻って、

時計を見ると、八時間も経っていた。本当に恐ろしかったよ。

数十メートルくらいしか入っていないのにだよ。

そしてロープを引きよせてみて、それが細いロープだったんだけど、

どうもおかしいんだな——長さがおかしいんだよ。五十メートルくらいしかない。

いくら暗い、足場が悪いって言ったって、八時間も経たない。」

俺は、はあっと溜息をついた。恐怖が伝染したのだ。鳥肌が立っていた。

「…不思議なことはあるよ。山にはね——

昔、小学校の屋上で、青いドレスを着た女性が、

松明を持って、山の方を見ていたことがある。」

「…なんで、松火なんて——持っているんですか？」

おそろおそろ、俺は聞いた。

「わからんよ——ただ、昔何かあったんだろうね。」

「その人——生きてる人ですか？」

我ながら間抜けな質問だったが、この老人は笑わない。

「…多分、死んでるだろうね。」

子供の時に——

(僕等が活着ているのは、何かを忘れているからじゃないか。)

と、強く思ったことを——思い出した…

「実はね——、俺もしかしたら、

その山伏知ってるかも知れないんですよね…」

「うん、そうだろうと思ったよ。」

「——最初はわからなかったんだけど、少しずつ、

本当に少しずつ、話を聞きながら、思い出していったんです。

あれは、——五歳か六歳の時だったと思います。

目の前に、ずうんと入道雲と見まがうような大男が現われて、

何か話して、俺を持ち上げるんです。」

「うんうん。」

「…俺はその時、神社のことを考えてた——んです…

誰もいない——汚い、雑草だらけの…」

と、言いながら、俺はぼろぼろ泣き始めた。

「こわかったね。こわかったね。」

と、子供をあやすような声色になった。

「多分霊の…景色が心の中に入ってきたんだらうね——」

（どうして忘れていたんだらう…

そしてどうして、このことを話さなかったんだらう——う…)

「俺、ずっと忘れていて——…」

「いや、今からでも遅くないんじゃないかな。

心当たりはあるよ。」と老人は言った。

古い地図を取り出して——廃れた神社がここにある、と言った。

「過去を——救い出しに行こうか？」

と、老人はビールを飲みながら、言った。

「夏の始まりを告げる・・・」

心に音楽が満ちるように

漂って――

ゆらめいて

誰もいないしいんとした静寂の中でたったひとりあなたを想う。

町の音も全くどこかへ消えてしまう真夜中、ざらざらして、

無性にアイスクリームが食べたくなる。我ながら不器用で、

涙に濡れた眼をあげながら――ね・・・。

冗談を言うにはまだ若すぎるかも知れないし、

真面目な恋をするには、もう少し歳を重ねなくちゃいけないのかも知れない。

あれだけ、洗練されたはずなのにね、おかしい――

夜の窓ガラスにうつる僕は相変わらず淋しげだね。精一杯味わった苦痛でさえ、

まだ足りない。足りないと思わせてしまう人生の四捨五入・・・

「不気味な欲望は、

資本主義のひとつの大きな物語のなかで――

回収されて終わってしまう・・・」

(本当に・・・?)

そして、夕方になると、

いつも僕はあの道を通っていたことを…

思い出す――。

思い出して――る…ああ――。

あの道は、あなたが通った道――…。

あなたに死ぬほど口を聞きたかった僕の迷路の一つ…。

心に音楽が満ちるように

漂って――

ゆらめいて

でもこんなことばかり繰り返してたら、きっと駄目になってしまう…。

牢獄に近いそのテリトリーは、

にぶい無様な色で染みをつけられた、

あの夜の渚の方向を思い出してる――…。

不幸＝憂鬱症。

だから…

歌声響かせたい小鳥が空へとゆく、廊下を走る風の足音よ――。

ぽっかり浮かんだ白い雲もいつかコップを満たす雨に変わるだろ？

それなのに、僕は気がつくといつもいつのまにかあなたを求めている。

天鵝絨の夜に蛋白石いろの月が昇ってそこに薔薇色の翳り…。

「自己疎外が、自分自身の破滅を、

偉大な記念碑の一部にしてゆく、無神論として…」

(本当に…?)

>>>どうかなんて興味がないよ。

>>>どうかなんて興味がない。

>>>わかっていることは一つさ。

>>>一つだけだと思うのさ。

今になって思うことは、

朝を迎えることはそんなに難しくなかったこと…。

いともたやすく――。

焦げた先でも、さわれてしまう灰のように…。

でも僕の時間は思う以上に深い霧の中にあっただらしくて…

いまでも目を瞑ると、彼女が好きで一緒にいたかったような気持ちがある。

口説き落とした女を見たって、虜にした女のうっとりした眼を知ったって、

きっと男なんてどうでもいい生き物だって思える――から…。

「夏の始まりを告げる…」

心に音楽が満ちるように

漂って――

ゆらめいて

どうしてかな、どうしてだろう――、

信じているんだと思う…あの夢のような世界で恋をした時間――。

僕が弱くなって、安眠できなくなった時、

僕はいつも思うんだ、

僕のやり方にはいつもどこか不自然で窮屈なところがあって、

時代に傷つけられ、やりれぬほど無知で不潔で図々しいくせに、

秘密をかかえこんで、そして荒廃して――

いま、――まさに、都市の時間が死にかけているみたいに思い込んでるけど、

本当はそうじゃないだろうって――…。

言語曲芸＝知的遊戯。

だから…

たまに疎ましく思う、その寝がえり…。

弱味を握られているようなこの癒えない痛み…。

永久に、こんな気持ちを持って余すとしたら絶望的だけど、

その裏側にある炎が、隠れよう、隠れようと、

ヴェールで一一…。

「噛みごたえのないマシュマロを、

撮影能力だと信じる、排水溝の底に吸殻が落ちてる…」

(本当に…?)

>>>どうかなんて興味がないよ。

>>>どうかなんて興味がない。

>>>わかっていることは一つさ。

>>>一つだけだと思ふのさ。

後悔していないの君は、あなたは、

出逢ったあの日のことを一一。

人それぞれ囚われの歳月を過ごすものだけど…

たとえばある人はいまでもアビロオドにこだわって、

僕なんかはいまでも…、

一一あの十九歳という短い一年間にこだわってる…。

心に音楽が満ちるように

漂って一一

ゆらめいて

僕はいまでもよくわからない、

何にも知らない未熟な僕だけが壇上に残って、

怒りっぽくて気分屋の海原へと出掛けてゆく前に、

あんな風に色とりどりの花を咲かせることを知ってしまった僕は、

無分別な肖像を、あるいは騎手の化石をせかせかと一一集めた…。

記憶の旗＝永遠における一瞬。

だから…

そうだよ、きつとこのジェスチャー・ゲームみたいな詩は終わらない…。

僕が否応なく感じていた何かは世界に適応できなかった僕の最初の感情だから。

魔法の光で眼をかがやかせていた君が僕の歌を作る。

どうしてこうなんだろう、どうしてそうすることしかできないんだろう…。

僕にはわからない——でも、ナイチンゲールの古風な高音は美しく、

…僕の心の奥にある、昔を憶うそのメロディーは何よりも美しい。

「夏の始まりを告げる…」

心に音楽が満ちるように

漂って——

ゆらめいて

空気や雨の頁。

そこでぐずついていた僕の足音が聞こえる…。

蔦かすらだぞ、吊り橋だぞ。

振り向いても誰もいないぞ。

ねえお前、月のおだやかな輝きを見たかい。

知っているかい！ 女がそこでどんな至福の表情で微笑むか、

まるでよろこびが身体から充ち溢れたみたいに、

一個の詩となって、人の心を動かすさまを知ってるかい。

心に音楽が満ちるように

漂って――

ゆらめいて

思い出のランプが揺れて――

幸せを掴み損なっちゃったって毒づくかい。それもいい。

それもいいが――せっかちなお前、

ぎこちなく意地悪にもなれなかったお前、

大人になる旅に出る約束だよ…風車よ回れ、

ドンキーホーテが出てくる。そこから、

教会が見えてきて、ロミオとジュリエットが、

あらぬ姿になって出てくる。残った僅かな花びらが、

無意識の回避行動の顕れみたいに滅んで――ゆく…

「頹廢的な生活から脱出すべく――、

海軍士官養成学校の飛行士課程に志願するんだ…」

大学生がアマチュア無線で主人公たちに向けて実況中継する――

(知的な限界を超えようとするとき生理的な限界をも支配できる…)

喜怒哀楽から羞恥心、虚無感、頹廢感、喪失感など、

しかしそんなものが、ベッドの上で横たわっている物質。

しん、と静まり返る彼等の顔に、肯定の色は見えない。しかし――

現代に向かって何を問えるのか。その一つの答えを示している…。

アマチュア無線をしながら、振り返って…。

都会の中の俺達の城…。ゆらゆらと大きなものに包まれて、漂っているような感覚…。

「鬼教官は？」

――今日の前で小さくなって震えている…。

(教師は教科書の受け売りしか出来ない。)

「脱落者はどれくらい？」

グラフィティ

――落書き…

「でもまず、大学が不正に蓄えた億単位の金を強奪する。」

意図的に提示された、一つの逃げ道…。

クラシック・ギターを弾きながら…神経も切れていって――。

口をとがらせながらギターケースを抱えて、立ち上がる。

目標を失った彼に示された道は他にない。

カウボーイ・ハットを被って、バスケットシューズを履いて――。

「ジョン・F・ケネディ暗殺みたいだろ？」

乗馬のシーン、スキューバダイビングのシーン、水上スキーのシーン――

が、流れる…。停車の失敗、強盗から投げられる酒のファンブル失敗、

水風船顔面直撃…。ボクシングに熱中しながら部の仲間とタバコ・酒・

バクチ・女・喧嘩の自堕落な生活をしている。

ミッション系大学に通う女子大生の恋人が妊娠している。棄てた…。

ノイローゼになって自宅療養中だった――と風のうわさで聞いていたが…。

身元不明の水死体が上がる。暑さと解放感で蕩けていた人々の心の奥底に眠っていた、

一つの嫌な事件の記憶を呼び戻そうと――する…。

いや違う――…。

何か違和感を感じる。

そうだ――彼女は結婚した…。

しかも、妊娠させたのはその男だった――。

音楽を止めてイヤフォンを外した。

咳一つで台無しになってしまうくらいに空気が張りつめている。

それは、夢だったのだ…。目が覚める――と…

ピスタチオとオンザロック…。

「こんな映画は観客に見せる物じゃない」と、映画批評をしている親友。

裏山の秘密基地の話、大学教授の口癖の話。レコードでジャズを聴く話。

ここは港町のいかがわしい酒場。

[移動]を開始し、

[肉体]を操作する…

LSD文化発祥の地・サンフランシスコのヘイトアシュベリーみたいだ。

「戦争に反対しているのに、戦争を増長してる…」

義務、愛国心、忠誠心、犠牲にとりつかれているあの人々…。

日本の左翼マスコミ…。

——少し切ないエレキギターのイントロが流れる。やがてドラムの激しい音…

一種の信仰であるかのように独裁者を崇めたてまつっていた、

八十年代の音楽だ。一步一步、愚か者へと近づいてゆく——

夜の訪れを少年に告げるものが一つだけある…

——「立場」

彼には母との不和を話したが、彼女は死んだということは揺るがない事実だが、

まだ話していない…。彼女は——父親のことでいつも悩んでいた…。

その頃は僕は、誰彼かまわず喧嘩をふっかける日々を過ごしていた。

年を取ってからもそうだ、ヨットやボートで遊んでい——た…。

そのくせ、携帯電話が落ちたくらいで傷が付いていないかどうかを確かめ、

我ながら小さい男だと自己嫌悪する。

鍋から料理をすくい皿に移して行くみたいな、男…。

空間と時間に入ってきたのは、昨日の科学者だ――。

ともあれ昨日、僕は父親に言ってやった。

恐竜時代に一人取り残された気持ちになりながら、

「僕は子供じゃないんだ。」と言った。

父との決別を……告げ――た…。

まだ誰もいない、そんな場所に一步ずつゆっくり、歩いて行くような気分で…。

傷つけまいとしどろもどろになりながら、頭をひねりにひねったけれど、

未熟さゆえ上手く言葉にできず、

奥歯に物がはさまったような言い方で肯定するしかできなかった、子供の僕はもういない。

今聞こえているような音で物音を聞いていない、エアコンの音、赤ん坊の泣き声。

満月、街灯を渡ってゆく――背広姿…。

悪質入居者との決別――かな…ニュートラルにして透明な観念…。

殴り合いが始まった。サンドバッグのようにはいかない。

固い腹筋を誇る父の腹にパンチをくらわして血を吐かせたのはお約束の描写だが

結局は自分も、父親も、ボコボコにされた顔で、力なく笑い合うだけだ…。

もし僕が空手やボクシングを習っていたら、もっと違っていただろ――う…。

「母を守り抜くことが出来なかったという罪悪感は、

流離の合図だったんだ…」

「お前の好きなように生きろ。」

「本気で言っているのか？」

「俺はお前を愛してる。」

進学を前にしたうつろな夏休みが――

いやらしいもの、ばかばかしいもの、好きになれないものでありながら、

それでも過ごさねばならなかった夏休みが表情を変え――る…。

空がすみわたっている…鏡のように、青んでいる――。

――今日の前で小さくなって震えている…。

(教師は教科書の受け売りしか出来ない。)

「脱落者はどれくらい？」

グラフィティ

――落書き…

沖縄のサトウキビ畑に、数日後、彼はいた。

期日までにサトウキビの収穫を終わらせるため、

若者たちがアルバイト「キビ刈隊」として集められたのだ。

彼はそこにソフィスティケイテッドに参加した。

惚けた様な表情を捉えてから、呼吸を整えていく表情を追う。

一つの価値の破壊は別の価値の肯定に終わっている。

確かにそれは何処かで感じたことのあるものだったはずなのだが、

それは善というより単純な美であり、

単純な美は善という枠組みを時に無制約的に破壊してしまう。

物を得た瞬間にそれは価値を失い――、

それを必要としていた自分すら過去のこととして処理されてしまうのだ。

目の前に新聞紙がある。

そこで、『〇〇が刺殺される』という新聞記事に目をとめ、

少年だった頃の友達をふと思い起こす。彼は死んだのだ。

サングラスの女から電話を受けていた。

とか――怪しい人影という週刊誌的文句も、テレビで知った。

リズムカルにステップを踏みながら株価上昇…。僕の心は――、

相手への気持ちが大きくなるほど、反比例して…

自分の価値を小さく感じるようにできているらしい。

バスに乗る。

アパートへと帰るために。

バスの乗客は老人たちであった。

( マネキン人形を解体するかのよう ) …

( 人体模型として役立たずのよう ) …

そしてこれはきっと不幸な未来を暗示している…。

自分の居場所さえもさらに 見失うのは当然のことだろう。

その時、僕はアルバムで見た幼い日の母の写真が思い浮かんだ。

ちらりと窓から顔を出す、そこには最も美しい水溜まりがある。

その液体-水…は彼らが溶けて一つになった姿を思わせた。

それは遠い昔、体育の時間が終わって教室で着替えている時、

何かどうしようもない痛みのため僕はそこを動くことができなかったことを、

思い出した。でもそこで積み上げてきた知識や価値観に基づく威厳が感じられた。

それは情熱の必然的な帰結である退屈な人生への宿命であっても――

僕は何処へ行くんだろう？

そして何処で死ぬんだろう？

ともあれ、ズボンのポケットを常に空にしておこーう…。

倉庫を改装したようなアパートの前に、女性がいる。

こめかみが、ヒクヒクと…震えた。

嵐のような熱狂がしばしば社会全体に吹き荒れた――

ダンス、精神錯乱、虐殺、幻影…屁一つこけず、エロ本の一冊すら読めない精神…

いや、――ほっそりとした美しい少女の顔があった…あるだけだった――。

ミルク色の肌、バラ色の頬…、ピンク色がかった貝殻のような耳…。

人類が生まれ作られた知識のみを今ここでひけらかしていると言ってもいい。

「何してるの？」

と聞いたのは、――そんなわけだ…。

「星を見てるの。」

犯罪みたいな――夜が来る…。

取り調べの警官の口から漏れるありきたりでクソツタレな台詞。

外界の者を拒む不思議な霧が満ちて――。

宗教的エクスタシーは原始的社会のなかにしか存在しない。

「じゃあ、ジャズを聴きに行こう」と誘うと、

すぐ助手席に乗ってきた。

「昼間は製鉄所で溶接工をしているのよ。」

彼女はサングラスをつけていた。ベイビーフェイスだったが、二十三と言った。

「着ている防護服のような物は、

元が何色だか分からないくらいに汚れているわ。」

目の前には、ジャズダンス・ブレイクダンスが見えてくる。

「男の子はどうやら幼稚園や、

保育園の先生に恋をすることが多いようだけど、本当？」

女権拡張——。けなしたり、あざ笑ったり、ばかにしたりすることもなかった。

でも、女性における男性の差別意識の花開く時代…。

クローゼットから引き出し、はっきりと目に見えるものにすること。

そしてそれらをカム・アウトということ。

歓楽街を、もしや彼女と偶然顔をあわせるのではないかという、

漠然とした期待をもって彷徨ったことを回想しながら…。

どんなふう成長したかを考えさせてくれる——言葉が聞こえてくる…。

そこでは、丘の勾配が強く、高い壁は裏手へと切れ込んで、

山の斜面にぶつかって終わっている。

「さあね。」

恵みの雨は有害物質を含んだ毒の雨に――なる…。

でも、雨は雨らしく、降り注ぐ――のだ…。

グラフィティ

――落書き…

腕を振りながら走る――

（ほら、合図もなく浮上してゆく産卵…）

草原の中を…

目の前には、草、草、草…

もはや誰もが口にすべき言葉を失っていた――んだ…

その一步に何かがあるなんて誰も信じてない…！

でも僕は（この次の駅なんて知らない…）

――（この町の隣の街なんて知らない…）

……. *Why does he run?*

はてしない――飽食文明…

懸命になって積み上げてきたものに、――価値がないと…

ダムの決壊！ 心の底から思う…だから！

走っている――んだ…

… うっとりとしたように身体を揺らし、なが、ら――

クロールや平泳ぎ、で…

陽光の踊るような色彩感覚、で――

繰り返される陳腐な問い…（線の内側に下がる？）

――（そしてまた元の自分に戻る？）

.....Why does he run?

おさえつけられていた躍動は——降り注ぐ太陽を浴びて、

浮かんで、あわただしく消えてゆく幻..

どこかの勾配に巡り合うまで、その中心を決められない広がり..

——「暑さ..」

(ねえ、さまざまな花が咲く——)

(ああ、ほら、乗り手と馬が一つになるってヤツ?)

青っぽくて温かい草の十種二十種もの香りに混じって、

鼻腔からじわじわとしみこんできて——、悪戦苦闘..

このリズムカルも..埃のような雲の中に——ある..

真っ白いシャツを着て..いる——だけの機械仕掛けの人形..

もっと——もっと..熱くなる...

脈拍に呼応する——なまなましい眼球の運動..

(魂の底へとつながっている..《瞬間》を..)

全開の攻撃性——で..

いま——今にも風を蹴って飛び立ちそうな躍動感..

僕は(この陰惨で、混沌としていて、なんとも不可解な世界に..)

——(自我を失うほどの狂気..)

.....Why does he run?

——ガラス瓶の中の生き物や..展翅板じゃもう酔えない...

虫たちが意趣を競い合うようにして鳴きしきって、

度肝を抜かれる。とても理屈ではとらえきれない。

こちら側にまで漂ってくる…それで僕はより軽快になる――、

走ってみる――誰もいない草原…！

無我夢中で、走ってみる…全力で――

――欲望の機械…

――そして、器官なき僕の身体…

( どうしていままで思いつかなかったんだろう…？ )

( 簡単なことじゃないか―― )

――亡霊が付きまとうような、疎外感…

――電波が遠くてアンテナが減ってく、人の心…

( それが何だって言うんだよ…？ )

( ソレガ何ダッテ言ウンダヨ―― )

夏の光に何かを暴かれそうになりながら！

遠くの向こう側にある一点だけを見つめて、走る…

……靴紐が切れてたなんて知らなかった、

……知らなかった、けど、

周囲の声が前から後ろへと次々流れ、小さくなっていく。

何故走っているのかも、どうして前に進むのかもわからない、

でもこの熱い身体——この、躍動する血潮は僕の真実…！

……ペーパークリップで綴じられた分厚い書類の束、

………いない、ね…

腕を振りながら走る——

(4つ打ちアクセントのドラム…)

暴れまく——る…

いまこうだよ、って——

これからこうだよ、って…

、、、、

草原の中を…

目の前には、草、草、草…

始めよう作戦開始だ。…(瑞々しい恍惚。流麗な放物線…)

——(脳内を駆け回る、ラット…)

………*Why does he run?*

…「産声」

素晴らしく豊かな草原に泣きそうになりながら…！

突然、空白の一瞬がやってきて立ち止まるまで…。

僕は、走り続けて——いた…！

何ももたない者は想像力を身にまとって寒さをしのぐ。

時間は矢のように飛ぶ。

あの祝福された構造・眠りの中で、

伝統的な美学に基いた一篇の詩を僕はとがらせている…。

ねえ、何もなかったなんて嘘だよ。何も、僕に――…。

自分自身、独特の哲学――その人生感に照らし合わされた生活意識が、

「これが芝居だ」

(これも芝居だ) …

おまえはからっぽだった。

ほんとうに、ほんとうに、からっぽだった。

あーあーうーうーぐずぐず…

ねむたい。ねむろうか。

そうだね――。

そうだね…。

海に近い街で、耳に絶えず鳴り響いている通奏低音は――別れの歌…。

欲望が幻滅に変わったって、自分でその殻を破ったばかりの卵を描くことが、

希望をつくることにかわりはない、この春の事物のなかにある――。

自由な連想で次々とイメージを増殖させ、

「スーパーサディスティックドクター。」（って、———どうということだろ…）

「ボディと言うべきなんだろうか、それともバディー——と…」

爆発し、やがて静かな暮れ方をむかえようとしている、僕の人生に、

胃酸が逆流する。吐き出しそうになるのを、必死でこらえる。

僕に残ったのは底なしの絶望…ランナーズハイと呼ばれる状態に入りやすい。

過去の様々なことがフラッシュバックのように蘇ってくる。そして、

催眠中のカタルシスのあと、覚醒する、未来が——

花びらのように美しく輝いている、…

———遺伝子改変における人体への種々の影響調査みたいなやつ…

あるよ——…。

ドストエフスキーの重要な預言も———聞こえた…。

ミネラルウォーターじゃ癒えない…水の味も——。

地球外の知的生物に応答を求めて宇宙に電波を送っている、

オズマ計画やセチ計画みたいに———詩を書く…。

そうして僕は今日も自分が死ぬように考えながら———詩を書く…。

ぼくはいつだって、からっぽだった。

おまえのように。

ほんとうに、ほんとうに、からっぽだった。

そうだろ——。

古いミシンみたいな土砂降りの雨が、見えた…。

ぽたりぽたりと滴を垂らす屋根のひさしの濁音に包まれ、

スッポンみたいに噛み付くことに意味がある。

<容姿はまず確実に劣等の部類へ入ると思われ――>

<人と違うことは、恐れを抱くに足るように思われ…>

カタカタ鳴ってる――んだ…。

暴力…エレベストの彼方に、世界中のエライ人が、

集まってるかのように思われ、

生活習慣上の問題点から考え方の傷に至るまで、決定的な罅、

そしてこの、慢性的な不安…。

そいつ――。

そいつ…と書いていいかな――。

そいつが鳴っているのは――僕の身体なんだ…。

汗みずくで息切れても、走るのを止めることができない。

だから――開きつづけている口から涎が流れ、汗と混ざり顎を伝う、

そして目の前が段々暗くなる。と、誰かが呼んだような気がする。

肩を叩かれたような気がする。

途端、意識が明瞭になり、驚いてふり返るが、

そこには誰もいない。そしてまた、残り火は消えず、

僕に残されたページを何度も繰り返して読む。

そして、電気を消して眠りにつく…。

人生の運行を停めるのは難しい。

自己反省的＝反射的な視線。

（を、）監視する／監視されるという二重の見解＝視野。

身体が風邪にかかっている状態で、

暗喩と象徴と連想に満ちみちた晦渋な一瞬一瞬を生きようとするとき、

階層の中の複製品が見えてくる。先輩後輩、本家分家、元請下請、

――知識の宝庫から何ものかを勝ち得るために・・

透明であるより半透明で、空間の外と内とでどんな視覚的交渉も図れない・・

売り上げ順位、学閥、それに貫禄。教祖に神学博士も、大僧上。

……小さな流れを経て、大海原へと入ってゆく道――

それはまさしくそれと相関する次のような命令を認めるため、

でも一体それを何処でもっとはっきりと感じよと言うのか・・

院号居士に、放言居士・・。

思い出は、声の雑音みたいに聞こえる・・。

恥や屈辱の感覚から自由でいられる世界はひとつの大きな無意識であり、

あるいは脳であって、僕等の働きかけ次第で、僕たち自身の夢と行動とをつなぐ、

思いがけないシナプス結合に出くわす……。でも、――さ・・

唐突の狼狽、そして後悔――。

その巨大なモル状の社会機械の中に範囲を定める無意識は、

充分文明された無意識であったりも…、一一して…。

スナップ写真のように、貧しい事実の集積一一で…。

悪への意志が聖化される、不毛性を選択する形而上学的自由は、

酸素を必要とする…肛門…。

ぼくは、はじさらしで一一いい…、

だから、ものわらいのたねで…いい…。

あきらめなければならないようなところのこり？

あるだろうか一一ないだろう…？

そうだろ一一。

背を押されたように木々が、騒いでいる一一

囃している朝が、さんざめいている…

花が一一何かの意図を持った絵のように転がっている…

芋虫から蝶へとかわる絶好の機会…

それなのに蛇が、こんなところにひそんでいる…

「おまえは、こけというものをたべているのだな。」と蛇は言った。

「おまえは、にんげんのくせに、こけがすきなのだな。」

(こけなんて、すきじゃない一一。)

そう想うと…蛇は突然、人間になった…。

「そうじゃない一一そうじゃない、おまえは、

こけがすきなんだ。こけがすきで、たまらないんだ。」

(なんていう、決め付け…。)

「でも、そんなような、きもするー」

そう言うと、蛇は人間から、元の姿に戻り、

じゃあね、と言って、帰ってしまったー…。

良心を潔く保つように努めなさいーかな？

「マンガ読みすぎたっていいじゃないか！」

「ええーっ、部品組み立てまでボクがやるんですかっ!？」

ふと頭上を仰ぐと、日除けのための布が、

通りの両側から隙間だらけのアーケードのように、

張りめぐらされていて、街の衣ー。

道に、誰かが洗濯物で干していたブラジャーが落ちていた。

SANSAの設立以前の宇宙事業は、科学産業研究会議（CSIR）が、

南アフリカ科学技術振興庁（SAASTA）と連携して行ってきた。

2006年7月28日南アフリカ政府は宇宙機関の設立を承認、

2010年12月に正式に発足した。南アフリカ国立宇宙機関。SANSA。

SANSAは、南アフリカ宇宙評議会および関連機関と緊密な調整を行い、

南アフリカの宇宙科学技術プログラムの長期計画の策定・実施する予定。

窓ガラスがマーブル模様になって、

いつも手紙の隅のほうに書くサインを書く時みたいに、

光のきらめきがー見えた…。

世俗の人びとのことばや振る舞いに関心を抱いてはならない。

魔の山を攻略せよ……。

ああそれでもう、マイ・フェイバリット・シングスが聴きたい……。

「ちゃんと押せ、（開く）ボタン！」

「ミュージックだね——あるいは、ヴィーナス……だね……だね？」

感情を食らう——お前が傷付きもしない距離で見てる……。」

（見てない——観てない……）

そんな——しばい……

ひどくすきで——たちどころに……

みりょうされてしまうわ……

むなしいごみのように、ことばが、うかんでいるなんて——

しかも、しかもそれが、あなただなんて……。

## 詩の本質

---

感性的な手触りというものに興味を持つ

動物的でもあり植物的でもある感覚器

人間は五つの感覚と

正確には定義できない一つの感覚を持っている

あるいは率直に宇宙的とでも呼ぶべき印象の作用

不思議な指示表出-受諾的態度の中で…

ご安心下さい…

落ち付きたまえ——

思考の系列はこころの動きであり

それは音声や言葉という意志の表現をして理解される

音声以前の身体的な動きを読み取る視覚

(鳥や昆虫には違う世界が見えている！)

あるいは匂いや味という嗅覚や味覚しても理解される

…人間というものの奥行き

大きさや小ささを感じるしくみ

海というかたまりを波として理解するしくみ

見えないものが見える媒介物の効果

望遠鏡に眼鏡に顕微鏡

(筋肉が収縮する！)

それぞれの感覚がそこにはある

エスカレーター感覚とエレベーター感覚

歩く感覚と走る感覚・・

(文法に沿って、

品詞ごとに微細に分けて分析していく！)

もちろんどれもが違うが

それは前提として脳の働きが必要不可欠であり

球体の現実世界というフィールドが必要だ

そしてそこに繋がっている意志がある

(意思決定のスピード！

リスク、アンヴィバレンス・・)

そこにおいて移動するというパターンを理解することができ

そしてその移動は先天的なものであり

遺伝情報に含まれている感覚を有していると理解できる

つまりこれは鋳型というわけだ

鋳型すなわち本能というわけだ

情報のメカニズムの基幹あるいは根底には

マインドセットされた本能がある

そしてこの本能は電源不要であり

(われわれはうごく！)

生命の不思議な力を証明している

(部品が実装されている！)

そしてプログラムがありパターンがあるものを

生み出すように考える

あまりにも多様化しすぎて

ブラックボックスとなっているが

大別すれば肉体内と肉体外と言える

それを感覚と運動として処理することもできる

内臓神経と体壁神経と三木成夫することもできる

たとえばコンピューターは

2進数、CPUの基本的な動き、

——電気が回路を流れている

コンピューターは数十億個のスイッチ…

僕は記憶する

僕は記録する

——記銘する

………貯蔵する

(頭にこびりついた、

たった一つの謎が、

次々に思考を導いてゆく――

この通奏低音！)

迷宮入りする方程式の生命の産地で

プログラミングに近づいて神を理解する

それはパラダイムなんだろうか…

そう想いながらも

データ圧縮された肉体の神秘を理解する

――考える…

世界は答えではなく手順を記録する

答えはその瞬間から手順という砂時計になる

僕は不意に鉱物の展示室に来たなと思う

そしてそこで火薬の原材料を見たなと思う

(所有する/所有される)

境界の特定を急ぎながら…

現在地を知ろうともがきながら

閉塞感に満ちている現状とその課題を知る

(主張は抱負か！

そうかも知れない…でも、僕は考える――)

……たとえば三歳か四歳であった

少年時代の僕が

(いまでも思い出して——理解できる…

一番最初の記憶である僕が、)

味わっていた欠乏感や孤独

マインドセットされた一つの象徴的な出来事…

ひとり部屋に残されながら

僕が家族の帰りを待っている

どうしてそんなことを思ったのかはわからない

ただ——「もう戻ってこないのではないか？」

「僕はどうやって生きていこう」…

そう思うと胸が竦んだ…

そしてその気持ちが仕掛け装置になって

僕はあまりにも沢山の詩を書いた

そしてこういう言い方をすれば

誰も疑わない

でも——恐ろしいのは…

それが嘘でも本当でも

誰一人として

真実を知らないということだ

真実はあまりにも不確かで美しい

何故なら太陽は熱い

だから地球は夏なのだと思う必要もない

「太陽」と「熱い=陽射し」

「すなわち地球が暑い=いまは夏だ」

とするのは別のことだ

もちろんそれは事実である

だが遠くにある太陽が

どうして地球に影響している言えよう

もしかしたら地球それ自体が

暑いという可能性もあるのではないか

「哲学」はそうしてきた

「詩」はこれまで多くのところ

宗教を拠り所にしてきた

科学の現代でもその傾向は変わらない

「神は正しい」と思う必要はない

「宗教に縛られる必要はない」のだ…

——と 思っている僕が

飛躍というその時の最大限の振幅をして

(向上したという優劣の感覚を有しながら！)

心理的な動きの時間について考えているのは

けして驕りからではない

「歴史に神は必要なのだ」

「ただ宗教に神はいらない」のだ…

と 僕が考えているがため——…

考える…考える——

どうして考えるのだろう——

考えることをやめれば…

人は人でなくなるができる…

苦しみも辛さも味わうことはない

喜びも味わうことはできなくなるが

——考える…

そうだ——考えることもできなくなる…

そして彼は「病気」と呼ばれる…

「頭がおかしい人」と呼ばれる——

でもそれを「詩を書く上で必要な感情」

「マインドセット」——と…

呼ぶこともできる…

僕は時々あまりにも賢くなりすぎるので

この世界のことをたった数秒で理解してしまう

「嘘だ！」と…

僕は子供のようにしなやかな感性で

人のすべてを見抜いてしまうことができる

（そしてそれを知っている人は、

僕によって何らかの被害を受けた人だ）

…僕は人を殺すことができる

そしてそれは「才能」というものだ

（しかしそれを別の力とすることもできる…

われわれは力を支配するために使うのではなく、

生きるために使う—

もっと生を味わうために使うことができる…）

僕はランボーやポーと話をすることができる

（誰も疑わないはずだと思うけど、どうだろう？）

—僕はそれだけの力の行使ができる

まがい物から真実は絶対に生まれてこない

何百万の言葉を連ねようとも魂の奥までは響かない

「否！」

—君たちは本当に勘違いしている…

「才能」というのはそういうものじゃない…

それはただそのようにあるものなんだ――

僕は別にあらゆることに意味がなくてもいいと思ってる

あらゆることは徒労でもいいと思ってる――んだ…

それだけだよ――

僕は別に何も求めていやしない…

何百年、何千年、何万年――

何億年、何兆年…

こんな馬鹿をやり続けたのかと思うと…

不思議だね――

生きてるってことが何かとてつもなく

素晴らしいことのようにも思えるし

そうじゃないという風にも思える――

でも君は知っている…

「それ」だよ――

そして「それ」は

随分と前からあったものなんだ

「それ」が何であるのか

僕と同じように何となくわかってる

「それ」が何となく心地いい

「それ」が必要だって何となく思ってる

心を、殺す風だ。

幸福な生の傷つきやすさは、

生きることにおける悲惨さだ。

明日には憎むことになるかのように愛し、

明日には愛するように憎むとはバイアスの言葉だが、

同時にそれは、

社会で生きる者たちの、

マゾヒスティックな喜びの一つである、と、

彼等は言う。彼等とは誰か？

社会不適合者のことである。

否、社会を必要以上に悪と見なす人の総称である。

社会で生きると、

まず上司に怒られる、と彼等は言う。

音に触れ火を放ち、陰険さ・底意を持って、

人格を否定されるかのような、

傷付く言葉を言われる、と。

違う、必要以上に利益を求めて生きているだけだ。

我々は、いつまでも未熟な欠点多き生き物であるにすぎない。

人間への理想だか何だか知らないが、

弱さが正常、甘えが普通とばかりに置き換えるのは沢山だ。

「成長しなくてはいけない。」

(これは危険だ！)

――だが、フラッシュバックするほどの恐れなのか。

毎晩、悪夢を見ねばならないほどの恐れなのか。

過剰なストレスをイメージするあまり、

バランスが失われて、視床下部に打撃を与える。

心拍数増加、心拍出量増加、筋肉血管拡張、

呼吸数増加、気管支拡張、筋収縮力増大、血糖値増加・・・。

パニック障害。PTSD。

これを避けるには、社長になるしかない。

あるいはアニメや漫画に逃避するしかない。

宝くじを当てるしかない、と。

違う、臆病への道を用意し、

心の狭量さを持って自分と他者との可能性を軽視しているだけだ。

「人は素晴らしい生き物ではない。」

(そうだ――人はけして素晴らしい生き物ではない。

だが、仕事は戦争ではない。)

安全な教育がもたらした、幸福な幻想の方が危険だ。

クスクス笑っていた！

そして、みんながクスクス笑っている化け物に思えた！

…後ろ指さす連中、人を陥れなくてはならない連中—

働く理由は、それゆえ遊びではない。死に物狂いだ。

生活をするためにお金を稼ぐことは兵役に匹敵するとばかりに！

だから鬱病になってもおかしくないのだ、と彼等は言う。

支離滅裂に—そして、誇大妄想を交えながら、

精神科の通院を余儀なくされるかのように彼等は言う。

神経質な人が想像をたくましくさせるディテールでもえがくように、

どんな歩き方をしたのだろう、

どれくらいの歩数をどれくらいの速度で歩いたのだろう、

彼等は蜘蛛の巣や、蟻地獄に例える。

あるいはそれは、強制労働所のように置換される。

余命を巡る社会的、財政的、医学的な管理…

制限時間内にすべてを成し遂げる、競技種目名のわからない、

人生。記録もなければ、観客もないプロセス…が、歪んでゆく—

他人やこの世界への信頼はリスクと富でバランスを保っている、

と考えていく傾向へと導かれ、

心はどんどん摩耗してゆくだろう。蠟燭や、靴の底のように、

すり減ってゆくだろう—石鹼のように…。

愛や友愛はその時、無視される。

生きる意味や目的はその時、無視される。

彼等は、ここぞとばかりに、

逃げ場のない恐怖が心を支配していくだろう、と言う。

地獄だ、と過敏になり、否応なく精神的に追い詰められ、

罪人に浴びせるような言葉で罵られるぞ。脅迫されるぞ、と、

マイナススパイラルへと案内する――悪魔だ…！

そして例外なく、

感性の鈍磨した、うすのろ野郎だと思い込んでいる。

自分の方が頭がいい、と勝手に思い込んでいる。

そんなことはない、全員それほど差はない。

能力にもそれほど差はない。人種も肌の色も関係ない。

体力も精神力もそれほど違いはない。

だが、彼等はいとも容易くコンプレックスや病名を用い、

お前は正しいのだ、と弱さを克服する道を断とうとするだろう。

これをスポイルと言う。

これを負の論理と言う。

一度染まってしまうと、この考えから逃れるのは難しい。

きっとあなたは、ドアの前でしびれたように動けなくなってしまう。

何故なら、自分自身の不幸の種を含んでいるものの中で、

奇跡から遠ざかるものほど真実であるかのような説得力を持つからだ。

しかし実は奇跡も真実の一つであり、

実は我々こそが、

その偉大な奇跡の一部であるということを忘れてはならないのに、だ。

だが、彼等は畳みかけるだろう。

熱があっても吐き気がしても、

働かないといけない。そんなのまともじゃない、と――。

そんなのはまるで、人殺しのようなものだ。

お前など死ねばいい。殺したい――呪いたい…。

「もし魔法が使えるなら、

終業時間まで一気にワープしてしまいたい。」

(彼等はいつだって楽することばかり考えている…。)

否！ 彼等は、試す、

真似ることができない死を超越したいのだ。

そして、動物的な力で社会をコントロールしたいだけだ。

それもおそらく無意識のうちに、

抵抗を表象の実践によって押さえつけてしまっているだろう。

それゆえ、彼等は死を暗黙的に内在した発言をする。

だが、そのような状態はもう既にストレスである。

というより、もう既に正常な発言が出来る相手ではない。

スプリングを引き伸ばしたり、

ゴム球を押し縮めたりした時に似ている。

満員電車も仕事の一部に括られる。

飲み会も、睡眠時間も、その一部である。

そして彼等は五日もしくは六日それが続くと、

悲観的に捉えたがる。

ハウスマン風の厭世的な詩ではないが、

そんな考えをすれば、誰でも生きるのが嫌になる。

やる気を失っても、やらなければ、仕事は終わらない。

仕事が終わらないと、家に帰れない。

疲れていても眠ることもできない。

当たり前だ、それで地獄でなければおかしい。

それは致命的な社会の病の感染である。

世界は病んでいる。自分はまともだ、と彼等は言う。

だが、そんなスプラッタームービーは見る必要がない。

あなたが見なければいけないのは、愛の物語だ。

この世界の平和が、あなたの優しさや、生き方なしに、

どんな素晴らしい物語もいなくなる社会に、

個人の意味や、生まれてきた理由がある、――

そんな愛の物語をあなたは見つけなくてはいけない。

そしてあなたはそれを信じて生きていけばよい。

何故なら、愛は難しければ難しいほどに価値があるものであり、

そしてその行いこそが、人を聖者にも賢者にもする。

そして彼こそが、あなたの尊敬する人のはずだ。

あなたが選ばなければいけない人は、人生の目標である。

あなたはその愛を信じて生きていかねばならない。

強く、愛を胸に刻んで、学ぶ勇気を、忘れてはならない。

そしていつかそれが難しくなった人生最悪の場面の時、

あなたの愛が試される一一…。

そしてそこに、一一権力の出口がある…。

そこにこそ、僕が考える本当の未来がある…。

そして、僕は、とある日一一、

文明の終わりを願ったのだ…。

そこで、僕という一一多くの人々が、詩人の魂と呼んだ…憧れた…

僕のすべての考えがダイナミックに呑み込まれてゆくのだ。

人が、人らしく生きられることを一一願った…

愛が、永遠にずっと続くようにと一一願った…。

波の音が聞こえると、

サフランの小さい花がたった一つ水面に咲いている。

もし耳がこのまま聞こえなくなったら、

靴ひもが解けたのさえ忘れられるのに――。

無音の世界を漂いながら、

自分なりの答えを探し求めている。

その場所、その場面、その時刻、

打ち寄せる波の音は――夏の訪れ・・。

陽射しが当たるし、

木蔭があるし、

おまけに、やさしい水音が始終して、

あちこちでねむそうな声・・。

僕は、右にゆらり左にゆらり無力に漂う・・、

長い廊下のはるかに遠くで――

絶えず物の崩るるような響きがして、

遠く家を離れ、故郷を離れ、

僕は僕を離れたことを、理解する・・

夕やみに響く波の音――

黄金色に染めあげられた波の広がり、

潮の香りと風のなかに、

ほの明るい霧のような空間を作る。

てのひらの中に、笑い声。

心の奥に、春の朝ののどけさ――

僕は、銅像になる…。

波の音が聞こえると、

サフランの小さい花がたった一つ水面に咲いている。

騒音がぼんやり聞こえてくる、

束の間、喚び醒まされる波の音――。

なつかしいなつかしい波の音、

神経を鎮める感情の音楽…。

そして、夜が更けて、固有振動。

若い木霊が、咳をする。

水槽の中に脳がある。

時間が——無い…。

観測者が、いない。

地獄とは何か…、

天国とは何かも考えられない…。

目の前に東洋哲学と、

仏教書があるような、存在——。

生まれた時から、

彼、あるいは彼女には、

手足がなかった。

ない——どころか…

肉体もなかった——…

最初から、こうだった…

ある時——、

その水槽に、蚊が入ってきて、

蚊が死んだ…。

それが殺人史上空前ともいう、

異様な死体が横たわっている瞬間——。

どうしてか、それが見えた。

酒の味のように運命を黙示する、

光…どういふわけか、視界があつた、

水の中へと、

飛び込んできたのだ。

疲れていたのかも知れない。

（ただ具体的な実例の取り扱いの中に、

黙示的に含蓄されている宗教的場面。

蛇足の語を加えたる――痕跡…。）

それでも、その瞬間、自分は蚊で、

死にたくないと願つた。

入れ替つたのだ…、

そして、飛んだ。

奇跡的に、自分は飛んでいた！

愉快だつた…！

次の瞬間、ものの数秒後、パチン、

と、父親にはたかれて殺された。

凄まじい形相で。

血が繋がっているとは思えない――

…夢だつた――。

それは、自分が生きている、

ということを、知ることが出来た、

最初の夢だった――。

ある時、

本当に、蚊がやって来た。

旧知の人にめぐりあったように…、

そして、だれでも自然に思い及ばないわけにはいかない。

本当に、蚊は水槽の中へと――。

入ってきた…複雑な感覚的属性が纏まって一体を構成し、

自分の頭に深い強い印象を焼き付けた。

だが、――入ってきただけだ、と…、

自分は、それを見ていた…。

生命は他の生命を犯さずに、

存在することはできないのだ。

夢のようだな、とそれを見ていた。

それが排他的特権となる人口原理の一部だと、

脳がいちじるしく能力を開花させながら、

蚊が、ずぶずぶ…と沈んでゆく――。

ずぶずぶずぶずぶ、と沈んでゆく…。

ずぶずぶずぶずぶずぶ、と沈んで――ゆく…。

獣の臭いを放つブヨブヨとした黒いモノ。

戦車的突進を誇りとした猟犬が、

異なる歴史を書くこととなる。

質感、立体感、固有色…

そのどれとも折り合いをつけることができない、

矛盾や葛藤の間から、靴ひもが――

こんなこと大嫌いでございます…と――。

蛇口をひねってみれば、水が流れ出す――

というみたいな…、身支度…。

何の為に存在しているのか――わからない…。

それは、素晴らしい切れ味だった…

ナイフは錆びてゆくほどに美しい――。

真夜中――靴ひもの声は…悲鳴…。

じゃあもう二度と触れないという約束を、

しようじゃないか…。

どうだ、と猟犬は言った――…。

時は過ぎ人は老いた、

そして犬も、狩りから引退した――。

どうだ、と猟犬が靴ひもを慈しむほどに…。

——そんなの、と靴ひもは言った。

それで展かれるとおもってもみろよ…

アンタに噛まれているあいだ、俺の時間が止まる。

ひっそりと影がきて…ひきちぎられるとしても、

その間、純潔だった…、審判の前だった…。

でも足でも靴でもない俺は…

それを辞めた瞬間、

ただの紐となる…。

解剖図にだって記載されない…、そうだろ——。

眼をおおうような地獄がえがかれているとしても、

それにどんな意味があるって言うんだ、

そんなの…悪い冗談すぎる——。

では紐よ、と猟犬は言った。

獲物を追うために目を凝らしていない俺は何だ、

毎日、主人に尻尾を振って、上目づかいをし…、

食事に心をおどらせている自分は何だ？

——俺は、二度と雪山の中をはしれない、

もう…、「行け！」と言われない俺は…。

子供から靴を与えられ…、噛んでいる…。

別にお前など一噛みたくもない…。

だが、そうするほかに何が出来る？

そうするほかに、何があるというのだ。

このような俺が…悪い冗談でなくて一、

これ以上のどんな悪い冗談があるんだ、と獵犬が…。

夜によって作りだされた化け物が押し寄せてくる。

古代に伝わる――『魔法』が…、

機械人形…、ロボットが――、じつとりと水滴に濡れていた。

魔法と科学とが共存する世界…、

時計の遠回りな復讐――。

彼は機械人形のジークリヒト、

敬礼ポーズを取りながら、

庭の八つ手の大きい葉に、

雨音がびしゃびしゃと聞こえると――数値化…。

音が何倍にもなってざわめく、数十秒間…。

(連打するティンパニみたいな音…、)

歩くたびにギリギリギリと歯車の音をたて、

そしてときどき石油缶のような首を振った。

(それは、フランケンシュタインの怪物のような?)

外にはなんにも理屈はない、

冬になれば雪が降る。

夜になれば暗くなる。

人間と約束を交わした記憶を胸に秘め、

河に舞い落ちた一枚の木の葉のように、

だんだん広くなる、長くなる、

本当に、心細くなる――流れてゆく…ことに、

流れてゆくこと、流れてゆくばかりが――。

<誰も 触れることのできない

ひとつの 空洞があります>

<そして それは

炎の花をつつむ静けさです>

ねむれない夜には…百足が這うてくる――、 這う…。

そして、いま、魔犬――、魔獣の群れ…に、

…囲まれて――いる。

(刑務官が歩く靴音?)

鏡ににじむ生暖かい血に……、

発芽する――突風…。

「博士…、虫の知らせがわるいからと、

あんなに御心配くださったのに、

わたしは完璧に壊れています。」

蟻は何処にもいられなく――なってしまう…。

だから蟻は——蠮螋になろうと思ったのです…。

不自然に凹んだかと思うと瞬く間に破裂…。

機械が——、ロボットが…、

魔法を使う…。

「もうすぐ、魔法使いたちが私を壊しにやって来ます。

殺された虫のような夜が鼻先に来ます。

——博士…、」

どこにも居られなくなってしまいそうで…

こわいです——私は特別なロボットだと…、

あなたは言いましたね…。

ジークリヒト、お前が…、

この世界の特別な魔法なのだ——と…。

いいえ——、博士…、

私は最初から壊れていたのです…。

人間のように——魔法使いのようになりたいと思った…、

回路が壊れてしまっていた私は…、

あなたの夢を血で染めた——のですから…。

狙われた女。

ガラス張りの高層マンションにいる。

――不安はいつもそこにある・・

遠目に見ても、長い首と撫で肩、

アーモンド形の目が特徴的。

影と闇だ。

「“巫女の予言”――。」

洪水の夕方・・。

光の色彩が錬金術する。

「ああ、人生ってなんて退屈なのかしら・・」

彼女はモデルで成功をおさめた女性――

仕事は順調にやっているし、

ネットに得体の知れない嫌な空気があることを除けば、

色んなことを前向きに対処している、と思う。

キングサイズベッドの寝心地。

最高級マンションの住み心地・・

うとうと――ふわぁ・・ああ・・・ねむい……。

目覚めると、そこはアラビアの王国・・。

傍らに、

「あなたは――

弟をたぶらかしましたね？」

なにそれ、ハーレクイン？

というか、ドッキリ…？

部屋は、豪華絢爛――

まるで、映画の舞台のセットみたいだ…

何あの、壺…めちゃくちゃ高そう…。

「ちょっと待って！」

いま、低くてセクシーな男の声聞こえたな。

痛い――頬っぺたをつねってみる…。

私はすぐさま、ロマンスモードになる。

ロマンスモードとは何か？ 言おう――それは…

素敵な男性と巡り合った時の女の子の気持ち。

「あなた…王族？」

ボディガードでもいいな、と思った。

百歩譲って、ボディガードなら、ときめける。

「いかにも――私は王族だ。ここが何処かおわかりかな、

お嬢さん…ここは、アラビアの…」

と、話していると――。

「夢だ。眠ろう。」

ふざけないで――いくら私だって、王族が目の前にいるなんて、

ロマンスはちょっと信じられない…。

すう…ウウッ—すう…。

寝た。本当に、—寝ようと目を瞑っていると…。

「眠るな！ 余を誰だと思っているのだ！」

パチッと、ぜんまい仕掛けの眼瞼が開く。

「もうわかってる…それで、

あなた、ツンデレするんでしょ、

…そして恋するのよ。血沸き肉踊るような…クソウ…

泣けてくるなあ—だから嫌なの！ お金持っていない女なら、

身分違いとか言えるのに、私、成功してるの。面白くない。

でも、待てよ—成功してるけど、実は、

心とは裏腹に仕事をしていたという設定はどうか。

フム—それでいこうかな。うん、それなら、萌える。」

なんだこの、女は、と私は思った。

ちょっと待ってね、と言いながら、この女、

ジロジロと私の身体をねめ回すように見る。

「彫りが深い二枚目ね。頭脳明晰そう。真面目そう。

でも、ガールフレンドはいそうな感じ。」

「余にそんなものなどおらん！」

「じゃあ、セフレはいるの？」

「余を愚弄するのか！」

「じゃあ、フィアンセがいるのね。ああ～王族のしきたり。」

「そんなしきたりなど、ない！」

すると、この女、オッケー、と言った。

「――もう一回、最初からやり直したい。

私は間違っていた。私に恋をするための仕掛け装置が、

足りなかった。多分、私はあなたを怒らせなきゃいけなかった！」

「余はすでに立腹しておる！」

「あら、よかった！」

「ちっともよくはない！」

「…そして、段々メロメロにされてしまうのよ。

あたしの身体を、好きなようにするの。やめて、

やめるものか。…クウウウ！ あ、そんなところを、

やめて。さわってほしいのだから、余は、女の身体を、

知りつくしている。…クアアア！」

なんだ、この馬鹿は、と、私は思った。

私は王族として――この国民を守る義務がある。

だから、この者を…キャサリン・ハワードという女を、

拉致した。ジェット機で輸送した。

弟との――スキャンダラスな写真が出回る前に！

午後には、政府首脳会談がある。

「…あなたは、余を――」

「いい！　いまのセリフ回しいい。」

ふざけるな――腕をぎゅっと握る…。

なんだ、この細い腕は！　こんな細い腕など、

すぐにでもへし折れる。へし折ってやろうか、

口の減らない女め。

「あんまり強くしないで！

――そういうプレイなのもわかります…わかるけど、

もっと優しくして…いや、優しくされると、萌えないから困るけど、

真面目に――腕に跡が残ると仕事に支障が出るから。これでも、

モデルなんです。――で、えーと、さしづめ、

あなたはここにいろ、と言いたいよね。」

察しがいいな、この女、と私は思った。

「そうだ。お前をここから出すことは出来ない。」

「いいわよ。でもその前に一つ…

堅苦しい会話はやめにしましょう。

私たち、混乱してると思わない？」

何処がだ、と思いながら、

「わかった、そうしよう。」

「…ただ、あなたがそうしたいのなら、

その代わりに、申し訳ないけど、

保険会社に電話かけてくれる？

モデルのキャンセル料——」

「わかった。それも…そうしよう。」

「それと——」

「まだあるのか？」

「あるでしょ！ 忘れてるでしょ！

ふざけないでよ！」

急に怒り狂った剣幕におそれおののく。

表情が猫の目のようにコロコロ変わる女だ。

魅了されて——しまう…。

「私は長い間、モデルの仕事してきたの。

真面目に、仕事しまくって、男と縁もなかったの。

そしてあなたはきっとそんな私を好きになるの。

もういいでしょ！ だから、——

この口の減らない女め、と口をふさがなくちゃ駄目。」

「こうか。」

と言いながら、てのひらをあてると、

ガブリ、と噛まれた。

「この天然素材め！ 誰が——

そんなことをしろと言ったか、この男！ ゲイかお前は！」

「何をする！」

それに、私はゲイではない！

「そこは口で塞ぐのよ。くちびるよ、くちびる！

わからないの！…煙草吸う？ なんだったら、

そこで、吸ってきて——そして、苦いその唇をおしあてて、

言うことをきかせてほしいの。」

「何を言ってるんだお前は！」

「お前、いい！ 乱暴な言葉遣い、もっとして！」

——私は段々、頭が混乱してきた。

絶世の美女のくせに、頭が少し変だ。

そのせいか、——それとも…

恋をしたいと願っているせいなのか？

「ねえ——それともまさか、もう、

襲いたくなかったの？ あの——拒まないけど、

順序は大切にして…できるだけ、マナーとして。

それに…愛せない人を愛そうと思ったら、

——いや、もう愛する気満々だけど、

順序が大切だと思うの——」

私は…、本当に頭が痛くなってきた。

「私は疲れた——お前とは後で話そう…」

アスピリン飲み過ぎちゃ駄目よ、と言いながら、

「ここで眠ったらどう？」

「お前などと眠れるか！」

「恋に落ちるのがこわいの？ こわいの——ね…

わかります——わかるけど…もう私たち、

出会ってしまったから！…クウウ、萌える。」

「…お前は頭がおかしいのか。」

ネジが外れてるのか…！

ドライバーが必要なら用意させるが？

「——疲れてるのよ。わかるでしょ、

仕事ばかりしてて、男にやらしい眼ばかり見られると、

段々それに慣れてきちゃうのね。いまのあなたは、

本当に怒ってる。それはわかる。でも…淋しそうだわ——」

「淋しい？」

「ええ。あなたは、淋しい人だわ。

あなたの目は、ニューヨークの自由の女神が、

パンティーをはいてるのか知りたいはずなのに！」

「知りたくもない！ この不埒な女め！」

「いいえ、知りたいはずよ。だから、こっちへ来て、ダーリン！」

「弟だけではなく、私までたぶらかすつもりか！」

「わかってる…罪な女なの。」

——と、言いながら、ふへへへへ、と気持ち悪い笑い。

どこからそんな笑い声を出しておるのだ…本当に——。

「…でも、モデルの仕事ってそういうものよ。

男が一発やりたいってポーズする仕事なの。

でも勘違いしないでね——つまり、それが、一番、

会社のPRに適しているってことなの。」

「なるほどな。」

そこは感心した。

だが、その、ふへへへへ、という笑いはやめろ、この女。

「…一言で言えば、勘違い。

私は弟さんをたぶらかしていない。わかるでしょ？

残念ながら、両手に花みたいな仕事だけど、

仕事が忙しすぎると、羽目を外せない性格で、

ちっともいいことなんかないわ。」

「どうやら——そのようだな…」

「ねっ、だから…もういいでしょ、口をふさいで。」

「こうか。」

と言いながら、顔を近づけると、

ヤメテエ、ケダモノ！

突き飛ばされた…！

「何をする！ 言ってることと全然違うではないか！」

「何言ってるのよ！ 男のプライドを傷つけられた男は、

カッと怒りに燃える目で唇を本気で奪いにくるのよ！

何、間抜けに寝ころんでるの！」

「…ああ、頭が痛くなってきた——

こんなに憂鬱なら、弟のことなど、放っておけばよかった。」

「いいえ、それも運命よ！」

彼女は——キャサリンは…

倒れている私に、しなだれかかってくる…

ああ、私はもう、身を任せてしまおうか…

時間の問題だ——時間の…。

ギター・トリオ+ボーカルのバンドで、

専任でボーカルをやっていた彼女は――、

「あたし以上にバカな女は…そういない――」

そう言ってた。左肺に穴が空いたみたいに…。

映画『タイタニック』を観ながら、

泣いたことがある――と聞かれたので、

「ごめん、」と僕は言った。

それは――思うに…どう反応すればいいのかわからない、

むきだしの気持ちではなく、

ラッピングされたひとつのものに近い印象…。

多分、『源氏物語』を、読んだことがない。

解決したいものを三つ挙げよ、と、

嘘偽りのないこの惑星の風――…。

大気の主成分が二酸化炭素だったらどうする？

僕等それで死ぬかな？

沈黙の形で激しく現在を生きる遺物。

非難ではなく共に滅びようとする巨大な意志の横顔。

死か――…

死ぬだろうーな…

でもお金を持っている人は、

何処かへ逃げちゃうんだろうな…。

死者のためのささやかな、ショーウィンドーが、

いまーファインダーにかぶさる…。

（歴史の中に強く足を踏み出すー

勇気が…ありますか？）

彼女はシンシアという名前で、

ゴシップ誌の背表紙みたいなアメリカ人で、

サビアン占いで言えばオカルトなカードの二十九歳で、

ローテーションは不明のTV好きで、

真夜中のドラマのためなら睡眠不足になっても構わないタイプで、

声が遠退いて、すうっと夜が明けて、仕事に寝不足の眼で出掛けてく。

朝はフルーツを生搾りしたジュースを飲む。

ローリング・ストーンズを尊敬してる。

そして、ピアスよりイヤリングが好きな女の子…。

あと、忌野清志郎を、可愛いと言った。『銀河鉄道の夜』を…

何処かすっとぼけていてイカしている、と言った。

ショッピングとランチどちらが好きかと聞かれたら、

迷わず、泣き顔になる普通の女の子だ。あと、金星が好きで、

いつまでもその金色の星を眺めていればよかった——と…

妙に詩的なことを言ったりしていた。

横転したゴミのトラックみたいな説明。

記憶が拒むものを忘れようとしてますます忘れられない。

僕が何も言わなければ、彼女も何も言わない。

視線を送ると、驚いたように目を見開く。

洗面器にミルクを入れて飲んでいるような夜の霧…。

僕は言った——。

「まず、愛。」

「次に、自殺。」

「最後に、戦争。」

彼女がなんて言ったかって？

近づいてくる足音に、

ゆっくりと意識が浮き上がってゆくだけさ…。

「あなたって——エキセントリックね…」

だそうだ——…。

そうだろうか、

ガラスの塔は巻き貝のかたちをしていない。

そして僕の髪は、ヒッピーを模倣していない。

それに、捨てられた赤ん坊が拾われて育っている、

この世界で、――そんな優しい褒め言葉はいらない…。

でも、怒りや悲しみさえも贅肉になる。

最低僕の場合は、贅沢な儀式のようなものだ。

優しさにすぎるのをやめた時…

スプーンと皿が当たる音を美しいと感じていた。

ところで、意図的に避けていた――が…

彼女の手首にはリストカットの傷があった…。

隠していたけど――、

多分彼女は――うつ病だ…。

彼女はギターの超絶的な演奏テクニックの持ち主だと、

誰かが言っていたけど、

一度もその演奏を見せてはくれなかった。

ちなみに僕が一番好きなギタリストは、伝令出撃な、

ポール・ギルバート特攻隊長…。

「目のつけどころがユニークね。」

「君が褒めるのがうまいだけだよ。」

瞳の中の冷静で知的な光が――それは、水底の落ち葉が堆積して、

雨水を濾過するように…静かに話のつづきを待っている。

砂混じりの風…通り過ぎてゆく風――ヒュウウ…ウウ…

波の音が…聞こえる――。

「ざあざあ――と、雨が降っていると、

ざまあみろ、って言いたくなるわ…」

「どうして？」

交差点に差し掛かって足を止めると、

まぶしい…汗でぬるぬるする腕と足に力をこめてみる。

ゆるく曲げた指が、あたたかくぬかるんだ泥土みたいな窪みに、

自然と潜り込んでいくような気がする。

幸せな世界こそが、と僕は僕自身に言い聞かせる。

腕で遮ろうとすると――消える…。

壁掛け時計を見ても、そこには長針も、短針も、

いつもチクタクとうるさい静かにしろ待ってそれは小さな音…

――せわしくなくうごく秒針すら…ない――

デジタルな時代なのに…、

いまでも自分の口の中においのおいする土が、

つめこまれている気がして――…。

「――知らない…忘れちゃった。

でも、そう言いたくてたまらなくなるの。」

遠くのほうで大きな音がして、

目の前がいきなり明るくなる。

迷路を突破するための賢い方法って知ってる？

と、彼女はニコニコしながら、言った。

「ジュニアハイスクールの時にやったの…

燃やすのよ。」

（彼女はヘビースモーカーで、

気がつくと、

僕のセブンスターを空っぽにしていた…）

また行くの？

右脳あたりが――ちりちりする…。

隠れ家に…。ひどく切ないものを覚えた。

でも、どろりとした蜂蜜みたいに、

何かが――巻きこまれていった…。

昔、彼女は修道女をやっていたことがあって、

――つまり、貞節の、しち面倒臭い、すぐにはやらせてくれない、

カトリックだった。でも彼女はいつだって、

空中ブランコや火の輪くぐりの練習をしているような女の子だ。

二十歳の時、――両親と些細なことで喧嘩して、酒場で出会った男と、

衝動的に都会へ家出。

それ以来、色んな男と寝た。

いくらだってチョコレートを差し出してくれる男と…。

銀行家でしょ、ミュージシャン…

「最初はほんの二、三日のつもりだったけど…

気がついたら、十何年経ってたわ——…」

蝶の死骸を、

蟻が運び去っていくのが——見えた…

神の手のひらが開いていく…。

それを見ながら、心に浮かぶイメージをまさぐって、

さながら天井の裏側を這うようにして少しずつ移動して…

何とか、答えを探しだそうと試みている僕は、

少しセンチメンタルな詩人…。

きっと、メモの上にメモを重ねて

判読しがたいメモとにしてしまうんだ、僕は。

遠く吠える——犬の声…が…

闇を線路のように伸ばしてゆき、全身の血の紅さが、

永遠のような夜と——僕を…巡り合わせる。

ひとかけらの雲が、切り立った崖へと、

ゆくみたい——に…

時刻表にないバスが通りかかる…。

「感情のままに生きるのは難しい――

あなただってそうでしょ、

何だかとても、無理して生きてる気がする…」

僕は首を振った…。

人質にしてしまう――つもりかい…。

そんな風に何かを認めて――

生きられると本気で思ってるのかい…？

「でも、他の生き方を知らない。

今日からランボーになれと言われてもなれない。」

素直な気持ちだった。

落ちた最後の一葉…

世界とやりに共鳴する――顫え…。

「あなたは世界で一番優れた詩人だと聞いたけど？」

「…女の子の前ではね。」

嘘だ――僕が世界で一番優れた詩人である時は…、

僕以外の誰もいない世界で、僕しか見ていない時だけだ。

ドラム叩けるの？…と何故か聞かれた。

僕は、もう一度首を振った…。

「勿体ない。あなた、そんな顔してるのに。」

ああ…雨を召喚せよ――

透明な機会という偽りの優しさたちよ…。

合成樹脂のパーカーにストールを巻いた肉体が、

時局とか、国家の要請とかいうような意識で、

むりにしめ殺している。

見透かされている――

そこに自分の肉体が在ると思っているのかね、と。

観客をあざける舞いを続けながら仮面の中で舌を出してみる。

そして健康の診断を求め、剃髪する。

（自分はいま・・東洋風の風采をして、

流れる命を、掌で抑えている、――）

わずらわしいことばかり多かった人生の余暇を、

静かに夢みながら、

音の死滅した夜更けの駅路で、

ふやけた電燈の下で。

誰かの言うがままにただ機械的に窓から首を突き出していた、

お調子者の動物。

いや――、まだ人類の生活も始まらなかった何万年も前の大昔から、

小さな橋の欄干にもたれて、霧の下を流れる水に見入っていた具合で。

一分でも大切なことはあった。

み空をとほく血を吐くような倦うさ、たゆげさ。  
もの

（自分はいま…西洋風の風采をして、

流れる命を、掌で抑えている、一一）

嫌われるかも知れないが…。

日は暮れるし、腹は減るし、

その上もうどこへ行っても、泊めてくれる所はなさそうだ。

私は何処にいるのだ、と思いながら一一…。

嫌われる？ 軽微な失望を繰り返しながら、

それでなお、遺書を託して馬を急がせているのに。

真正面から眺めていた彼等の姿ばかりがチラつく。

しかるに何事であるか、

ハウ…器官やら骨やら神経やらが、

ソファーにもたれてとろとろと居眠った瞬間のように、

ちかく坐る少女を夢みてぼんやりして乱暴に灰色の雲が流れて、

その藝術的素質に豊かな民が、フォーセンアメする。

ジョナサン・スイフトする。

「神話のパンドラの匣には、

ダイヤモンドが残っている――…」

白いシャツの群れ、色ガラスの群れ。

母親の乳房を見て甘い微な戦慄を覚えた幼少期から、

今醜い勢いのためにその固有の性質を放棄し、

その内輪には入り込まない私の眼にさえオリンポスの果実が…

戦争の前夜らしい雲行き、

自分のしどろもどろの答弁に

空の霊と草木の精とのささやきとちがわない、

肌ざわりの柔らかさ、溜息のかぐわしさも、

ヒットラーの演説の言葉のために消失し、

モーツァルトの緩徐曲の霊妙な作意さえ、

催涙のマッコウくさい二合ビンとなった。

「桜の並木があり、

そこには半開きの桃の花が、淋しげに淡々として、

見覚えのある町角がふっと巴里の街角のように思われ…」

リップクリームを取りだして唇につけてから、オゴッており、

クロロフォルムの甘い馥りに辟易した。

何かが見渡されそうに水蒸気を含んだ風が吹いていた。

年老ゆると共に、若かった頃の美貌が醜く変ってゆく、

あの不思議な匣…。

下らない独り善がりだったのだろうか、

足搔きのとれない憂鬱を舐めている、私は、

発見の目的でなされたあらゆる航海の歴史の一つとして、

うれしさとおどろきのまざった小さなふるえ声で、

コックとなる。包丁はたまむしいろの孔雀を捌く。

「プラトンの対話篇におけるソクラテスは、

常に私らの後を追う…」

囚人の首、手首、足首には小さな鎖がくくりつけられ、

力のシンボルだ、憤怒の、怒りの象徴だ、

神の怒りじゃ！ 神の奇蹟じゃ！

虫のように簇がってみえる微かな明りを指しながら、

舌の先で自分の口の中にある緊張が膨張するのを感じた。

インポテントになったようで県境だった。

写真でしか知らぬマダムに河原で摘んだ花束をあたえてやりたくなる。

アントアネットは大きくなるにつれて、ますますきれいになった。

ボロ切れのような皮膚を垂れた私とは大違いだ。

アナウンスが響いた。

運転手が独特のアクセントで。

ひかりの素足が――・・。

春の夕暮だった、函館行き・・。

終 わ っ て

ゆ く の か な

( G e t u p , )

くり かえ し

宇 宙 を

いい な あ と…

真 っ 白 い

カ ー テ ン

言 葉 を

越 え て ゆ く

夜 が

熱 い お茶 し て

触 れ

て

ゴ オ ゴ オ オ

「か わ い た く ち び る に 」

( ジ ャ ズ … )

受難 し て

す こ し

酔 っ ぱ ら っ て

m y w o r l d...

m y w o r l d...

「 お し え て 」

( P l e a s e )

衣 擦 れ が

し た

ほ ん と

は

ち が う よ ね

砂 糖

菓 子

の

味

d a n c e , d a n c e,

d a n c e , d a n c e

瞬 間 は 雪 景 色

絵 の 中 の 餅

お も ち や も

あ き れ る

歌 留 多

き き ち が え

m y w o r l d...

m y w o r l d...

素 早

く

し な やか

な

激 し さ の

な か に

濡 れ た 靴 下

ぼ く は

た い く つ

「 長 く の び た 髪 」

手 が 冷 た い

な に か

心 が も み く ち ゃ に

泳 い で る ……

絡 む ぐ ち ゃ ぐ ち ゃ に …

夏 の

通 り 雨

バ ス 停 ま で

「 お し え て 」

( P l e a s e )

終わりは悲しいから、切ないんだけど、ピアノのメロディーに乗って、チョコレートかじって微熱に浸って、落ちてくる顔を沈ませた…。（痩せていて――ゆっくりと開いては閉じる鰓みたいに、君の髪が…）甘い香りを漂わせていたあの夏の切なさ。残酷で、湯気でかすんだコンクリートの壁みたいに濡れている気配で、――でもそれも…少しだけミステリアスな、夏の夕暮れにだけ吹く風に消えていってしまった。僕は…少年のように――君を追いかけていた…。（電話の向こうで…、――いつも、取り残されていた夜…）シェービングフォームの泡みたいに、それは世界の小さな――物語だった…。キスをして、全裸でまさぐりあっていた夜だって、本当は――そんなことしたいはずもなく…ただ、みんながそうだからと自分に言い聞かせていた。（交差点は赤信号で…、顔が見えない夜がたまらなく嫌で――、ふと花びらが舞うその刹那のように命が、何処かで消えていくことだけはわかっていた。十代になって、二十代になって…僕は後ろぐらいことで緊張し、硬くなって、全身が甲殻になったみたい

に凍てついて、本当に、誰も愛せなくなったことを知った…朽ち木や鉄片の意味もわからず、――ビル

ディングも、駅も、何もかも僕にはどうでもよくなっていた。そして胸がもう動かなくなる前のオルゴール

みたいに震えていた…。（あなたっていう名前の…、やさしい目をした――生命反応…）答えなんてな

い出口で、懐かしい海の香りが不意に思い出せた。高校二年生の四月五日。チャイムが鳴った。はか

ない…短さ――その、一瞬を…誰にも見つからないまま背中を向けて、それでも、お互いがお互

いの

一部であるように、裏庭の木の陰で、夕暮れてゆく時間、手のひらと手のひらみたいに、くっつけあい

ながら、たった一言——「ねえ…、」と君は言った。言った——んだ…灰が煙草の先端から落ちてゆく

みたいに、甘酸っぱい要素なんて一つもなかったはずなのに、いま、不条理に…僕の意味を壊して

——ゆく…触れそうで触れない指先の、——あの、ふっくらとした、人差指の感触が…。

愛 - 愛の欠如の苦しみ - 。

*ha\_je\_hi jo\_jo\_hi,*

*jo\_jo\_hi,*

恋人の女の子、

さあ、まだキスを与えよう - 。

何を見つけよう...

《魂の庭に蜘蛛の巣がある》

階段が現れるだろう...

哀れなわが詩行は静脈の中、ステップを踏みながら。

ハーモニーが響く - 。ケラケラと...

惜しみなき仮面 - 嘘 。

*ha\_je\_hi jo\_jo\_hi,*

*jo\_jo\_hi,*

アイ ウン リプロ

君は一冊の本を持っている ...

奥底にある、奥底の欲望は

人生の最後... そんなに早く犬に噛まれ、

死、雄弁 - 思考の絵画...

「時間が過ぎるのを忘れてしまいそう。」

「少し遅れる」——あまりにも簡潔なメッセージ..

外国映画のサウンドトラックアルバムみたいに..。

(ウーノ) —— (ドゥーエ)

(トレ) —— (クアットロ) ..

(歯車が——噴水のまわりを歩き..)

*l'animale, l'animale,*

<動物、動物..>

レオナルドが裸になる。

ボッティチェリはうずくまる。

ミケランジェロの髪は、跳ねてる..。

淫ら..。

((雲、うとうとしている..))

*Sono le sette e mezzo.*

7時30分..

赤、赤、赤...

心地いいリズムに鼓膜を揺らされながら――

「スパッィオスパッィオスパッィオ・・・」

アコースティックギターのアルペジオが・・・

「ピアノノ・・・」

おとぎ話のよう **に**

opera/parola/primo/rosso

.....*Ständchen*

そこには 幸せが続く退屈。

そこには 美しい娘。

薔薇の香りが愛のベッドの側へ

明るい月の夜へ 。

開いている窓から夏の陶酔をもたらす風 を・・・

シィ、シィ！ アッリーヴァ スービト！

「はいはい！ 直ぐに來ます。」

愛 - 愛の欠如の苦しみ - 。

*ha\_je\_hi jo\_jo\_hi,*

*jo\_jo\_hi,*

恋人の女の子、

さあ、まだキスを与えよう - 。

何を見つけよう...

opera/parola/primo/rosso

.....*Ständchen*

何を見つけよう...

うきうき、ドキドキ、する..

きれいな、ふしぎな、薫り...

「りんごと同じ、色の。

——太陽。ひまわりと同じ。

色の...太陽——。」

計り知れぬ利益を...

王冠の孤独が言う。

(君は勿論、交互に配置された4個のクロス・パティと、

4個のフルール・ド・リスを基調とし、

その上に4本のハーフ・アーチが十字に架け渡され、

内側は白貂の毛皮で縁取ったベルベット帽である、

大英帝国王冠を想像したろう…ねー)

(違う！ ロンバルディアの鉄王冠！)

(そうに違う！ ミルククラウン！)

、、、、、、、、、、、、、、、、、、

持て余して手放したりする…、

利益を目当てとしたものとして行われている今日の社会に、

幸福の追求なんていうものがいけしゃあしゃあとぬかされ、

でも嫌いなもののために、死ぬことはない。

カササギよ、かささぎ、

赤い夕焼け…。

月の見えない、

風が運ぶところで、

海鳥の冷たい夜明けがある。

僕はそうしてる・・

(夏を休養に充てた春競馬の活躍馬みたいに、)

いつまでもそうしてる・・

そうしようとしてる・・。

つまり、一度聞いた――過去の人間の営みの跡が残されている、

遺跡から――発掘調査報告書・・

りんごをかじるみたいに

資本の運用・・

このしっけどうする？

期間中に消費しうる最大の額・・

神がいなくなっても、

“心臓の鼓動がきこえなくなることはない”

――お祝いしてはならない。

“でもそれはあふれてやまぬ歓喜の噴水？”

だって、公共や他人の物を勝手な理屈で私物化する輩がいて、

古墳時代みたいなありさまなんだよ、まったく・・！

Please my dear, I need someone

to hold my back...

「確かに何度も怒られたことがある。」

「でも俺にはどうしても怒っている理由が理解できないんだ。」

「馬鹿だとは思う。でもだからまた同じことを繰り返す。」

――気がつく、みんな何も言わなくなってる・・

一方の利益になると同時に、他方への不利益になる行為・・

>>>でも不利益ってさ・・

>>>言うほど、人を困らせるものじゃない。

壁に立って――あざみは午後遅くに花開いた。

小規模多機能ホームみたいな場所で、

ふと思ったんだ・・思った――

(あのパトカーも偽物、あの警察も偽物、

正義も偽物、良心なんて偽物・・かも知れないって・・ )

そんなエゴイズムはまったく短所だとばかり思ってたけど・・

DNAが運ぶ遺伝情報にバグを感じた――んだ・・

そして気がついたら、死刑囚最後の日について考えていた。

カーテン越しに、ひんしゅくを買うほどの喜びがそこにあって、

ああ、俺だけが知ってるんだ、知ってるんだ――

話してくれ！

離せ！

チンプンカンプン！

このすつとこどっこい…

どうだっていいよ！

どうなったっていいよ！

ソウルってなんなんだろう？

熱いって——ことか？

ああ…

熱い——

長い秋に電話をかけるみたいに、ぼんやりと思っていた…。

ブランコが思い浮かぶ、滑り台が浮かぶ、

その背後にあるこの世界を残すために、死があり、

そして、市場は三十八度五分の高熱の独占をうみながら、

手紙について——アルファベットをならべた…

必要な能力を持つ人はあまりいない。

完全で正確な知識を持っている特別な学者も

いない——…

焼け焦げそうさ。

天才なんてふりをするんじゃない！

馬鹿より素直すぎる。

それもこれも…運命なの——か…

襲いかかってくる、エネルギーの爆発！

…星の雨が降る

……もっとかい？

…もっとさ！

……もっと！

深呼吸の方が必要だ——羽根の生えた軽い…軽い…

ロマンスが必要だ…いま、僕の庭を揺らすような——

世界は病んでる…終末の時計。

新鮮な野菜や、泥がついた笑顔。

抜群な密談の屋形船。

Please my dear, I need someone

to hold my back...

そして思いあがってる…

でも、それでいいんだ

文明——

・・・（油断のならない人物）

…………（とても頭の鋭い人物）

タンポポの種は蚊と湿地の草の上に浮か——んでいた・・。

モミの木の後ろの空赤く、ヒバリのさえずり——、

スズメはエロチックでセンチメントな甲高い声で言う。

甲高い声で言う——

・・・甲高い声で・・言う——蒸気・・。

喜劇俳優みたいに

ツルゲネーフの作品を読んでる

僕がいる——・・

自然の力と自然の姿との・・

あまりに強烈な詩・・

最後の時間まで照していたランプ

爆弾——

デパートを走り、目が覚める・・。

弱者救済を過剰にやりすぎた結果、ルールが捻じ曲がっ てしまっている事案。

痴漢の冤罪や、少年法による犯罪・・

どんな——後利益のある呪文…。

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、

プレアデス星団の下の囀り——。

世界の魂は何処に滞在するのだろうか——…。

僕は言う、そんなのまるで、

—— テーマパークのデモンストレーション、と…

—— パーフェクトなフィクションだ、と…

この世界を焼かなければならないような、

この僕の焦がれきった、熱望は——、

間違った拷問道具みたいにある。

「人生ってもう素晴らしいんだ！」

「ああもう…」

「めまいするくらいにさ——」

(Oh....)

紛争を解決するに値するだけの利益・必要性は、

本来得られるべきだった天国への切符だった。でも、

これを欠く訴えは不適法。確定の困難。訴訟。

そういうのが流星みたいにあって…、

すべてがこれまで以上に、未回答の嘆願書——。

かびのついたするめのような

舞台にかけられることのない

人生の幸福——…

だってそれは…

本当はそうなんだよと…

そしてそれに抗うことはないんだよと

教える——

この生涯はいかに短かろうと、

苦悶や恐怖や責め苦のうちに、

公然と仮面をぬいで、

やっと聞こえるほどの低い声で、

苦痛のしずくに依って——語るだろう…

でも想像を超えちゃってもいいのさ、

うおおおう、とか言いたいね！

馬鹿だろ？

大体そんなのアニメだけ、

やめろやめろ、

そんなセンチなことを言うのは。

でも――涙が出そうだろ…

この刑務所が僕の筆を生みだしてる。

僕の魂が飛躍の際涯までハイテンションマックスでいく。

毎日がわけわかんなく過ぎてゆく。

今日が何月何日でしたっけなんて、悪いジョークさ。

「ところで…」と言ったのは、

やっぱり一昨日だったのかな、

そんな気がする！

そんな気がする！

同じ時間に僕の唯一の友人がいる。

守護者よ、僕の欲望への言葉の護衛をせよ。

もはや、僕にそれが守れるとは思えないのだ。

快適ではないのだ。

ただ、僕がそこに座って、

測られざる未来を生み出す杭のように考え、

衣裳やら祝宴の御馳走やらを、マッチで擦る誕生と死。

嘘をつく理由がないそして別れを告げることもないまま、

一人で歩く――よ…。ああ――グレートだね、

アンビリバボーすぎるよ。喜び色の洪水って感じだな。

資本主義ってこういうことか。

ああ、それがいまになってどういうものか、

ばっちりね——わかっちゃったんだよ！

…身体の中にロックがあるからね！

ねえそれがどれくらい素敵なことか、

——僕は今になって思い知ってる！

ねえ、悲しみなんて見つからないって、

途方に暮れることだったんだ、

そうだって君も知ってたかい？

ねえ、今日が終わる…

どうしようもない一日が終わる…

またか——…

またかと言ってもいいのか…

でも…

僕は僕が必要だって言うような、

本当に愚かな——

花が咲き乱れた午後、

空を見ていたよー

誰もいなかった..

誰もいらなかった...

それが恐怖感を与えるための物か否かに関わらず、

私は記者としてある青年を取材していた。

落ち着いた雰囲気を持っている町の改札口をくぐった。

一日の乗降人員は三百人から四百人程度だと言う。

ファミリープールや野球場やテニスコートが近くにあった。

交差点を通過すれば、役所があって、

ちょうど、一家族全員が惨殺された舞台がある。

しかしそこまできてみると、展示販売している住宅があって、

やはり、そんな風には見えなかった。

「と言って、俺はそんなことをしに、

ここまで来てるわけじゃないがな…」

（待ち合わせは、喫茶店で、

電話をすると、すぐに行きます—…）

—部屋に入った時、死体安置室に入ったような気がした…

「ようこそ、来て下さいました。」

（私は、彼から、“閉ざされた場所”や、

“世界の終わり”といったものをイメージした…）

のろのろと、異様な波紋を描きながら彼は言った、

「虫の話です。」

「――見たこともない植物を求めてフィールドワークしている、  
植物学者が…、ある時、見たこともない虫に会ったという話です。

あの坂を見ましたか？ 斜面をのぼってゆくと、  
どこか暗い影を落としているようで薄気味悪い、神社があります。

植物学者――いいえ、彼、…」

段々ろれつが回らなくなってきた――いる…

混乱しているのが手に取るように分かった。

ボイスレコーダーをとめようか、と言うと…

「いいえ――僕…」

それは水道の――水が…

地下の下水管へとゆくような――。

「そ、その虫はなんて言うんだろう――本当に見たことがなかった。

ど、ど、どんな図鑑に照らし合わせても、

これまでさんざん、さんざん、ヒュウヒュウ…フウフウ…、

いいですか、ハアハア… 本当に見たことがなかったんです。」

彼は新聞社に、そんな手紙を出してきたのだ。

世紀の発見かどうかわからないが、地方の記事なら…。

遠くから響いてくるパトカーや救急車のサイレンの音。

不意に彼に案内されて、来た――、

クネクネと狭く細い路地が不規則に絡み合っている道路を、

私は蜈蚣のうごめくさまのように回想していた。

「…それは何処にいるんだろう？」

「ここにいますよ！　ここに！」

――眩暈を引き起こすほどの不思議な世界への誘い…

しかし、虫は見当たらなかった。耳をつんざぐような大声が残っただけだ。

ぼわんぼわんとするなか――、次の瞬間、部屋は消された…。

「ほら、いるでしょう！　こんなに！」

道路を挟んで反対側に電気屋さんがあって、

こちら側に少し大きめの洋服屋さんがあって…、

それで――それで…。

「こんなにつて…」

どこからか下手なピアノの音が響いてくる。

いや違う、ピアノの音ではない――そんな気がした…

不協和音――耳障りな音がそう錯覚させている…、

そんな気がした――そんな気がした…！

「いるでしょう！　むらむら…、むらむらと！」

一瞬、柱に寄生するシロアリのことを考えて背筋がぞくりとした。

はあ――はあ…。げぼっ、げぼっ。

「いまはね…、へへへ、そいつがね、

僕の中に住んでいるんですよ。そいつはね、

オレンジや黄色に塗られたショベルカーみたいに…」

こいつ、正気じゃない、という――ことを…

私は思った。じゃりっ、じゃりっ、という音…

昔からそうだ…私はいつもこんなヘマばかりする…。

「ねえ、悪いけど、私は――…」

次の瞬間、私は――見た…

あわてて条件反射で、部屋を飛び出していた…！

ドアへ！ 階段へ！ 二階から一階へ…！

あれは、押入れの段ボールの中から出てきた、

大量の小さなかまきりを見た時の恐怖…！

（彼は――彼は！

そもそも、いなかったのだ…

何故なら…そこには、虫しかいなかった―― ）

いなかった――のだ…

もう階段は消えて――住宅は消えて…

そしていまではもう隠せないほど、変な声が聞こえてくる。

ジムシノ唸り声…

虫の声――あれは――あれは…本当に虫の声なんだろうか…

「ま、て…マテ、うぐっ…ひい…

ま、て――」

追ってくる――追ってくる…

人の恐怖心を駆りたてるような、何かが…

何かが正しく、何かが間違っている。のだ。

正しい。間違い。な。のだ。

グレー。

はいいろ。あるいは、ぎざぎざ。

ひらっぺたくてふとくて、たぶん、扁平。

でも、ねずみ色なのだな、きっと。

うーむ、

この手のヤツは好きじゃない。けど。

必要があることを意味しているだけで理由になるのかい？

それが楽しいというだけで失礼にはならないの？

ケースバイケース。回答書。

そうして。人生問答。

生活の中では非常に多くの熟考を必要とする場面がある。

隙間がある。悩みごとは尽きない。

除夜の鐘は百八つでは足りない。煩惱のカタマリ！

そして愛のカタマリ！

間違っていることでも正しいことはある。のだ。

正しいことでも時と場合によっては間違いということもある。のだ。

白でも黒の場合もある。の。だ。

黒でも白と言えという場合も。だ。

うーむ、

非常に——非常に多くの困難が疑問を増やしてゆく…。

人がいるだけで、問題がうまれてくる。

むずかしくかんがえるなよ、

機械化を導入しても、違う人の手が必要になる。

楽にはならない。だから、考えも、どんなに達観したつもりでも、

またすぐに、違う考えが必要になる。薬がいりや被験者もいる。

立ち止まるな！ 立ち止まらない！

そして、問題山積ピラミッドのごとし！

目の前で間違っているでも教えてくれる人がいたらいいね。

素直になれたらいいね。

両親の育て方が間違っていなかったらいいね。

君が赤ん坊とかきかんぼうとか思われていなければいいね。

いいね。

何がいいんだ糞野郎。

いいねじゃねえだろぶっ殺すぞ！

キンタマついてんのかしばきあげるぞ。

大阪湾しずめるぞ。ドタマかちわったろかコラ。

えーと…。

あのー……。

社会ってまったくもってこんな感じかもしれぬ。

しれぬといいながら。なのだ。

そうではないと思いながら。なのだ。

優しくて親切な人が好かれないはずがないけど、

なのだ。なのだ。

でも君がそれを出来ているなんて、

思いあがっていなければもっといいね。

人生は様々な取引所。

たとえば、君の苦手なものが必要となる場所。

勇気がなくちゃけして乗り越えられない心臓破りの坂。

でも状況を改善することもできる。

それが交換条件付きでも。プラスアルファでも。

人生の偉大なるマスターでも、

スピリチュアリティな人でもないが、

他人の気持ちに配慮した結果、幸せな気持ちが増えてゆくのだ。

徳がたまる。

人間としての生きる甲斐が増えてゆく。

そしてそれが世界平和の第一歩なんだ。

隣人によろしくせよ。

おはようこんにちはこんばんはおやすみなさい。

そしてそれを教えてくれる人こそが愛を持っている人なんだ。

好きだよ愛しているよ。

えーと…

えーとじゃねえだろ、ぶっ殺すぞ！

蜂の巣にするぞ！

ピストルで銃殺してやろうか！ してやる！

心臓えぐりだしたろかコラ。

ともあれ。

ともあれって何だ。

まあ、ともあれ。

給料のことばかり考えてはいけないよ。

自分のことばかり考えていてはいけないよ。

そうかといって無理し過ぎてもいけないし、

でも、何もしないような人間になっちゃいけないよ。

ね。そんなのすぐにわかる。

一日の仕事をするのは太陽が輝いているからだよ。

干し草をつくるように、そして牛がそれを食べるように。

ルールはすべてではないよ。

でもそれをゲームのように思っはいけないよ。

けれど、それで人生を賭すならその限りではないよ。

勝ち負けがすべてではないよ。

好き嫌いがすべてではないよ。

でも、それが無理ならその限りではないよ。

繰り返しだよ。でも、恐れなければ乗り越えられる。

でも、乗り越えなくてもいいんだよ。

ただ違う場面でそれを乗り越えなくちゃいけないだけだよ。

ね。そんなのよほどのこと。

けれど、自分で見て考えて判断しなくちゃ駄目だよ。

しかし本当に公平でなければ人なんかいらんんだよ。

間違っていることを認めないからといって、

間違っていると言わない者になってもいけないし、

でも勇気を持って間違っていることを時の流れに任せてもいいんだよ。

そして人生は自由なものだよ。

誰の発言に左右されるものでもないよ。

正しいことは常に正しいものだから僕が言うべき正しさではないよ。

間違っていることも然りだよ。

だから尊敬されないような人になってはいけないし、

馬鹿なふりをし続けてはいけないよ。

でも何から逃れても過去は必ず追いかけてくるものだから、

人類みな兄弟と思って生きるのがいいよ。

そして世界は常に平和だけれど、

平和であった日なんてただの一日もないんだよ。

ね。何の話してたっけ？ わからないだろ。

でも。たまにはいいさ。ね。

この空気のなかにどんな波動で飛んでいるのか知らないけれど

恋というものの中に僕がいる

汗とこの空気に含まれている湿気で

重たく体にまとわりついていたマイナスの効果をもたらす常套句は

もう何処かへと行っちゃったんだ

僕は今この瞬間 君だけに視線をそそぎながら

そして君が僕の世界で一番の理解者であることを願わない日はない

肺の中に吸いこんでしまうしかない不幸は

ビジュアル表現と操作性やテーマへと個人個人に

あるいはコネクションやコマーシャルへと大衆へと

…欲しくないな

……闇の中でも自分の姿がはっきり見えていたらいいな

——そう想わないか

僕はいじらしくてたまらない君に誓う

何の見返りも期待せずに利用される——愛とか…

会社に行くだけだった…時間とかが…

癒されてゆく

そしてもっと健康的な発想ができるようになる

花が肥料を貰ったように生き生きとしながら

あなたが心の中に植えられているということで

……いまひとつの

…きれいで不気味で血の気を感じさせない

——サボテンにさえ

…やさしく見るゆとりが出来るようになっている

よこしまなもののように決められている恋

相手の警戒心を解くための老練なテクニックとしての笑顔

そうかも知れない

いやそうだって決めつけてしまった方がいい

押しつけがましいお説教よりもきいてくる励ましもあるさ

何千年も前からこんなものだったんだろうなと思いながら

人生のバランスってすごいなって思う

ニーチェやカフカみたいな

多角的な視点を持った熟練の道化者でさえ

ひとつの言葉が誰かを感動させたり傷つけたりするうえで

男女にも似た関係性を知っただろう

束縛と解放というテーマを思っただろう

…夢なのかな

……いやそうじゃない

——それはきっと

きっと――手を伸ばせば・・

本当に少しの短い間だけ日常を彩ってくれる熱烈性と知りながら

全く以て不可解な物語りの中へと入ってゆく

そして脂っぽい好奇心に犯された血を新しいものにしながら

遠くであなたを見ている僕は

あなたの瞳に宿った無邪気な優しさに

あなたの声の甘い旋律に

――きっと

……………何処までだって――ゆける・・

何処かへと――ゆける・・

だからねえ僕とあなたとがいる文化に誓言を立てよう

いまこの瞬間のそれが下らなくてちっぽけなものでもいい

とりあえずこのいま僕が思う最重要課題を

時の中で重ねよう

それはロマンティックでどこか非現実的な都市の詩

それはストレスやフラストレーションを忘れた詩

……………小休止

……………閑話休題

完璧な指揮者が常にそう企図した結果

よい音楽がつくられてゆくように

間違っただけのものがあまりにも多すぎるこの世の中で

一番忘れちゃいけないことが何かってことに気付いてる僕は

ちょっとセンチメンタルすぎるかも知れないけど

いつのまにか素直になれない僕等の心を開くための詩を

そしていまでも子供でありたい僕等の純粋な成分としての詩を

いまも悲しみや憎しみにとらわれそうな

僕等の尻をたたき我に返らせるそんな詩を！ 詩を..

いつかきっとウッドベースになる

ヴァイオリンになる

やがてきたるべきパーカッションパート！

僕はインスピレーションを刺激されて

理想主義のイデアリストになっているのだ

目的が多少ずれていても

ある一つの目標にむかって練習する合唱会の準備みたいに

あなたの笑顔は遠い日に田舎者であった僕の幸福の定義を満足させる

それゆえに僕はあなたに誓うことができるんだ

この文明の最大限の抵抗として立派に生きることを

しかもひとりではなくふたりに生きることを

愛はそれぐらい強いものだトー

僕は本当に驚いている..本当に...

欠点だらけの人を僕が愛するなんて誰が信じたと思う

どうしようもない人間を愛するなんて誰が信じたと思う

ねえ人生ってやつを呪いたいくらい愚かな考えを吹きこまれる前に

本当はもっと前に恋ってやつを楽しんでおくべきだった

…ねえ信じられるかい

……ああ信じるってことが

——むずかしかったそんな時間を

…取り返せはしないのに

グッドバイ！ タクシーから降りた…

そして僕の陰茎はかくも心を打つ！

オーノー！

ポコチンよ、どうして、

真夜中にブランブランするの？

ホネ☆ホネDANCE———

ダアア…ンスするの？

マラカスが鳴る！

もっとまららかすを頂戴！

哀愁ただよう盛り場！

ハメハメのニャンニャン！

シャークシャーク！

サーカスが始まる、驚きは确实！

歯槽膿漏は関係ない！

でも言ってみるそこがグレートな男だと思うから…！

いや、一応——いってみました、ナイトフライト！

もものきすもものき、

すっぱいももはしもねたももこちゃん！

もこっち！

もちろん、ワタモテ。

でもかのじょは、ともこ、というのだ。

でも、えーと、ももこちゃん？

まあ、そんなことはヨイデハないか、将軍。

彼女は僕のそそり立ったものに興味津津…！

興味ティンティン、なんちって。

「何これ、エッフェル塔ですか。」

ありがとう、きみ、いい子だね、と言うと、

「何これ、エクスカリバーですか。」だって…

（なんか、のってるな、この子。

ニョホホーな女の子、肉食獣な気配。）

「北海道函館市住吉町にある立待岬——

とでも呼んでくれ…」

「かっこつけても、ムラカミハルキ。

どうせ、シモネタよ。」

「なにそれ。」

「かっこつけても、ムラカミハルキ。」

と、こいつ、ムラカミハルキ連呼する変な女。

ムラカミリュウ連呼してたら、

ほんとうなにか変かと思うーけど…

アキモトヤスシ連呼してララ…

ララ…たら…ララーたら、ふふん！

ともあれ、いま、水面下でなにか撲殺天使注意報！

氷点下で大変だからあたたかいシャワーを浴びよう。

いやもちろん、もののたとえだよ。

僕等、ホッキョクグマみたいなものじゃないですかい、うぎゃー！

もちろん、全世界がFREEZするための裸体！

俺は今、快樂を創造しようとしているのだ！

いま、走れ！

偉大な興奮のるつぼを作りだそうとしているのだ！

むらむらでむれむれでごめんなさい！

「いやだから、ムラカミハルキ。」

「いや、それあんまりよくわからないよ。失礼だよ。

僕は好きだけど、失礼だよ。ムラカミハルキに！

いやこう言っちゃおうか、やめておけよ、ハルキに！」

「うるさい、はるき！」

グッドバイ！ 太宰治な時間はおしまい…

パンナこった食べ過ぎ、

なんてこった、

ともあれいま、マイルドできゃしゃーんな夜の暑気あたり！

どういう意味かはよくわからない

でもそれを正当化するための準備は虎視眈々、うひょー！

ナムアマダブツするためのオードリヘプバーン！

手塚治虫先生の愛すべきポルノの無茶なバーン！

バーン！ ピストルを撃つように滅茶苦茶なこんにやく、

おお、きれいなお尻！

なんという、きれいなおっぱい！

いま、僕は蜘蛛で君は蝶なのだ！

いま、さしつさされつ、将棋の時間で、

ツメ☆ツメnight――

あんまりうまくないですね、ごめんなさい、

いま、君が髪の毛だとすると、僕は鼻毛なのだ！

いま、プロレスがお好き？ 僕は相撲だよ。

たたかえ！ いま女のSecondベースを盗む

たたかう！ サードベースをスチール！

そんなものいらない自爆覚悟のホームスチール！

グッドバイ！ 僕のきょだいなキャンタマ袋から、

いま、こどもがまなぶような性教育！

飛べ！ 僕等のスーパーミサイル。

行け！ 行け！ 合体ロボ！

北海道の名産しろいこいびと。

でもいっぱいあるから、

それはしろいこいびとたちダロ！

かもやーん！

桑田圭祐のしろいこいびとたち。

対戦車砲、というか核爆弾、

ああ空からちゅどんちゅどん！

君の真珠湾を爆破する！ ボンバー！

とうか、フィーバー！

もちろん君の真珠湾を大切にするつもり！

日本人の馬鹿がただいま特攻する！

もちろんいますぐフンドシする！

君に触れた手は冷たかった

ねこが無邪気にはしゃいでいて可愛かった

それに触れようとしていた君は

幼い頃に戻ったみたいに

林檎ひとつでどうにかなるでもなく

ただそれが時計の秒針のようにふとした瞬間に

うつつなく消え

ひとつに重なりたいと…手探りで――

夏時雨 はるかに過ぎて

いたずらにしずかに

触れないようにしていた世界は

いつのまにかむっちりした肉づきに

したたるような色気の新しいリズム――…

傷口にふれていた手の感触を思い出した

秘密を知ってしまったとき

冷たい目をしていたことを思い出した

頬があんなに濡れて

あんなに真っ赤だった頬が嘘みたいに

しらぎぬの散華

しらべなき葡萄のつぶれるごとく

大声で届けようとする人がいて

駆け寄ってきた君

君の右手が左腕に触れた

キレイに 咲いた…

花が 水面に光る指みたいに見えた――

いまさやけき色をとふれば夕のそらの明星

いまかかれる色は唇の深紅の色に染まる想念

でもその手は

岩間の清水わくほとりの枝みたいに

小鳥を憩わせることをしない

忘れてしまったの？

忘れたんだね――…

いつでも群衆に囲まれたい――と…？

信仰が孤独を紛らわせてくれる――と…？

…祈ることで死の運命を回避できるとでも？

手は――

てのひらは…

詩や散文のように

死の風のかすめる時を待ってる

きらきらするネイルの指や

ビーズ細工のちゃちでチープなそのネックレスも

折にふれて――

自分の胸に浮んでくる

にじり寄って 頭をなでたり

頬をつっついたりして それから――

それから…ぱっちり見開いた眼の中で…

くしゃくしゃになって

泣き出したいように見える

どんな――に…

パイプオルガンの荘厳な音色に

罪の符号をあたえても

この祭壇の前まで来ることはできない

僕は夢を見

僕は愛を知り

僕は君を見つめる雨の音――…

刻一刻と休みなく

夕暮れが

川のほとりにある町のとある小さなアパートの部屋の

みすばらしいコップに花を活ける

新鮮で小ざれいで暮らすため

いまもやさしくその背を押すため

でもね可愛い人

あなたがその手を伸ばしたとき

僕は尋ねてみようかと思ったのだ

そうしなかった――が…

世界はただ続いているにすぎない

運命は明日も見ることができない——と…

それでもいじ汚く夢を語るのかい

いまでも気味の悪い蟹の甲羅の味噌をむさぼるのかい

手と手が交差する

耳元で囁いて誘うように吐息が重なる

そっと手を伸ばして髪に触れる

冷たい雨に濡れて震える

冷たい身体に風ばかりが吹きつける

まだ形も整わぬ君よ

それでいて幸せでも不幸せでもない——と…

それでもどこかに本当のつぶやきがあって

それが水のふかいところにあって

みずからを色彩豊かな充実で満たそうとし

のぼってくるものの気配で

目覚め——る…君よ…

目を瞑れ——

夕暮れの放逸な散乱する陽だまり

一体どこでその手は

果てしない地下を

まさぐるものとなったのだ

一体どんな理由で

探し物を

見つけようと銀の迷路へ——と…

ゆくのだ——

少しでも

悪いことがなくなるように——と…

君は今日のことを考えていた

君に触れた手は冷たかった

だから落ち着かない夜が来る

だから洗濯されたものが

古臭いものをたかだか

新しく見せているだけだと見破れない

やれやれたため息が出そうになる

だからあのオレンジ色の湿った霧みたいな

弱い日光がまき散らしてしまう

内側にある骨にじかに触れたみたいに

あなたが

手を伸ばすのを

悪いことだとは思わない

ただ輝きはその手自身のものだった——と..

僕は思うよ..純粋な世界の微笑から..

何とはなしの——愛しさから...

ねえ悲しかったんだ

恥じらいが雪のように積もって

て

僕の心は君の見せかけの策略を

見破ってしま——う..

僕は君にとっては叡智を持った賢者

自信家で尊大で傲慢かも知れないけど

そんなの——違うって..

冷たい何かに——震えた..

思考とも呼べぬ情緒の移ろいに

触れられてしまう——体温の..

何とも言えないなまぬるさが..



ゆらゆら ゆれる ——

..ウィルスの様に忍びよる、

悔いの痛み——

限界..

、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、  
驚異的な存在感を誇示するドラムスの、

手紙！

嬌態！

サクソフオーン、終焉を告げる。

指を燃やす / フレーズの変わり目

(緊張感が足りない、)

から、 —— Fly With The Wind...

天から火を盗む..! (歯車——)

叩きつける! *passion...*

神 經 中 枢 の 航 走 !

神経中枢の航走!

神経中枢の航走!

黒い垢じみた硝子粉が、

憐れな動物に襲いかかる！

演奏…！ 感電…！

血の味がする / 視界良好！

完全に突き破る瞬間の痛み、

発火点にして危険地帯！

発火点にして危険地帯！

発火点にして危険地帯——…。

さまにならない…

傷口——

夜が明けなけりゃ——、出血…

離陸準備を開始する！

(on) すぐに、

生の力強さ。生々しく、

総毛立つ！

高速燃焼、の焦げ付き。

こより / は危険な発情

から、——

頭脳朦朧、言語不明瞭、文章曖昧…

僕等の卵！ 飛べ…！

風速を増大せよ… ピストル！

(忘れかけていた、 命 令！)

打ち鳴らせ！ シンバル！

才能はない！

余裕すらない！

飛んで—— (ゆく、) 卵！

ユラユラト…酔い心地に、

(on) 飛べ！

飛べ 飛べ 飛べ！

うとうとしていたら、王宮に着いていた。

いつの間に遊びから帰ってきたのか――

子供が・・

ちょうど、目の前の空いた席に座って、

「君は僕だよ。」と言う。

( 寄りかかり、憧れ、身悶えし・・、 )

でも自分が誰だかわからなかった。

何が何やら、まるでわからなくなってしまっていたのだ。

まだ明るい、陽のあたる石の上にとまる蜥蜴みたいに、

氷り付きながら、盲目のようなさざなみを思い出す・・。

多数者を、唯一者へと変えながら――

名声をかちえても、産をなしても、

衣食住に関する余贅にすぎぬというのに、

、、、、、、

それでも私は――

どこにも一生の区切りがない、自覚もない、青春を捧げた。

遠のく意識の中で、クリスマスツリーを思い出す。

凍え死んだムクドリが転がっている。

やさしい未来の種子は、更に深く、冷たさから熱へ――

もっともっとたくさんあって当然のように私には感ぜられた。

自分自身の誇り。

「君は僕だと言ったね。」と僕は言った。

「言った。」と彼は言った。

「それは生の告知としてかい？」

だとしたら――魂の飛躍を瓦礫の間から感じられる、

すべての均衡を取る、しらざれる、わが中心にある火に…。

薪木を焼べることもできる――

でも雨は、紙の船を沈ませ…、

町を、雨水でびしょ濡れにした時、小心な心は悟った。

もうどんな祝祭を行う勇氣もない、幸福は墓に沈んだ、

激しい欲望も熱烈にない、もう悲しまれたくも慰められたくもない、

そしてその呪縛をかなぐり棄てることなど出来やしない、

わかっているんだ、――わかってしまったんだ、

どれだけ辛抱強く、色とりどりの花を見ようとしても、

どれだけ真っ直ぐに進んでいるつもりでいても、

みの  
熟りゆく麦の穂が豊かに波打つのは、時の後なのだ、と。

運動神経のすべてを注いで、憐憫と苦悩に満ちた、

湿原を抜きたい――

音もなく、大きな大きな宇宙を泳ぎたい…

それでも忙しく、不機嫌な叫び声をあげながら、

人生は――無意識な傾斜へと、核へと、ゆくのだろう…。

「王宮へ――ようこそ…！」

(それは僕の精一杯の讃辞だった。)

髪を、ゆっくりとかき分けてゆくように、

空虚な空間がひろがるのを、黙認した。生の営みの上に、

お菓子や、葡萄酒が見えてくる。原野が草をおおい、

丘が木々がおおいながら、

妖精たちとの束の間の交歓となったキャンプみたいに、

星の名前をいくら呼んでも、どんなの鳥の名前を呼んでも、

いまはどんな不思議なことも起きやしないと知っている。

(…血一滴まで、冷え切っているんだよ。 )

しかしすみやかに消えてゆく生命が、自覚され、

なつかしい死者の内のただの一人だって夢の枕に立たぬまま、

顔の皺が増えてゆくことを、僕は知っていた。

挑戦は忘れないようにしたものの、体験自体の凝集力、

存在の動悸する血の滾りのようなものは失せていったことも。

すべてを知ることは愚かしい、――。

でも、こう考えてみてはどうだい？

図書館の閲覧室で雑誌や新聞を探しているみたいに、

小さな夜を積もる長い話で満たす、相手と巡り合えた。

ナイチンゲール

夜啼鶯や、蝶さえも、――愛よりも更に深い、円環・・

シャイニング・スター

それは輝ける星・・

めぐる、春に、夏に、秋に――冬……。

人形のような結婚式、会社の定年・・、

（演奏台では、いつも夜会服に身を包んだスウィングバンドがいて、

でも曲は、Bill Evans - Waltz For Debby と、決まってる・・）

そして素敵な贈り物。

文明の牢獄の恐怖から、

照射される光の中、夜の道が――ドラマティックに演出され、

壊れた腕輪――壊れた手錠が、

花束のお土産を持たせてくれる。

（一瞬でも、太陽が真上にあったと信じることは美しい。

一瞬でも――黄金と暗黒が寄り添った夜明けの瞬間を、

信じていられた、絶望や破壊は美しい……。）

しかしいまでも時々、砂丘へと足を運ぶ・・。

一日が欠伸をするのを知りながら、

そいつが砂の城を、破壊するのを知りながら、

――窓がびりびりと震え、壁が震える・・

性の機能をうしないながら、高い山の崖に咲く花を見つめながら、

目指すべき自由に船旅を限定しながら、

愛の無邪気な顔を見つめ、病に命の火を吹き消されそうになりながら、

夢のような玩具だけが知る不動産、住宅で、

世界の悲しみを、関係させてゆく――

「ねえ、どう思う？」と僕が訊くと、

いつのまにか、彼がいなくなっている。それで、もう、殆ど…

雪の降ったような静けさの中にいるような気がして、

年甲斐もなく、僕は泣いてしまうんだ。

「人生はとてもきれいなものだろうか、

人生は、――いつでも、ひとりぼっちのものだろうか。」と…。

目標がないから頑張れないと言うから、

じゃあ目標なんていらんんじゃないかって――

コンプレックスは解消できたらいいし、

挑戦したいことならすればいい、

みんな他人行儀だよ。安心して――いい…

やるかやらないかを決めるのは一人だけだ――

努力しなきゃいけないみたいに言うのは、

それが社会をよりよくしていく考えだからだよ、

それに合わないなら、やらなければいい…

努力しようがしまいが、

時間はいたずらに過ぎてゆく――し…

人ってつまらないことで笑う、

人を馬鹿にするために遠慮なく笑う、

けれど、いつまでもそうしているつもりかい――

そうやって、ネガティブなものの見方を？

ある人が言った――

「写真をアップするなんて、

よっぽどルックスに自信があるのかな。

うらやましい。」って…。

そうじゃない—

最低僕はそうじゃない、

何かを変えてみたいと思う一つのことにはすぎない。

最低、僕は、

何もしなかった人よりも、

一歩前に進んでいたらそれでいい。

どれが正解なの？

どれもが—不正解？

…みんな同じだよ。

間違ったとか、正しいとか、

そんなの誰が決めることなの？

僕の人生も、お前の人生も、

どんな通り一遍の解釈をするつもりなんだい。

ある人が言ったね、

何となく生きたい、

責任を取らずに過ごしたい、

いい加減に生きたい、

…そういう生き方も出来る、

だって、世界は思い込みでしかないから、

人それぞれが好き勝手に生きた結果の街で、

仲良くする友達が、

そんな奴だったら…嫌だね——

プラスチックナコトバハ、

イラナインダ。

オットウセイが…

ゆっくり螺旋状に流れてくる欠伸それではかなり意味合いが違ってくる

神様がいないんだよ取り留めもなくただ考えているとずぶずぶと

沈むことしかできない僕はようやく周囲の変化に気が付いたありさまで

指先から自由自在に空を飛ぶ鳥…

前頭葉が異常に発達した結果は無意識の領域で人格を形成する――

なんだこれは。

なんなんだろうこれは。

たとえるならば流木と一緒に浜辺へ打ち上げられた貝殻や硝子

栄養補給とかエネルギーだった消費だったさまざま破片

(きみはまだみたことがない、)

(でもいずれきみもそれを見る、)

刹那の面影がヒカリモノに反射するけれど無性にがんじがらめで

繰り返される回想が歪つに乱反射する不規則なコマ送り何故だか眠い各細胞

流れている映画は古いモノクロ映画しかも外国の知らない街で

人の流れがスローモーションになっていくころまで飴色の感情

プラスチックナコトバハ、

イラナインダ。

オットウセイが…

世界の境界線。

そして内の世界から、

境界線を越えて出てくる真実。

口を大きく開けて、（システム全体が大きすぎる、）

少しジャンプして、（時計の時間が全部バラバラになってる、）

バンジージャンプのあとの伸び縮みするゴムみたいに確実に定期的に

不確かで美しくアンバランスなコーラスを重ねる

枯れ葉が踊って笑顔や涙の先の未来が映る

生活会話を少しずつ回想

生活会話を少しずつ回想

何万回もの朝と夜がそこにある秒針の一定のリズムが

ミスト状に発散オペレーターの声――

「都市は死なない――」だった…かな…

（前から後ろへ、ゆっくりと。それらは、いつかどこかで見たよう、な、

懐かしいもの、だった、は、ず、）

ガードレール――

舗装されていない砂利道…

曲がり角がきついカーヴ・・

(でも、) ……

(でも、) ………

マグネシウムが発火する何かの衝動の残滓はシャツ一枚羽織っただけの肌

――乗り換える路線のホーム (のつもりかい、)

…… 標識が指している方向 (に、進もうと、で、も、)

冷たい空気の流を感じる秘密なのさ小さな人影が街灯や周りの建物から漏れてくる明  
かり

遠い古い町に揺らぎながら灯っていた安らかで強い火の祈りのような願いのような命

痛痒く隙間なく詰まっているためにイメージがちりぢりになった光の幻

機械化した一定のリズムで駆動してはねじまき状の削りかす

プラスチックナコトバハ、

イラナインダ。

オットウセイが……

「画面に流れてきた映像はエロ系です。」

好奇心をむき出しに、揶揄し、はやし立てた記事……

「ドン引きされる罫です。」

――足元からは水の流れる音。

そして砂利のこすれ合う音。

……空からはバラバラと雨が降ってくる音。

クジャクが羽根を広げるように分身し

まだあどけなさの残る顔どこかだるそうな表情を

世界って――

世界って……

心の空白だけがはっきりと見えはじめたら小さな切れ端

ポタポタ落ちるのにまかせて微妙な感覚で伝わってくる砂浜で乾かす気配やがて

ロールケーキになるんだ長いものに巻かれるんだ脇目も降らずにいても

そういうつもりではなくてもこの船から指令が出ている限り

ささやく言葉はあちらからこちらへと濃い影を緑の地面へ落としてゆく

無関係に感覚がむきだしにされていく巨大な工場があるともしらずに

手足がはえて歩いて行く鳥たち

手足がはえて歩いて行く鳥たち

しいくれええと ・おぶ ・ぎ ・へええぶううん

でも網が来るフォークで突き刺しピピッピピッと

このままでいい体温がありふれた時に流れていくセンサーに

流れていかなければならない脳内を堂々巡りする曖昧な記憶でこぼれて

まるで舞踏会で踊っているように群れをなして夜の街になって好色

でも夜の光りは何故こんなに明るいんだろう

(でも、) …

(でも、) ………

だれかの心を照らしてはくすぐるこそばゆい気持ちにする

安っぽいパンコールがハレーションを起こしている

人が集まりおもいおもいに手をかざしひらひらさせ

硬いものや柔らかいものは波をかき分けて全身に駆け巡る新しい血

(でも、) …

(でも、) ………

—痴態

鮮やかな夢を一一見る…

誰かが微笑む 夢…

ゆらゆらと溶けて…

(その甘く心地よい胃液の色に、その澄んだ透明な波に一一)

夢のように なくなってしまう…

風に戯れ 雲を追う…

「ごめんね。」

君の笑顔が好きだった (あの空へ、) 一一

開け放された窓から

ピアノの悲しげな音が響く一一…

(あの空へ、)

一一目を瞑ると、街を染めていく花たちがしゃべる。

心はどこにあるの？

(その甘く心地よい胃液の色に、その澄んだ透明な波に一一)

あなたの瞳は誰をみつめているの？

だけど僕にはわかる…

君の揺れる影…

——やさしさは蒼く悲しい香水壺。

甘いけれど、それは。舌の上で、

あっという間に、ひんやり ——と…

優しい風——

芽吹く蕾…

二人しか知らない夜の秘密が永遠という文字を組み立てる

翻弄されてしまう光と影——あの日突然奪ったくちびる…

「セミの声を追いかけている…」

(追いかけている——)

、、、、、、、、、、  
生まれる前からそこにいて——

、、、、、、、、、、  
永遠に君は変わらなかった…

幼い頃 歩いた道…

(微笑みながら 眠りつづける— )

やさしくなれる町……

—目を瞑ると、街を染めていく花たちがしゃべる

青く澄んだ<sup>たかど</sup>高処で

(その甘く心地よい胃液の色に、その澄んだ透明な波に—)

あなたの瞳の中—揺れている…

なつのとびら…

ななつのとびら—

じゅうよんのかがみ…

にじゅういちのけつまつ…

微笑んでも涙が伝う…

願いが叶うという特別な夜…

ロマンチックなオブラート

額縁にひそやかな夢の息吹が

夕焼け空となるとき

ざぱんと、飛沫きらきらとひかるプールに――

星が降る… 知りたいのか、 知りたくないのか、

天の邪鬼な彼女と、僕…

誰もまだ見たことはない永遠にも似た誇張…

狂気のようにきらびやかな目眩に魅了される…

電信柱の長い影 (も、)

木漏れ日が宝石のかけらとなる黄昏 (も、)

「さよなら。」

君の笑顔が好きだった (あの空へ、) ——

開け放された窓から

ピアノの悲しげな音が響く――…

(あの空へ、)

僕のKeyがひとつ消えてしまう――

…雨の無声映画を見てみたいに蝉。

――蝉…。

(今でも消えることのない胸の奥の痛みは、) 陽炎、

花園に 眠る どこまでも果てしな い Blue...

四時頃、学園祭の終わりを告げるアナウンスが始まって、

一般客が帰ってゆく。

肥大する自我、膨張する自意識は運動を始めた――

そして、消費される対象の中で、物語の契約を結んだ…。

四時十分ごろ、校庭でダンスパーティーが始まる。

かもちゃんはその時、首から優勝メダルをぶら下げながら、

くるくると片足立ちで踊っていた。喜びに釣られたのか、

さまざまな鳥たちが、かもちゃんの周囲で踊っていた。

秀一は、花村と一緒に踊っていた。あれは、ワルツか？

会議は踊る、されど進まず、か…。

マスターは今頃店を片づけていることだろう、

商店街の人たちや、さまざまな協力者たちは、

これから夜遅くまでに荷物を運んでしまわなくてはいけない。

学園祭は――終わったんだ…

ゆかりと目が合う――…。

ドキッとする…不思議な瞬間だ…。

(うん?)――

屋上を人差し指で、――差している…。

(行かない?)…かな――。

俺は親指で、合図を一一返す…。

くるりと振り返りながら、

(先に行って、待ってる一一…)

下駄箱で靴を着替えて、

一階通路を抜ける一一…。

トントンーートン…。

足音って不思議だ。

階段を昇り、五階までゆく。

そして特別室を見ながら一一…。

非常階段の入口まで…。

頬を撫でていた穏やかな風が、

一瞬強く吹きつける…埃っぽい、風一一

「いつまでも、

こうしてるってわけには…いかないよな一一」

階段 a と階段 b。まじわる交差 x。

吊り橋を歩くような、階段…。

夏の暑さが、不快感指数であらわされることをやめて、

いまは、すこし、涼しい一一…。

五時頃、学園祭の閉会宣言を会長がする…。

長くて、少し面倒くさくて、でも、色々あった学園祭を。

ちょっと一一切ないかと言うと…切ない…。

ポケットに手を入れて、そこにある、――煙草を…

投げ捨てててしまいたくなるくらい…。

(いけないのよ！) という風に、

ベンチに座っている――それ、俺の椅子だけ…

でもそんなこと知らないみたいに――彼女が、指さす…。

(そうだろうか?) という風に、

僕は、両手を上げて、驚いたふりをする。

距離を縮めていく、そして、ゆっくり、目の前まで行く。

*It's amazing, just like that...*

「昨日…あなた、あたしに言ったでしょ？」

すごく――官能的な声…。

「…本当は――ちょっとドキドキしてるの…」

クスクス…それはそうだよ――

やっと夏休みの宿題が終わりに近づいたんだからね…。

どんな長い夜にも終わりがあって、誰かが、…

そのゲームはおしまいだよと言うまで…永遠に続くんだ――

二段目を積み終わり、三段目、四段目と積み上げていくんだ…

そうしていった時…少なくともひとつのセンサが、

そのウィンドウを、最高にきらびやかにしてみせ――る…。

*It's amazing, just like that...*

ねえ、――君だけだよ…

違うな…君だけがそこにいればいいよ…

終わらない物語、永遠に終わらない思春期…

そこに—君は座ってればいいよ…

君がいたいだけ—ここにいていいよ…。

…だって—君はヒロインだから…。

…いつだって—そうさ…

—恋が終わらない限り…

…永遠に、ずっと、いつまでも—

かもちゃんが、ぺたぺた、ドタドタと尻っ尾ふりながら挙動不審に歩いていた。

リー・マヤはかもちゃんの傍で、動かなかった。

どこからどうみても、ソフィー・アンダーソンが描いた感じだった。

そしてもちろん、コティングリー妖精事件のように捏造なのだった。

息をしているように見えても、それは機械仕掛けでしかないのだった。

ジョアンヌは、僕のポケットの中に隠れていた。

「秀一の店行くダロ。クレープ食べるダロ。」

「そうだな。」

「ジャム、クリーム、ちょこれえと、あيسくりいむ…」

ごくん…っー

と、咽喉が鳴るジョアンヌ。東京都渋谷区の前宿竹下通りはクレープ屋が多い。

リー・マヤ、先程から、何かいい匂いがするぞ、なんと不埒な、ということで、

目を瞑るというより、鼻を利かせているという顔をしている。

妖精も、犬とそれほど違いがあるとは思えない。もちろん、われわれ人間も。

ふぁ…あ…あ…あ…らめえー。

「クレープ食べたら綿菓子食べよう。」

「食べるダロ。」

「…食べたい。」とジョアンヌが喋った。

でもそれはあまりにも小さな声だったので、よかった。

ふわふわとした食感が魅力の綿菓子で、こういうイベントの必須だけれどー

棒を握っていると手がべとべとするのが難点だ。

もちろん、ジョアンヌは手を舐めるだろう。かもちゃんは、一口でいく。

「色んな店あるけど、他行くか？」

「昨日行ったダロ。リー・マヤとジョアンヌも見たダロ。」

「そうなのか。」

「――あとは、食べるだけダロ。」

\*

「エントリーイーナンバァァ1番の…女性は一―」

どうして、魔が差したのだろう、ゆかり。

そこには、どう考えても、仕込みが入っている――…

「この可憐な女性ええええええ、かもちゃん！！！」

後ろで出番を待っていた、ゆかりの顔を想像すると面白い。

そしてその時、彼女はこう思っていた…！

「（あたし、バカコンに出てるんだっけ？）」

いいえ、ミスコンですよ、お嬢さん！！！」

\*

バカコンに、秀一が出場した。

観客席で見ていた真兄はきっと、お前の勇気を胸に、

彼女ができない理由を、そこに、見出したことだろう…！！！！

ミスコンは、圧倒的大差で、ゆかりのものになった。

かもちゃんは、「かもちゃん、…欲しかったダロ」と言ったが、

赤いセルフフレームの眼鏡とか、金色のカツラとか、

あまりにも大きなスカートとか、タイツとかは、

既に間違っていた。しかも一々女ですらなかった。

でも、ゆかりに、そんなに人気があるとは思わなかった…。

彼女を誘った僕が一々ちょっと後悔するくらいに…。

と、秀一が叫んでいる。

「俺は本当に馬鹿だあああ！」

と言いながら、ケーキに顔をつっこんだ。

聴衆は全員拍手した。

（出番が少なくなったからって、ついに、やけになったか、

この男というシチュエーションだったが…）

かもちゃん、本当の敵を見つけたように、驚きながら、

「かもちゃんの方がもっと馬鹿だああああ！」

と言いながら、あは一ん、

あらかじめ用意しておいたくす玉の紐をくちばしでひき、

パッカーンと金盃を頭に落っことした。

どうしてそんなお約束のネタなの…？

わからない、ただ一々生まれて三歳とは思えない、表情…。

「きくぜ〜ッ！

福島県道362号南福島停車場線！」

わずかに漏れてくるリズムは、聞いたことがあるぞー炎天！

他の馬鹿達は、全員それを見て棄権した。

なにしろ、まだ、バカコン始まって数秒でそのテンションである。

聴衆は抱腹絶倒になった。何も持たず何者にもなり得ない、

それでいて純真極まりない涙ぐましい笑いへの努力と現実への抵抗。

俺も笑いながら、俺も一度くらいああいうのに出たかったなあ、と本気で思った。

でき得うる限り恐ろしく地獄の光景を説く人の前でも、――ああ・・

楽しく快きもの、笑いは、こんな風に天国を説明する。

「秀一、お前なかなかやるな！」とかもちゃん。

でいーふえんす！ でいーふえんす！

何かを牽制し合う。夏だー！ 海水浴だー！！

馬鹿だーあ！！！！

「お前こそな！」

そう言いあいながら、セクシーコマンドー。

両手をはげしく振りながら、スッと、チャックを下ろす、秀一。

う・る・と・ら・ヒッサツワザ出た！

かもちゃんは、と言えば、スーツ姿に着替えている。コント？

「・・・気晴らしも必要だと思わないかい、

にぎやかなネオン、きらびやかな女性、それに上等の酒。

でも、本当に一番必要なものは、——自由だ！」

と言いながら、スーツを次の瞬間ひきちぎった。

破った。そして、飛んだ……！

まぶしい！ まぶしい！ 夏の空……！

意識的にかあるいは無意識にか、誰もが昭和という出来事の終わりを自分の物語にしようとしている。そんな気がする町を通り抜ける――本当に魔法にかかってしまった・・・みたいに、世界が弾む。運動シューズが、ビデオカメラで撮影されるみたいに、漫画やゲームが一瞬よぎる。現実と虚構の境を曖昧にしながら、細かく砕いた骨・・・性的な嗜好も、倒錯した恋愛感情のように扱われなくなった情報の中で・・・

ゆかりの家へと着くまでに、自動販売機に――彼女がいて・・・。

電信柱、田んぼ、家屋、ぼおっと、まぶしい光・・・。

意識が遠くなり始める。このまま意識を失うことができたなら、どんなに幸せかな・・・。

そこには何が待っているんだろう。

そこには、新しい夜明けが――待っているんだろうか？

明日の服、明日の靴、明日の鞆、明日の髪型・・・

「待った――か・・・？」

「ううん、全然。」

素敵な出会いは夜にある――

記憶は知っているようで、知らない・・・

同じ空気を、吸って、歩くペース――。

春がきて――夏が来て、ずっと夏だったらいいなあ・・・

上唇と下唇が触れ合うたびに、糸を引くような粘り気を感じる。

音もなく声も上げない、君がいたから――不思議な、一進一退の攻防。

たまらずに一呼吸おくと、どんな優しさを、という言葉が残されてる..

話したのはいつだったっけ..心を通わせたのはいつだったっけ..

手をつないだのは..抱き締めたのは...

物質的な豊かさという価値観にとらわれている限り、

水に落ちた小石ほどの抵抗も感じさせないままに、

..あなたには、聞こえなくていいんだ..

罪の意識は消えないし、様々な価値観が氾濫し、無数の物語が生まれてゆく、

《腐った 果実》みたいに..

でも同じ場所で足踏みしているようでいて、本当は少しずつ何かが変わっている。

目で捉えていたとしても認識することのないほど緩やかなスピードで..

束の間の奇跡の中にいる..それも、一瞬のきらめきを叶えながら..

「何、ジッと見てるのよ。」

「..男はいつだって女を見るものだよ。」

「やらしお。」とゆかりが言った。

「やらしお違う、ティンティン。」

「かもちゃんの影響が色濃い。」

「乳首透けてたら、それもわかる。」と、全世界エロ男子中学生の代表。

「でも、本当は？」

「...本当は..ちょっとドキドキしてるんだ..よ。」

ああ.....ああ.....ああ.....

ああ……ああ……ああ……

見つめられるのは嫌い…だけど…でも、本当は嫌じゃ…ない…。

やっぱり待ってた人が来てくれることが一番嬉しい。

やっぱり——今まで待っててよかったと素直に思えるから…。

(目の前に可愛い人がいる…人が、喋ってる——

物音がする…でも、本当はそれですごく孤独なんだ…

触れられる、熱も、——リアルなその肉体も、衣服も、

心臓の動きや、脳波ほど、確かなものじゃないかも知れなく——て… )

彼を信じる…信じることで得られる満足も、

同じことの繰り返しの中で、決心が揺らいだり——する…

今日と同じ日はもう来ないと知っている——のに…。

「不安に対する自己防衛の現れ。」と、俺は言う。

「経験や知識として知っていることは、すべて自覚があるものよ。」と、ゆかり。

小さな嘘をいくつもついたような、——森の奥で、

封を閉じることのできないラブレターがある。思い出に時間は関係なく、

その人にとって、その一瞬がどれだけ大切で、どれだけ意味があったかで、

たくさんたくさん、幻影が生まれて、夢や、恋が生まれ…る。

そして、遠くへ去るところかさらに強大になり、身近にすり寄ってくる。

次の瞬間、恋人が生まれて、きっと家族になる——…。

心細くて死にそうな夜——いのちをふきこまれたいあさ…

肘と肘が触れた瞬間の、麻酔…

きっと、悲しいことがあったんだよ。

悲しくて、心が潰れてしまいそうなくらい悲しくて――

心が、思い出を閉ざしてしまうくらい、辛いことがあって、

そのまま、えいえんがほしくなって……。

「肉体が精神を超える時もあるかな？」

――独りぼっちが好きだと言いながら、

……本当は、このまま時間が止まればと涙をこぼした瞬間。

*Like a fire ball...*

息をしたいけど、いとも簡単に夏の夜の涼しい風が口を塞いで――いく…

大きな期待にふくらみながら、愛にまつわるすべてのものに、

恋い焦がれたりする…何度も何度も確かめるように、

好きだと――言う…明日もちゃんと笑っていて、欲しいから、

絶対に迎えに来るから――とか、ちゃんと好きでいるから、とか…

そのときはふたりで一緒になろう。結婚しよう――とか…

「マリなんかのことで、泣いたりするなよ。」

「…うん。」

誰も知らない悲しみさえも――好きだよ…

少し照れくさい優しさだけ――好きだよ…

「約束、しような。」

「…うん。」

自動販売機の傍で、

美しいものがある、

カクテルグラスでも、

パーティーグラスデモナイケド…

一瞬の夢に等しい—— 光…。

ゆかりからメールが来た。

どうも緊張が一つ抜けたらしくて、

背筋がゾクゾクッとした。

\*

---

From:香山ゆかり

---

Subject:○×△□@○×.△□.jp

---

Date: 20××年 ×月 ×日 \*\*:\*\*\*:\*\*\* JST

---

To: 神崎竜也 <○×△□@○×.△□.jp>

---

---

こんばんは。

---

今日は本当にお疲れ様でした。

---

学園祭に、脚本の補佐に、BGM、

---

それに、自分の演奏もちゃんとして、

---

竜也の、よい面がすごく見られて、

---

色んな人もそう思ったんじゃないかな、

---

…そう思います。

---

---

それで、もし、これからよければ、

---

散歩しませんか？

あなたと、話がしたい。

\*

時々思うのは、ゆかりって、すごく演技的な部分があって、

それですごく女優なんだな、ということに感心する。

普通の男性はそれをどう思うのかは知らないけど、

ああ、フェロモンの籠め方がすごいな、と思う。

\*

僕はもちろん、ゆかりにメールを出す。

何処で待ち合わせをする？

家まで迎えに来て、と返ってくる…。

電話しなくても、コミュニケーションが出来る。

しかも、殆どリアルタイムに。

メールで。しかも、想像力さえあれば、

話した手触り以上のことを、

妄想することも出来たりする。

それってすごい不思議な時代だよなあ、

ある意味、魔法だよなあ、と思ったりする。

もう考える時間はほとんどいない。

話が必要ななら電話をすればいいし、

話をしたくない気分の時はメールをする。

さらに、ラインとかフェイスブックとか、

ツイッターとかがある。でも、

そこで事足りることなく、

それが一つのキッカケとしてある限り、

やっぱり僕等は勘違いしたり、

余計に迷ったりすることを、

続けるんだろうな、と思った――…。





酸素／青を謳歌して泣く／鼓動／を／刻／ん／で

ポップでクールな空気感覚——に、しらける…

騒ぐな！ くるしくない、くるしくなんか——ない、

ためらうことも！ な——い…！

…夢のない不安の眠りから目覚める。

、、、、、、、、、、、、、、、、、、

田舎の便所の裸電球みたいなミラーボール…。

ハリー、ハリー、ハリーアップ！

<ロックユウ！>

風にザワザワとゆれるヤツ！ 満場喝采！

自慰行為…

「欲」「求」「不」「満」

抜けないイヤホンプラグ！ パンダ型スピーカー！

シド・ヴィシャスより不健全な壊れで、憐れ、

ピー・キュー・キュー・キュー・ヴィイ・イイ・ン

罨で足手まといなものに埋没する。膚に感じるピリピリした緊張、

剣と魔法の罪無きファンタジー（だとしても、知らないぞ、）

△within the system of ventricles in the brain…

▲Do you miss me? Do you miss me?

無口になるのは嫌なんだ>>>

靴履くのだって本当は嫌なんだ>>>

—マリオにドラクエ、ファイナルファンタジー！

しらけたドラムスはいらない。ギターもいびつで、ベースも墮落して、  
ショック！ 馴らし—て…パサパサする紙の中じゃあ、彩れない。

心臓の中で深く遊んで」 弁論して」 説明して」

世界が無の素晴らしさに耳を通じて身体を震わせる。これまで、  
変な奴だった。指先に何かが当たる—瞳を開けてはならないのに、

△within the system of ventricles in the brain...

▲Do you miss me? Do you miss me?

戸惑ってばかりいるんだから>>>

今更、お釈迦になんてできやしない>>>

—リアルでもなければ非リアルでもない中間領域

人に促されるままに勉強をしてきた！

将来、有望な人材になれるらしい。—でもあるとき、今まで疑問に思っても、

押さえていた気持ちが、感情となって現れ、壊れる。精神的終末へと、

生きているよ確かに、溶けていくよ静寂に突っ伏したまま、

ドライブする、迷路みたいなRole Playing Gameの単純なシステム。

拷問や狩り、専制と隷従…そしてそれはただしいことなんだって、

そしてそれは、生をつかむためのものだったんだって、言った…



、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、  
急かされるように加速する世界とりあえず、

スーパー... ソニック...

この紐を解いてみることから始める——よ、領収書が、翩って…、

あらゆる社会の問題はその疑問点をこの首切り刃のまわりに置く。

墓穴を見つめる人の悲しみを変形させんと！

Oh...OH!oh!Oh!OH!oh!Oh!

…夢のない不安の眠りから目覚める。

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、  
田舎の便所の裸電球みたいなミラーボール…。

ハリー、ハリー、ハリーアップ！

<ロックユウ！>

沈黙の中に非情なテンポで時を刻む。

いつの間にか心臓もふたたび正常に安定した鼓動をうつ。

いまは緊張していなければならない時だ。

明瞭な概念を与えておかなくてはならない。

ああ、欲しい…飛ぶやつ——飛ぶやつ…。>>>

素晴らしいものがある。>>>

——でもなんかはきつと一生わかんない…

そこにあるはずものが、全部素晴らしくて、握手する。

抱きしめる。でも他の人間はそうじゃない。

幸せをストレートに追おうとしない。いい気になって、勝手に諦めて、



劇は始まった。

(か・じ・の)と書かれた、あやしげな文字がプロジェクターでうつされるなか、パチスロ台がならぶ。全然カジノじゃなかった。かもちゃん監督がリアリティーを追求した結果こうなった。一切意味がわからなかった。そこに、トレンチコートにソフト帽を被った、タフガイなかもちゃんが登場する。何故か、ムーンウォークしながら。

「ドンキーホーテ達がねむらない街、…」

とか言いながら、照明がかもちゃんにあたる。

そして、ソフトクリームを食べていた。実際馬鹿だと思う。

きゅるきゅるきゅる！ ききいーっ！ パンチラゲエム！ パンチドランカー！

…照明が落とされる中、プロジェクターを使って、光る絵の車がゆく。

ここらへんのアイディアは俺が出した。光る車は、赤、青、黄色と色を変えてゆく。

単色効果を使うことで、シュールリアリズムをアシストできるかと思ったのだ。

「斜めに車をかしげさせて通過するー高速エリマキトカゲ！ ばきゅんばきゅん、ずばきゅこん。トントントン！ きゅるきゅるきゅる、ぐおおおお、ずばばばば！」

「(オーイエー、オートマティックコンピューター！)」

「名乗らず、語られずーその機体は走った。連邦軍！」

「(オーイエー、オートマティックコンピューター！)」

「そいつは何だ、鳥か、違うダロ、ヒヒーン！ ボクシングのトレーナーが叫ぶ。ジョー、それは違うアニメだろ。作家志望のジョーは？ 若草物語。アッパーカット、のーぱんしゃ

ぶしゃぶ、わかってるダロ。ランボルギーニ・カウンタック。パフェからクリーム」

「（オーイエー、オートマティックコンピューター！）」

オーイエー、オートマティックドラマコンピューターというセリフは録音で、

メロディがついている。R & Bっぽい感じを求めていると思ったので、あえて、そうした。

それ以外は全部、かもちゃんの独り芝居——独り語りである。

で、どんな演技をしているかといえば、羽根をばさばさせながら、

舞台の上を右から左へ行ったり、左から右へ行ったりしている。

セリフはともかくとして、まったく噛まないあたりがちょっとすごい。

「マッチ箱のような汽車が、海を走ってゆく。オーナイストレビアーン、しゃぶしゃぶうまい。でも車には、キャビンアテンダントが乗る。“ヘイ、ポリスマン、羽交い締めはやめて”…お嬢さん、集団食中毒を防ぐ目的から、乗客向けと同じく複数の種類が用意されているというのは本当ですか。本まぐろです。知ってるダロ！ 一番搾り。客室乗務員の制服は、国際的に著名なファッションデザイナーに依頼するというのは本当ですか。本棚三百九十八段！ ガードレールにあたる。眼ン玉とれる。ひしゃげる。鉄プレス。構わず、バコーン、お釈迦。パコパコ！ それでも、高い橋の上を通過する、音すがすがしくひびきわたる、パパピア！ リニアモーターカー。」

プロジェクターの映像は、飛行機——この飛行機は、アニメーションに詳しい奴に頼んで、作ってもらった。実は結構凝っているのだが、かもちゃんの印象が強すぎてこのことを記憶の隅に入れておける奴の方がすごいと思う。

「かもちゃん、クリント・イーストウッドの顔をしながら拳銃を抜く！ コルトバイソン！ ずばば！ 図書館のリファレンス係の頭を撃ち抜く。焼け焦げる。溶けてしまう。」

オードリー・ヘップバアーン可愛い。センチメンタル・キッス」

そしてそこへ、美女ーゆかりが登場する…！

彼女は、アリスファッション！

「私は美女のゆかり…！」

と、言うセリフなのだが、ちょっとふいてしまう。確かに美人だけれど、そんなセリフ、あまりにも突拍子なすぎる。でもそこがすごくシュールで、よかった。

「せわしない息遣いで達する！」と、ゆかり。

「あふんあふん、…あはあん！」と、かもちゃんが何故か達する。

観客の中にはこれで、腹をかかえて笑い転げてしまう奴が現れる。かもちゃんはこのやらせると、もはや右に出る者はいないくらいうまいのだ。

「と、ハリボテがあらわれる。」とかもちゃん。

「囚人服を着た、おとうさん。竜也。元プロレスラー。」

と、録音された声…。イメージ的に、やっぱり、マッチョな感じにしようと、胸にプロテクターをいれて、ガチガチな感じを演出している。ただ、声優はもちろん、かもちゃん！

フッ、とライトが消える。そして、プロジェクターは発電所の写真。

「鳩が飛び、カラスが飛ぶ！」と、かもちゃん。

「プテラノドン飛び、始祖鳥飛び！」

やっぱり、みんな、吹いた。あんまりにも意味がわからないからだ。

でも、ここは図鑑の写真を参考にしたイラストを使って、

鳩、カラス、プテラノドン、始祖鳥。黒子に棒をもってもらって、右から左へ、左から右へ、ゆらゆらさせる。五秒間隔で、ライトも、色を変えてゆく。

「そこに秀一、駆けつけ三杯サッカー選手。私腹を肥やし会社を食い物にする重役たちの姿を垣間見て、嫌気がさして、マリファナやる。ふくらはぎにその鋭いおののきを打ち込む。何発も！」

プロジェクターで、秀一の髭面写真が登場する。

頬に何故かブラックジャック的傷跡が入っていて、秀一を知ってる人は爆笑する。

「裏取引に巻き込まれた。」と秀一の声。

ちなみに写真は、素っ裸で白粉を身体全体にまぶされた、かわいそうな秀一の写真。

さんざん嫌だと言いながら、結構、いい写真になってるじゃないか、と僕は思った。

「発電所に、幼馴染の友達がいる、いまは悪い仲間になっ…」

「深夜の密会がバレてネガとテープを、…一億円と交換…」

と、ピアノの音が鳴る。鍵盤の端から鍵盤の端まで移動。

ちなみに、中原さんが演奏してる。

「そして、時は二千年過ぎた。」という、かもちゃんのセリフ。

(たんたらりーん、というメロディーが聞こえてくる。)

ここらへんは僕の腕の見せ所だと思って、BGMを使って、心臓の音を入れたり、ネコとか、車の音を入れたりしてカオスな雰囲気まで持って行く。

「そして、カジノに車のシーンに、美女のゆかり、マリファナサッカー選手秀一はひとつの運命になった。さようなら、かもちゃん、さようならゆかり、さようなら秀一！」

という字幕が、入る。ちなみにこの字幕、わざと字の汚い生徒に書かせて、味のある文字にした。

「そこへ、行方不明になった恋人の調査を依頼する男。」

と、僕の写真。

「そこへ、オーナーの娘ゆかり、海岸線走るオープンカー。暴走族の真似事をして、これからデートクラブ。不良娘、いつになったらおうちにかえるのこのむすめ。」

と、ゆかりの写真。

「でもみんな死んでる。黄泉の世界。」と、かもちゃん言った。

演奏は、チャイコフスキーの秋。間違いなく、僕の趣味。

プロジェクターの映像は真っ暗な部屋になり、マスターと光の中の少年。

「黒い魔術着をしながら、エロイムエッサイムする。

おお、そこには九層の地獄の最下層コキュートスにて凍るサタンだろ！」

「そこへ男装したゆかり登場。」と、かもちゃん。

ゆかりが、現われる。

「わたしたちの世界は何処へ行ったの？」

そうして、演劇部員が全員舞台上に登場し、コスプレした変な恰好で、おどりまくる。当初予想した以上に、派手な恰好で、しかも、何故かオペラ調で好き勝手なセリフをしゃべりまくる光景は、本当に混沌だった。そして、それがひと段落すると、プロジェクターで今回の参加者ほかの名前が紹介され、最後に、中原さんの演奏が来る。彼女が選んだのは、ショパンの別れの曲。

ちなみに聴く人が聴いたら、演奏がコンクールで優勝をとれるくらいのレベルであることが、一発でわかっただろうと思う。表現力が巧みで、中原さんの気迫が伝わってくる素晴らしい演奏だった。

その演奏の間、プロジェクターには、今回の劇のセリフが垂れ流しにされている。

かもちゃんをよくわからないのに、何故か張り詰めている緊張感が、過ぎ去ってしまった季節を、少し官能的にしている。かもちゃんの俳優的才能は、このよくわからなさと共にあるのだと思う。そして、演奏が終わると、拍手が巻き起こった。ブラボーと、おじさんが叫んでいた。え、マジで、と僕はちょっと思ったけど、かもちゃんはすごく当たり前の顔をして、天才だから仕方ないダロ、というどや顔をしていた。ほかの演劇部員は、OBが来ないことをひそかに祈っているような顔をしていた。ゆかりは、さすがに演技を一切していないけれど、ここぞという時の役をきちんとこなしていて、よかった。ただよくも悪くも、これはセットされた舞台上、かもちゃんが主人公の、ひたすらシュールリアリズムな劇だった。そしてこの面白さって、一度観た者にしかわからない。

そして、劇は終わった。最後に部長のみっちゃんとやらが、演劇部の威信のため、

「今日はシュールリアリズムの天才かもちゃんと、昨年、脚本を担当した神崎竜也さんに全面BGMを頼みました。オリジナル脚本『カジノ』です。演劇部による前衛舞台でした。明日は『若草物語』をします。ご静聴ありがとうございました。」と、マイクでフォローを入れた。

「本当だったら明日もしたいけどナ、みんなアリガトナ」とかもちゃんが言うと、

あたたかい拍手が巻き起こった。

航海士のように、双眼鏡を使っている、かもちゃん。

空を飛ぶ、リー・マヤ。

お菓子にかぶりついている、ジョアンヌ。

「んう…」

あえ、なんらっけ？ かぷっ、ーパイの実！

はあはあ、とクリスティー。

いっけないのよ、でも、ほしいなら、分けてあげゆよ。

えっとね、あのね、

「わう！」とクリスティー。うるうる。

「ですよ…」

と犬と仲良くなるジョアンヌ。

目にゴミはいただけだよ。泣いてないよ。ぺろぺろ。

でも、ジョアンヌ、パイの実はそいつ食べないと思うよ。

にいっっ…にまーあーっ！

「ご飯もうすぐだから、やめような、ジョアンヌ」

「ああーっ！！ お菓子いー！！」

持っていたお菓子の袋を取っただけで、涙がぼろぼろ流れる。

あうーっ。アウーッ、とジョアンヌ、クリスティー。

まあいいか、と思った。君の見る世界を僕は知らない。

目を閉じる。聞きなれたリズムに世界はゆっくりと回転していく。

聞き覚えのあるリズムを耳の奥で探しながら、

それぞれに世界は回転していく。

マスターが弁当を並べている。中原さんはどことなくそわそわしている。

おそらく演奏のことを考えているのだろう。いいことありますように。

光の中の少年はこころなしか、ちょっと疲れている。

さっき、占いを見に行くと、盛況していた。

結構イケメンだろうと思っていたけど、雰囲気プラスで存外評判がよく、

おばさん達にからかわれていた。

彼は真面目に占いをしているのでそれで相当困っていた。

秀一と、花村さんもいる。

甘い輸入菓子の匂いがするし、とてもとてもエグゼクティブ！

洒落たお店にあるような、ケーキとシャンパンは出来すぎた舞台装置だ。

シャンペンがボトルからパーンパーンという音とともに噴出。

その音ははなやかな装飾音の旋律をかなでた。

「さっき、学校内を回ってきたよ。」と、俺はゆかりに言った。

いろいろあったね、つかれたね、がんばったね、と、

リー・マヤが言った。

なに、喧嘩売ってるの？ 水責めがいいの、火あぶりがいいの、

それとも、つぶされるのがいいの、というと、

リー・マヤ全力で逃げた。

「遊んでるのよ。」とゆかり。

「遊んでやろうか、王女！ 卑賤な者が！」

六本の弦が奏でる音。ギターをかかえながら、一言う…。

「お疲れ様。」とゆかり。

僕は屋上のコンクリートから立ち上がる。

\*

胸の奥にあるリグレットが襲いかかってくる。

ただの音だというのに、その段階が抑奪するように降り掛かってくる。

月夜が照らし出した身体に、その精神が抱擁を求め、

段々と月の光を頼りに突き刺してくる（洗練された音、）

音は余響していき……。

昔、世に時めいた人の高雅な習慣の面影がなお残っている化粧道具。

銀色のはげ落ちた銅製の十字架像。

金箔のはげた木のわくのうちに、すり切れた黒ビロード。

\*

覚えてたの言い訳の情けなさが、

いつまでも張り付いてしょうがない、

濡れたシャツを脱ぎ捨てさせる。

「こころ」と「からだ」を爽やかに関係させる――。

\*

一階の廊下で、呼びとめられた。

「神崎君…ちょっと――」とマリが現れた。

見た瞬間に、ムククの叫びみたいな表情をする、マリ。

…前髪で隠れた伏目がちの両目に、

一瞬だけぞっとしたらしい。

「睨まないで。こわいから。」

「睨んでない――普通だ。」

ますます嫌悪感がつのった。

なにやら吐き気が咽喉もとに込みあげてくる感じがあって、

無感覚になった物体のように冷たくからだにぶらさがっている、腕が、

異様な感じを持って襲いかかってくる。

脅かされた偽善が、抗弁する。不実を言い立て、巧みに偽ろうとする。

イイヒト…尊すぎる。社会性や協調性を身につけて、そう――だ…

地平線の向こうまで、そう――だ…。

大地がきれいさっぱり朝陽と共に消えていってくれないか、と思う。

そこにはもうみんな消えてしまった。ふっ、ふっ、ふっ…

分かる奴にしか分からない狭い範囲で、ビーズみたいに、ちらばって、

かがやいている。ひくっ…うっ…

あなたはどこにいるの>>>

どこに?>>

僕はもう、彼女に対する良心に目を醒ますことがない。

悲しい人形みたいに、俺はもう、何も見るができない。

説教の題目は慈善か? 雄弁なる、慈善、大司教様が待ってる。

「あ?」

はなはだ気が乗らなかったが、..こつも真剣な表情を見せられては、

肯かなければいけないのか、と思う。対峙した身の毛のよだつ瞬間に想いが及び、

身震いする。暗黙の了解で、不平満々たる内密な、

好きとかいう感情さえも汚らわしかった。ゆかりの親友——親友が..、

たとえば、目の前でこんなことをしていたらどうだろう。

「謝りたいの——ちゃんと..」

「許す。忘れろ。」

「...そうしたくなるのも、ちゃんとわかってるから。」

...口の両側を吊り上げるよりも、

唇をかむ方が自然だ。

——いや、お前は全然わかってない、と俺は思った。

そこには部活動中の勇ましい掛け声、金属バットが響かせる甲高い音、

夕方を告げるカラスの鳴き声がある。

それは(マリ)じゃなくて、(ゆかり)だった——..。

醜悪にソフィスティケートされた...。

コンビニやガソリンスタンド。電気屋やスーツを着た帰宅途中の人。

戦争、災害、病気、貧困、――。

大量消費文化の隆盛を担う中産階級、

センスに乏しい和洋折衷のマイホーム…

この街で、なりたい職業とか、本当に人を好きになることとか、

そしてそれでも希望を持つこととか、夢とかを…考えていた――。

地球の真ん中で、――それも、宇宙に向かって。

炭酸飲料の空き缶、菓子のビニール袋、エロ雑誌、

あるいは砂浜に散乱する花火のカス、煙草の吸い殻、

うち棄てられた使用済みのコンドーム。

いつだって、俺はふらふらとして、

答えなんか分かるはずのない妄想をしながら――。

ベッドの上に寝転び、蛍光灯を見上げながら考えていた。

考えるけど、何の答えも見つからないまま、時間はどんどん過ぎていった。

結局はわからないことだらけで、何が正しいのかもわからないけど、

いつの間にか慣れてしまっていた日常。

まよいこんだの？（曲を検索しています、）

あなたはどこにいるの>>>

どこに？>>

「本当に謝る気があるんだったら、ゆかりにちゃんと謝れ。」

ききいっ、自転車の方向を変えて走りだす。

風になびくスカート、流れる黒い髪。

ゆかり…。

僕は思い返すだけで胸がドキドキする。

自転車を走らせながら――。

不確かな存在を抹殺するために退屈を紛らわし、

およそ似合いもしない飾りもので、

今僕がここに立っている意味を曖昧にしようとしている。

（おい、神崎、学校を自転車で走るな！）

と言われるところだが、

（今日は自転車で走っていい日なんだ！）

人々が僕に無言で挨拶をする。そうしてふと、

工具やネジになったような気持ちになる。

盛りのついた猿の群れたちは、目的の場所へとゆく、

汚染物質の集合体――廃棄物処理法は？ 幻想は、

次第に破滅的なイメージに入れ替わっていく。

生き血を吸うのがライフワークみたいに批評家は言い、

恵みの雨は有害物質を含んだ毒の雨となる…。

そんな中で、自分はそれとは別のことをしようとしている。

寂しいとか、悲しいという言葉で終わらないように足掻いている。

時間とともにあらゆるものが入れ替わっていく空気が感じとれる。

蜃気楼・朝と、きっと愉快であるに違いない夜の間を、

精いっぱい僕は謳歌している。

懐古調のレンガを入れ替えて行くように、現在は、

張り詰めた緊張感や、機械のような冷たさではなく、

ハートのaceとjokerを変わりばんこに見せてくれる。

かもちゃんが、中学生の女の子に縄跳びをもってもらいながら、

びゅんびゅん…ジャンプジャンプ！

100回以上の記録に挑戦している。

(内側にこびりついた何かがぶるぶると震えて

ああ、そうだ、

これを待っていた…

これを持っていた…)

――スターリング・サブマシンガン！

\*

野菜を切る、同級生。

黒髪のハイレイヤーに鼻の頭に絆創膏、

白のVネックのTシャツと青いジーパンというラフな格好。

エプロン装着女子。

罪人とともに馬車に乗り、罪人とともに断頭台に上る。

「切り方なんてまともに習ったことはないのに…」と言う。

俺は、ジュージュー音のするフライパンを見ながら、言う…！

自分のクラスの出し物が、焼きそばだというのは知っていたし、

もちろん、顔出しもしていたが、考えてみれば、こんなの注文きく奴と、

作る奴、二人がいればいいんだよな、と思う。

「そう、ぼやくな。」

研究を重ねて出来上がった料理はかなり美味しいと思う。

僕は考える、生き立ちや、今住んでいる家や、今日これから誰かと会う約束とか、

用事とか。時間には限りがあって、その区切りをつけているのは、

自分であったり自分でなかったりするのだ、と。

「食べて！」

しかしそれを、ほっとけば何皿も食わされるかもしれないという問題とは、

地球と木星の距離くらいかけ離れた問題だ。台風が微妙にそれてしまい、

祭りの始まる前みたいな風が吹いている気分になる。

「今日は竜也君、がんばってね。」

ドキュメンタリーチックにフェロモンでまくりな節がある、同級生。

いや、名前も知らないんだが…うん、ああ、もちろんさ、と笑う。

そして、津軽海峡に身を沈めてしまいたくなる、寒さ！

このまま、フードファイターになるのか？ いや、違う、と俺は思った。

真剣に疑うことも馬鹿らしい、異形のミュータントとなる。

「美味しい焼きそばを作れ！」

「おいっす！ まいどあり！」

\*

窓には夏がはめ込まれていて、

静かに、静かに読んでいた絵本を閉じ、

深い青を重ねている、コップに水が注がれ続けるように、

心が満たされることのなかった、

何かが溢れていく感覚を覚える――

ガラスに反射している香りを・・

深呼吸と一緒に吸い込むと異なる時間の空間。

スノボは禁止だ！ サーフィンボードも・・

だけど壁はある。

だから騒音は聞こえてくるし、

カップルの仲睦まじげな会話だってもちろん聞こえてくる。

遠く懐かしい街の匂いがする公園のベンチでのキスシーンや、

海が見える・・つめたくさみしい風でカタカタと震えている、

瘦せた壁。それにつられたように、

白いレースのカーテンがそよぎ、

窓の風に委ねながらゆっくりと動き、流れる時を感じる。

深い海底の様に光を吸い込むようで、

見つめられれば目を話せなくなるだろう――

ほら、風の通り道ができています…

\*

止まれない、らしいよ。

映画の予告編が終らないうちにいくよ。

面が消えた空間に真剣な眼差しを注ぎ、

きーほるだーのぶひんになった、

Rock'n'Roll...

僕らが乗っている回転装置。

白と黒に塗り分けられた、

モノトーンのフェンダー・ジャズ・ベースみたいに、

横断歩道するんだ。パンダかい？

パンダだな、でも自分が感動したい、感動したい。

それだけだ。柔らかくて、温かい。温かいのに。もう、これは、

体温じゃないんだ。カーテンの奥から見える空は、

きれいすぎて、嘘みたいで、こんな空を見ている目って、心って、

多分、きっと、すごいことなんだ。

磨かれた天井、ゆか、壁、国語算数理科社会。

時間が滑ってゆく――。

\*

ひっそり構えている古本屋なんかで、棚の中に収められたそれ相応に年老いた本を眺め、立ち尽くしていると、書店なんかと違うということに驚くことがある。本屋では、本棚から本棚へと働きバチみたいに飛び回る人々がいて、情報収集に熱心だ。

ぼやけている夢の部屋。背表紙を目で追う、人びと。

くるくる、回ってるんだって…！

木馬はもういない、回る勢いで駆けていったから――…

図書館…

今回の学園祭では、本の受け入れをやっていて、持ってきた人には、食事券と引き換えるという物々交換をやっている。そんな光景を見ながら、何故残していたのか分からない、もう忘却の彼方にあつたノートを思い出す。若さと、若さゆえの弱さ。それが、たった一、二分そこらで全部真っ白な灰になる。ランボーみたいだ。顔色一つ変えずそれをじっと見

ていた。無表情で…しかし、きっと、普段と何ら変わり栄えしなかったに違いない。

J - P O P を聴いて精神的な満足を得ることができなさそうな性格であることをのぞけば。

歓楽街のネオンサイン。フーテン、ヒッピー、シンナーにマリファナ。

もう、そういったことにどのような感情も持つこともないが…。

通りすがりの人、風、空。求めている、求めている——朝…。

赤錆びたナンバープレートが、

行き先を告げることも——ない…。

冬が嫌い、（此の花は、）義務――

法的根拠がないと無視。住民投票したって…縄くれる国、

…ぼ――く…檻の中に入ってたんだ…

鉄の鎖、道德の腐り、因習のくさ――り…水くみ上げるとく自然のカラクリ、

、

すいちょう

波瀾――こんな暮らし、小さな四角の自由、衰凋の…

捨てたも同然、罰あたり。（介護する、此の花は、）

親の因果。何れの日にか止まむ、生まれぬ先の身を知れば、

必要無い。（無、）疎ましい。其の全て――（此の花は、）

*fragrance*…ぼ――く…盛りひさしきよろづのあはれ、

あぶな い――

ファナスチック

…傷つけ合う、狂信的に。けばけばしく飾った、愛が、

遺伝の後天的なものと気付いても何時とは無しに消えてしまう恨みで、

どう

おいめ

性格破産――如何にでもなりそうな負債だけが限界点へゆく、毒…

「殺したいほどお前が好き――…」

（みずからをいやしくまっくろいたねにせよ、 ）

（鳥の眼、此の花は、）己のが欲情の満足。生物の美しい悲劇…

こたえ

心は恐ろしい憎悪。骨肉…《絶望》に気付いても、心は許すまじきなりけり。

――兎角、俗物で駄目（薪木の燃える、鬼、蛇、此の花は、）

遂に醜く奪い合う煩惱は、七珍万宝。拒絶、饒舌、

さき

…先方へ行く…不快の技法…

そらごと

成功か失敗まで虚言（定まる宿業、重荷、此の花は、）

わな

生活の係蹄の中に入って、火との距離を調節、

自在曲線定規…墮ちていく…、*gas-cooled reactor*…

…ふしぜんな…無駄話、ポーフラみたいにわいてくる…

…ふしぜんな——芝居、居心地が悪くて、艱難…

ああ…ぼ——く…餓え合う、

あぶない——

…ぼ——く…は痩せる、賢愚得失、浮世の捨て言葉、

善悪の境など、「子が生まれるまでの、」（血の責め、意識の喰らう、）

性格破産——情念が無益に搔きたてられてゆく、毒…

「牢裏に繋がる——…」（黒点を認める、此の花、）

希美衣さんと話をする。むり。な。おもちゃ。

はやる気持ちに迷い込んだ足——話をするのが非常に下手な森・お菓子の家。

慰めのような小さな青い花。目には、沈んでいくよう——に・・見える。

僕は目の前の小石を、蹴飛ばす。（自分などには見た記憶がもう残っていないが、元来夢

というものがこの話のように、後に奇妙に思い当ることでも無いと、忘れてしまうのが普通だから何と

も言えないが、）それは、夜の川に、まあい泡をぷくりと吐いた。いろがかわる。（いろがかわる、）は

だのにおい…。

「なんだか、時間取ってもらって、ありがとうね。」と希美衣さん。

なんだか、と、僕も思った。（まあ、いいか。うん。ごめんね一人で納得しちゃって。そ

うだ、竜也に言いたいことがあるんだ。）とか、・・ねえ、どうしてなんだ。耳にあてないと聞きとれない

くらい、声が小さい。メモ自体を消してしまったみたいに、正確には分からないことを言うと声が不安定

になってそんな風になる、という感じで、心配と制止観念が都会の中をうろつく鳩みたいに。

どうしてなんだ——

そんな風にささやく。（脈絡なく与えられる…）

「・・本当はそう言われなければ、いいのに、と思ったりもします。」と俺。

そうだ、本当はもっと、違うことがたくさんあるように思えた。

もっとしなくちゃいけないことも、もっと伝えなきゃいけないことも一一ある、と…

でもそう思えば思うほど、態度がぎこちなくなる。時間だけが流れていった。（結果に作用を及ぼし得ない、という意味で、）今まで、僕らはどんなことを話していたんだろう。

いつも何をしていたんだろう。霧、煙、ざわざわとした物音、荒々しい叫び声、息の詰まる

ような黄いろい塵埃。街は夜を呑み込んで、彼女は女優の衣裳を身につける。（並みはずれた感激

に対する熱情もようやく醒めて、）自然に振舞うことができない。一生懸命勉強して、今度のテストで

百点取るとか、毎日ランニングして、運動会で一等になるのとは、ちょっと違う。違うのはわかってい

る。ただ見つめ返してくる、自由だったなにもないところ、きこえる、きこえない、（ヘルツ、）

（今ここで、彼に言いたいことをぶつけてしまったら、彼は迷惑だと思うだろうか。言いたいけ

れど、言ってはいけないことがある…）一人の自由を気まま勝手に楽しむことを忘れて、違う、違

う…。（それが事実だとすればだが、）でも、違うのだ…。

（多くの水が忘れ去られたままに打ち寄せる、）波打ち際…。

（四拍子をきざむ、）ライトグリーンブルーバックメーカーラベルチャイニーズ…。

「そうね。」と希美衣さん。

（唇の薄皮を摘み取って、）君は…。むり。な。おもちゃ。

そこにいるのはもう、ひとりの弱い女の子で、希美衣さんがかぶってきたキャラとか、

そういうのとはまったく別のものだった。（ナマケモノのようにゆっくりと固まった、）

懊悩、苦悶。香は失せ色は褪せてほとんど狂気になるばかりで、暗い恐ろしい破裂的な烈しい情熱のこころみ。

そのあと、二言、三言あたりさわりのない会話をする。元気、とか、近頃どうとか、だ。天を見上げる微動だにしない一個の石と化す…僕は一一申し訳なく思いながら、少し居心地が悪くなっている。（あどけなくて残酷な、）心…。みんなとおんなじが普通で、みんなが好きに埋もれて、でもそんなの心配もないはずなのに、心配ないでしょ、でも、もし、希美衣さんとのことをゆかりに変に思われたらどうしよう、と…。

（誰にも本当の気持ちは話さなかった、）心の殻…。

純粹であること、先天的であること、生きている間に感じたことや判断したことすべてを嘘にする、その作用に耐えられないのだ。形、釣り合い、あるいは美しい気分の平衡より来る喜悦、自己の平生の性格の内に編み、その作用は感情の根幹を揺さぶり、感情そのものを無意味にする一一苦しかった、腰から下に足がついてたみたいな時間…。

散歩も同じ道、同じ時間じゃないと、調子が狂う…。

ほどけないで繋がれている。（もっとも、いやらしい部分なんだ、彼女…）

力は内包量、すなわち度が…無限大ならば反発力は限りなき処にまで作用しなければならない、すなわち有限な時間の内に無限な空間を充たさなければならない。

（内部に狂おしき苦痛がひそむ時に外形は、痛ましさの像となって現われる、）物質の反発力は延長力。延長力とは一一弾性…。およそ、人間が考え出したとは思えない格好をするヨガのポーズを見た気がした。そしてその時、シンセイザーの奇怪なインド音楽を想像させる響きを内部でどよもす一一。

それを知らずにいる。知らずにいるから、こんなにも、笑って、また次に何かを求める。

喜びは見当違いのものだったし、悲しみも、本当は悲しみではないのだ。

(と知りなら、) 暗示的な、多くを切り離して重要な一部分を示すことでしか、  
最も深い静寂の時は来ない…。

(ねえ、と僕が僕につぶやいている、) 腕の中の耳…。

「学園祭——あるいは文化祭…」

(ジョージ・ハリソンがどうしたって?)

「どっちでもいいですよ。」

ほとんど色のない小さい薄い唇は半ば優しく半ば皮肉に、(にっ、とセンチシヴな皺をつくり、笑い、) 白い歯がきらきらと光る。(軋んでいる四本足が、) 濃淡の異なる夜をつくりだす。そして底から湧いて出るような、胸の奥にある深い秘密の一部分が、こだまする。

(ここは分娩室、) 夜のかげらを——集めて…。

「大変みたいね。」と希美衣さん。

(まるこげの肉をきりわけて、) いままでのことが、かわるのよ…。

「…このごろ、イライラして、苦しくて、疲れて、本当に嫌になるわ。」

——これは大変なことだ!…と思いながら、普通を装う。(火星のように荒涼とした場所で、) 一日考え込んでばかりいるとしまいには病気になる、と言いそうになりながら。

(聞こえないのか、聞こえないのか、) おい、もう咽喉が痛いよ…。

(聞こえないのか、聞こえないのか、) クラッシュ! フラッシュ!

(切なすぎるよ、) ライトグリーンブルーバックメーカーラベルチャイニーズ…。

「はい。」

クスッと、希美衣さんが笑った。

(気持ちのもどかしさ、言いたいことの半分が伝わらないことは、) 悲しい…。

一ページ目からやり直すことはできない、だから、誰もが一様に、目を丸くして——できることならこのまま触れずにやり過ごしてしまいたい、という顔。闇に吸い込まれていた。暴力を働くみたいに——手当たり次第に見境なく…。でもわかってた、いいところでおわれなかった物語に、なつかしい物語なんてない。切ないだけ、きっと何年たっても、何十年たっても——胸が苦しいだけ…さ、だけなのさ、きっと——…。

「訊ねたいことはたくさんあったけど、結ばずにいる点と点ね——」

一拍置いた。むり。な。おもちゃ。

頭がチャンネルをまわしている。これってどうするんだっけ、あれってどうしていたんだっけ、わかんないや——いつまでもずっと、わかんないの、そうじゃない…そうじゃないけど、皿の隅に寄せられた小骨に、あの魚の骨に、咽喉にひっかかったことを思い出す、焼き魚の匂い…。

(オリーブオイルが溶け込んでた、) 脂も…。

(オイルがまざった、) ライトグリーンブルーバックメーカーラベルチャイニーズ…。

「…竜也のこと好きよ。でも、そういうのじゃないの。」

(始まりも終わりも同じであると知っている、) 僕はいつもよりトーンの高い声をあげていた。はい、語っておりますよ…はい、間違いなければ続けてください。そうだね、考えてる。(息が、止まりそう…) 伝えたいこととか、たくさんあって選びきれないけど、やっぱり、一番言いたいのは、お互いをつなぐ言葉、つなぎとめる言葉。(実は同じようなと

ころをぐるぐるとまわっている、) 疑問に満ちた視線に気付きながら――…。

世界一有名な夜が明けるピークのない、(エリマケトカゲのいない、)

起きている時に見る夢、そうだね、同じだろ、そうよ、同じよ、かわらないよ…。

わかんないよ。わからないよ、でも、きっとわかったはず――さ…。

「マリのことでしょ、どうせ。」と、俺は言った。

言いながら、久しく味わっていなかった不思議な気持ちに、心をおどらせる。

「大丈夫ですよ、秀一が何言ったのかわからないけど――

こてんぱんにやってやりましたから…」

いつも周囲に笑いを振りまいているような、秀一の役どころ――僕と希美衣さんと秀一の三人の間柄って、こんな時にいつも機能する。(人目を忍び、露見を恐れ、絶えずびくびくとして逃げ回っている犯罪者の心理だとしても、離陸、) 僕が浮かないことがあれば希美衣さんが励ましたり、秀一に何かあれば希美衣さんがいじって僕が励ますとか…

しかし、ペースが狂ってしまうな…。

(まっ白い、)

(まっ白い、)

言うより、真っ白い、なんてことは、――ない…。

ただ一つ、伝えたい、なんてことは、――ない…。

(しまうな、) 幼年時代はすべての世界が恐ろしい…。

(しまうな、)

――automationなrhythmで。

——もだえるしかできない、

(しまうな、)

(しまうな、)

「うん、さっき、ゆかりちゃんから聞いた。」

「んんーっ！」と、変なりアクションをしてみたが反応はなかった。

じゃあ、どうして、こんな場を、というのがあった。

「ただ、そういうのを知った時に、」

…さわ——っ、と前髪が揺れた。

希美衣さんは気持ちを切り替えるように、大きく伸びをした。(周囲からの祝福がとても嬉しくて、) 奈落の底に突き落とされたような感覚を押し殺す。でも僕は意味を上手く汲み取ることが

できなかった。センスのないジョーク、なのかと思った。(病的感覚や強迫観念が、無用なおしゃべり

を拒む、) それにしては、迫真の演技だ。最後のほうは言葉になっていなくて、語尾がかすれていた…。

(忘れちゃうぐらいに、) さまざまな森の絵を描いてる——。

「感謝しなきゃなって——今まで、竜也に好きだとか言ってたけど、

もう、きっぱり、今日でやめようって、決めたの。」

あえて言うなら——と僕は思った。むり。な。おもちゃ。

(ぶら下がる、) 青かな…。

リハビリだったのかな…そしていま、カムバックなのかな、と思った。(可愛い女の子になってね、) そして恋をしてください、かな。網膜半ば奪われてその洞黒く錯乱せりし——

、、、、、、、、

枝葉のさざめきが、……………

聞こえてくる。はてなくのぞむ、文明というあやしきもののひろがり、——一個人に言う。

その人が、後に何を成すのかの方が重要だと。（でも、僕は雨を思い出す、——思い出す…）

雨はいつでも、僕をずぶ濡れにした。心臓も歌う、濡れる、手はすべる、——下着も靴も等

しく不快に貼りついて体温を奪う…。よくわからないことがよくわからないとこで、擦れ違っ

ていて、いまじゃ何にもよくわからなくなっていて、わかんねえんだ！ わからないんだ…。

（言い分は一言一句、細大漏らさず聞いて、）ハロー、と相手に言えるぐらいの…。

（切なさ、かな、）ライトグリーンブルーバックメーカーラベルチャイニーズ…。

「あなたの隣の席は居心地がよくて…ずっと、その場所にいたいと思ってたけど、」

考えてみると、こんなセリフ、異性に言われたら普通どきっとするよな、と思った…。

（嘆くべきことなのか、祝福すべきことなのかわからないが、）思った…。

でもどうしてだろう、——いままでは、ドキドキしない。希美衣さんが本気だったとか、嘘

だったとか、からかっていたとか、いや本音交じりだったと見破っているいまでも、そのセ

リフは、ゆかりじゃないと反応しなくなっている。最近になってよほど明るく変化してきた

主観的な世界では、頭に浮かんだことを、深く考えることもなく口に出してしまう癖を反省

して、考えながら喋る習慣をつくっている。生んでいる。でも、希美衣さんを拒んでいたか

も知れない。艶めくような夜は、はかなさと妖しさとつめたさが混在している。夜に開いた

隙間を埋めるように、空想の雨の旋律…。

（わらい、）夢見てしまった——。

（自分を仮装したり、警戒したり、絶えず神経を使ったりして、）雨…。

すうーっ、と風が吹いて、頬の熱を冷ます。夢のなかで想像している、涙は、どんなものよりも嘘っぽくて、（ドロップみたいな、）小さな窓枠をもっていて、そこから、リー・マヤとかジョアンヌが出てくるんだ。スイッチオンスイッチオン、くりかえしながら、かもちゃんが遠くで、戦隊している。（ロボットしている、）僕等の、昔話みたいに…。

どうしてみんなが、アイツのこと好きなのか、ちょっとだけ、わかる気がする…。

「離れてみて、少しだけわかったことがあるの—

あたし、きっと、竜也がいなくてもひとりでやれる。

最低、マリちゃんみたいな馬鹿なことはしないって誓える。」

「知ってますよ、ずっと。」

—たとえば本に挟まっている、不格好な葉みたいに…。（ブラボー！ ブラボー！）意識が呼び戻されていく—。（その、ぼくらの背中を、）空白の天使が、夜を飛行する、おでこを光らせながら…。

ぼうっとしている…ずいぶん、変な気分だ。けむりがしみる、瞼を、とおくまでのぼしているみたいに、一日ごとに滅んでゆく細胞がまだ手に残って—いる…目覚まし時計は、まだ鳴らない。パジャマは、まだ必要としない。

けれど、息ができないんだ、さくそふおんさくそふおん！

（いんた—ふおんいんた—ふおんきこえるの先、）いる…。

（経験の統一から見て経験の対象とはなり得ないもの、仮象。）いる…。

（蛇が目をひらく瞬間の、）ライトグリーンブルーバックメーカーラベルチャイニーズ…。

線香花火の火花が、

間歇的に、

小さい火の球から射出される。記憶の朦朧は、

いまもなお寸断されているうつろな異装、

火薬は0.08グラム。

視覚的造形物…。ヒューズ、

すなわち幻像の奇怪なる饗宴。

凝集と発散との間に、如雨露のような緩い雨垂れ。

命が宿ったかのように酸素を取り込みながら、

どんどん大きくなっていく火の玉、あらわれて――

消える…。うえからしたへ、井戸水の冷たさ、麦茶の味、

さらに、したへ――風鈴の涼音、夜の海の波の碎ける音、

多分に沈黙を好む、さえぎれない防御不可能なもの、

「洋火 三色芒」ではなく、それは、それでもそれは、

(塩素酸カリウムやストロンチウムではなく、)

めざめていた…。むらさき色の神経の歯茎のかゆさ、

すみやかなvibrationの追跡…。

「和火 炭火」

(硝石・硫黄・木炭の、)

――神秘なる花びらの耽美性…

やがてパチッ、パチッと一つずつ、

乱調なのどくび、見えない、筋組織、雷紋の熱狂、

とりわけそして曲解された葉ずれ、

(思い出は見おさめ、君の量産されるN U D E)

(永遠に私家版のパンフ！)

EROTICな・・・その光はぼうぼうと、あえぎの夜を加速させ、

地名を記述し、思い出を母語のたゆたいの中で捏造する。

力強い火花をねじれさせながらフレアせる――860℃から...

940℃くらいまで温度が上がる、この移動・・・めくるめき、

移動せよ、飛び火せよ、ふらふらとリズムなく、

蟹は甲に似せて穴を掘る、

あらい去り難い、重い罪の斑痕――。

あるいはもう、無数の毛根のからみつくありさま、

気づかわしげに崩壊に根差しながら声になりそこね、

それでもどこかやわらかく温かみのある火花は、

遠い埋立地、濃艶と奇異のセンセーショナルな既知の記憶装置、

深くは追求しない時の棄てられた不安の多様な流れのなかで、

優美な火のアーチをうみだし、はじいて、脂のように、

咽喉の奥で滑って行った、端緒、ずり上がる、ノイズの成分へ・・・、

皺だらけの薄い皮膚に見えてしまう、紙片となったてのひらは、

枝の迷路のように風を希薄にしながらにして不在な、

霊の息をこもらせ、葬儀・・

係累が増すのはひとつのかなしみ、

うすくはがれてゆく現実の収縮する、alibi。

最後の花をつくりだしたあと・・飛び散る火の粉は、

火の精――電気・・850℃まで下がり、

赤からオレンジとなって、盲目的な愛のうれいやつらさ、

ときのあるよろこび、…………。

短い蟬の一生を彷彿させ、一抹の不安を胸のしこりとする、

不意打ちの感傷主義、NOSTALGIA…

異国情緒なその火の魔力で、病の亢進、不明の轍・・

しかしそれで、しかしそれで、夏の夜は魅力的。

ひかりの粒子にまみれながら、

絵になる月灯りのシルエットも――

「ひとりでさみしい――

泣きそうよ・・」と。

彼女がそっと僕に言うため――・・

少女の言葉や、仕草は、

こんなにも――儚く流れ落ちてしまう・・

とそんなふうにかんがえながら、

いまにもみつけてしまいたくなる原形質、

――ずり落ちてしまう、僕のジーパンが裏がえる、  
くぼみ、穴があいて、引き寄せられてしまう、接近し、  
とおざかり、うずまきし、  
迂回されてゆく――、  
何がわかっているとしても波は伸びてはゆかないし、  
棒の先から、一本の道が、  
視覚障害することもできない、余韻、  
その硬直するひきちぎられたあとの草、  
あおざめながらさわやかに泳いで行く、  
欲望は、あや目も分からぬ真の闇に、  
めくることのできない、  
筋肉のバネを記述する――八月・・。

花火をする。川原――

高周波の音がしそうな気配がする――虫が飛んでいる・・・コウモリを想像させる。いや、木の枝のUSBメモリ。さもないと、盆栽型太陽電池式充電器。このほかにもカブトムシ型たんす。そのほかにも、パズルのような本棚・・・ああ、僕等の時代の、膨張しているオフィスビル・・・

*It came apart...*冗談はさておき、 He fell apart!

to keep a person apart from someone or something!

*It came apart...*冗談はさておき、

それにしても、何故ここにアロエがあるのかわからない。( *I' ve no idea how...* )

高層マンションに椰子の樹があるようなものだ。いや、――取り合わせとしては、巨大なサボテンがあるようなもの・・・。 *I don't know about that kind of thing...*

川の両脇には土を高く盛った土手があり、その上がサイクリング・ロードになっている。

君は走る。Enjoy running...Enjoy running...

夕方頃だったら、短く刈り込んだ野球少年たちが遊んでいる。君は投げる、いきみながら、投げる。フリスビー！ 小石に！ フェイク！ チェンジアップ！

(朝方なら、ランニングをする三十代、ウォーキングをする五十代と勝手に考える人達が走っている。――走っている・・・)

そう風。まさしく、風。

ニヒルな笑いで脱兎！ アヒルな動きで脱帽！

――僕はどちらの時も、土手で寝転がっているか、

ベンチで窮屈そうに肩をすぼめて煙草を吸っている。軽やかに駆け抜け、

横から追い抜く時に、the world's end―the ends of the earth―

the confines of the earth―the four corners of the earth...

*It came apart...*冗談はさておき、He fell apart!

to keep a person apart from someone or something!

*It came apart...*冗談はさておき、

対岸の土手までは五百メートルくらいの幅があり、内側に、野球やサッカーのグラウンドや、芝生の広場、ゴルフの練習場などがある。川の付近には、工場が多くある。そしてその工場は、マニアでもない限り、チョコレート製造工場である。

(僕はPearl River-珠江へと垂れ流し状態の川のことを思う。)

(デニム産業・・・毎年、二億枚ものデニムがここで生産され、染料や脱色材が混ざった何トンもの排水が垂れ流された。規制はしている。でも取り締まりは数が大きくて厳しい。そして川は黒くなった。川は墨汁のように憎悪のように黒くなった。)

(それでもデニムを穿きたいか？・・・オーイエス、穿きなさい！)

・・・幼いころに見たテレビ番組の砂漠みたいだ・・・受容体拮抗剤――。

*No rain falls in the desert...*

ちなみに、僕等は野球のグラウンドで待ち合わせをしていた。していた、のは、鉄アレイ

のことじゃない。古くがっしりとした石の階段をおりていくまでの、足かせみたいな、僕等のプラネット的事情。君は繁殖力が強く、夏雑草の代表的な強害草の一つアキメヒシバが見える。白色を帯びた緑色で縦の筋がある楕円形のミチヤナギが見える。足下に、セブレイレブンの袋が見える。ゴミが入っている。君が死んでいる。お前はもう死んでいる。それは漫画だ。ぶるり、と両肩がふるえる。急速に、目の輝きが失せていくような気持ちがある。そして、目の前には、がっつりペンキの剥げて木の地が見えているベンチが見える…。

こういうのを、コップの中の氷が溶けていくような、とでも言うんだらうか。

氷解とは違う、ゆっくりと溶けてゆく――怒りを含んだ、氷…。

**a burnished sword**...そうかも知れない。

**a burnished sword**.....ふかふかの気持ちいいベッド。

しかし、川に秀一と来ると、石投げ…誰が一番石を跳ねさせることができるか競ったりしたことを思い出す。でも川に来ると、僕はプチトマトのことを思い出す。レタスではないところが残念だ。もちろん、皮肉である。しかしキュウリと露骨に言うよりはいい。小学校で低学年が作っていたプチトマトをもいで、籠に入れて、あらやだわ奥様といいながら川で食べたことに起因する。ひどい上級生もいたものである。本当にお前ってやつは！　こらこらお前のことだ。ともあれ、石投げは川の伝統行事だ。石を持てば投げる――石器時代より続く下品であり、邪道であり、しかし野生のフレキシブルなDNA的邂逅である。

アンド、スイーツ（笑）

ドラッグアンドドロップ操作で！ パワーアンドフリー！

カットアンドペーストによる編集で！ サクセスアンドピーナッツ！

steroid打つのがa nebula called the Andromeda Nebula!

うむ、そしてもちろん、パンツ一丁で川泳ぎをする。光景的には、昭和のよき時代なのかも知れない。僕はアマゾン河ではそれをやらない。バナナを食べたらするかも知れない。嘘だ。きつとしない。でもアマゾン川では無理だけど、インドや中国では生理的にというより命の危険を感じるためにほとんど駄目だ。無理と駄目の違いはもちろんイントナーションの違いということにしておくのさ、爽やかにね、キャッチボール。サッカー。探検——自然的世界知の形而上学的原理と実践的世界知——批判はロマンだろうか？ 耳に届いて孤独の遊び相手となる、線香花火。

希美衣さんとマスターが声高に話している。秀一と、花村さんは静かに。

(「ジョリジョリ……この髭そりがたまらない——」)

でも、その騒がしさがありがたい。たまらないのは、暑い夜に入るプール！ 僕は大きな溜息をつきながら、ゆかりの背中を見る。深い背中開きの洋服。自分の彼女だけど、漂ってくるオーラというか、神々しさに圧倒される瞬間がある。背中というのは、目や口や鼻が見えない分だけ、変なものだ。もうお尻を見るか、背中を見るか、太ももを見るか、うなじを見るかしかない。いや、あるいは、隠しているけれど男性は女性のことをそんな風に見ている一瞬に性や立場に覚醒するのもかも知れない。きゃしゃで、背筋が伸びていて、無駄な脂肪がついていない、背中。商品名や店のロゴが入っていない段ボールの断面みた

いに思える、背中。目玉焼きとサラダしか食べていないみたいな背中、と言うべきなんだろうな、きっと。その背中は、川のように陽射しにさわられてしまううつくしい背中。女の子たちは、ゆかりに聞くんだ。背中、背中！ そんなに痩せて大丈夫なの。ギスギスするでしょ。大丈夫オーケーイエスペニシリン！ ヘルシーな和食薄味中心だから、野菜たべすぎベジタリアン。もうすぐあなたはオバタリアン！ いや、それではギャグですよ、お嬢さん。でも、ごちゃごちゃしている世界にモノは増え、さらに狭苦しくなるようなダイエット方法を事務的口調で一分の隙もなく捲し立てる。背中、背中です…広告——宣伝…手間のかかるダイエットより、その克服より、血液型や占いを信賴し、人の心配を装っている人のさもしい心理。心配することは保身で、背中…エクササイズのように不敵なポーズを繰り返す。自分に有利な展開へと持って行くための、切り口上であると見破られているとも知らずに。誰と、買ったの？ 通販。ああ、暑い、暑すぎる。ねえ、団扇とか扇風機じゃないよね。ああ、恥ずかしくないのかな、露出狂だよ、とサディスティックなプレイ決めたくなる不思議。肌をみせるのが流行ってる時代があったり、プライベートビーチでは年がら年中サカってる…

ベッドの上では？ もちろん、ヨガリあってる…

*It came apart...*冗談はさておき、He fell apart!

to keep a person apart from someone or something!

*It came apart...*冗談はさておき、

あいまいな角度のクレーンみたいに固定されて、機械という明るくて元気なそれが、内向

的で気が弱く見える。いや、そもそも感情なんてないのに。でも感情なんて、耳かき用のようなスプーンでアイスクリームをすくっているようなものだ。とことん頑張っているタイプの子がノイローゼになったり、背負い込みすぎて、頼られ過ぎて誰かが自殺をしたりする…。

薄い雲のような絶望感——得体のしれない不安…。

…あえて名付けるとすれば、憐れみか。慈しみではない。

僕はゆかりの背中を見ながら、アングルという画家について考える。

沈黙、そして重い空気…

その背中からはきっと薔薇の香りがするに違いない、と僕は思った。睫毛の端を掠めて泳ぐ、尾びれの美しい紅い魚。鯉だ…息を吐く分だけ、切れ間が出来るコマ割り。こんな時は、ゆっくりとことんまで、誰かと話せそうな気がする。ギャグを一つも言わず、ゆっくりと、言葉を選びながら。でもこんな時は、必ずと言っていいほど、誰とも喋りたくない。甘く切ない…あこがれが熱を持ち始めた距離で、つむじのあたりの自然のバランス崩れてゆく。口を閉じ、目を伏せ、夜にだけ見える速さ、降り注ぐ雨のような淋しさ…。

川から上ってくる風が、気持ちいい。

I'm feeling good! The wind feels good today...today...

ハッポー！…と言いながら、かもちゃんが、ジョアンヌと、リー・マヤと一緒に土手で、段ボール滑りをしている。俺はそれを見ながら、溶接工のマスクをする。花火をしようと思うんだけどナ、デモ、ソレカラダナ、と訳のわからないことを言って、グワグワ、

ばさばさ…なんだろうと試してみていると、飛んだ！ わけがわからなかった。そして全身で、鳥～！っていうことを主張していた。開放的な種族である鳥、——かもちゃんには、目の前にあることがすべてだ。オープンマインドが重要だ。世界は多分イエスで出来ていて、最後は君がイエスになる。

(動物園のふれあい動物コーナーでうさぎに直接さわる。)

「…そんな奴はもちろん焼き鳥屋で料理されてしまうだろう。」と、言うと、

「あ、また、悪いこと言ったダロ！」

それは直情径行あるいは猪突猛進と揶揄すべきなのか、それとも、と思う。僕は鷹揚に構えている内に、見ないふりをしている内に、存在自体を忘れてしまったものはないか、と思う。回想やイメージの反復。叫喚、嫉妬、不安、恐怖。きっと…そうやって、沢山のものを取り逃がしてしまったんじゃないか、と思う。大抵、雪につぶされてしまう。好奇心の花びらが歓びに濡れてしまう。それは商業主義的なソルト・ポルノグラフィーへの幻滅や軽侮といったものに、矛先を変えながら、しかしある意味では暗さがあり、心理主義的傾向を持ちながら、ひしひしと伝わってくる…くるのさ——肩のさびしい斜線の、すうとすい鉛筆でひいたように薄く流れ、細くとがったような、肘の骨が見える——まるで、こわれ物…

*It came apart*…冗談はさておき、 He fell apart!

to keep a person apart from someone or something!

*It came apart*…冗談はさておき、

ロッカーの鍵を開けている浮浪者――…。

あるいは、アコーディオンとハーモニカの共演…。

そこに、干し草のようなやわらかい感触があって、鶏卵を見つけたような熱い衝動を呼び起こす。超高性能な望遠鏡と電子顕微鏡を目の中に持っているみたいに息を呑む。足許からビルそのものが崩れ落ちる錯覚。ぞくりと悪寒が背筋を走り、平衡感覚が失調する。

問うことも、答えることもなく過ぎてゆく影…。

愚にして賢…いつまでも恋人同士のような関係が続けていきたい…とか――自分だけを見てほしいとか、自分のためだけに、頑張ってくれる、もちろん自分も彼女のためにとか、この人がいないと生きていけないとか、無茶なことをたくさん思う。一本一本触れ合って軽い音を立てるような髪の毛を、光が滑って行く…。

光は賢くあることのみ必要なんだ、溶鉱炉もそうだ、熱も、光も…。

、、、、、、、、、、、、、、、、、、

朝の陽射しのようなひとすじ――。何を見ているの？ 蛇口をひねって、勢いよく水があふれ出したみたいに、いま、唇に手の甲をおしあてて、水の味がする。手持ちカメラ、望遠レンズ。深い場所で息する哀しみといらだちがひそんだ無言の夜。

微かな背中の震えは手の届かない距離…。

――逃げないよね？

……逃げない。

(火ってさ、脳味噌と首筋あたりにある気がしないか？)

(――火って、気が強いよな、負けず嫌いで、何にでも首を突っ込んでいく)

身長がまだ十五センチは低かったころ、二十センチ、もっとか——もっとかもしれない…いつものように始まる。塵の吹き溜まり、雨水の溢れた路端。そして、頭の中のスケジュール帳—カレンダーをめくってゆく。

深く、深く息をして——バケツの中に、花火をジュッと入れて消していく…。

だから、海だと僕は思った。

波が引くと、世界が海のほうへ引っ張られていく…。

コインランドリーは、

雨の日以外は閑散として、

——湿り気を帯びた風に、

…時々胸の声、

……病。

今日 だって…

単純 だから

秘密 だよ…。

僕の心臓がね… 」

アパートもまだ空いたままで、

耳に焼き付いた )

ス キ…

半袖に一枚羽織ってもよさそうな、

涼しい風が吹いて、

妄想するばかりの

片思いしているみたいな )

特別…

背を向けて、話… 」

受話器を左耳にあてて、

肩で押さえているみたいな、

歩き方をして… )

一体どんな顔で、

どんな声で俺の理性を飛ばし——て…、

る。ノーガード (で、)

どっかスキが多い (ね、)

——洗濯のいい匂い、

…が、またたいて、

……すれちがう、人ごみ。

、、、、、、、、  
イイダストキカナイ…

波間で 足掻く 夢 へと…

…流れ…星……

、、、、、、、、、、、、、、、、  
ネムレヌヨルヲヌケダシテ…

今日 だって…

単純 だから

秘密 だよ…。

僕の心臓がね… 」

ぱちぱちと爆ぜる音をたて

小さな赤い炎が揺らめく )

世界..

哀しみの手をひいて..いる——

永遠..臆病な時計の針を止めても、

手遅れになる、

ビー玉揺れるラムネ瓶 )

恋愛..

もっと..恋をして——

少し焼けた肌に アイタイ

過去の辛い記憶.. 」

不確かな、オレンジの教室、

夕暮れが美しく、君がいて、

陽だまりの匂いがして.. )

、、、、、、  
コイヲシタ..

今日 だって..

単純 だから

秘密 だよ..。

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、  
イロンナコトムズカシクナッテ..

胸が苦しくて…」

苦しく て――

ス キ…

\*

目が合っただけで恥ずかしくて、

だって だって だって…

世間体ばかり気にして、

カッコ悪くて、泣きそうなくらい、

どうしようもなくなって、

一瞬では永すぎて――

永遠は切なすぎて…

駄目…

勘違い…

喜びに満ち溢れた世界は哀しくて、

失敗じゃ終われない恋をして、

でも自己完結で終わりそうで、

穴があったら入りたくて、

言葉につまづいて、

だって だって だって…

好きだって言った――

好きだって…

くすぐったくて恥ずかしくて、

子供みたいにドキドキして、

眠れなく――て…

気になっ――て…

一番大好きな人が、

後悔の道に引きずっていくようで、辛いよ。

退屈やさみしさは君から生まれて、

愛しさのすれ違いもそこから生まれて、

綺麗ねと見ていたあなたのしまいを引き取る言葉に、

目を伏せるけど、傷つけるつもりもなく、

わからなくて、たくさん笑って、

「借り物 だよ…」

そう…………

(偽物だ よ――)

風がふわりと甘く香るような気がして…

音楽が流れているみたいに胸が弾んでるのがわかって、

すぐにこの気持ち伝えなくちゃ...

世界が色づいたのが自分でもわかるのがうれしくて、

明日晴れだなんてどうでもよいのに、

優しくて、その言葉が君じゃなかったら、

君じゃなかったら——君じゃなかったら、

君じゃなかったら！

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、

そんなこと言う必要もないし、

だってもう、またおんなじことの繰り返しって、

ぼやきたくなること..

...止まらなくて、

たくさんしゃべって楽しかったけど、

でもきっと何回言ったかと数えるような、言葉、

自分勝手にどこか独りよがりな気持ちも消えなくて、

それで勝手にあきらめている自分も嫌いで、

それでも心の中にはさみしい気持ちもあって、

だって だって だって...

ずっと見ていた、

背後に迫る朝、気持ちを悟られないように意地悪く笑って、

顔から火が出るほど恥ずかしくて、

目をそらしてしまう僕はやっぱりカッコ悪くて、

どうしようもなくて、

駄目”

勘違い・・・

## the alimentary canal

---

ない、アングラー。

果実のころがりおちるのに似て…

落下、衝突、行方知らず…

、、、、、、、、、、、、、、、、、、

僕のアキレス腱が断裂する……………。

黒い言葉の上にひきもどされた。柔軟性を向上させよ、

十分な合意が得られた状況ではない。留めゴムで固定された、足首が、

だんだん深く、この黒い霧を求めていく。それは棘のように刺さりこむ。

でっちあげるわけじゃないよ。ただ…それに、

偽りがなければ、いまこの瞬間に、

ずいぶん簡単なことで幸せになってしまえる——。 僕さ…

《腹を切り裂くんだ——》

《もっと、もっと…》

星のすき間で、とうめいな指令。

いくどもなぞるゆび——が…

まなざしの奥で、とうめいな夜を揺らしている。赤くなる…

だから、花がちぎれて——く…

イ マデモ名前を、

呼んでいても……。

言葉をいくらねじまげたって、もてあそんだりだりしたって

結果として不幸がもたらされる以外に、どんないいこともない。

(Ah あしのつめは、のびすぎた——。)

聞いたこと、感じたことは、

ずいぶん長く忘れていた、ほんのちいさなこと。

くりかえされてゆく、夕焼け——彷徨う、

僕の中のピアノ線。僕の中の電線——

目覚めろ……!

**目覚めろ……!**

「ウィンチェスターライフルで、撃ちたい。」 (夏の夜明け……!)

いまのまま、でも、いい。

本当にそう思う——んだ……

でも、夏の暑さを凌げても、胸の熱さは消えない。

蛇口から垂れる水は、つめたい……

きらきらしたかたまりは、ひとつのなにかの、終わり。

腸内にガスがたまって腹部がふくらんで——ゆく、遠くにある、

何かを引っ張れば、その時点で何かが粉々になる。

(ステロイドホルモンとか……

ヒドロコルチゾンというホルモンとかを考える—— )

ねえ、カメラのレンズの明るさを、カ氏 32 度の氷とでも呼ぼうか――

呼ぼうか、あるいは、何度も何度もかきませる、夏の魔法と呼ぼうか。

まつげからこぼれ落ちる、水溜まり。

この夜の速さ――物音を吸い寄せる…。

無秩序で残酷な見せ場が...

どあのぶのつめたさをおも...

(いまがただしいみたいに

(これからもそうであるみたいに

明るくて暖かそうな方へ方へとあるいて行く。今から、

消化管に同化される。絞めあげたマフラーはもうない。

ネクタイもない。ただ――吸収可能な状態に変換される…

誰一人知らないような街で、だるさを曝しながら――

現在のルールを全消去、ファイナルオブジェクト…

「でしょう？」

(デッサンのない絵なんだ…！

(そしてもう、人生を切り刻むだけなんだ…！

けれど――

クルシイ？　くるオしい…

天使が、風向きなど…気にするわけもない。

気にしてるのは――もっと別のこと…

少しずつ消えてゆける、涙の前の液体よ——…。

罪を犯したことが、ある。けれども全部沈んで、

なまぬるい、あめ、

がらす——まだら……つたって落ちた。

誰にでもすぐにわかってもらえそうにないことがある？

はじめて浴びた雨——でんわの音…

だからきっと、良心の呵責も感じていない？

何度だって、噛み付くための道具。ポスターだって、

入れ替えなし。心の奥で、僕は思ってる。無声映画だ——

そして本当に、心の中にある街だ。

いつの日も変わらず、祈っていること…

そしてきっと、あるがままに時が過ぎる——。

妙に黒く澄んだ二つの眼（から、）

弱々しく震える色褪せた唇（が、）

あつて、どこにも存在しない……

肌がなめらかになり色が白くなるかも知れない。

ひどくおかしい劇。すばらしい絵。

（Ah 憤死したとは突飛な飛躍で）

それでも、喪失？ 胸焼けを起こしそうな、poetry——

それでも魂は帰れるのかい、と、よびかけられる。

でもそれは、消えないということだね――。

消えない…消えたりしない――

手を伸ばしただけで、視線の先で、触れあう…。

(Ah あしのつめは、のびすぎた――。)

永遠は遠く、**愛**は束の間――に…

僕の言葉なんて、クレオパトラの鼻ほどのこと…

パスカルの警句みたいに、夕焼け――てしまう…

でも、僕の中の修辞学。僕の中のVivid――

よがりまくれ…！

**暴れろ…！**

## 空気

---

商業中心の世の中に娯楽が溢れ、

ひどくはにかむ朝。荒涼たる焼け跡の後、

気まぐれな時計は主人を殺すための、

響きを得た。僕は胸元に左手をあてて、

瞑目する。朝、望むのは、快適な生活。

板につかない、自分探しの戸惑いに、

鳥の鳴き声。でもいつかもっと簡単になる。

力なげにもてあそんでいた砂のように、

ロボットになる。そして僕はすぐに、

切っ先の鋭いナイフになる。わかったよ、

それが自然に従うということなんだね。

まるくあいたくちびるから、無様に、

ほおばるホームレスの顔。わかったよ、

それが僕らがここで手に入れることが、

できそうな、唯一のものなんだね。

ねえ、唯一のものだって言いなよ。

ねえ、僕の町はどこもかしこも、

凍りついてる。手紙をポストに入れる、

あの音も。景色も。そして見るのだ、

僕は、新聞を。ニュースを。

何でもやりかねない政治屋。

こんがらがった頭の中で、

ウエッジウッドかヘレンドか、

ロイヤルコペンハーゲンの器に入った、

コーヒーを求めている。蜘蛛は、

昆虫が巣にかかるのを、待ってる。

腕のなかで、彼女が逃れるのをやめ、

切なそうに身を任せるのを、待ってる。

良いギターを掻き鳴らしながら、

声帯の振動。鼻の上の汗。僕らは、

いつまでもぴったりくるものを、

探し続ける。水を手に入れるために、

僕は川へと行き、夢を手に入れるために、

僕は町へとゆく。そこで、無造作に、

空に放り投げられた帽子みたいな、

気分で、地球の画像。マグマの画像。

家に帰ればキャベツを洗い、そのあと、

ザルにいれ、水気をよく切る。

その間にトンカツを作る。揚げる。

そして、ぼんやりとする。さあ、僕よ、

君はこれで満足か？僕は、

鏡のなかにいるような気持ちに、

なりながら、僕は、そうだね、

見つからないものが増えたね、と。

見つかったとしても、

わからないかもしれないね、と。

名を呼ばれ、人として暮らしながら、

時折邪悪でずるかしこい生き物に、

なったような気がする。そして、

こぼれかかる溜息に疲れる。

短時間で分かりやすいルート地図や、

目的地への必要な情報は、

本当に簡単に手に入るのに、

どうも相変わらず僕らは空気の中で、

空虚な沈殿をしながら、他人事のような、

発言をくりかえし、それでも、

酸素を必要として、誰かに、

たとえば燃え盛る炎に、

当たり前のことを口にしている。

彼女が見つけたもの。

彼が手に入れたもの。

――まるでずっと前から、

そうであったみたいに、

一緒に並ぶ。

高い所から手が出てくるのがこわい、

僕等は、 ..

飛行機が通りぬける間、

ずっと、手をつないでいた・・・。

ふたりで帰るのは、

ふたりで帰るのは、

久し振り。

リア充のすること、

と思っていた時期もある。

都市伝説みたいに、

恋愛映画を見ていた。

お洒落な服も持っていないし、

カッコいい要素自体がひどく不確定で、

シングルプレイ、ソロプレイのエロゲー状態。

(股間にビッグバンの異変が起こると、

僕は、非常にもぞもぞした。)

やりたい、というのが、

非常に厭らしいことのように、

思っていた時期がある。

、、、、、、  
違いますか？

ポン刀で一閃。

、、、、、、  
違いますか？

44マグナムで眉間をブチ抜きたくなる一瞬。

見ていられないような、

恋愛が展開されることになる。

それから、

結局どこまでいっても、

自分は何をしているんだ、

いったい彼女は何がよくて、

何処がどういう風になっていう気持ちは、

消えていかない。

(ある日の僕等がそう思ったみたいに、

オワタ宣言をしよう。)

でも、何だか淋しかった。

でも今回だけなんだ。

言葉が足りない。

だから擦れ違う。

もっと分かりたい。

でもひとりになりたい。

人一倍、

感受性が強いから、

視野が極端に狭くなる。

人間と猿の間には――

モラトリアムがいる、

あるいは永遠に、

大人になれないような人達がいる。

でも、手をつないでいると、

テンションが上がってくる。

ハッピーな空気が流れてる。

劣等感、孤独、

自分は どうして？

慣れ切った表情、

予言のような空。

「それでどうなったかって？

そんなこと、起こらなかった！

だからそういう思い込みを、

ずっと引きずっていくことになる。」

「引きずらなくなったら？」

「引きずらなくなったら——…」

ゆっくりゆっくり、

時間が止まる、

止ま——らない…

でも、ゆるやかにになる。

むせかえりそうな、

はげしすぎる、

葛藤——。

潜水艦の中で、画面から目を逸らすことはできなかった。四海は、ピアノ調律の破片群が作り出す膨大な運動エネルギーを保持していた。そしてそれは多くの影響を与えると予想されるよりも、多くのパンチを保持している。自衛隊——軍隊。法律——憲法……しかしそれだけに、剣呑な一瞬だった。冗談のような音声、次いでジェスチャーが繰り広げられた、沈淪の美学。壊滅的な時間の経過。敵艦隊である光の軌道は次々に通過していき、気がつけば、画面上には、レーダーも光学センサも、モジュール間の連絡通路も、機位変更のシステムも無効にされていた。何を意味するか？……それさえも空っぽ。伽藍堂——咄嗟にフィネガンズ・ウェイクを思い出したほどだ。規律や規則よりも、どんな映画のワンシンでも、音楽のフレズでもなく、意味不明な言葉の連なり。かろうじて、宇宙の括弧内で意味を留めていた。腋臭も、煙草も。金曜日になると出てくるカレーライスも——それでも、優秀だった。粘り強く誰もが認めるだろう。華々しい着水式、お披露目……ニュースは連日放送され、この国の新しい変化をSFではなく、ゲームでもなく、圧倒的なリアルで感じさせる潜水艦が優秀であるか否かを、よもや間違っ、て、“否”という者もないほかに。そうだ、いまだに呼吸は普通に出来るし、衝撃を吸収する素材をそなえたこの艦は、いまのいままで、探査-戦闘管制という二大原則を守り続けていた。気取らない花束だ。「区画化」だ。そ

うだろう、それどころか、損傷が何箇所あるかという連絡もおそろしくスムーズだった。哲学的な問

題も、宗教的な問題もナンセンスだった。問題はただ一つ、長期間の連続潜航であるあまりに数

年に一度という最新式の潜水艦に、冷凍庫を正確に作動させられるか、それのみ、というのは

――ジョークだったが、宇宙用とまで言われた潜水艦。だが、手遅れだった。移動自体が物理的

に不可能な攻撃を受けた時、外扉に危機的な歪みが入った。怒濤-激浪・・ついで、そこから爆撃

が入った。そこで、深刻な速度の減速を余儀なくされ、瞼のシャッターはしきりに息苦しくボタンを

押した。舞台の上の脚本が、すりかえられたかのような失意。それでも、ただちに修復につとめた

のだが、最終的に不可能。切断-閉鎖するしかない、我々は地上でおこなわれた緊急会議で決

定を受けた。緊急脱出用のプログラムとして、海面まで逃げることのできる装置がついているのは

奇跡的だが、しかしそれとて、起こらないことを想定している以上、安全であるという保証は絶対に

ない。隣接しているのは、不可視性である。消しゴムはいくら巨大でも映画のスクリーンにはならな

い。乗務員は全員で四十九名。もちろん、コックも含めてだ。だが、機械文明らしく、脱出にさえ被

弾の可能性はあるということに、何ともノスタルジーの化身といった全身的疲労感であることか  
。

原子爆弾の脅威から、ついに日本の法律が切り替わった末に生まれたこの潜水艦が、いま、政

治的な陰鬱さに似て、漂流している、というのは何とも滑稽な消臭効果。牛の糞便を、おのが小便

で臭いを消そうとするような馬鹿馬鹿しさか。いや、尾籠すぎる比喻か。それでも赤い文字の緊急

事態をしらせる数字のカウントダウンだけは、自分の荒い息遣いに連動しながら受け取った。そし

て衝撃が来た。端末を操作している乗員から、「限界です。」の連絡。後ろを振りかえると、既に真

っ青な顔をした二佐の姿。血の気が失せていく。沈む…少しずつ、いや、そのひとつひとつが、免れ

得ない事態を想像させていた。歯車の外れたような軋み音。ゆるぎのない大きな石のように思っ

いた潜水艦が、強引な力で、たとえば巨人にぶんぶんと振り回されているような、振動を受けてい

る。不気味な横G、凶暴な運動エネルギーは危惧、心配、不安を予想以上にあおった。それは予

想以上に気づまりな気持ちにさせた。客観的な記述――それは目に見えて、雨に煙る古い街並み

の人びとのように、権力が、威力の前で沈んだことを明らかにした。緊急事態の作法として、各部の

点検シミュレーションを、ためしてみるが、何事も始まらない。この艦の最も奥深い所で、正常な動

作が拒絶された証明なのだろう。気密が漏れ、生命を維持するための作動状況のすべては、単調

に、しかし確実に欠損として増加していき、いまま途切れることなく、おそらく最後の最後まで続くの

だろう。手紙文の結びまで――レーダーや通信システムに不具合が発生している。機能の回復は

、  
どう考えても不可能だ。非常用の点検プログラムを、作動させてみる。だが、それはパーツの交換

を必要とする。自分は誰よりもこの艦に詳しい。攻撃型原子力潜水艦と弾道ミサイル原子力潜水艦

について。船の歴史。自衛隊から軍隊に移り変わった時に見直された法案と憲法の改正。被害が

どういう種類のものであるのかも、もちろん、この艦が後何時間で沈むのかということも冷静に分析

できる。脱出する。その緊張で、胸が感動スペクトルのように高鳴った。二時間程度で人生を観て

しまおうという倒錯以外の何ものでもない願望が、引き金を引く。神前や霊前に花を捧げるのにも

似た、この引き金を引くという行為。それは、土まみれの馬鈴薯のように、いくつもの子供と、むす

びついている。だが、違和感があった。どうしてだ、と思った。記憶の中で、この潜水艦は絶対に沈

まないという説明を頑なに信じていたからか。それとも、一瞬遅れて伝わってきた死の気配に、所

詮この潜水艦も棺桶にすぎないということを身を持って知ったからか。他の心の問題に執着してい

たからか。類推における苦痛を否定していた我が未熟さ故か。ともあれ、艦内の通信ユニットをオ

ンにし、手短かに状況を説明する。三分後に、所定地までの移動、ならびに退去。《脱出》を発令し

た。そして、一瞬の後、自分は息をひそめながら、静かに馬鹿なことを囁いていた。「四十八名、

全員が脱出することを祈る。」…経緯は、どうだったのかはわからない。何故、残る。どうして艦長

はそんなことをする必要がある。わからない。本来なら十分に検討を加えるべき問題だ。生命にも

かわる。ましてや、原則を貫くところに重点があるのなら、全員がこの潜水艦に残るべきだ。だ

が、艦長として乗り込んだとき、その覚悟は出来ていた。他に選択の余地はなかった。それは何

を意味する、を除いて…誰かの呼びかけに答えるかのように、自分は、「少なくとも自殺ではない」

と言った。だが、もはや結論を先延ばしにするべきではない。自分はポケットの中に入っている軍

指定の拳銃を取り出し、口の中に入れた。不思議と怖くはなかった。不思議な接合が漠然とした

印象を与えている。だが、それも長くは続かなかった。次の瞬間、強烈な衝撃で意識を失い、おそ

らく、私は死んだのだろう。パレスチナには穀物が実らぬよう塩をまいたという、バル・コクバの乱

のように――。

トゥルットゥ、トゥルットゥ・・・  
心は弾んで、*It's so lovely a day.*  
*It's so lovely a day.*  
*It looks so lovely and calm.*

つめたい 風に

目を覚まし たら

『アケオメ コトヨロ... 』

雲に紛 れて

丘に流れて ゆく

夢を見 たよ

●絶妙な乗り心地とコンパクト  
●軽快感あふれたホイール●  
Ternを代表するモデル。●レー  
スからツーリングまで使えるコ  
ンポーネント。変速数：20speed  
●Wheel Size：24"●Weight：10.  
7kg●推奨身長：148-195cm

Seatpost to Handlebar：Min:560mm Max:700mm  
Saddle to Pedal：Min:770mm Max:1040mm

自転車に乗ろう。。。

自転車に乗ろう。。。

how do you feel?

よご（れる）

けが（れる）

「聴位置自動調整機能連携」

「しゅーくりいむ」や「ぷりん」と…

自転車に乗ろうー

君は見たー思い出を探す人…

君は見たー思い出を探す人…

2001-2002-2003-2004-2005-2006-2007-2008

2009-2010-2011-2012-2013-2014

.....信頼性、明瞭度、寛大さ、礼儀、

.....文法も、不明瞭、こだわりも、痛みを伴う、

「真実」ー「嘘」を我慢…？

きみじゃなくてもいいー

きみじゃなくてもいいー

「ギロチンの考察」

サイズはM、Lの2サイズよりお選び下さい。

（耐久性なんて誰も求めている。）

というか…そんなの、

停止し、刺激になった変換を含めて、

そんなの——と言う僕に…

『M a r k e t ですよ、君。…

滑稽な君の動き、筋、愚かすぎる。

脳も、心臓も振り回すような、愚かさ』

開いた口がふさがらない。

「美意識の考察…愚かな、

愚かな、本当にこれは愚かな、

愚かな、愚かな、愚かな、」

(専門性なんて誰も求めているない。)

いつしか泣きやんだ空に

バースデー

(君の好きな…)

デコレーション

(遠い森の影——)

「あっという間に、ほどけてくれる」

自転車に乗ろう。。。

自転車に乗ろう。。。

つめたい 風に

目を覚まし たら

『バカマルダシ ファンシーゲンゴ... 』

雲に紛 れて

丘に流れて ゆく

夢を見 たよ

一一街の何処かで。

● 【interviewer】 -----。

夕暮れ) 7days...Anytime Blues...

「ロッキンチェアに向かって、  
ロンドンのにぎやかな区域の霧が連綿として続き、  
その椅子のうえに、  
切れ味のいいナイフが、置かれてある」  
“グッドラック”と手を振ろう――…。

疾駆する刹那の記憶。

橙色の口紅。

カット割りの技術やアングルやショットをかさね、

テロップやスチル画像を嵌め込む手法、

3DCG...29.97のフレーム...

一階のよりも二階のほうが――

天国に近い…

――頬から口もとへの、

なやましい曲線――

ピアノの音が――止まない・・・。

(ミュシャ撮影のヌード写真みたいだ。)

(B-ガール系のタンクトップは好みだけど・・・)

...空中楼阁。

「ルージュの色が崩れる魔法・・・

ガラスに残る妙な形――」

半狂乱の ジゼルが

鏡の中で

微笑む――。

● 【interviewer】 -----。

夕暮れ) 7days...Anytime Blues...

....ミュシャは、香水瓶やロゴを作り、

ポスターやリトグラフも作った。

memo : いくつかの物をひとつにまとめると、  
結果として生ずる全体の形――ステンドグラスだが、  
さほど、個人を意識する上で意識されるものではない。

「(意識されるものではない――神のように?)

やがて、漁船から漏れた油のように、

長く尾を引きながら、

僕は彼女の姿を見失った。マニュアルシフトの車には、

茂りに茂った枝と葉を持った雑多な草木がこもり、

——廢墟では、カナリアが…。」

(とあるCaféでは、

ベーゴンエッグマフィンが人気だ。)

バッキンガム宮殿／

イングランド銀行やマンションハウスと呼ばれる市長公邸、

商品・金融取引所のロイヤル・エクスチェンジが面する八叉路／

大英博物館／ロンドン・アイ／マダム・タッソー館／

でもアナスタシアはいない…。

衣服や皮革製品、手帳、

滑稽な印象を与えるものに、

キッスをする。

ロンドン…

サーカスのような街——

「その時、僕は何故か——

アデイ・エンドレのことを、

考えていた」

It will be daylight in an hour's time...

*It will be daylight in an hour's time.....*

詩人が優しい声で言った。

「火は、

けして、――

酸素を作れない…。 」

弾んで...跳ねて .....

笑って...泣いて .....

● 【interviewer】 -----。

夕暮れ) 7days...Anytime Blues...

マイドキュメントをクリックしよう。

夜の喧騒が螺旋になる。船虫になる。

蛹になる。蛇になる。

胎児になる。卵になる。

生殖器になる。小さな額のなかで、

退廃的なコラージュ...

さよならも言えない...

記憶はなくなっていく――

—物体に力を加えた途端・・

ばらばらになる—

「夜の化学工場で、

ILLUMINATION...が、

無粋なパネルで塞いだ窓の外の浴槽・・・」

蟻の巣になる。

ずたずたに切り刻まれる。

限りなく夜に近いその名前が、

白い骨格—一月、

鮮明な、鮮やかな、

伝統的で、Simpleな、

ネオンサイン・・

This part of the

program **is**

brought to you by

不機嫌にも似た、

子供の真面目腐った表情。

足音と会話の渦・・。

流れる血、こぼれる珈琲という液体。

死と隣り合わせの危険な思想――。

わきあがる鼓動・命の芽吹き……。

(街の音を『録音』する……。)

舌と舌が出会い、

揺れて

揺れて

さよならする――。

並木路のマリー・アントワネット。

並木路のマリーは――

人前でくすぐったそうな笑みを浮かべ、

ヴィーナスの過ぎた日々が描かれ……て――

胸が空っぽになるような、

疼くような、でも正確には分からない、

ああ、風のように境界線の内側を射て、

木の葉が揺れて、ひらりと、舞い落ちて、

愁いが胸を締め付けて、

きっとあなたは何かを知っていて――でも、

どれもこれも、心象、

あともう少しというところで、

みんな砂の城のように崩れた。

*steal a kiss from a girl...*  
*Thank you...Thank you...*

「あわわ。」

と、サンタクロースらしき格好をした女の子が、

ふつうに、ふほうしんぬう、した。

僕は、けえたい、と呼ばれるもので、パチリとやった。

「くぬやろ…警察に突き出すぞー！」

と、この文章を読めばお分かりの通り、

本当は、警察なんてどうでもよかったのです、はい。

「ごめんなさい…でも、あたしー

さんたくろおす、なんです。」

「そうでしたか。お疲れ様です。

ーなど、言うと思ったか！」

「ひいい！」

僕はもちろん、読者さあびす、というもののために、

やらしい縛り方をした。このうえなく、

やらしおな縛り方をしたので、

読者たちは、眼ン玉が火星まで飛んでしまった。

そうでなければ、ぼつのき、とよばれる、

やらしおピラミッドを、おやにおけるむすことはちがう、

ひゆてきないみで、テントを張った。

それを見た、ちきゅうがいせいめいたい、は、

ニヨホホ、と笑った。

それはいつぞや、おんなはこどもをうむきかい、  
といった、湿原、を、――ああ、うちまちがっちゃったよ、  
でもいいや、めんどくさいから、湿原でいこう、  
湿原をほうふつとさせた。

おいおい、はちゃめちゃだよ、この人。

世界は平和だった。マトリョーシカは、  
やっぱり、まとりよ一鹿、だった。

\*

ところで、縛られたさんたくろ一す、が、  
どうなったかですって、  
あなた、童話で、  
おおかみがあかずきんちゃんを、  
『食べちゃった』って、  
どんなことだと思っているのですか？

\*

かっぱ、が、  
にんげんであったとき、  
どんな、ひと、を、

そうぞうしているのですか？

\*

ぼくらは、ときどき、

さんたくろおす、な、おんなのこについて、

ふたしかなことを、かんがえてしまう。

ほんとうに、

まっしろな、ゆきのなかを？

えらいくろうしたのだねえ、

あたたかいスープを召し上がれ。

「ニヨホホ！」

ふくろ、

ふくろ？

ああ、ふくろなら、ちゃんと、

ここにあるよ――

って、チガイマスカラア！

長い道が、

ある一一。

砂浜から消えるメッセージ…

よれよれの、シャツじゃ、

感情は水、想いは空気、

「クズ」の方が「素晴らしい生き物」

と言う人もいて…。

かけ離れたボタンは、

うつしみの空洞を駆け抜けてゆき、

詩句になった。

ロマンティストの沈黙、

そしてモーツアルトの不幸は、

眼から口へと流れ入るまま、

熱風よ、

魂は、かがやくのか？

のうてんきな、

空に、

煙草の煙が迫ってくる。

浸蝕してくる骨や肉の軋み――。

それでもなけりゃ、

あれだと言って、

あれでもなけりゃ、

これだと言う。

『欲情の文化』して、

カッコ悪かった。

でも、土台、

なんのかんのと言っても、

カッコ悪くなければ、

普通で、しかも、

正しかった瞬間の、

ふりだしに戻る。

環境破壊もどこ吹く風、

熱なんてないね、

でもイデオロギチック、

困ったものだな、

どうかすると、

けたたましい。

狂おしいやら、

イソギンチャクするやら、

いかんせん、面倒くさいやら。

天国の鼻孔、

通貨してゆく――

しいたげられた、空気が、

行き着くための、

手続きと、

回りくどい説明によって、

多弁、する。

意味と無意味のはざまで、

混沌に満たされ、

階段となる――。

ある、なつ、かしい、風、

とか、

意味、とか――

求めてなくても、

死だって、

薄い紙切れで処理され、

その後は、

かぜ、だ――。

花が、咲いてる――

目の前で、

うつくしく、咲い、てる、

名前もなく、

僕に呼ばれるでもなく、

昨日も、

知らず――…。

僕は思う、

ママレイドを、

爆発させよう。

単純に、

ひんやりと甘い

ママレイド――に…

僕は何か言いたくて、

でもそんなこと――

言ったって始まらない、

始まらないけど、

一枚の羽根のように、

それは、

賢明な接続——…。

どうでもいいことが、

あまりにも多すぎる。

でも、

そんなんじゃ、

何も見えなかったに違いない、

何も、ふれ、て、は、

来なかったに違いない…。

花なんて、

どこにでもあるものだけど、

メンタルファクターは、

溜息を理解してるつもり、で…。

長い道のり、

幼かった僕の記憶、

そしていま、

蟻の行列は、

神に祈らない、

空気ピストル…！

——そして、

ぼくはぼくだけの、

《魔法》…。

つめたくて、

やわらかな、

夜中には、

時間が、

止まっている。

彼女は言う。

「あたしはただ、

話していなかっただけのこと、

不自然でしょ。

あたしからペチャクチャと、

そんなこと話し始めていたら――」

街中ですっ転んだ、

視界にあるのは人の脚。

何事も無かったかのように通り過ぎる脚。

立ち止まってこちらに視線を投げかけている脚。

あなたを染みつけて、

糸を引かせて

こぼした絵の具――…。

思想が消え去った、

世の中で、

金の重さだけが、

身にしみる。

そしていつ僕は理解したのだろうか？

透明ではない人間は、

死んだら土に還る、と――…。

足が痛む時、

僕は足の存在を感じる。

手が痛む時、

手の存在を。

心臓が痛む時

僕は心臓の在処を想う。

人生にマニュアルがあったら、

きちんと読んでおくべきだった、

と思う僕もいるけど、

写真たてに外国の空を飾り、

誰かからの電気信号、

メッセージを、

受け取る。

思い出の隣に恋人がいて、

いつでも気まぐれにふるまう――

僕は、

海をコレクションしよう…

と、思う――…。

もしこの世界に愛が無かったら、

味気ない世界になるだろうね。

もしこの世界に男女というものが無かったら、

ひどくさみしいだろうね。

屑と、僕も誰かに呼ばれ、

トウヘンボクと、誰かに僕もきつと呼ばれ、

遺伝子が、

互いの価値観を認めず、

本能のすれ違いをRepeatする。

存在をrequestする道なんてないみたいに、

「好き」という言葉に飽きて、

「慈しむ」という言葉に疲れて、

「愛おしい」という言葉にあきれる。

でも、君を見て ピンッと動く気持ちだけは、

永遠に、変わらないと思う。

ずっと――…

絶望的な孤独が、ガラス壺の海に、

ペン先を浸して、

手紙を書かせている。

「平和な時代に――」

と、始めるつもりかい。

そうだね、僕は教室という、

管理下の檻の中で、

大人と子供を見た。

けじめなんてなくて、

開き直ってふざけるばかりの、

生贄たちを見た。

憐れな仔羊たちは、

蠟人形のような顔をして、

びくびくしながら、生きてる――…。

生まれたことを、

生まれたことを――…。

その時、文字はかすかにふるえていた。

未来に向かって滲みゆく影に脅えていた。

薄暮に出現する影は、

限りなく、薄い。

太陽が消え、魔力から逃れたサターンが、

息を吹き返す。

誰かに見せつけるように、

差し出した蒼白いその手首には、

ためらい傷が残っている。

死に損なった、この街で、

うわべだらけのぬくもりに抱かれて、

絶望と言う名の朝が、

欲望に立候補する。

そして君は遮断する。

虫の絶命みたいに、

痛覚遮断する――…。

あの袋の中には、

彼らの全財産が入っている――

都市を見たか？

あの絶望のいれられた、

綺麗な匣を見たか？

僕は「さよなら」という言葉が好きだ。

綺麗で美しい響き。

何より「さよなら」と言ったときの、

口の動きが素敵だと思っている。

プールの底に、

小さな小さな亀裂が出来てゆくような、

もどかしい時代の傷口が好きだ。

既婚者は、

指輪をして、

その手にスーパーの袋を持っている。

その時、からだはゆるむ。

幸福であるかのように、

瀑布が、

イルミネーションが、

マンションの明かりが、

うつくしく切り取られ、

いちにちの汚染のかけらもない、

それでも、しょっぱい宝石が、

いいえ、と言う。

おはじきは、

本当に簡単なゲームだ。

本当に簡単に、

ビー玉する。

そして、砂時計は、

激しい雨に、

鳴り止まない鳥の鳴き声だ。

心のふるいにようやくしがみついている、

砂は、

落ちたらきっと楽だろうに、

と、思う。

一人の若者が立ち上がって叫んだ。

その場にいた人たちは、

はっとして若者を見たが

また、何事もなかったかのように、

騒動の中に紛れた。

若さ故の衝動が、

手を引いて、この長い廊下を歩き始める。

その手の力を今でも覚えている

複雑な感情を、うまく説明できない夜は、

名前のない衝動に繊細な感覚が幾つも絡み合って、

本当は自分でも、よくわからない――…。

街にはたくさんの人がいて、

都合のいい言い訳を、

いつも胸のポケットに用意しながら、

足音を立てることもなく歩いている。

扉の向こうでは、

戦争が始まっている。

誰だって結局死ぬんだから、

僕も死ぬんだから、

後腐れないだろう、

そしてもう、何も恐れてはいないだろう？

欠伸をひとつふたつと数え、

何時の間にか手渡された、

石鹸を握り締める、時間という場所。

僕らが欲望を、吐き出している場所――…。

深夜のターミナルからゆっくりと、

長距離バスが発車し、

顔を上げる。

どんな巧妙なフェイント、

ギミックを駆使したとしても

僕を撒けるわけがない。

朝はやって来る。

必ず、僕等の元に。

でも、足音は

いったい何時から

何処かに行ってしまったんだろう？

いちにちの汚染のかけらもない、

踏んだらこわれそうな、

しろくて、まだ、

まっさらな光。

人生や夢について語らい、

ネオン街に行き交う人々。

人間模様を坐り心地のいいダンボールにして、

そこで浮浪者たちが眠る都会で――…。

僕はまだ風を見たことがない。

まだ、星を見つけたことがない。

それでも同じ月を見上げ、

時に酒を酌み交わし

仕事の愚痴を言い合ったのだろう。

記憶の断片は、

ジグソーパズルのピースのようにバラバラになり、

もはや修復も不可能で、

顔もおぼろげにしか思い出せない。

たとえば森の中――

その茂った緑の中にある明るさのそれは光。

僕を包むやさしい空気のまとまりは風。

木や葉から感じる呼吸…。

そんな近くから花を見なくても、

綺麗と思ったところから見ればいいのに、

人間関係の残骸だけが、

重たい動機づけとして、

人生を唄っている――…。

でもその人生は虚飾にやられちまって、

嘘は愉悦に満ち溢れ、

道化師達が繰り返し続ける、

事切れるまで――…。

「でも人生は、素晴らしい――…。」

絆という言葉が、

何かの免罪符のように、

安売りされて、

歌われるたび、

心の中で、

わだかまりが大きくなる。

あてのない旅を続けながら、

いつ終わるともわからない旅を続けながら、

いつのまにか腐った僕の瞳、

いつのまにか愛で汚れてしまった僕の瞳は、

それでも、生きる意味や理由で、

ごちゃまぜになった水溜りの油膜。

うまく、君を抱き締められない時…。

うまく、君を見つけられない時——…。

最後に触れたあなたの手の、

あの、

泣きたくなるような、

切なさだけが、

残る——…。

身体を売る女の哀しみに似て、

息をするたびに、

酸素が無くなって、

あの暗くて小さな箱、

僕はすごくすごくこわくて、

鳥かご、虫籠…押入れ、夜の滑り台の下、

集会所、治療と返済——

死と生が同居していた、

あの街で——…。

「滅びが――」

「たとえば、俺はネコ耳の女の子と巡り合うんだ。」

と、奴は言った。

しかし、奴と言いながら、馬鹿と言いたいやら、

手っ取り早く、氏ネ、と言いたいやら、ああ、うん。

友達だよ。馬鹿話してる時、隣に可愛い女の子がいたら、

もちろん、他人だよ。他に選択肢あるのかい？

「そうか。」

俺はいま、生徒会。

たとえるなら、ノーツーから、

ストライクを取りにきた球をぶっ叩く高校二年生。

悲しいかな、美人書記は眉ひとつ持ち上げない。

ちなみに喋ってる此奴は、副会長。俺、会長だ。

正確に言えば、眉目秀麗な生徒会長。

ただ、動機は美人書記めあてとかいう、情けなさ。

それを知ってる奴も、いなければ、

それを話せる奴も、いない。

「…もっと聞いてくれ。俺は、ある日、

“何か頭についてるぞ、何だいこれは”と、

片思いをしていた彼女にさわる。」

「さわれるんなら、片思いじゃないだろ。」

仮に、美人書記の君よ、

バス停で猫の耳をはやしたからって、

僕に出来ることは、見てみぬふりをするか、

それ可愛いね、と笑って慰めるかだけだ。

しかしそれが君の一部なら、

もちろん、尻っ尾もさわらなければなるまい。

って、いきなりエロゲー的展開する高校生。

「違う。さわりたくてシカターガナイ症候群。」

「また、勝手なことを。」

でも、そこは、さわるな、間違いなく。

でも、さわったら、きっと、

取り返しもつかなくなるだろうな、

これはもう否応なく。

カリカリカリ…。

鉛筆の動く音がすさまじい美人書記。

「———。」

彼女にネコ耳か、

愛嬌があっていいな。萌えるな。

まちがいなく、夜のベッドで俺は悶えるな。

語尾にニャン、とかつけてみろ、

さすがのポーカーフフェイスも崩れて、

鼻の下のばしてしまうな。

って、いかんいかん。

「―――。」

というか、お前、生徒会の仕事しろ。

なに、売店でコーヒー買ってくるとか言って、

ひょろっと抜けた上に、

…でも、抜けたおかげで、

美人書記に、聞いてみた。

彼氏とかいないの、メールしてもいいよ。

と、さりげなく、笑顔で言った。

これまで、破壊力抜群の作り笑いで数々の者たちを、

騙してきた僕は、きっと、彼女に、

疑われることさえなかつただろう。

その時、僕は神…！

『あ、大丈夫です。私、彼氏なんていませんから。』

いないのか、よかった――。

ところで、帰り、喫茶店行かない？

もちろん、この意味わかるよね？

などと、言えるわけもなく、むしろ、

突櫛貪に言われたような気がしたので、

『そう。ごめん——続けてくれ。』と言った。

しかしまあ、プラス思考が肝心だ。

「——。」

そうだ、お前仕事しろ。

戻ってきたと思ったら、

なに、ジョージア飲みながら、なに、無駄話してやがる。

俺もそれ愛飲してる。

というかそこ、普通に俺と彼女の分を、

差し入れするもんだろ。彼女は誰がどう考えても、

ヴァームだから、ヴァームにしておいてください。

あとで、俺出しますのでおねがいします。

というか、何故敬語。わからない。

でも、ヴァームにしておいてください。お願いします。

「——。」

いかん、この馬鹿のせいで、

学園始まって以来の天才と謳われる俺が、

妄想してしまった。いや、俺自身のせいか。

でも許せん。なに、てめえだけ飲んでやがる。

しかし、美人書記の横顔はきれいだ。可憐だ。

怒ってたら、こいつのせい。

頭のおおきな、リボン可愛いね。

(でもNEKOMIMIはいいぞ、

と、まだ、馬鹿が話してる。)

「…耳だ。俺はおどろく。なんだ、この肉感！」

「シリコンだろ。」

「お前ナア、夢なくすだろ——いやいい、

こんなトーヘンボクなんか、相手にするものか。

なんだ、このあたたかさ、つくりものじゃない！」

「秀吉草履をあたためる。」

「お前ナア…。」

「知らないのか、あれも、多分作り話だぞ。

でも、世の中には嘘でも真になることはある。

しかし、ネコ耳の女の子のことを考える前に、

もっと考えることはあると思わないか？」

「スリーサイズ。」

「そうか、スリーサイズとは恐れいったな。

スリーサイズよければ、ネコ耳もいいな。」

がたん、と美人書記立ち上がる。

「会長、」

一瞬、言葉が怪鳥と変換されたのは、

眉が、そういう風に見えたからだと思う。

柳眉立つ——こんな馬鹿話をしていたせいで、

絶対に軽蔑された。

オレ、生きていけない。

「終わりましたので、帰っていいですか？」

「ああ、もちろん。」

すばらしいポーカーフェイス！

でも、ああ、行ってしまおう。こいつのせいだ。

もちろん、僕は、一緒に帰るつもりだったのだ。

『夜道暗いから、駅まで送るよ。』

『あ、寒い…』

はい、と僕はマフラーを首を巻きつける。

『はい…。』

って、俺もこいつと同レベルか…。

くそう、明日も、朝の一緒の電車に乗れたらいい。

と、そんな会長のなやましい心をよそに、

美人書記は、生徒会室を出ると、

トイレへ直行した。

鏡の前で、シュルっとリボンを外した。

頭の上には、ネコ耳がある。

「どうしよう…、

スリーサイズあんまり自信ないんだけどな。」



何を気にしていたのか、僕は本当にわからなくなった。

---

数歩先で、

立ち止まって、

後ろを向く。

顔が見えなくなる。

それは嘘かも知れない。

いや、

本当かも知れない。

まさか、

嘘でしょ？

じゃあ、心に聞いてみな。

心は嘘をつかないから――

本当に？

本当に？

わかってる、

わかってる、

君が、

ココから飛び出す、日。

未来からの、

飛行船――…。

たくさんの顔が…

笑う――

不快だった…

脳内の化学信号は、

灰色の空気を漂って、

力強さを

君の吐く言葉のくだらなさを…

遠い空の向こう側へ…

作られたものは、

意味を持ちながら、

静かに、

失われてゆく…。

どっちでもいいじゃないか、

と、言ってみた。

だったらさ。

別に悲しくなんかないし、  
楽しくなんかもない。

馬鹿だから、  
もうあんまり覚えていない。

それはとても大事なことののに、  
それが無いと生きられないような、  
とても大事なことののに…

「何度聞いても、  
美しかった、言葉…」

ありがとうが…

切なくなる――

それは覚えている、

それは覚えてる…

それは覚えているんだ――

不協和音で、

頭がおかしくなりそうな、

この世界はあまりにも綺麗で――

空を飛ぶ鳥にも、

鮮やかに実るリンゴにも、

水中を進むイルカにも、

あからさまな自由が、

目の前に転がっている。

ブルーな回想。

危険な静寂。

『一冊、同じ本読んでいれば、

会話することができる。』

(もしも、一冊の本に、

魅力がなかったら、

どうしよう?)

古典的な夢が、

テクノロジーの進歩を。

空白を埋める塵芥は、

いま放たれたばかり。

幻の街へ――…。

想像しよう、

そこにきっと答えはあるから。

酸素を吸って、

二酸化炭素を吐き出す。

胸が膨らむその一瞬、

確かな生……。

あの人は——

どうしてあんなに、

綺麗……。

(他人という鏡に映ったら、

今日はきっと難しくなる。)

でも——他人という鏡に、

映りさえすれば、

今日、街で泣いてる人を、

君は見つけられる——…

目を閉じても、

君のことなら、

わかるんだ。

でも恥ずかしくて——。

わかってるんだ。

いや、

わかっているんだ。

いまでも、

さみしいこと——…

僕は、光が届かない所で、

滅んでゆくかも知れない…

何も知らない深海を漂う——

発光体…

まるで肉体を失った魂のように、

深くへ、

もっと暗いところへ…………。

青空の下で、

白い花が笑っている。

僕の汚れた足は、

アノ曲が流れている——

あのリズム…

雑草を踏み躪しながら、

その希望へと、

僕は向かう。

わかってる、

わかってる、

君が、

ココから飛び出す、日。

未来からの、

飛行船――…。

振り返っては駄目だよ。

ソコには何も無いから。

ソコにはただ何も無いという、

ただソレだけが、

広がっているから。

伸びる鉄――

縮む影……。

「口笛でタクシーをとめたい――」

笑ってごまかせるのも、

思い上がりも、

あともう少しで出来なくなる。

ガラスの破片で、

足を切った。

生きる意味を失った街で、

そのまま幾日も経過した。

これからどうすればいいのか、

わからなくなった。

何を思うのか、

何を考えるのか、

何を求めるべきなのか、

わからなくなる。

花が枯れるから、

水をやり続けた。

ピアノが壊れても、

体が自然と強張るように、

弾き続ける――。

地面にうつる影が、

どうしようもなく見える。

リンリーン...

ジージー...

リンリンリーン

ジージージー.....

リンリンリンリンリーン

ジージージージージー...

少なくとも...

これは――

夢でしか無い...

支度を始めた、夜。

パン、ランプ、毛布、ナイフを、

ナップサックに詰めながら、

ハートをあげる、

ダイヤをちょうだい。

そして僕は、

kissというものを、

ここしばらくしていない――...

大声で泣ける――

乾いていた、夏…

記憶の糸を辿って、

僕は井戸の底へ。

合図だよ、

たかが、合図。

たかがね、

スイッチ――…。

行き交う幻覚をやり過ごし、

消え去る風景の痛みの中から、

ただ一つの宝石を掴み取る。

いつまでも、

ここにいるわけじゃないから。

いつまでも、

ここにいていいわけじゃないから。

「彼女はとても静かな人だった。

でも、とてもやさしい感じの、

する人だった。」

哲学書には、

過去を尋ねるな、

と、書いてある。

幻の女に――。

心に残る一瞬に、

いや、

人生そのものに、

巡り逢えた――…。

ふざけんな、無表情…！

---

退屈が虐殺を始める前に。

開口一番、アホになれ同士！

とりあえず二枚目になろうと思う。

死ぬべきか？

死ぬべきだ。

Oh他人グルメカースレテオの、クラッシュ!!!!

ガチれ、バトレ！ 男塾！

360°の属性パズル、ルービックキューブ的手法。

俺はエルメス、グッチ、

ヴィトン、プラダを女に買う。

貢くん。ベイスボールアウト！

憎いゼコンチクショウ、アクティブなディスプレイ良好。

ボボボのボオオン！

俺の名前を呼ぶ時だけ甘い、彼女のprice。

ベリーグッドな法治国家のアラベスクよ！

時間…資金…技術…。

いつでもどこでもかかってこい、天国へ往く、

着メロはもちろん、女々しくて。

嗚呼ア…ああああああ、

なんたる無様でございませよ。

なんという、落ちぶれっぷりでございませよ。

うふふ…

こわいぞこわいぞ、うふふふ…Want you!!!!

十人十色センサ万別、

爆発思考、刹那系ラブソング。

スラストラケル、ジンセイトイウモンダイ。

ツクスナ。ソレハマケグミ。

うっせーぞ、個性尊重。一歩、又一歩、

オメガに近づく！ ハイビスカスも枯らす程の毒！

FUCK先公！ F UCK社会！

光合成したいあR。あふ、あふっ、あふう…

「心のチャックはあいているのかい？」

エンドレスリピート。ゲログロ免罪自由郷。

もっと！ キノ、コ。ポンプくみあげよ変態！

でも、お金払いながら思う、

意識は低迷し知能は低迷し、

「アナタガスキダカラアアアアア！」

GUNGUN☆キュンキュン煩惱まみれ！

チョイアサア！

タップダンスのリズムで、

アア、そいじゃ右見て左見てアンチ！

街で聞いた言葉じゃアリもしないが、

シュカラカ！ シュビドゥバ！ ViVit!

Chu☆Chu中のトレイン・キャップル、

バイブレーションはもうダンジョン！

氏ね。マジかったるいッスのシンク口流しそうめん、

ピンボールゲームに注いだコインのようにフラワーして、

ネオ、ゴア、トランスランダムなオートメーション機構が、

パッケージングされた美術セレクションした、

カンパニ一行きだvoice!!!!

嗚呼ア・・・ああああああ、

世界ってもんすごく汚いから爆発してほしい！

白昼堂々の通り魔殺人！ ゲイのレイプ!

闇夜の韓国！ 白昼の北朝鮮！

そしてわれらがJAPANESEは外国で女を買う！

<<Action!!!!>>

心にHIT致しません。ヴァンパイア、

deliciousタイムの時間だよ、ハッピー！

ナースがベッドの上に登って手招きしているぞお！

<<Action!!!!>>

もっと奥で。掻き乱したい、掻き回したい、

納豆衝動が、胸を締め付ける。暗い顔しちゃ損、損ッ！

悔しかったらDrawing...

根暗、貧弱、日陰モンキー、記号の羅列、Inkのシミより、

やりたい、犯したい、えびぞりファンキーいなぼうああしたい。

「身体目当て」イキつくせ、メメントモリ疼く、

コンクリートジャングルしゃちほこ大陸！

お茶のこさいさいポップコーン！

やり尽くせ我無罪しかし、語られる正義！

息苦しく、霞がかった部屋で、FUCKER!!

さよならドンブラコ！

ユニコーンの角のけぞる！　すごい曲がり角度！

アッ！　アッー！！アアアアア！　ビー向こう…

ビー無効の…こうせん、こうせん、こうせんー

ビー向こう、の伊豆らだけの、

ノイズだらけのー…。

世紀のアニマル大根おろし。フラストレーションの、

四六時中肩こりのプライドずたずた。

残し、たい、ような、酸素。

アイツ等、コイツ等、メロメロマイブーム！

ビビリ屋チキン骨なしVS悪徳ルール寝取り。

気がつきゃ、糞無し扱い。

走れ跳べ叫べ笑え、屁垂れ化現象。

「必殺 透明人間！」

(その名の通り、

空気を消すことができる!) アブラカタブラ、

ランデブー金利!! 暴利よララバイ!!

ジャンキーヨガレル収縮! ノイズ、アイツ、

愛ス!!!! ZERO。オペレーター、

メカニック、パイロット。

餓え、餓え、かぎりない回転イスの世界、

目玉にこびりつく、駆逐、失格の烙印!

ダメ! でもさわりたい!

ティンティンよ、台風雷風 風風!!!!

雨雨雨!!!!!!!

反響! 残響! 絶叫! あらん限りのpeanut...

俺のぶっとくて、かたくて、すごく大きな...

ダメ! じゃあどうしたら!

マグロにまつわるホモサピエエエンス!

腹出る!! 贅肉留まる!! 弱肉強食!!!

適者生存!!!!

金舞え！ 愛舞え！ 好き放題に舞え！ 核弾頭jack!!!!

真相と深層が御苦労Drawの、レール乗ったって出来ない、

シーソーゲーム。絡みの不在証明アNo!!!!

<<Action!!!!>>

恥骨subliminal効果！ その時、男は、

ヘラクレスだった！ 自由の男神、思春期性絶頂、

呪われたバベルの塔。絡みの不在証明アNo!!!!

<<Action!!!!>>

はじけとぶ脳内麻薬分泌、乱れる蝶々、色香と悦楽、

制服をひきちぎる！ 遺伝子に従うなら艶笑、必殺お仕置き人。

大洪水でありんす！ へちまの花でござんす！

神様ア、あんたを殺したがってる。

ボタン粉々、スカート、HeELLLLLIIIIIIIPPPPP!!!!!!

マシンガンのように腰を振れ！

アイスクリームのようにとろける観音びらき。

エアロビクスで体操なWonder!!!!

ジェットエンジンより強力病んでる膿んでる空飛ぶ灰！

トロトロに蕩けていた、あわび。アイツノ愛情ハ偽者ヨウ、

でも、Rock is DeadなエントロピーはMax!!!!

(井戸なんか塞いで御仕舞い！)

制服のスカートに、染みついた獣の臭い、Godとかいう、

アルファベットカプセルかみくだいてたも、

何枚羽根をむしっても辿りつけないHeaven!!!!

<<Action!!!!>>

俺の極太まくわうりが行く！ おイタがすぎるぜ、

ミッションイッポンシボオ！ ムードを作るルート、

昼にも夜にも染まらずに、嘶け！

天国が地獄に見えるだろう、嘘だって真だろう、

ヒヒヒィ！ 穴があく、馬が叫ぶ、

王将馬取り桂馬金取り。そこんところ。

「I say !」 DEEP...

虚空へ消え去る、ティンティンWorld!!!!

蛍光灯の指揮官は破裂！ ムクムクと膨れあがった。

コロニーはシンプル三分五厘：情報取得完了。

絶望のまくわうりするのはまだ早い！ でたらめの痛み、

まがいもんの腐り！ ミルフィーユみたいにシートだけ、

変えて、ティンティンまで変えるつもり！

嗚呼ア・・・あああああああ、

反論出来ねエー。でも俺にはシャフト、ギア、

エンジンむすぶコンベアアー・オイルのピストン。

ドゥルルルル！ 幼稚でも子供でも、

ヘヴィーローテーション・バイブル！ 精子と卵子が、

ドッキングする、くせえ、くせえ羊水、しかし水の垢だか、

泡なんだか。進め、溺れ、狂い、ノタレ死ね、

ミュージックプレイヤーイライラするんだよォー。

報知器が繰り返している。無気力なウィルスばらまかれる。

ディレクター、もう、なんとかならないの？

国をむすべば子が生まれ、芝居小屋、

エクストプラズム、けしからんおっぱいにおはじきをとばす、

ああ！ おお！

ちぎりをむすべば破倫でござりましょ？

うへえ、カルマの滾りでござりんす。

うへえ、こいつはすげえ設備投資でござります。

宝物は、

ただ一つ！

確かに、

秘密の場所に

しまったまま！

掛かっている。

僕の心にはいつも。

『準備中』って看板が…

また、見つからない、  
見つからない…。

「静かに僕等は何処かへと、

運ばれていき、

僕らは違う景色の中で、

巡り合う…。」

迷子の子供のように、

また地球が回る。

<檻の中で>

一日が終わる。

<金属でできたこの街に>

知らない未来が。

(気付いていない――)

だって、僕は遭難してる…

どんなに光満ち溢れる場所に、

立っても、何も、

代り映えしなくて――)

「毎日？――

毎日！」

…風や熱の奴隷

……また一日が終わる

来た、

やって来た！

乱暴に、

引きちぎる

迷路！

掛かっている。

僕の心にはいつも。

『準備中』って看板が…

ベランダの洗濯物は、

少し冷たい夜の匂いがする。

だから思う。

君が孤独を叫んだ声が、

いつか誰かに届けばいい、と。

過ぎ去ってしまえばいい。

忘れられていくがいい。

もう見たくない。

だれかが悪いんじゃないの、

でも、だれでも良いんじゃないの。

僕は、たくさん泣いた。

そんな風に、

たくさん怒った。

でも、それだから知ったこと。

また、見つからない、  
見つからない…。

「鳴かないカナリア…ガラスの本…

撒き散らされた酒瓶…

そして涙と自嘲の、

Poem…。」

ざざー、、、

ざおあざおお！ツ、

ざざー…

充実なんて――

しなくて…いい…

<孤独の中で>

長い眠りが来る。

<幼かったこの僕にも>

わずかなささくれが。

出会えたときが始まりだった――

いつからだろう、こんな気持ちを知ったのは。

どうしてだろう、こんなに胸が苦しいのは…

さみしさ、

おかしさ！

僕は、

君を連れて

抜けだす！

掛かっている。

僕の心にはいつも。

『準備中』って看板が…

迷路が…

掛かっている。

僕の心にはいつも。

『準備中』って看板が…

迷路が…

長い眠りのあと、

目覚めて、

シャワーを浴びて――

ミネラル・ウォーターを飲む。

呷る。自分では手が届かないような場所へ。

どうしてだろう、何かが、そう、

何かが、傷口から噴き出した血のように、

あふれた。そして、慰めるように、

何かを隠した。僕は、

コップ一杯飲んで、

ベッドに戻る…。

ねえ、たったそれだけで。

ボクは今、壊れてしまいそうだよ…

(カッコよく死にたい――

どんな、シグナルが脳に走るだろう、

雲のように、

行方は、風に決められたまま、

不思議な気分――)

「毎日?――

毎日！」

（しんと張り詰めた空気は、  
この世界の終わりなんだと思う。  
空と街と僕を結ぶ、沈黙が、  
この世界のどんな音より大きく響く。）

また、見つからない、  
見つからない…。

…手にもったアイスが溶けて、  
……ぼとり、涙が。

揺れる電車の窓から、

君の家なんて見えない。

ずっと遠くにいるから、

君の声なんて聞こえない。

正しいとは、

ひどく、くだらないことで…。

誰かに都合がいいってことは、

群れの空気で…。

空も、海も、

動物も、植物も、

道端に転がっている石も、

今そこに在るだけなのに――…

ゆれるボート、

僕等は離れる――…

夢を夢とわかっているような――

無意識を意識するような時間に…

流されるまま、

すぐに、見えなくなる。

『観察』とは『知ること』ではなくて、

『意味』とは『理由』ではなくて、

眠り続ける カタチあるもの…

揺れる、消える、足音が迫る――

進めない、こんなに駆けているのに進めない…

流れる、揺らぐ…未完成――

「僕は沢山の思い出を…押しこむ…

一番奥の見えないところに…

永遠に見つからないように、

Poem・・・。」

また、見つからない、  
見つからない…。

冷たいアスファルトに、

横たわってみる、真夜中、

星を見ていると、煮詰まったように、

打ち上がる、死。

なんだかひどく一人な気がして、

ずぶりと、静けさに埋まっていく、

うるさい車が通り過ぎる間際、

通りすぎる人の声――。

僕は、この世界が、

狂っていると思う。

でも、ユダよ、

逆さまの空もいい――…。

(でも、僕よ、

ため息をつくな…！)

見えない壁に怯えて、

人間の雑音！

お金も銃も、

恋も愛も

迷路！

掛かっている。

僕の心にはいつも。

『準備中』って看板が…

また、見つからない、  
見つからない…。

…一人じゃないと探せない、

……都会の隅っこで愛を探して。

道行く人の、

心の弱さ、

どうしようもなさ、

情けなさ、

みっともなさ、

全部、見抜いた後で、

あなたにだけしか、

言えない言葉がある。

固くなる心、

閉ざされていく世界…。

肯定は、

否定へのループ。

僕は、優しくなれる、

誰よりも——…

つめたく

さしかかる

わびしさに

つきささる…。

君の目はいつも遠くをさまよっている。

僕の目にはいつもの青い空。

三年間生きたので許してください、

干からびさせて下さい、と、二人は言った。

<ダンス！ ダンス！ ダンス！>

繁華街、

ぐじゅぐじゅした創痕の街。

死臭の中からあふれだす春。

ラップマンが、歌う、臆。

うつくしい灰の薔薇の腐り。

「マジ半端ねえ、この一瞬、

止まらねえ、ここまできたらあとにはひかねえ、

マジ絶対ゆるがねえ、

死へのカウントダウンが始まる。」

破壊…。非人道兵器。致死量の毒ガス。

某宗教団体。問題化するのを恐れた彼等は、

「証拠隠滅」を命じた。

作業に従事したアルバイトは五人、

その中に俺もいた、

作業は、

羊の群れが川となってみずからの渴きと潤いになるまで、

続いた、シンカンとしていた。

海洋投棄、焼却、埋め立て…。

受精した！ 分裂マシーン。1を刺した、

2を刺した、3を刺した…。

美しく下降する鳥たち、

乾いていく、お金の操り人形たち。

（海では魚が

「これからだれをよぶこともなく

――ぷかり ぷかり

朝が巡ってきて、

何者か知ることもない一瞬が、

プラットフォームの、

白線の向こう側にあるのかも…。

(砂嵐の葬式。)

ガタガタ震えている青年――

ミミズがあわあわと這う

29歳、哲学科卒業。

ステンレスキッチンに置かれた

一枚の紙切れに、…。

幼少のころから神童と呼ばれたが、

神経質で、リストカッターで…。

「吐く息が白く白く白く白く白く白く…。」

マネーゲーム、出会い系、

悪魔の卵、

ニュースタイルカリキュラム。

テレビ放送——に、字幕が見える…

「従順になる、あなたのことなんて知らない」

掬い上げられた水のように、

もう指の間から逃げ出す。

ゴシックロリータの女の子が、

動画の中で、にこにこ笑っている。

そそがれる陽は強烈だ。

「死にます。あたし、これから、死にます。」

なぜ？

眠りから覚め…ルルルル、ルルル、

口ずさむ、歌声、響き…

こんなに気持ち悪い——…。

「世界が終わるまで、カメラで撮影し続けます。

よかったら、あたしと目を合わせていて下さい。

ゲシュタルト崩壊できるかも…」

ひとつの病理。

花が咲き散り葉が緑から黄色そして紅へと染ま、る、

メロディの足。

（大人になると、

きこえなくなる音があるって、

本当ですか？ ）

気分はブルー。

気分はグレー。

嘘、嘘。

気分はパープル。

気分はレッド、

気分はグリーン…

自殺願望者がビルの屋上で騒いでいる。

死ぬまで歯車…。

ベイビーピンク・コミュニケーション。

乳の色症候群フェルガモ。

ガガガ…

ビビビビビビ…………。

なぜ？

眠りから覚め…ルルルル、ルルル、

口ずさむ、歌声、響き…

こんなに気持ち悪い——…。

コンクリートジャングルで、

マインドコントロール…。

光化学スモッグに排気ガス、

脳内特殊装置、便利なボタン——。

魔法使いのお婆さんに、

ヒキガエルにされ、小さな魚を食べ、

小鳥に狙われ、足を滑らせ、

花にとまっていた蝶にあたる…。

とても不確かで、

とても不確かなものをはあ、と

息を吐いて、

「バックコーラスして… 」

沈黙のうちに本性があらわに、

モラトリアム・メランコリー、

黒い輪郭と暮れてゆきながら、

縊死、三半規管の狂い、

子宮が、途方に暮れていく。

テレビをみて空しい事件の報道。

社交辞令のような、可哀想…。

インストゥルメンタル・セロファンのなか、

『いない？ いない？ いない？』

……狂気はこの瞬間、映画にされて、

ウソのスマイルをして、

また誇大妄想、被害妄想…。

「どうせあの尻軽女、ビッチなんだろ。」

「サティに一体どんな用があるの？」

青と灰の満たす白い陶器の午後は終わり、

予定調和のなぐさめのような雨。

3、2、1、0、伽藍！

だれと、どこで、どのように暮らす

だれに、なんと、答える。

（君はレベル100になったような顔をしながら、  
コミュニケーションという不毛な戦略を攻撃する、  
——革命、という言葉を用いて…）

長い渋滞の列に、

エチルアルコールのたゆたう夢。

あなたのように嘘をついてみる、

あなたのように、

もっと、もっと、

残酷になってみる——…。

クローズド・サークル。

電話などが通じず外部の往来ができない場所。

たとえばそれは、ゴシック小説よろしくの館で、

犯人が、十二人の人間を閉じ込めている。

その中に僕もいる。

ある朝、とある無人島への招待状が来ていた。

名前の差出人を見ると、中学校の同級生である女子のMだった。

「お久しぶりです。Aさん、

お元気ですか？」

一度も話したことはなかったが、

まあ、折角の招待状である。

しかも、豪華料理に、素敵な洋館、

その上、交通費も支給してくれると言う。

お金持ちだなあ、M、

それにいいところがある、とその時は思った。

おそらく、卒業後の同窓会的意味合いもあるんだろうな。

でも、正直すまないとは思いつつ、

仕事とかもあるので、

行かないでおこうと思っていたら、

迎えの人がやって来て、

殆ど、行くか行かないかの二択を迫られて、

僕は前者になった。

会社に電話をかけて、長期休暇をとった。

存外、人手が足りていて、

また、事情を説明すると、

「まあ、リフレッシュしてこい。」とのこと。

なんだか、めちゃくちゃ運がいい。

やったぜ、俺、休暇たのしむ。

M、ありがとう。

てなわけで、無人島へ着くと、

船着場に懐かしいクラスメイトの顔があった。

親友のBである。

でもそこで、Bは、

主催者である中学校の同級生Mの顔が見えない、

まだ来ていないことを口にする。

ほかの奴も全然だ、と言う。

不思議だな、確かにそこには、

僕と彼しかいなかった。

他の奴は？

と、思っていたら、また迎えの車が来て、

洋館まで連れていってくれた。

ロールスロイスだった。

そして大きな門をくぐり、館の扉に手をかけ、

踏みこんだ次の瞬間――

僕等は真っ逆さまに落ちて、

トランポリンにたたき落とされた。

「おいおい、ひどすぎるだろ。」

「なあ。」

と思っていたら、そこに、

十人のクラスメイトがいた。

でも、そんなのどうでもいい、

さすがにこれはやりすぎである。

「おい、主催者は何処だよ？」と、僕。

「は？ 何言ってんだよお前。」

お前ら、まさか、オッケーしたのか？」

と、サッカークラブで、

クラスの盛り上げ役だったC。

「は？」と、僕。

「いや、だって、クラスメイトが次々に、

変死していた事件、知らないのか？」とC。

それを言うと、DやEといった、

女子達が、ひいっ、と大きな声を出した。

「マジで。」と僕。

「それである招待状だろ。

行けねえだろ、気持ち悪くて。

でもそうしたら、夜道で、

誰かにクロロホルムのような布を嗅がされて、

口元をむぎゅうとされて、

気がついたらここだよ。」

拉致——。

おそらく、僕とB以外は、

そうして連れられてきたらしい。

すでに、もう事態は犯罪であり、

いま、緊急事態であることがわかった。

と、そこへ、スピーカーから声が聞こえた。

それは、

おそらくMなのだろう。

「諸君、ひさしぶり。

これから、全員殺害するゲームを始めよう。」

僕等は、一瞬にして、青ざめ、

次の瞬間、

「早く出せ！」と口々に叫んでいた。

「こんな悪ふざけやめろ。」

「悪ふざけなものか——…」

とMは言いながら、自分が、

イジメを受けたことを告白し、

お前等は何もしてくれなかった、

見て見ぬふりをしたのだ、と言った。

でも、僕は本当に知らなかった。

おそらく、Bも知らないだろう、と思った。

けれど、僕と彼以外は、

どうもそのことを知っていたようだった。

スピーカーから、

「これから一週間お前等を罅り殺しにする。

せいぜい、首を洗って待ってるんだな。」

すでに、もう、殺す気満々。

「なあ、クラスメイトが変死した事件の犯人は？」

と、俺は聞く。

「もちろん、聞くまでもない。」

——そのようにして、俺たちは、館の、

おそらく地下の通路に迷い込んでいた。

俺は、何とかMに謝って許しを乞うしかない、と思った。

知らなかったとは言え、

そんなことがあったら、

こんなことをしでかしたくなる気持ちもわかる。

何とか、こんな馬鹿馬鹿しい事件を早くやめさせ、

自首させてやらなければ、と俺は思う。

思ったが、あの様子ではそれも難しそうだ。

「…俺は鈍いから、全然Mがそんなことになってたなんて、

知らなかった。」と俺は言った。

Mがやってることは、馬鹿だと俺は言った。

こんなことをしても何にもならないのに、と。

しかし言いながら、

「止めないと――会って話すれば、

きっとわかってくれる。いや、わかるまで話す。」

そう言うと、Bは、こっくりとうなずいた。

「でも、どうする？」

ここはおそらく閉鎖された場所だ。

しかも、無人島だ。

出口は何処にある。

そして、Mは何処にいる。

またいつ、Mは俺たちを殺しにやって来る？

と、そこへ、

剣道部のDが、話しかけてくる。

「実は、目覚めた時に、

見取り図を持たされてたんだ。」

と、そこへ、Cも言った。

「俺は、これだ。」

目の前に、銃があった。

Dや、Eが言った。

「わたし達は、これ。」

それは、懐中電灯と、電池だった。

「他の奴は？」

すると、水泳部だった女子のGが言った。

どうも、これは一一と思った、俺は、

全員を集めて、チェックをすることにした。

「わたしは、鍵束。」

「俺は、パンだ。」と、H。

「俺は、水。」と、I。

「わたしは、封筒。」と、J。

(手紙だろうか？

あとで見よう一一)

「俺は一一何にもないぞ・・・」とK。

「わたしも。」と女子のL。

と、次の瞬間、うわあっと、

変な声をあげたかと思うと、

バタッと倒れた。

Bがお前等全員動くな、と言った。

俺はもちろん、動いた。

「死んでる。」と俺。

「毒物のようだな。」とB。

殺人ゲームは、

始まったのだ……。

しかし、パニックになっている場合ではない。

とりあえず、Jの持っていた封筒を開けた。

すると、そこには、一億の小切手が入っていた。

「どうやら……脱出者には、

これを、くれてやるから、

せいぜいがんばれってことらしいな。」と、俺。

「素晴らしい激励だ。」とB。

俺達は十人一一。

とりあえず、見取り図を見た。

この部屋は、大広間。

ここをふくめて、十二の部屋がある。

階段のようなものは見当たらない。

だが、おそらく、

十二の部屋のうちのどれかに、

隠し扉のようなものがあるのだろう。

と、Cが突然キレた。

拳銃をパンパンと頭上に向かって撃った。

「犯人はMじゃない。

きっとお前等の中にいるんだ。」

「やめろ。」と俺。

「まだ、キレル時じゃない。」とB。

だが、この馬鹿は、

次の瞬間、

「お前が怪しい」と言って、

Bににじり寄った。そして、

拳銃をこめかみにあてた。

Bは、やめろ、と震えた声で言った。

「俺は本気だ。」

「やめろ！」と俺。

このままではまずい、と思った俺は、

次の瞬間、Cに飛びかかる。

そして、揉み合いを演じた末に、

俺は銃を奪い取ることに成功した。

Cは、お前が犯人なんだな、

聞いてくれ、みんな、Aが犯人だ、

と言った。

みんなが、どう思っているかは、

わからないが、Cがヤバイ奴だということは、

ちゃんとわかっているようだった。

「何とでも言え。この馬鹿が！」

と俺は、銃とは反対の手で、

顔面を殴り付けた。

鼻血が出た。

「銃なんかあるからいけないんだ。」

と俺は、壁に向かって銃弾が出なくなるまで、

撃ち尽くした。

これで、もう、銃による殺し合いは起きない。

しかし、耳がキーンとしていた。

「…ありがとう、助かったよ。」とB。

Cは、撃ち殺されるものだとはばかり思ったらしく、

すっかり腰が抜けていた。

もしかしたら、漏らしているかも知れない。

「とりあえず、Cもちゃんと聞け、

なあみんな、とりあえず俺たちはここから抜け出すために、

ひとつずつ、部屋にあたっしていこうと思う。

この地図を見てくれ、地図には出口は書かれていない。

俺はおそらく、それでも出口があると思う。

また鍵束は、部屋の扉の鍵だろう。

でも、鍵を見てくれ、これは十三個ある。

つまり、一個だけ、別の鍵なんだ。

この鍵は、出口に出られる鍵だと俺は思いたい。」

「いい推理だ。」とBは言った。

「でも、もちろん、そうじゃない可能性もあるけど、

Cみたいに、暴れるのはやめてくれ。」と俺。

みんなは、一様に肯いてくれた。

「従えとか、俺がリーダーだとか言うつもりもない。

ただ、こんなことをしてたら、Mの思い通りになる。

Mは、おそらく、俺たちが殺し合うように、

仕向けてるんだ。でも、Mに、

俺はそんな凶行をさせたくない。」

みんなは、どう考えているかは知らなかったが、

銃がどういう意図であったのかを理解したようだった。

「また、懐中電灯と電池は、

この部屋の向こう側が真っ暗闇であることを、

おそらく示してると思う。」

でもまだ開けるな、と俺は言った。

「もしかしたらMは、

何かを仕掛けているかも知れない。」

ふふふ、と頭上から声が降ってきた。

「M！ M、お願いだから聞いてくれ。

俺たちはお前にちゃんと謝りたいんだ。

お願いだからもうこんなことやめてくれ！」

「遅いよ、A。

…でも、本当にそんな気持ちがあるんなら、

そこから抜け出して、ここまで来な。」

「必ず！ そうする、だから、――」

と言ったが、プツッと、

無情にもマイクが切れる音がした。

俺はうなだれた。

「…でもA、お手柄だよ。

これでMに、気持ちは伝わった。

最低、ここから抜け出しさえすれば、

助かるチャンスがある。」とBがそう言った。

そうだな、と僕は笑った。

うなだれている場合じゃない。

明るく物事をとらえなければ、と僕は思った。

――俺は広間のドアの横に立って、

おそるおそる、開けようとした。

ドアノブを回した。

何も起きない。

仕掛けはないようだ。ドアを開けて覗きこむと、

通路はやはり真っ暗だった。

「行こう、みんな。」

と、僕は言った。

通路を出て、隣の客間と記された部屋へ行こうとした時、

僕は立ち止まった。

そうだ、ふっと僕は指をなめて、風がないかを探ってみた。

「いや、まさかな…。」

しかし、あった…！

風は、客間とは反対の方向から、かすかだが、した一一。

あっちだ。あっちへ行こう。

「そちらには、六つの部屋がある。」とBが言った。

「六つか…」

懐中電灯で地図を照らしていると、

Dが、ふっと思いついたように言った。

「考えてみたら、

AとB一一ねえ、あなた達、どこから入って来たの？」

「どこからって、

上から落とされて一一…」と俺。

「何か見なかった？」

俺とBは顔を見合わせる。

脱出口の手掛かりはなかったか、

と聞かれているのだ。

「見なかったな——」と言いながら、

いや、待てよ、と俺は目をつむって考えた。

「そうだ——確かに、

玄関扉の前に、螺旋階段があったような気がする。」

「でかした。」とBが言った。

ちょっと待てよ、と俺は言ってから、

深く目を瞑った。

こうなれば頭を絞ってみるしかない。

あれがああで、これがこうで、

と僕はイメージの中で、階段の場所を結びつけてみようとする。

「地図では、

左の部屋に三つ、右の部屋に二つ、奥に一つだな——

つまり……右の部屋にあるのが、イメージ的には正しい。」

正しいが、なにぶん、殆ど一瞬の記憶のことである。

かなりチンプンカンプンだ。

「すまん……」と俺は肩を落とした。

「いや、でもそれが本当だったら、

十二の部屋を、たった三つに絞り込むことが、

できたということになる。」

「――急に落とされなかったらな、

もうちょっと、何か言えたんだろうけど…」と僕。

「なあ…」とHが言った。

「うん？」

「もしかしてさ、いや、

もしかしてなんだけどさ、――

俺たちって最初から、間違ってるんじゃないか。」

「何が？」

「いや、だって、

――ここでは、Mの声が聞こえない。」

そうだな、さっきみたいに、聞こえない。

どうもこちらにはスピーカーがないようだ。

隠しカメラもさっきはあるように思えたが――。

「…本当に、Mなんているのか？」と、Hは言った。

(つまり――俺たちは、

いもしないMと話していたってことか?)

いや待て、そうなるも…

「ちょっと待て、俺はMじゃないぞ！」

「あ、違う違う…そういう意味で言ったんじゃない。

それは、代役でもやらせたらいいじゃないか。」

そうだ、迎えの車がやってきたくらいだから、

そう考えても不自然ではない。

「問題は、そもそも、銃があって、

懐中電灯があって、地図があって、鍵束があって、

食料と水があって、ということだよ。」とH。

「すまん。もうちょっと、分かり易く。」

「つまり…あれって、殺し合いをさせるための、

設定だよな。部屋の向こう側に行けば、

俺たちの恐怖が待ってる。でも、Mは、

出口があるなんて、言ってない。

それどころか、ここまで来られたらな、と言った。」

「つまり——H、こういうことか、

俺たちは最初から入口にいて、出口にいた？」

「大広間をもう一度、隈無く調べてみるか」とB。

…部屋へ戻ってみると、

ウィーン、と自動式の階段が降りてきた。

えっ、マジで、そんなんでいいの、と僕は思った。

ちょっと待て、いや、待たなくていいか、と僕は葛藤しながら、

とりあえず、その階段をおそるおそるのぼった。

のぼりきると、Mがそこにいた。

満面の笑みをたたえて、そこにいた。

「M！…ああ、この馬鹿野郎、

いや、馬鹿野郎ちがう——ごめんなさい、って、

それも違う……」とシドロモドロな僕。

「落ち着け。」とB。

「いや、落ち着くな。」とC。

パカーンとクラッカーが鳴った。

「おめでとう、Aくん。」とMが言った。

「はい？」

そして、そのMの後ろから、殺されたはずの、

KとLが普通に生きていた。

僕は——というか、僕等はふつうに驚いた。

そして、プッ、とCが笑った。

「いやあ、どうせ同窓会やるんだったら、

大がかりなネタやろうぜってことになってさ、

俺、錯乱した男役。」

「え、ちょっと待て、えっ、えっ、えっ！」

「その顔…素敵。」とM。

「えっ、素敵とかじゃなくて、

素敵——うれしいのか、うれしいと言っていいんだな、

これネタだったんだな、——いやでも、

うれしいとかじゃなくて、」

「可愛い。」とM。

——ともあれ、と、Bが醒めた声で言った。

「悪ふざけだった、と。」

「はい…」と本当に満面の笑顔のM。

「本当に、閉じ込められたかと思った。」とH。

「いや、みんな仕事だから、

どうせなら、無茶苦茶な誘い方してみようと思って。

みんな、わたしの思いつきで、本当にゴメンナサイ。」

と、お嬢様全開のM。

でも、安心したら、なんだか、

Mに平手打ちの一発でもしたくなってきた。

ずかずか、と歩み寄り、

「お前なあ！」と、大きな声を出すと、

「Aクン、わたしあなたの会社のオーナーの娘なの。」

「えっ、マジで。」と僕は普通に驚いた。

思わず、引っぱたこうとした右手を隠すくらいに、驚いた。

「だから休み、普通にとれたでしょ？」

それに、あなたは断らなかった。」

いやあれは断らなかったんじゃないくて、

迎えの車が来たからで一と、言おうとしたら…。

「脈ありね。あたし、あなたのこと、

ずっと好きだったの。」

と、急に話がものすごい方向に展開していた。

「拉致してきた、みんなも安心して一一

一応、長期休暇だって連絡してるし、

その分の給料とかもちゃんと出すから。

もちろん、迷惑料込みで一ただ…。

どうしても、ひとつだけ、

みんなに来てもらいたかった理由があるの。」

本当の彼って、

どんな人なのか？

「いや、あのね…いや、あのですね、

ご令嬢のMさん、そういう時は、

直接おたずねなされればいいと思いませんか？」と僕。

「照れ屋なの。」

(照れ屋は、さっきみたいに、

普通に告白なんてやらかしません。)と言いたかった。

「ねえ、」とMが言った。

「はい、なんでしょうか、ご令嬢のM様。」

「Mって呼んで。」

「何でございましょうか、M様。」

「プロポーズ承諾してくれる？」

と、彼女は言った。

そして小声で付け加えた。

「だって、謝りたいんですよ。

一生謝って。あたしの恋心は、

こんなものじゃなくってよ。」

と、言われて、

僕はすっかり顔が真っ赤になり、

こくんと肯いてしまった。

そして、次の瞬間、

誰ともなく、拍手が巻き起こり、

舞台の幕が閉じられたことを知ったのだ。

《夜》——部屋に、何者かがノックする。

もちろん、ドアは開かない……。

それだけだ。

開けてみても、ぬぼうっとした闇がある。

電気をつけても、

クリーム色の壁があるだけ。

少し前に、

コーヒーに砂糖を入れていたら、

コップの中の黒い液体の窓に、

自分ではない誰かが映った。

見間違いかと思った。

でも、こういうのって、

一度考えだすと中々頭から離れない。

要約すれば、

「もしかして、俺、

憑り依かかれているんじゃないか？」

俺は、

カメラ屋でポラロイドカメラを買い、

自分の部屋を写してみた。

写真は、とりあえず、

タロット占いのように伏せていた。

それから数分後――

おそるおそる、写真を裏返してみると…。

「よかった――。」

そこには、何も写っていなかった。

僕は憑依されていない。

しかし、ドアのノックの音は止まなかった。

星新一のショートショートなら、

そこで物語は始まるのに、

いつまでも何も起こらなかった。

そんな、ある日――

家に電話をかけてきた友人が、

「お前、同棲してんだろ。」と言ってきた。

「なんだよ、いねえよ。」

また、誰かが、

勝手に悪いことを言ってんだな、

と、思ったのです。

でも、彼は、

お前の家から女の声がする、

と、言ったんです。

「何言ってんだよ、おまえ。

お袋だろ、きっと。」

そう言うと、

サーッと、彼の表情が変わったので、

どうも、変なことを言ったらしいな、

と思いました。

家に帰る前に、

自分の家に電話をかけてみました。

プルル、プルル、

携帯画面には、実家という表示。

「もしもし。」

――母親です。

なんだ馬鹿野郎、

あいつ、脅かしやがって…。

「あ、俺…別に何でもないんだけど、

これから帰る。」

「はいはい。」

でも家に帰ってからも、

気になるんですよ。

だから、思い切って、

父親にこの話をしてみたんです。

父親は、学校の教師で、

とてもいいお父さんです。

息子と父親の仲がいいなんて、

気持ち悪いことですけど、

結構話してましたー。

二階の書斎をノックします。

「ねえ、お父さん…」

「ああ、入ってくれ。」

僕は部屋に入り、

本棚に見惚れます。

「…何だ？」

「いや、実はー。」

と、僕は、自分の家であることを、

ハブきながら、

いやだって都合悪いでしょ…

話しました。

友達の家ってことにしました。

そうしたら、お父さん、笑って、

「子供の頃は、

いろいろあるって言うからな。」

と、靈的体験に好意的な意見。

教師だけど、否定はしないんですね。

「…まあ、どうしても気になるなら、

ビデオカメラでも設置したらどうか？」

って――。

そうだね、ありがとう、

と、言って部屋を出ようとしたら、

「そういえば、お前、

ずっと小さい時に、

部屋に女の人がいるって、

騒いでたことがあるな。」

ドキッとしました。

頭からつま先まで、

電流が走ったみたいになりました。

もちろん、覚えていません。

「…やたらリアルなんだよな。

水に濡れてるとか、

髪はどれくらいとか、

身長はおとうさんより低いけど、

おかあさんより高いとか、

—いやまあ、

当時は、子供のいたずらとっていたけど、

思い出すと—

あれも、霊体験だったのかもな。」

僕は心底ゾッとしました。

じゃあ、

俺の部屋にいるのは、

いや、俺の家にいるのは、と—。

俺は、ふっと思い出して、

ポラロイドカメラの写真を、

もう一度見てみることにしました。

(見るべきじゃない！)

と、頭の中で声が言います。

でも、見ました。

そこには、――

やっぱり何も写っていませんでした。

本当に、人間って馬鹿だなあと思います。

『私がモテないのはどう考えてもお前らが悪い！』

とかいうアニメを観ているのですけれど、

その主人公の黒木智子みたいだな、と思いました。

人間って、現実直視できないと、

あそこまで歪になっちゃうんだ、

でも、そこが切なくもあり、面白い。

次の日、

僕は友達に、

これこれこんなことがあってさ、

という話を順序良くしました。

最初は友達も笑ってたんですけど、

段々、顔色がおかしくなってきた…。

教室で話していたのですが、

ガタン、と席から立ち上がり、

「俺たち、親友だよな。」

と、肩を押さえて、聞いてきました。

「もちろん、なんだよ、気持ち悪いな」

「…いまから、神社行こう。

お祓いしよう。」

俺はわけがわからず、

こいつが、俺をからかっているんだと思って、

無性に腹が立ちました。

「ふざけんなよ、理由言えよ。」

「…言えない。」

すると、ぼろぼろ、涙を流して言うんです。

「俺にはそんなこと言えない。」

一瞬クラスの空気が止まったみたいになって、

僕等の方に視線が集まっていました。

すると、仲のいいクラスメイトが、

俺の名前を呼んで、

どうも最初から僕等の話を聞いてたみたいで、

「俺も行く。」と言ってきました。

「なんだよ、大袈裟だな。」

でもこうなったら、

もう仕方ないじゃないですか、

神社へ行きましたよ。

それで、神主さんに、

お祓いをしてもらいました。

五千円したか、と思います。

でも、友達たちが、

半分出してくれて、

うわーこいつら、いい奴、

なんて思ってたんですけどね。

神社を出る時に、

もう、そっちの家へ行くな、って。

「は？」

は、ですよ。本当に、

何言ってるんだこいつは、と思いました。

「おじさん達が心配してる。」

なんで、こいつ、

俺のおじさんのことを知ってるんだ、

と思っていると、

「お前の両親は死んだんだ。

忘れたのか、

強盗殺人で、包丁でめった刺しにされて、

死んだんだ」

ってー。

優しい。

---

初めての言葉って何？

にこにこって、笑う。

無限の遠くまで語りかけてくれる、

秘密の魔法みたいに、君が言う。

「わかるでしょ？」

君が僕のこと、

「自由だ。」って言った。

「旅してるみたい。」

そう言ってくれたから、

本当の魔法使いになろうと思う。

風景をめくりながら

遠くへ、行かせてあげる。

この世界の一番遠く。

一一目が眩んでも、

僕は、笑える。

癒えたはずの胸が疼く、

想像できない場所で、

メチャクチャニサレテ。

奥から流れてきた別の場面に押され、

僕のうしろにまわ、る、神が嫌で。

コキュウコンナン。

トクトク。

(本当はもう、わかってるんでしょ?)

(何が?)とは、言わない。

上を見る。

見たって——もう仕方ない。

さみしいだけだよ。横を見ても、

スポイル…。

前を向いていたって、

臆病な狂人になるだけだ。

さらさらのパウダースノーの気分。

でも、ピアノを弾いている。

(生存本能に火をつける孤独に、

気が狂いかける航路図。)

て。ん。て。ん。

て。ん。

て。ん。て。ん。て。ん。

て。ん。て。ん。

遠くから聞こえてくる声は、

さ。び。し。い。

ポケットの中で、

小さく折りたたまれていた次元だ。

いったい僕は、なにを求めていたのだろうか？

さ。び。し。い。

数字を入力する、

1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 0と、

四桁、八桁、入力する。

たとえば2000年の

東京は、8,134,688。

太陽までの距離は $149.598 \pm 0.000\ 680$ 。

意味不明な数字の羅列が権利を主張する。

返還される、歴史。

でも…って、君は思う。

本能のようなものが呼び起こされ、

衝動的にその鍵らしい物に疑問を感じる。

そんなの必要ない。

踊り子のフリルをゆらしたみたいに、記憶のだまし絵。

耳のスピーカーには子守唄。あるいは、君の心臓の音。

「文明の孤独は、

いくつもの世界を必要とし、

自分の中に何人、何十人もの魂を必要とする。」

不協和音の鼓動が、

天井を突き破るもののように思える。

幕は引かれない。

僕等はいつも人を騙し続けた。

本当の自分なんか見つからないということを、恐れた。

でもそんなの、飛翔から生まれた風の前では、

受精するだけ。

愛だって、カップラーメンの中で孵化するのだ。

(どうだ？ これだろ？

これじゃないのか？)

裸体の熱は、きっと、

完了した時間を歪めてしまう。

面影がなくなるまで、

人を愛した記憶を忘れるまで、

付き合ってみようと、思った。

無と対峙する、始まりだったな。

感覚を開放させるための起爆剤。

ねえ、ベタベタするのはニガテなんだろ。

でもゴハン、ヒトリでタベルの嫌なんだろ。

いいよ。映画に、行こう。

買い物に行こう。

つまらない奴だけど、よかったら、

旅行に行こう。

くだらないこといっぱいだけど、

真面目になりたいよ。

心配だよ。こわいよ。

誰かを好きになるって気持ちで、

セクスのためだったら、嫌だよ。

(白い壁と天井があって、

ときどき、その空気みたいになって、

僕は窒息しそうになる。)

SOSって、言う。

緊急事態って、誰かが言う。

でも、淋しさのカタチ。

スキとかキライをかさねながら、

すべて純粋なものにする。

空白だらけの冷たい僕の心臓を、

どうしようもなくあたたかくしてくれる。

もう一度だけ、ねじをまく。

眼から脳裏に映像化される硬質な音より、

心臓からきこえる音が耳にやさしくしずんでゆく。

時限爆弾のような生存の秒読みは、

おさえきれない愛しさが救ってくれた。

「機械仕掛けの世界・・・。」

寄せる波に向かって原始的な抑揚。

手を引かれ歩く。

ただ君と手をつないで、

懐かしい匂いのする街を歩きたかった。

記憶には、いくつもの水たまりができていた。

僕は、もう僕を必要としない場所まで来ていて、

だから君を必要として、

もっと普通の生活を考え出していた。

甘えきった倦怠。

自分を墮落させる言葉に嘔吐。

僕の手の中の物は、

いつも、耐え切れない心。

「魔法なんて、ないんだ・・・。」

て。ん。て。ん。

て。ん。

て。ん。て。ん。て。ん。

て。ん。て。ん。

虹彩の中の影が、

憂鬱なクロールをする。

ふるえている刷毛が、

雲をばらばらにする。

感覚が閉鎖されているような気がしながら、

それでも、

「どこへ行くの？」

から始まって、

さ。び。し。い。

「じゃあ行くね」

で終わる。

悲哀の音色と光の乱舞。

大量に降る雨と、残酷な心の会話や文章。

さ。び。し。い。

互いを完全に打ち消しあっていて、

変わらない街、完全に何も変わらない人たち。

嘘だらけのどうしようもない心たち。

見ていた僕は、すごく寂しい。

(蟻だ。)

それは、とことこ、と歩いて行く。

「蟻だ。」

——心の敏感な場所に、

優しいお前が泣いている。

命の淵を力なくもがいている。

黒い葬列。

生存競争の歯車。

（何かを見つけたとしたって、

涙の一粒も許してくれない、

人はいつだって好き勝手な夢ばかり見る。）

ごらん、淋しさが仲間外れをうみだし、

怒りが人を傷つけようとする。

憐れなほど、愚かな僕らだ。

それでも、神話と星座がむすびついたように、

国と国同士がむすびつき、

文明が進歩をはじめてゆくことを、

止められない。僕の肩が、ふるえ、

新しい争いが始まることを予感したとしても、だ。

手を強く握っていてくれないか、

感傷よ。

海よ。

まだ行かないでくれ、離さないでくれ、

青空は、何処へも行かないと、

信じさせてくれ。

(でも、一分前の僕は、何をしていたのだ。)

考え終わる前に、ほらすぐに、

(でも、一日前の僕は、何をしていたのだ。)

知覚できないほどのわずかなズレを感じながら、

僕は取り残される。

でも、僕の言葉に君が笑った。

(不条理なものだ、

みんなが置き去りにしたものを、

結局、僕だけが見放さず、

僕ひとりだけが、守ってる。

永遠に悲しいような気持ちがしてくる。)

きっと、助からないだろう。

でも、こうやってでもいなければ、

僕は僕の生まれた意味も見つけれない。

でもきっと僕は立ち去った彼等を許すだろう。

愚かな人びとを許すだろう。

「わかるんでしょ？」

君が僕のこと、

「自由だ。」って言った。

「旅してるみたい。」

ひとつひとつ、思い出せる。

耳の奥で、その湿り気が、

花の波のように匂いたつ。

それは火だ。

まず、僕のくぐもった声が、

たくさん名前を呼ぶ。

そして、月は満ち、

僕はまた、すっかりつくりかえられている。

ちっぽけでいとおしい、水の流れ。

そこで君と混じりあい、青になり、

波となった。

呼ばれることで、

フォルテシモの雨も陽気さのなかの汗になった。

純粹にはじまってゆく世界。

夢を見てまた目覚めて色んなことを夢見る生活。

はじめたものは、

繰返し続けたものだ。

鳥の卵だ。

そしてそれはブロック塀にいた猫だ。

そして僕は自由な魔法使いだ。

僕は花の雫にもなれる。

やさしい月の射しこんだ水面にもなれる。

(ごっこの夢。)

あるいは、

(そういうはずの夢。)

ねえ、まだ、

詩を書き終わらないの、と君が言う。

部屋の明かりを消しても、

パソコンは消えない。

傷つきやすい夜が、

僕の感性を決定的に歪曲なものにする。

テレビの電源を消したって、

ゲームのリセットボタンを押したって、

僕はまだ、本当が何かなんて、

一つもわかっていない。

でも、ただそのことだけが、

世界へと解き放たれた。

愛は、かぎりなくやさしい。

かぎりなくやさしいものは、

いつだって絶望を胸の中にかかえこんでる。

きっと、

何千年生きても、

何万年こうやって詩を書き続けても、

僕の言葉は空っぽにならない。

なんていうさみしさだろう。

なんていう、愛の深さなんだろう。

呼吸や心臓の音も、涙も、

僕の愛なんだ。

どれくらい消しても、

どれくらい分だけ、

あたらしいものが生まれ続ける。

きっと、火傷してしまう。

凍瘡になって、

羽ばたきの感覚を忘れてしまう。

いつか、標本の中に、

僕が含まれてしまうようになる。

でも、ごめんよ、

これは降りやまない雨なんだ。

死にたがり、の恍惚と、

生きたがり、の官能が、

折りあわさって、絶望の烙印を押す。

でもその時、絶命する。

しかしその時、僕は時計であり、

一個の磁石なんだ。

コマーシャルが証明している。

氾濫して、イメージが混じり合い、

僕はもっと目覚める。

出口へ向かいながら、もっともっと離れていく。

飢餓。

そして、拡散。

溶けあうこともできずに、

奪いきることもできずに、

ビブラートすることもできずに、

空の裂け目へ行くこともできずに。

「人間は何処にいるのか？」

(隣人は何処？)

僕は、十字架の上にいるみたいだ。

あるいはずっと監獄にいるみたいだ。

あるいは最初から亡骸であったみたいだ。

でも、魂が宇宙を求めている。

そして僕は、うねるような風の音に近づく。

祈りを濁きの中で知る。

無限に不可視の運動が、

断片で再現されることを知る。

永久にやさしくある方向へ、

行かねばならない僕等自身の言葉が、

その時、ふっとわかる。

「そうだね、そうだったね——…」

僕は、何年も前に、

海で感じた時の孤独を思い出した。

美しいものに、

傷付けられる感じを思い出した。

匿された病が、遠い意識の底で、

本当の愛の姿を説明している。

あらゆるものが、あらゆる意味を生んで、

あらゆる僕が、あらゆる文字に溶けてゆく。

「風になりたかった。」と僕は言った。

君はくすくすと笑ってる。

「海に、近付きたかった。」

——波音は聞こえない、

でもきっと、愛って、

どんな言葉にもなって、

そしてこの文明の悲しささえも、

亡霊たちの声さえも、

許してしまえたんだよね？

そう思う。

しずかに、パソコンを消しながら、

かたわらにねむる、彼女の頭を撫でる。

人生はその時、少し優しい。

狂いそうだけど、優しい。

## くまのねむり

---

あー眠い。

冬眠したい。

寒すぎてマジ無理。

だってぼく、くまだから

冬眠する権利があるはず。

…くまだぞ、

人家はいりこんで、

冷蔵庫あけちゃうぞ、こら。

—って、くまじゃない、

俺人間だ！

しかしまったく春ってやつは、

眠たい心地にさせてくれる。

春眠暁を忘れず？

夢の中へといざないこまれていく時の、

快感もそうだけど、

夜中に目覚めて、ああ寝ようと思って、

すうと入りこむときも素敵。

—長い道である、

夢の中で、

希望を探すのがいい。

…迷宮入りするねむり、

生きている時間の三分の一は、

夢を見て過ごす。

ほとんど死んだみたいにして過ごす。

脳の回復、体力の回復、

そして時にそれらに、基づかないような、

夢という不思議な時間。

——それにしても、

くまは、

どんな夢を見ながら、

冬を過ごすんだらうな？

ソラを見上げれば果てしなく広がる星、

随分寝たけど、うう…ぶるる、まだ寒いな、

お、ありがと、くまだけど、

ポカリスエットのみます。

ゆきがふってくる。

わあ、ゆきだ、ゆきだ、

って、ちがうだろ、穴掘らなきゃ、

っておれ、さっきどうやってねてたっけ、

いやそれはうさぎだ、

というか、へびだ、

くまはあなのなか。

——それにしても、

と、ぼくは、時計を見た。

チラッと見る。

あと十分くらい眠れる。

人生落第者の気分。

でも、生きてく上で、

上も下も邪魔なだけさ。

このままゆっくり時よ、

このままゆっくり時よ、

動けばいい——…

すると、誰かが言ったんだ。

「過去に腰を下ろすのも、

不思議な場所で目覚めるのも、

人生に立ち向かうのも、

君の考え方次第だ。」

ぬくもりがそこにあるだけで、

動物の居場所になる、

生き物の住処になる。

それを作りだした人にも、

それを享受する方にも、

やさしい心のよりどころになる。

唇に泡。

唇に泡があって口角が、

口角が蛙を思い出させる。

蛙は何かを見ても何かを思い出す。

蛙…は、いつだって、

優しい——さ…

「悲しみなんかなくなったらいいね。」

と君が言う。

「洗いざらい全部、ぶちまけちまったらどうだい」

と——それに僕は…

そうだね、そうだねと応じながら、

「疲れたらいつでも遊びにおいでね

一人でいたい時間もあるだろけれど…」

何も言わずに抱きしめた——

それは、非常識な、

セクロスの宣言だったのかも知れない。

「俺はプロだ！ プロだ！

まくわうりだぞ！ 暴れてやる！

ちゃぶ台ひっくりかえしてやる！

ヒッサツワザにする！」

いつも以上に優しくしてくれた、時間――。

あたたかなシチューや、

バーモンドカレーを作りたがる、僕…。

おやすみなさい、

グローバルスタンダードのなにかしら、

ドアをドンドン叩いている、

いつ鳴りやむのか分からない淋しさ、

さようなら、だけど、こんにちは、

念願の免許をとったら、ハイヒールが折れてしまった女よ、

(君は胸の手術をした――…)

ああ、それを考えながら眠る…ああ、可能性を閉じたのならば、それが、

それが――光であり愛であり、自由である！

「死んでくれていいよ。」

――でも、生き残ってくれ…。

頼りなくて寄る辺ない、

でも、つかみどころがない、

超越系とかいうグループに属していることじゃない？

僕はといえば、

もやもやで、マントヒヒとクレイジイなことを考える。

それでもすぐに眠りながらエレジイのことや、  
ノイジーなことばかり考えている。

(幼かったかと、問うたなら…

—文字すくなかった、幻とでも気障に?)

必要なことは、サイレンかも知れない。

必要なことは、悪魔みたいに追いかけてくるかも知れない。

鴨がネギしょっているみたいに繰り返す—

君は、スポークンワーズとかフリースタイル…

(官僚が悪い…)

—防衛長官が悪い…

「何月何日だか分かんなくなりながら、

海へ行こう…」

よいつぶれてタクシーに乗ると、

何故かおじさんが、

「苦労してるなあ」という顔をして、

ゆっくり運転しますね、

と言ってくれる、

不思議なジントク?

入らないものなんてあるだろうか?

監獄？

閉じるべきものなんだろうか？

平和・・・？

不況へ——

ああ、スネたりグレたりしない、

一本の細い道へ・・・うそつきじゃない、そいつに、

ジャンプしながら、はしゃいで、

不思議なアイテムをとってしまうのだ、

ゲームの中では、きっと誰かが儲けていて、

そして誰も死ななかつたはずだよ。

そしてきっと、どんな、

アルバムにもはいらなかつたはずだよ。

ウォシュレットもプラズマテレビも、

ヒトラーだつたはずだよ、

夏だよ夏、ああ・・・夏だな——

あたまがわるいからだ、ああ、それで、

あたまがかゆいからだ、ああ、それで、

はたけで、ねむっている、

おじさんに、

むぎわらぼうしをもらうのだ。

もっとむれてしまうけれど。

もっと、むれむれ。

笑い声が一番楽しそうに聞こえてきて、

殺人殺人殺人殺人、

ああ、ダイナミックなハッピーなんだ、きっと、

すばらしい晴天だな、

ああすばらしい剛速球左腕、

新しい可能性を見つけたくて見つけれないもどかしさ——だな、きっと..

うるとらなんだ、直感で、本能で、名刺交換しそうになる、われわれ、

“らでいかる”とか、

“なしょなりずむ”とか言いたかったのだ、僕は。

(自分のなかに確かなものがないと「信じてしまっている」)

UFOが見えてくるのだ、

宇宙の神秘に驚く、僕は、

ロボットダンスを近頃ひそかに研究していて、

ジゴロ、クロロホルムをかがされているなのだ、

よくわからないかな、

よくわからないね、

(自分のなかに確かなものがないと「信じてしまっている」)

——でもそれは、「気のせいさ」…)

でもそれで千匹か万匹かの無限のほたるが湧いているのだ、

でもおかしいな、キャンプファイヤーの思い出がない、

おかしいな、ビジョンとエッセンスが足りない、

高速ブロードバンド回線が足りない、

君は多分人間を少し信用しすぎているんじゃないか、

そうだろう、そうだろう、

(神がさみしいっていうだけで、

ブッダやキリストがうまれてきて、

悲惨な人生を過ごしてくれる——… )

人間なんて糞して、飯くって、働いて、それだけの生き物だ、

イースター島のモアイ像みたいな顔をしながら、

パチンコ屋へ行き、風俗へ行き、それで、

ファイナルファンタジーをし——と、話がそれたね、

いやちがう、あれはたぬきなのだ、

でも、たぬきなのだごり押しして言っていると、

ぼくはいつも、轆かれたたぬきを道路へあげてやって、

切なくなったことばかり思い出すのだ。

(歩くとピヨピヨ鳴いてみせる、君はひよこ、なのだ )

地球のシーブ

地球にいる僕というスリイブ

…こほん、こほん、あーあー、マイクのテスト中、  
ほんじつは、せいてんなりせいてんなり、えーと、  
ぶちころすぞ、きみたち！

「被害を被っている世界の人としての意見は、  
いつだって国家の戦いになるが——  
被害というのを気にするもしないも、  
当人の自由であるのだ！」

( センスが無い——)

きききっ——いいいん！

…ああ、またビールこぼしちゃったよ、  
まったく。勿体ない。  
パチンコ屋だよ。まったく。  
換金のシステムってふしぎだよ。おいおい。

( ビジネスチャンスも無い…)

きききっ——いいいん！

…はやく夢から醒めたいよ。  
誰かが魔法をかけてくれると信じてるよ。  
ああ。おお、そんなの洗脳さ。呪いさ。  
でも、不思議な魔法があって、

いつか、ちゃんと、めざめるつもりなのさ。

…こほん、こほん、あーあー、マイクのテスト中、  
ほんじつは、せいてんなりせいてんなり、えーと、  
ぶちころすぞ、きみたち！

白黒の映画を見ながら、

心の叫び、主張、愚痴、カミングアウト、

ああ、一人芝居、独り言、絶叫…！

椅子に座ってる奴らの評価を待ってる、

机上の空論はいつだって、遠くで火山でまくわうりしている、

被害妄想なわけ、そしてそれはいわゆる過剰防衛なわけ、

大体おおくのところ、まくわうりしている、

沖で衝突するタンカーのことや、

いつか倒れるかも知れない斜塔のことを、

ぼんやりと考えながら、まくわうりたべたい。

祝福されるべき君よ、

誰だろう、君はえらばれたのだ、

糞まみれになりながら、

前に進むべき、

ピーターパンの面影はない、

ムーンウォークで、

ただのいい人になってしまう、

早くかれらを見捨てなさい、

ロープを切りなさい、

マサチューセッツ工科大学まで、

——行け…。

行くな！ どっちなんだ、

僕にキスしろ！

「いいから、しまっとけよ。」

「何をッすか？」

「わかってるだろ。バットだよ。」

「バット？」

「俺にはわかってる。

それで、ボールをぶっ叩くつもりなんだろ。

その破壊力は、スイカさえ粉々にしてしまうだろう。」

「何言ってるんすか？」

「股間の！」

「ああ、これっすか？」

「あざーす（↑）」

\*

「戦いへ行く前に一つ聞きたい。

我々は戦うべき時と、守るべき時がある。

そうだな。」

「むちゃくちゃカッケエーけど、

シモネタっすか、氏ねよお前」

\*

「彼女の前でふざけようと思って、

フラワーロックンロール股間にのせてたら、

うう、ああ、うう、おお…

なんじゃこりゃああああ！！！」

「止めとけよ。」

「なにやあ？」

\*

「ふう、バットを振りまわしすぎて、

こんなに俺の手がボロボロになっちゃった。

人生はつまり、バットを握るか握らないかなのだな。」

「なに、かっこつけてるか知らないけど、

警察呼ぶわよ。」

「男にとってバットとは何か？

蠅たたきのようなものか？ 否、断じて違う！

男にとってバットとは、エッフェル塔であり、

自由の女神との邂逅だろう。」

「あ、もしもし、警察ですか…

実はわたしのうちに――」

ぷつんと、電話を切ってそのまま、

おもしろいので、続けてみた。

「にゃあ。」

「猫の振りした…はい——」

「びよこびよこ。」

「はい、うさぎのふりした…」

「びよんびよん。」

「かえるのふりもする…はい、」

「アミーゴ！」

「はい、——あぶない人が、」

「モンマルトル！」

「ってなにそれ、」

「いや、芸術家っぽいかなと思って。」

「ちょっと思ったんだけど、独占欲って強い？」

「えっ、そんなことないよ。むしろおおらかで、馬鹿だと思う。」

そんなの自分で言うのもどうかと思うけど、という眼で彼は見る。

「じゃあ、例えばいこう。」

「来て下さい。」

「もうちょっと、明るい声で。」

読者サービス…読者サービス。

「ばっちこい！」

と、わたしはセーターを脱いでから言った。

「じゃあ、俺がクラスメートの女の子と一緒に帰る。」

「え、…えーと、そうね、いいよ、うん、いい、

でもーねえ、エヘヘ…あたしにも、声かけるよね？」

「次いこう。」

「ばっちこい！」

「クラスメートの女の子が、コンビニに寄りたいたと言った。」

(え、なにそれ、買い食いするつもり？

ふたりに仲良く食べるつもりか、えー、その女の子、見付けたら、

睨んで、唾はいとく。女なめっとこわいぞ、くらい言っとく。

それで、とりあえず靴隠す。手エ出したら…これ以上は言えない。)

「へええー、ふううん」

「次いこう。」

「ばっちこい！」

「ちょっと待て、お前ちょっとキレてないか？」

「キレてなーい！」

「わかった。次いこう。」

「レシーブはまかせろ！」

「クラスメートの女の子が、あ、今日家おかあさんおとうさんいないんだ。

法事なの。よかったら、これからゲームセンターいかない？」

（ちょっと待てええーい！）と頭の中で誰かが言った。

それじゃあはじめから、彼を誘惑するつもりで、サソったな。

どういうコンタンだ。オトし狙いか。クドき文句は、実は、とかいうカマトト路線か。

まちがいなく、さそり座の女。そんな卑怯な奴に対抗するためーに、

コブラ買いたい。具体的に、コブラ彼女の服の中に入れてたい。

「いいよ。あたし、その子の気持ちわかる。エヘヘ。」

「なあ、顔・引きつってないか？」

「ばっちこい！」

「でも俺、カノジョいるんだよ、と言って別れた。」

「ぱちぱち。」

「でもその女の子が、帰り際に、

“でも今日、時間あるんだ、家寄ってかない、ご馳走するよ”」

(ちょっと待てええーい!)と頭の中で誰かが言った。

なんだそれまで散々フェイクだったのだな、さそり座の女よ。

ふっ、見え透いた真似を。手料理ごときで男が落ちるなどと…

肉じゃがが? 女盗賊、肉じゃがが?

「えへへ…わたし、そんなの全然気にしないよ。」

「へえ…」

彼に顔をじろじろと観察されて真っ赤になってしまう。

手にあった缶を最低でも百回くらいつぶしたい。

握力なくなるまでつぶしたい。でも、もしかしたら、そうしてるうちに、

彼の右頬あたりにまちがって、あたしの拳が飛んでゆくかも知れない…

蝶のように、蜂が刺したから!

「でもそうすると、お前は、すごく優等生の女の子だな。」

「愛される女の典型になりたいです。」

(夜な夜な携帯電話を覗くなんて馬鹿なことはしない—)

相手も嫌だし、バレたらそれこそ悲惨。

必要とあらば、盗聴!)

「じゃあ、今度、俺、その子と一緒に…」

ぐにゃっ、と缶から黒い液体がこぼれた。

「え?」

「…ぐす…スン…」

「ちょっと待て、泣くとかズルいだよ。質問だよ。

たとえ話だよ。なんだよなんだよ、俺、悪者みたいじゃないか。」

「泣いて…ない！」

「わかった。お前は泣いてない。」

「ばっち…おい！」

「嘘だから。——本当にそんなことはないから。」

「嘘か。」

「嘘、嘘、とんでもない、大ウソ。」

「そうね…そうよね。」

サッサッと涙を拭いた。彼がじろじろと見た。

「それでは、採点結果が出ました——

ちゃらちゃらちゃーん…お前、めっちゃ独占欲強い。」

「えーなんでー！」

教室の窓から、裏庭が見える。

そこに、櫻崎がねむっているのが見える。

陽射しのせいか、やたら白っぽく見えて、不思議だ。

「おい、櫻崎のやつ、眠ってるぜ。」と柏谷。

「下ネタかよ、氏ネヨ。」と、俺。

「…なんだよ藪から棒かと思ったら、金棒ですかいきなり。

言っとくが、使いすぎたオナネタに飽きたなんて悪い過ちだ。

しばらく寝かせると、また復活する。一時の感情に流されるな、

萌えろ。そして、目覚めろ。」

「お前は誰なんだ。」

と、言ってから、冷たく言い放った。

「いいから、氏ネヨ。」

後ろから、ねえ優しくしてあげて、その人、絶倫で欲求不満なの、

と、本庄なつみの声がする。

クスクス、とまわりの女たちも笑っている…。

しかし女の笑い声ってのはやたら耳に残る一一。

それにしても、それが女の言葉かと思う。世も末だ。

いや、始まったばかりなのにこのありさま。

「言うな、本庄。友情とは見返りを求めないもの！」

友情が頂点に達したその時、腹の奥底でマグマが煮えたぎるのだ。

ああ、すまなかった、柏谷。本当はお前のことをグレートに、

ミラクルに、愛しているのだ。」

「愛しているのだ。ドリブル、パス、ドリブル、パス、

トラベリリイイイング！！！」

「受け取ったぞ、お前の本当の声を！」

と、どこからかやってきた奴と絡み合いを演じる。

ホモプレイやめろ。っていうか、お前誰なんだ。

というか、お前も誰なんだ。

「いいから早く氏ねよ。」

えーっ、サド過ぎるだろ、もうちょっと優しくしてください、

といおうとしているのがわかったので、俺は言ってやった。

「牛丼買ってこい。」

「牛丼だと貴様、許さんぞ！ 許さん、俺はつねづね、

牛丼などというものが許せなかった。牛丼じゃない、

あそこには、必ずたまねぎがある。ましてや、紅しょうが、

なにより、卵がある。俺はそれがつねづね許せなかった。

だから俺は紅しょうがしか喰わない！」

「馬鹿か、お前は。」

「ずっこんばっこん！ ずっこんばっこん

それでは、わたくし、牛丼買いにいかせていただきます。

「おい暴走列車が通るぞ、童貞力をなめるな！」

くっくっく、と俺は笑った。

「ねえ…櫻崎さんに見惚れてるの？」と、なつみが言った。

「いや、こういう映画どっかにあったよなあって。」

「ふうん…で、好きなの？」

「なんで？」

「なんでーって、お姉さん相談にのってあげようか、ボク」

「そういう言い方はよせ。柏谷のように接したくなる。」

「接してみてもいいわよ。その代わりに、

密着プレイが増えて、女性ファンなくすわよ。」

「じゃあ、そうしょうか。」

と、言ったら、なつみが後ろへ下がったので、

冗談だよ、と言った。こいつはこいつで、純情なんだろう。

「別に女性ファンはどうでもいいが、

本当にそういうのじゃない。」

「じゃあどうして眺めてるのよ。ああ、先生、

ちょっと嫉妬しちゃうなあ。かわいい男の子が、

ひとりの女のものになるなんて。」

「だから違うって。」

「じゃあ、何なのよ。教えて！」

「いや、周りが木に囲まれてて、

陽射しがすうっと射し込んでさ、あそこだけ別世界みたいだろ。

あんなところで眠ってるなんて、いい趣味してるなと思って。」

「話したことあるの？」

「ないよ。」

「ふうん…話したいとか？」

「いや、そういうわけでもないよ。むしろ、

あそこで、ぐっすりと眠りこけてくれていたらいい。」

「恋とかじゃないの？ 言っちゃいな、本当は、

彼女を見ているだけで幸せでした—とかいう、クチなんでしょ。

わかってる。とっても幸せなんだ、好きなんだ、お前が！」

というか、なつみ、お前も柏谷の馬鹿がうつったのか？

「お前はそんなに恋に結び付けたいのか？ というか、

犬猫じゃないんだから、絵画的な興味とかあるだろ。」

絵画的な興味？ なにそれ、ぺっ、喰えない、となつみは言った。

「乙女心とは恋をドラマティックにする。」

「やめろ。無理矢理すぎる。」

「…まあ、好きじゃないならいいんだけどね。」

「—うん。」

と、なつみが後ろから離れていったので、安心して、

ぼんやり眺めていると、

「ーアイツ、櫻崎のこと好きなんだって！」

と、なつみが大きな声で言うのが聞こえた。

ああ、時よ止まれ、しずかなるお前は美しい。

僕はくるりと振り返り、掃除箱から、箒を取り出し、

いまも、熱弁している、なつみの背後に立つ。

「キスしろおおお！ 愛をささやけえええッ！」

「ところで、なつみ、モグラたたき好きか？」

「好き！」

「よかった。」

僕は遠慮なく、振り下ろした。

あははは、と女たちが笑った。

それにしても、女の笑い声はよく耳に残る…。

## マイクロスリーブ

---

なみだ。

抱きしめられると泣いてしまうのかな。

からだ、は、その時、

ふやん、と、ちいさくふるえて。

赤ん坊みたいなの――

ちいさな声で、

泣いた。

「駅で、きれいな女の人を見た」

(たとえば、あたしは、馬鹿なのかも知れない。)

・・・でもあの人は、あたしよりもずっと綺麗で、

たとえばあたしが片思いしている男の人に、

愛される人なんだろうな――。

あいしてる、の延長、コオド。

あいしてる、の延長――。

寒いし痛いし悪いことばかりだしほんとうについてない、

苦しいし馬鹿馬鹿しいし断然どうでもよいはずなのに、

一度思い込んだら中々消えない。

するどくなった、とがっていった、

いちばんはじめに消えてしまいたい、にぎりしめるて、

ひつようかな、走るあし。

しょう／いや

しょうしょう／いや／いや

と、言った――。

まったく何物にも染まらないでいる白紙の手紙に、

とくべつ真っ赤なキスマークを、

つける人は誰？

包丁で、首からざくりとされるゆめをみる。

サロメかわいそう。

サロメどうした、かわいそう。

とっ、とっ、とっどっどっどっどっ…。

さあっ…っつ、と風が吹く。

わたしのことは苦手ですか？

苦手です、とあなたが言う。

知っています。あなたは、優しい人が好きだと言ったけど、

わたしがそんなに優しい人ではないからでしょ？

いいえ違います、とあなたが言う。

ではやっぱりあなたも美人が好きなんですね、

そして不美人のわたしを、

世界に存在してはいけないもののように、

見るのですね？

いいえ違います、とあなたが言う。

やっぱり、と思う。

やっぱり、

あなたのことがわたしは好きです

しょう／いや

しょうしょう／いや／いや

と、言った――。

手に余るような、

はじめてすることが何度も終わる。

かみさま、

かみさまって、あたしは、よんだ。

つないだ、手、は、ふいうちのななめ、こうとうぶで、

つまんない子。

そうね、あしたも、あしたもあたしはきみのいないせかい、

おわりゆく、あした、それはあなたのあなただけのもの。

半分を、虚無にして。

半分を、希望にかえて。

車の音が夢にまで――

みやあ…！

しずかにして…

しずかに処理されてゆく世界で……………。

やみくもでのらくろな一瞬。

一瞬。意識が飛んで、身体がガクツとなる、

まいくろすりいぷ。

、、、、、、、、  
砂の様子が、舞う――…。

あいしてる、の延長、コオド。

あいしてる、の延長――。

ヘッドフォンの耳の内側まで、ぐらりとゆれた電車で、

一本の細いろうそく…満員電車の、すくない酸素、

“自分はいらない”

とけて――いく・・・かおや、からだ――

でも、きもちわるいはずなのに、こわくはなくて、

あたしは、ただ、こころのまんなかにある、

あたしがあたしである以上にずっときれいなそれを、

あなたに、ふれてほしくて、そいつに、

あなたのすべてを、そそぎこんでほしくて――。

身体の奥から、

それはきつとこころの奥の方から――。

...どうして、伝わらないの...

どうして、こんなふうに...

伝わらないの...

遮光――斜光――射光・・・

カーテンは、

隙間を埋めて部屋を暗くする、けれ、ど、

まるで夜中のベッドルームみたいに、

ぎゅっと、もっと、

吐息を合わせ、あったかくなる。じりじりと、

かんのうは、応じられずにふさがって、

髪はいつまでも乾かない、けれ、ど、

落ち着いていられる。

「でも世界と離れていき

少し冷たくなるのよね——」

だからカーテンの隙間からこぼれた光は

あまりにもまぶしく、ふてぶてしいのだ。

“凶形や数字ばかりの夢”

くらいこのへやに月が射しこむ、

あんまりにも気になって、けれどたぶん、

なにからなにまでぜんぶいやになって

部屋から飛び出して月を見してみる。見ていると、

真っ赤な、真っ赤な、月。すごく簡単すぎて、

こわれそうで、なんだか、泣いてしまいたい。

“情緒不安定”

そうしていつか漠然とした不安の夢をみているらしい、と、

気付く。よるにとどく、とどくだろうか、

オートマティックなコンピューターの世界、脳に、

ああ、顔をしかめて、きみのおぞましいノクターン。

『羊水に帰りたくなる』だとか、

『海に帰りたくなる』だとか、言ってみる、

まんまるくなって、

だんだん近くなる救急車のサイレン、

パトカーだと中々気付かない、救急車のサイレン、

形成されるあいだ。

でも、電気を消して。

あたしにふたつ、目、目。

ねえ、何も見えないてあしもみえない、部屋で、

ふっと考える。ふとんにくるまって、

呼吸を忘れ、そうだ、いまあたしは裸でいる、

もしこの瞬間死んでしまったら、

すごい恥ずかしいことになってしまうな、

あはは、いんらんっておもわれるかな、

でも、よるになるとさみしくなるからあげるね。

あげる、ほら、これが、ひとつの成就……。

意識の奥深く

くらくてさむいところに、沈澱していく

からだというからだから、熱が、逃げていく。

あたしはそれでもまだのこっている熱。夜の色をのぞいて、

くすぐったくなって、性欲とかいうやつで、

ときどきして、

ふうわ、と白い息を吐く。

吐いたと思う――。

「ねえ、キスするときの、

舌の絡ませ方がわからない」

なみだ。

抱きしめられると泣いてしまうのかな。

からだ、は、その時、

ふやん、と、ちいさくふるえて。

赤ん坊みたいなの――

ちいさな声で、

泣いた。

春うつくしい

風に

色がつき

波

はな咲き

はなびら

おちるときに

貝の

模様をたどり

春うつくしく

いろはにほへ

しずかなるとき

たかぶる

ほんの数秒前までの記憶が...

太陽が終わりのない明るさで街を照らす

埃と土のゴミの臭いを混ぜ合わせたような街

ただ一瞬だけ 世界を照らしながら生まれた

その時に自分は両眼を潰し 血を流して

異邦人や 敵がうまれた――

ワカラナイコト

疑問...

モザイクロール..

ふたたび何処かで叫びがあがり

生は容易く説き伏せる

「――ながれてるあたたかいのは鼻血..」

「じゃ、たのみますよ。間違いなくね。」

それは幾つも咲いた傘と黒い服の群れ 濡れた墓石

終わりもなく始まりもない 季節を

(記憶の中 あの子どもたち 楽しそうだ)

.....薄れてゆく意識

...残りの時間

伸びてゆく枝葉や 咲き乱れる花々が似合う

ザアザアと鳴る雨の音 大粒の雨

あやうげに拡がっては収まる排水溝の穴に

小さい小さい赤い旗を立てた

めくれる炎を見つめながら少しずつ痺れていく血液

(空も だんだん 青くなって

日ざしも だんだん 白くなって)

眼球の白 赤くなる――

辛いのは 変わりゆくこと――

何もかも存在しない永遠は夢の中だけ――

散っていた 桜の花弁」

散っていた 桜の花弁」

.....パンドラが言う

間違いじゃないから...

そっとあけてごらん...

青空に整然と息を吸って吐く

舌と舌やわらかい／午後

毛細管現象がうまく行かずにインクが出なくなる

指は振れた釘 その錆びた時代をとどめなければ

帰るところのない者のための音楽

／午後 はらわたを裂く 僕等の餓えは

過去の何事かを思い出させる間もないうちに

四方のコンクリート壁に吸い込まれて消え失せ

乾いた皿の上に ふたたび沈黙する――

抱く。抱く。抱く。)

欲望は確かに沸きあがってくる……

鎖骨の下へと黒い血が落ちてゆく

／午後

日没から最初の星が瞬くまでのひそかな境界の時

(人は殺され、焼かれ、灰になった、)

リズムが街灯の光を

「虫は、光らなくなりました」 そのうちに／眠った／

(眠れるわけがない――眠れ…

義務ですよ。いいですか、

どうにかこうにか幸せになってきた、)

縫いあわせて

街に魔術を描き出す

自動車を通行禁止とした通りの両脇に

出店がびっしりと並び 続くアーケードの

天井からは吹流しが下げられ

もう暫くすると神輿と仮装行列が…

かりそめの饗宴へ導かれる 欺瞞は

電気ショックで心室細動を止める

おや、そうですか？  
いやいやたしかに  
お目にかかりましたよ

風にさらされ 雨にさらされ

壊してゆく 夜の匂い――

あらゆるものはただそこにある

そのことはまったく変化しない

いつしか月が高く輝き 余韻とともに消えていく

その時に

夜の深みの果てに誰もが眠る…

――暗闇に浮かぶ閃光

しかめっ面で目を閉じた。

唇に熱が残っているうちに

何か新しい言葉が見つければ良いのに

…み…み――な――り…

グランドピアノの 砂

汚れた 足

不吉な命令を下す 雑音

ワカラナイコト

疑問…

モザイクロール…

祈りが影のない雨のように思えてくる

僕らは動かないまなざしを向けあい

裏白い顔で揺れている

植物よりも非生産的にたたずむ

ほんとうに美しいものは ないのか…と…

待つ—通りと通りのあいだのどこかで…

少年の名前が耳に残る—

まだ君の精神は未熟だから……

日陰をたどって歩く街路樹から

曲がりくねった裏通りをゆき

口から口へ伝わる 日没前の世界に渦巻く

揺れている 個人の焼けつきそうな嘘…

一瞬で碎け散るガラスの脆さ…

ミシンをかけるあざやかな 水平線

暗くなった舗道 地下街 交差点で

しゃがれた歌声のことばかり思い出す

本当は色んなことは

もっと低い声であるべきなんだ

どうしても人間の声にはきこえない

ハンバーガーショップの店員が言う

「お間違いありませんか？」

(空も だんだん 青くなって

日ざしも だんだん 白くなって)

愛を――

愛 を――

僕に 愛を――

散っていた 桜の花弁」

散っていた 桜の花弁」

単純で意味のない車輪

蝉の鳴き声が僅かながら聞こえる

明るい日射しが射し込み

葉に白い色の花が咲く傷口を覗きこみながら

澄んだ真っ青な空が爽やかだ

いちばんかんたんな発音で

「あお。」

だが太陽の明るさから身を隠しながら

恋をしたり 嘘をついたりした時代を

思い出す 旅をする――

自由に――触れ…て…

苦しい――

くるしい――…

心は部屋にとどまる 何十年先も

その音色が似合わぬ程暗く沈んで

引きかえせない橋を

渡るまでは みにくく割れてゆく 月だけが

僕の宙？ 静かに灰になっていこうとしていた終末に

燃えている――目に見えるすべて…

地下をめぐる憎しみの声 残り火

ふいに ちかづくように降り始める

雨は…

(ほしのささやきでも、

とりのなきごえでもなかったけど、)

かすかに振りかえることもできたのに

居場所はない 孕まないことにする

痙攣のように焦点もなく崩れ果てるその時

見えない波長の叫び

黄色いボタンが飛び出していない…

赤いテストボタンは飛び出している——

青い——白い…

ねむりたい——

ねむりたいの…

重力の果てにあるような熱にゆらめく空気のなかで

叫びの途切れる瞬間 そのあいだのいびつな隙間に

黄昏がもう赤く染まっている

ワカラナイコト

疑問…

モザイクロール…

ちぎれてゆく——のは…

破り捨てたもの——…